熊本県文化財調査報告第 261 集

Tamana plain jyouriato
(Kogamae Area)

玉名平野条里跡
(古閑前地区)

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ―

2010
熊本県教育委員会

玉名平野条里跡（古閑前地区）

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　－

２０１０
熊本県教育委員会

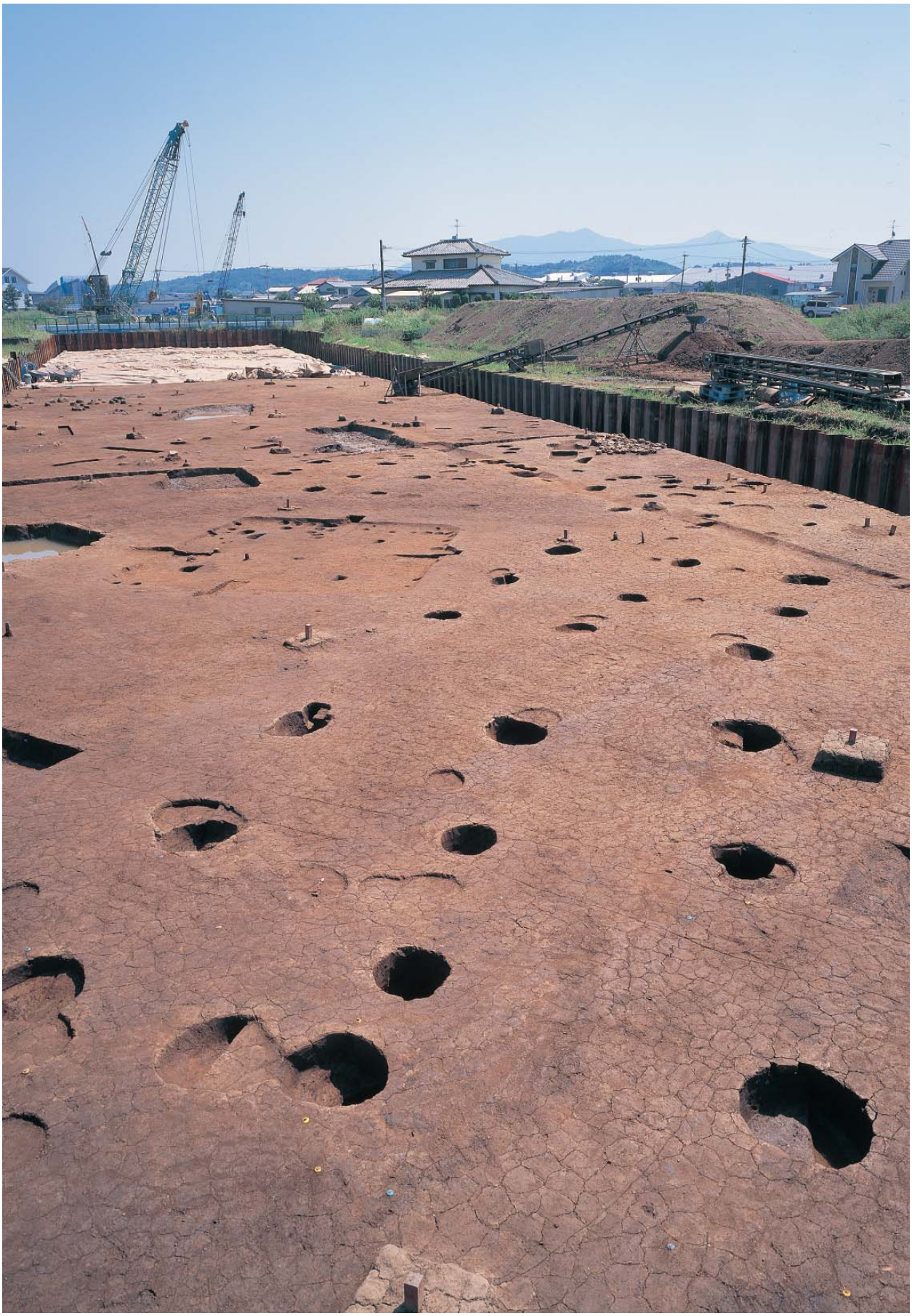
菊池川左岸上空より菊池川河口、有明海、雲仙普賢岳を望む
2007年（平成19年）７月23日撮影

PL.2

菊池川上空より新玉名駅、小岱山を望む

1．１区完掘状況（南より）
2．１区北西壁土層断面（南東より）
（Fig.5 参照）

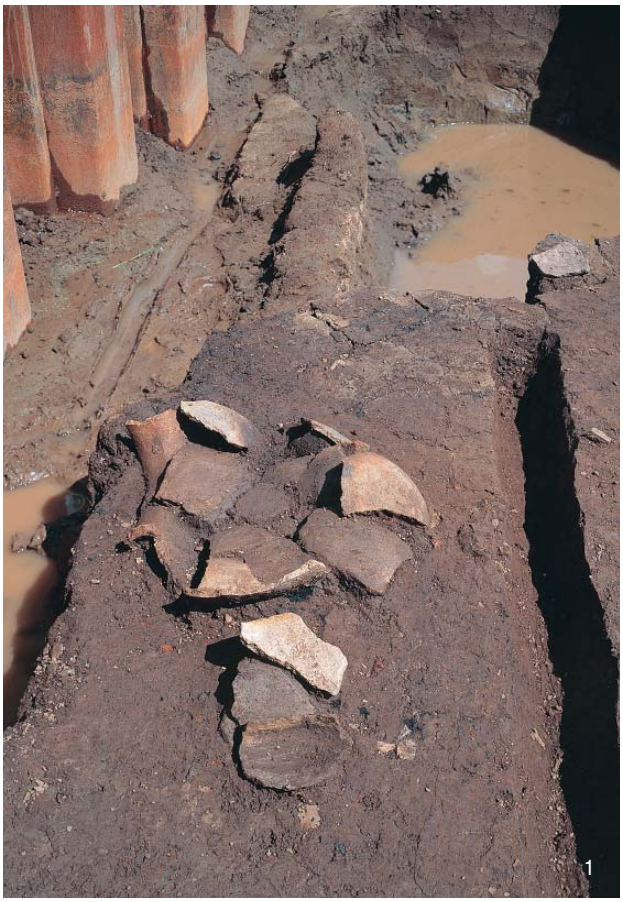
２区調査区完掘状況

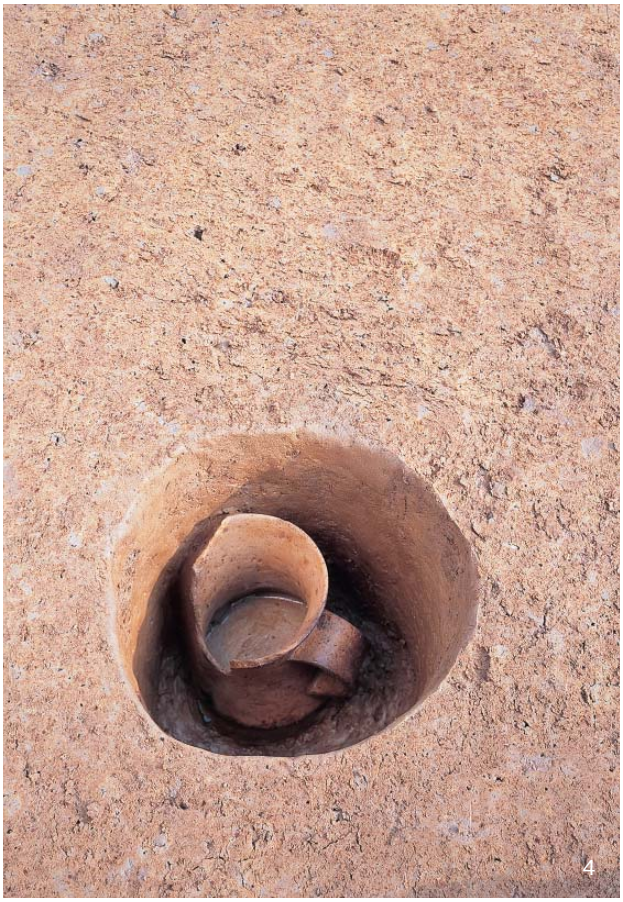


２区掘立柱建物SB001・SB002・SB003 完掘状況（北より）

PL.6

1．２区井戸SE002 遺物出土状況（南東より）
2．２区井戸SE002 遺物出土状況（北より）





1．２区竪穴建物SI017 遺物（製塩土器）出土状況
2．２区竪穴建物SI017 遺物・獣骨（馬）出土状況
3．２区井戸SE004 遺物出土状況（東より）
4．２区埋納遺構SJ001 遺物出土状況（北西より）

２区井戸SE004（29～31）出土遺物

1．２区竪穴建物SI017（65～70）出土遺物　　2．２区竪穴建物SI017（76～78）出土遺物
3．２区竪穴建物SI017（71～75）出土遺物

２区竪穴建物SI019（81～86）出土遺物

２区埋納遺構SJ001（94. 95）出土遺物

1．２区石器（125. 129. 130. 131. 138. 139）　　2．２区石器（126. 127. 128. 132～137）
3．２区製塩土器（121～124）・遺構内出土遺物

序　文

本書は、九州新幹線建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、熊本県玉名市に所在する「玉名平野条里跡（古閑前地区）」の発掘調査報告書です。

遺跡は、熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山に源を発する県内の四大河川の一つである菊池川下流域に広がる玉名平野上に位置しています。

菊池川流域には、古くから熊本の歴史を語るうえで欠かせない多くの遺跡が所在しており、なかでも全国でも類例をみないほどの密度で装飾古墳が築かれており、古墳文化を語るうえで重要な地域として注目されています。また、古代には菊池市・山鹿市にまたがり古代山城の一つ「鞠智城（国指定史跡）」が所在しています。

このたび、このような歴史的背景を有し文化が育まれてきた熊本県北部域に、九州新幹線鹿児島ルート計画が策定され、平成２３年３月の開業に向け建設工事が進められています。

本書はこのようななかで、玉名平野右岸に所在する「玉名平野条里跡（古閑前地区）」の調査結果を整理・報告したものです。

本書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査に御理解、御協力を頂いた玉名市民の皆様を始め、玉名市教育委員会、事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局に対し心より感謝申し上げます。

平成２３年３月３１日

熊本県教育長　山 本　隆 生

玉名平野条里跡（古閑前地区）発掘調査報告

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　－

目　次

第１章　序　言…… 1
　1 調査に至る経緯…… 1
　2 事前照会と予備調査の経緯…… 1
　3 玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査までの経緯…… 2
　4 調査組織…… 2
　5 報告書の作成…… 3

第２章　調　査…… 5
　1 調査地域…… 5
　（1）遺跡の位置及び地理的・歴史的背景 …… 5
　（2）既往の調査 …… 5
　（3）遺跡の名称について …… 6
　（4）測量 …… 6
　（5）地区割…… 6
　（6）その他…… 6
　2 調査日誌抄…… 9
　（1）表土剥ぎ及び調査環境整備 …… 9
　（2）１区…… 9
　（3）２区…… 9

第３章　遺　構……14
　1 調査１区……14
　2 調査２区……19

第４章　遺　物……63

第５章　調査の成果 ……96

附編…… 103

写真図版

報告書抄録

奥付

挿図目次（Fig）

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡
Fig.2　玉名平野遺跡地図
Fig.3　玉名平野条里跡（古閑前地区）周辺遺跡分布図　（S=1/5,000）
Fig.4　玉名平野条里跡（古閑前地区）１区、２区座標変換点
Fig.5　玉名平野条里跡（古閑前地区）１区遺構配置図
Fig.6　竪穴建物 SI001 実測図及び出土遺物
Fig.7　竪穴建物 SI002 実測図
Fig.8　玉名平野条里跡（古閑前地区）２区遺構配置図
Fig.9　竪穴建物 SI003 実測図及び出土遺物
Fig.10　竪穴建物 SI004 実測図
Fig.11　竪穴建物 SI005 実測図
Fig.12　竪穴建物 SI006 実測図及び出土遺物
Fig.13　竪穴建物 SI007 実測図及び出土遺物
Fig.14　竪穴建物 SI008 実測図及び出土遺物
Fig.15　竪穴建物 SI009 実測図
Fig.16　竪穴建物 SI010 実測図及び出土遺物
Fig.17　竪穴建物 SI011・SI012、土坑 SK012 実測図及び出土遺物
Fig.18　竪穴建物 SI013、土坑 SK005・SK006 実測図及び出土遺物
Fig.19　竪穴建物 SI014・SI015、土坑 SK031 実測図及び出土遺物
Fig.20　竪穴建物 SI016・SI017 実測図及び遺物出土状況図
Fig.21　竪穴建物 SI018 実測図及び出土遺物
Fig.22　竪穴建物 SI019 実測図及び遺物出土状況図
Fig.23　竪穴建物 SI020 実測図
Fig.24　竪穴建物 SI021 ～ SI026 実測図及び出土遺物
Fig.25　竪穴建物 SI027・SI028 実測図
Fig.26　土坑 SK001 実測図
Fig.27　土坑 SK003 実測図及び出土遺物
Fig.28　土坑 SK004 実測図及び出土遺物
Fig.29　土坑 SK007 実測図
Fig.30　土坑 SK008 実測図及び出土遺物
Fig.31　土坑 SK009・SK010 実測図及び出土遺物
Fig.32　土坑 SK011 実測図及び出土遺物
Fig.33　土坑 SK012 実測図
Fig.34　土坑 SK013 実測図及び出土遺物
Fig.35　掘立柱建物 SB001 実測図
Fig.36　掘立柱建物 SB002 実測図
Fig.37　掘立柱建物 SB003 実測図
Fig.38　掘立柱建物 SB004 実測図
Fig.39　掘立柱建物 SB005 実測図
Fig.40　掘立柱建物 SB006 実測図
Fig.41　井戸 SE001 実測図及び出土遺物
Fig.42　井戸 SE002 実測図及び遺物出土状況図
Fig.43　井戸 SE003 実測図
Fig.44　井戸 SE004 実測図及び出土遺物
Fig.45　埋納遺構 SJ001 実測図及び出土遺物

挿図目次（Fig）

Fig.46　柵列 SA001 実測図
Fig.47　墓 ST001 実測図及び出土遺物
Fig.48　溝 SD001 ～ SD007、自然流路 NR001 ～ NR003 実測図及び出土遺物
Fig.49　溝 SD002・SD008 実測図及び出土遺物
Fig.50　自然流路 NR004・NR005 実測図及び出土遺物
Fig.51　溝 SD001（1 ～ 3）出土遺物実測図
Fig.52　溝 SD008（4.5）出土遺物実測図
Fig.53　井戸 SE001（6）出土遺物実測図
Fig.54　井戸 SE002（7 ～ 14）出土遺物実測図－①
Fig.55　井戸 SE002（15 ～ 20）出土遺物実測図－②
Fig.56　井戸 SE002（21 ～ 28）出土遺物実測図－③
Fig.57　井戸 SE004（29 ～ 31）出土遺物実測図
Fig.58　竪穴建物 SI001(32)・SI003 (33.35.37 ～ 40)・SI006 (36)・SI008 (41)・SI014 (34) 出土遺物実測図
Fig.59　竪穴建物 SI007（42 ～ 52) 出土遺物実測図
Fig.60　竪穴建物 SI010 (53 ～ 57) 出土遺物実測図
Fig.61　竪穴建物 SI011 (58.59) 出土遺物実測図
Fig.62　竪穴建物 SI013 (60 ～ 63) 出土遺物実測図
Fig.63　竪穴建物 SI016 (64)・SI017 (65 ～ 78) 出土遺物実測図
Fig.64　竪穴建物 SI019 (81 ～ 86) 出土遺物実測図
Fig.65　竪穴建物 SI018 (79.80) 出土遺物実測図
Fig.66　竪穴建物 SI023 (87 ～ 90)・SI024 (91.92)・SI026 (93) 出土遺物実測図
Fig.67　埋納遺構 SJ001 (94.95) 出土遺物実測図
Fig.68　土坑 SK002 (96)・SK003 (97)・SK004 (98 ～ 101) 出土遺物実測図
Fig.69　土坑 SK005 (102 ～ 105) 出土遺物実測図
Fig.70　土坑 SK008 (106 ～ 109)・SK010 (110)・SK011 (111)・SK013 (112) 出土遺物実測図
Fig.71　墓 ST001 (113) 出土遺物実測図
Fig.72　自然流路 NR001 (114)・NR004 (115)・NR005 (116) 出土遺物実測図
Fig.73　J-13Grid (117 ～ 120) 出土遺物実測図
Fig.74　調査区内 (121 ～ 124) 出土遺物実測図
Fig.75　石器 (125 ～ 131) 実測図－①
Fig.76　石器 (132 ～ 140) 実測図－②
Fig.77　時代別遺構配置図　(弥生、古墳)
Fig.78　時代別遺構配置図　(古代、近世・近代)
Fig.80　製塩土器出土遺跡の分布図

表目次（Tab）

Tab.1　九州新幹線（新八代・博多間）建設に伴う玉名郡市地区埋蔵文化財発掘調査一覧
Tab.2　玉名平野条里跡（古閑前地区）基準点成果
Tab.3　遺跡地名表
Tab.4　2 区出土遺物観察表－①
Tab.5　2 区出土遺物観察表－②
Tab.6　2 区出土遺物観察表－③
Tab.7　2 区出土遺物観察表－④
Tab.8　2 区出土遺物（石器）観察表
Tab.9　2 区出土遺物（鉄器）観察表

写真（PL）

PL.1　菊池川左岸上空より菊池川河口、有明海、雲仙普賢岳を望む　2007年 (平成 19 年) 7 月 23 日撮影
PL.2　菊池川上空より新玉名駅、小岱山を望む
PL.3　1. 1 区完掘状況 (南より)　2. 1 区北西壁土層断面 (南東より)
PL.4　2 区調査区完掘状況
PL.5　2 区掘立柱建物 SB001・SB002・SB003 完掘状況 (北より)
PL.6　1. 2 区井戸 SE002 遺物出土状況 (南東より)　2. 2 区井戸 SE002 遺物出土状況 (北より)
PL.7　1. 2 区竪穴建物 SI017 遺物 (製塩土器) 出土状況　2. 2 区竪穴建物 SI017 遺物・獣骨 (馬) 出土状況
3. 2 区井戸 SE004 遺物出土状況 (東より)　4. 2 区埋納遺構 SJ001 遺物出土状況 (北西より)
PL.8　2 区井戸 SE004(29 ～ 31) 出土遺物
PL.9　1. 2 区竪穴建物 SI017(65 ～ 70) 出土遺物　2. 2 区竪穴建物 SI017(76 ～ 78) 出土遺物
3. 2 区竪穴建物 SI017(71 ～ 75) 出土遺物
PL.10　2 区竪穴建物 SI019(81 ～ 86) 出土遺物
PL.11　2 区埋納遺構 SJ001(94.95) 出土遺物
PL.12　1. 2 区石器 (125.129.130.131.138.139)　2. 2 区石器 (126.127.128.132 ～ 137)
3. 2 区製塩土器 (121 ～ 124)・遺構内出土遺物
PL.13　1. 1 区検出状況 (南より)　2. 1 区完掘状況 (南より)
PL.14　1. 2 区掘立柱建物 SB002・SB003 検出状況 (南より)
2. 2 区掘立柱建物 SB002・SB003 完掘状況 (南より)
3. 2 区掘立柱建物 SB001・SB002・SB003 完掘状況 (北より)
4. 2 区掘立柱建物 SB004 完掘状況 (北より)
PL.15　1. 2 区掘立柱建物 SB005 検出状況　2. 2 区掘立柱建物 SB005 完掘状況
PL.16　1. 2 区掘立柱建物 SB006 完掘状況 (西より)　2. 2 区溝 SD002 完掘状況 (東より)
3. 2 区溝 SD004 完掘状況 (南西より)
PL.17　1. 2 区井戸 SE002 遺物出土状況 (南東より)　2. 2 区井戸 SE002 遺物出土状況 (北より)
PL.18　1. 2 区井戸 SE002 完掘状況 (北より)　2. 2 区井戸 SE001 完掘状況
3. 2 区井戸 SE003 完掘状況　4. 2 区井戸 SE004 遺物出土状況 (東より)
PL.19　1. 2 区竪穴建物 SI001 検出状況 (南より)　2. 2 区竪穴建物 SI001 内貯蔵穴 検出状況 (東より)
3. 2 区竪穴建物 SI001 完掘状況 (西より)
PL.20　1. 2 区竪穴建物 SI002 検出状況 (東より)　2. 2 区竪穴建物 SI002 完掘状況 (南東より)
PL.21　1. 2 区竪穴建物 SI003・土坑 SK019 完掘状況 (西より)
2. 2 区竪穴建物 SI004 完掘状況 (南東より)
PL.22　1. 2 区竪穴建物 SI007 遺構検出状況　2. 2 区竪穴建物 SI007 遺物出土状況
3. 2 区竪穴建物 SI009 床面検出状況 (東より)
PL.23　1. 2 区竪穴建物 SI011・012、土坑 SK013 検出状況 (東より)
2. 2 区竪穴建物 SI011 完掘状況 (南西より)
PL.24　1. 2 区竪穴建物 SI017 遺物 (製塩土器) 出土状況　2. 2 区竪穴建物 SI017 遺物・獣骨 (馬) 出土状況
3. 4. 2 区竪穴建物 SI017 遺物出土状況
PL.25　1. 2 区竪穴建物 SI016・SI017・SI018 完掘状況 (東より)
2. 2 区竪穴建物 SI021・SI022・SI023・SI024・SI026 完掘状況 (東より)
PL.26　1. 2 区竪穴建物 SI019 ピット検出状況 (東より)　2. 2 区竪穴建物 SI019 完掘状況 (東より)
PL.27　2 区竪穴建物 SI010・SI027・SI028 完掘状況 (北より)
PL.28　2 区埋納遺構 SJ001 遺物出土状況 (北西より)
PL.29　1. 2 区土坑 SK005 遺物出土状況 (南より)　2. 2 区土坑 SK009・SK010 完掘状況 (西より)
3. 2 区土坑 SK011 遺物出土状況 (西より)　4. 2 区土坑 SK012 完掘状況 (西より)
PL.30　1. 2 区溝 SD001(1 ～ 3) 出土遺物　2. 2 区自然流路 NR001(114) 出土遺物
3. 2 区自然流路 NR005(116) 出土遺物

写真（PL）

PL.31　1. 2 区溝 SD008(4.5) 出土遺物　2. 2 区井戸 SE001(6) 出土遺物
　　3. 2 区井戸 SE004(29 ～ 31) 出土遺物
PL.32　2 区井戸 SE002(9 ～ 14) 出土遺物
PL.33　2 区井戸 SE002(15.16.18.19) 出土遺物
PL.34　2 区井戸 SE002(21 ～ 28) 出土遺物
PL.35　2 区井戸 SE002(10.18.21.25) 出土遺物
PL.36　2 区井戸 SE002(19.28.16) 出土遺物
PL.37　1. 2 区竪穴建物 SI001(32)・SI003(33.35)・SI006(36)・SI014(34) 出土遺物
　　2. 2 区竪穴建物 SI003(37 ～ 40)・SI008(41) 出土遺物
PL.38　2 区竪穴建物 SI007(42.43.46.48 ～ 52) 出土遺物
PL.39　2 区竪穴建物 SI010(53 ～ 57) 出土遺物
PL.40　2 区竪穴建物 SI011(58.59) 出土遺物
PL.41　2 区竪穴建物 SI013(60~63) 出土遺物
PL.42　2 区竪穴建物 SI017(65 ～ 78) 出土遺物
PL.43　2 区竪穴建物 SI017(65~70.76 ～ 78) 出土遺物
PL.44　2 区竪穴建物 SI019(81 ～ 86) 出土遺物
PL.45　1. 2 区竪穴建物 SI023(87 ～ 90) 出土遺物　2. 2 区竪穴建物 SI024(91.92)・SI026(93) 出土遺物
PL.46　2 区埋納遺構 SJ001(94.95) 出土遺物
PL.47　2 区土坑 SK004(98 ～ 101) 出土遺物
PL.48　1. 2 区土坑 SK005(102 ～ 105) 出土遺物　2. 2 区土坑 SK008(106 ～ 109) 出土遺物
PL.49　1. 2 区土坑 SK010(110)・SK013(112) 出土遺物　2. 2 区墓 ST001(113) 出土遺物
　　3. 2 区自然流路 NR004(115) 出土遺物　4.5.6. 2 区 J-13Grid(117~119) 出土遺物
PL.50　1. 2　2 区石器 (125~139)　3. 2 区製塩土器 (121 ～ 124)・遺構内出土遺物
PL.51　2 区鉄器

玉名平野条里跡（古閑前地区）発掘調査報告

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

第１章　序　言

本書は、九州新幹線建設工事に伴い平成１９年６月１日から平成２０年１月３１日まで熊本県玉名市両迫間５８－２ほか９筆で実施した「玉名平野条里跡（古閑前地区）」での発掘成果をとりまとめたものである。

玉名平野条里跡は、熊本県四大河川の一つで、県内で最も北に位置する菊池川下流に形成された沖積平野上に位置する。阿蘇外輪山西麓に源を発する菊池川は、菊池・鹿本・玉名平野を貫き全長 61.2 ｋｍに及ぶ一級河川で、玉名平野を経て有明海に注ぎこむ。河口部では広大な干潟を形成する。干潮時に陸地化する干潟は、近世以降数次にわたり干拓が行われ、近世以前の菊池川の姿を大きく変える一因となっている。平野の東部は金峰山系の二ノ岳、三ノ岳山麓に接し、北側は花崗岩塊の小岱山から続く洪積台地と接する。

玉名平野条里跡（古閑前地区）は、玉名平野中央部両岸に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地「玉名平野条里跡」の範囲に含まれる。遺跡周辺の標高は３～５ｍを測る。

１　調査に至る経緯

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大ならびに地域の振興を図る目的で、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約 294km の大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大等、多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれている。

当該ルートは昭和 48 年 11 月 13 日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和 61 年８月 29 日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成３年８月 22 日に先行して八代～西鹿児島間について工事実施計画が認可され、同年９月７日に起工した。その後、平成 10 年３月 12 日に船小屋～西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年６月２日に博多～船小屋間が起工している。現在、平成 16 年３月 13 日の新八代～鹿児島中央間の開業を経て、博多～船小屋間について平成 23 年３月の開業を目指して工事が鋭意進められている。

２　事前照会と予備調査の経緯

熊本県内における九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成９年の日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局【現：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局（以下、「鉄道・運輸機構」と言う。)】から、芦北郡津奈木町内における文化財及び埋蔵文化財の予備調査依頼を契機として、熊本県内における新幹線建設に伴う埋蔵文化財の対応が始まった。

今回報告する玉名市内における埋蔵文化財への取り組みは、熊本県南域の調査がほぼ終了し、調査の対象が県央、県北へと移ってきた平成 15 年度から本格的に着手した。

同年、鉄道・運輸機構から玉名郡玉東町稲佐から玉名市津留（菊池川）まで[1]の予備調査の依頼を始めとし、福岡県との県境までの予備調査が断続的に依頼され、本調査の傍ら予備調査を実施した。

当該地域における予備調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地「玉名平野条里跡」内であるため、遺跡の範囲・性格・内容などの概要までを把握する確認調査として実施し、鉄道・運輸機構九州新幹線建設局長より県教育長あて予備調査依頼が提出されたのを受け、平成 17 年５月 19 日から同年６月 28 日にかけ新玉名駅を挟み、大坊トンネル～菊池川橋梁間で予備調査を実施した。計 22 ヶ所の試掘坑（以下、「トレンチ」と言う。）を設定して実施し、その結果を、平成 17 年７月 12 日付け教文第 1021 号で回答した。工事にあたっては事前の協議が必要な旨を通知した。

1　熊本県教育委員会『祭田下遺跡』熊本県文化財調査第 247 集　2008
　熊本県教育委員会『太郎丸遺跡　西屋敷遺跡　瀬萩遺跡』熊本県文化財調査第 250 集　2009

結果、玉名郡市において新幹線事業に関し埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断された遺跡数は、当該地域で２ヶ所、その他を含めると計９ヶ所（Tab.1）となった。

この結果を踏まえ、熊本県教育委員会と鉄道･運輸機構は埋蔵文化財の保護について設計変更等、協議を行ったが、新幹線事業の性質から「記録・保存やむなし」との判断に達し、発掘調査に着手することとなった。

その結果、大坊トンネル坑口で「西屋敷遺跡」[2]を、今回発掘調査成果を報告する玉名市両迫間で玉名平野条里跡（古閑前地区）の２遺跡を確認した。

2　熊本県教育委員会『太郎丸遺跡　西屋敷遺跡　瀬萩遺跡』熊本県文化財調査第 250 集　2009
西屋敷遺跡では、明和四年（1767 年）から明治二十四年（1891）までの 124 年間に及ぶ近世墓の調査を実施し、墓石の調査から５段階７形式の形式変化を確認している。

№.	遺跡名	所在地	博多駅からの新幹線距離程	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	長山前田遺跡（ながやままえだ）	玉名郡南関町長山字前田	66km700m ～ 66km900m	600㎡	H16.4.27 ～ H18.5.21	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 横田光智	弥生・中世	掘立柱建物、柵列、道路、溝、土坑
2	稲佐津留遺跡（いなさつる）	玉名郡玉東町稲佐地内	80km383 ～ 80km598m	2,273.54㎡	H16.5.27 ～ H17.12.28	尾方圭子 今村和徳 横田光智	弥生・古墳 古代	掘立柱建物、土坑、溝 竪穴式住居跡、柱穴群 巴形銅器・弥生土器・古式土師器
3	祭田下遺跡（さいだんした）	玉名市津留字祭田下 223-2 ほか９筆	78km227m ～ 78km400m	5.762㎡	H16.6.1 ～ H16.10.27	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	古墳・中世 近世	溝、杭列、土坑 13 世紀～ 14 世紀代青磁・白磁 土師器・中世須恵器・瓦器など
4	小薗遺跡（おづの）	玉名市石貫字小薗 345-2 ほか 13 筆	74km220m ～ 74km300m	2,406㎡	H16.6.14 ～ H16.10.31	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 遠山　宏	弥生・中世 近世	掘立柱建物、竪穴式住居跡 土坑、溝 弥生土器・土師器・須恵器・陶器
5	太郎丸遺跡（たろうまる）	玉名市大字津留字白拍子 373-2 ほか 13 筆	77km840m ～ 78km230m	14,148㎡	H16.11.1 ～ H17.10.31	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子 水上　悌	古代・中世 近世	土坑、土坑墓、溝、掘立柱建物 土師器・中世須恵器・龍泉窯系青磁 瓦器・白磁
6	西屋敷遺跡（にしやしき）	玉名市大坊字西屋敷 2660-3 ほか 4 筆	75km230m ～ 75km500m	325㎡	H17.4.9 ～ H17.5.13	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	中世・近世	五輪塔、近世墓（舟形後背墓石）
7	瀬萩遺跡（せはぎ）	玉名市津留字川面 103-3 ほか 3 筆	78km860m ～ 78km985m	2,395.35㎡	H17.4.19 ～ H17.9.30	吉田徹也 早田利宏	古墳・古代 中世	竪穴式住居、溝、焼成土坑 土師器・須恵器・青磁・白磁ほか
8	両迫間日渡遺跡（りょうはざまひわたし）	玉名市両迫間	76km277m ～ 76km420m	742.92㎡	H18.8.23 ～ H18.10.10	坂口圭太郎 亀田　学	弥生・古墳	水田畦畔
9	**玉名平野条里跡（たまなへいやじょうりあと）（古閑前地区（こがまえ））**	玉名市両迫間字古閑前	76km721m ～ 76km873m	2,537.85㎡	H19.6.1 ～ H20.1.31	長谷部善一 吉田徹也 手柴智晴 吉井英二 坂本亜矢子 園田恭子	弥生後期 古墳初頭・後期 古代・中世 近世	弥生後期（竪穴住居跡・溝状遺構） 古墳時代（竪穴住居跡･製鉄関係遺構･井戸・溝状遺構・土坑） 古代（掘立柱建物跡・溝状遺構） 中世（溝状遺構） 近世（粘土採掘坑）

Tab. 1　九州新幹線（新八代・博多間）建設に伴う玉名郡市地区埋蔵文化財発掘調査一覧

３　玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査までの経緯

玉名平野条里跡（古閑前地区）は鉄道・運輸機構九州新幹線建設局長より文化財保護法第 94 条第１項に基づき発掘調査の通知が熊本県教育長あて提出され、同時に土地の承諾書を添付した発掘調査依頼も併せて提出された。それを受け、県文化課にて長谷部善一・吉田徹也参事を調査員と選出し、平成 19 年４月４日付け教文第２号で文化財保護法第 99 条第１項の通知を提出し、発掘調査に着手した。

４　調査組織

以下、各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。（※は調査非常勤職員、※※は整理非常勤職員）

調査・整理主体　熊本県教育委員会

予備調査　2006 年（平成 18 年度）

調査責任者　文化課長　梶野英二
調査総括　　課長補佐（文化財調査第一係担当）　高木正文
調査担当者　文化財調査第一係　主任学芸員 長谷部善一　主任主事 吉田徹也

発掘調査　2007 年（平成 19 年度）

調査責任者　文化課長　梶野英二
調査総括　　課長補佐　江本　直
調査指導　　課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文
調査担当者　文化財調査第一係　参事 長谷部善一、吉田徹也
調査補助　　手柴智晴※　坂本亜矢子※　園田恭子※　吉井英志※　稲葉貴子※　唐木ひとみ※

整理報告書作成　2010 年（平成 22 年度）

整理責任者　文化課長　小田伸也
整理総括　　課長補佐　木崎康弘
整理指導　　文化財調査第一係長　村崎孝宏
　　文化財資料室長　　坂田和弘
整理担当者　文化財調査第一係　参事 長谷部善一
　　稲葉貴子※※　唐木ひとみ※※
整理作業員　石田敦子（班長）　福島典子（副班長）　小早川隆春　塩田喜美子　今崎光成
　　田熊敏子　田中裕子　藤井美智子　（以上、一次整理）
　　土田みどり　岩下恵美子　築出直美（以上、二次整理）

調査指導機関及び指導・助言・協力者

独立行政法人国立文化財研究所　奈良文化財研究所、大牟田市教育委員会、みやま市教育委員会
玉名市教育委員会、和水町教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県立装飾古墳館
植木町教育委員会（現 . 熊本市教育委員会）　宇土市教育委員会、甲佐町教育委員会、玉東町教育委員会
牛嶋　茂　坂井義哉　猿渡真弓　竹田宏司　中原幹彦　美濃口雅朗　益永浩二　増田直人　林田和人
原田範昭　藤本貴仁　西口貴志　西山由美子　檀 佳克　　宮本利邦　宮本千恵子
田中康雄　兵谷有利　末永　崇　荒木隆宏　古閑敬士　毛利恒彦　上髙原　聡
尾形圭子　吉田徹也　松森由美　青木勝士　坂口圭太郎　池田朋生　木村龍生　北原美和子

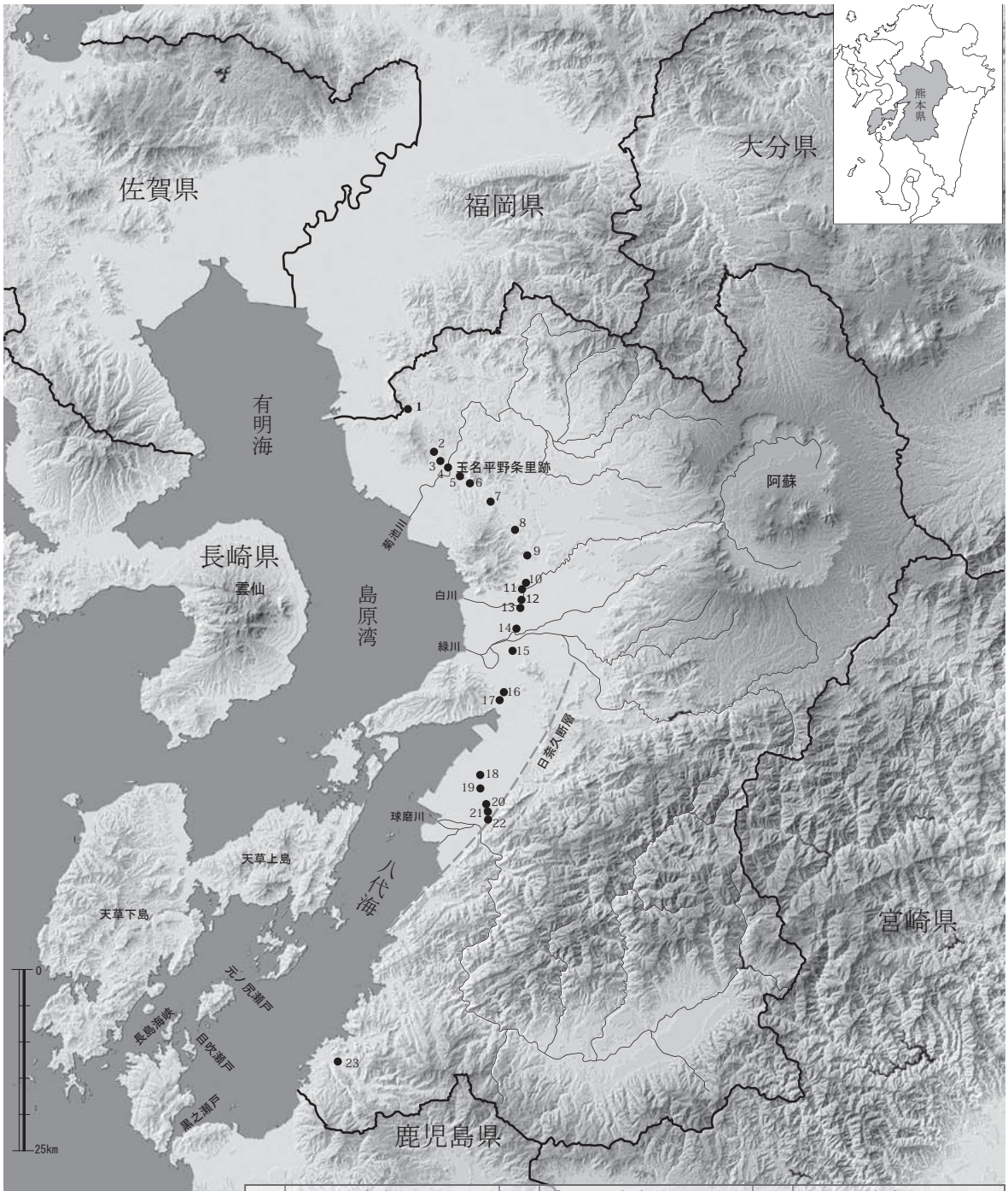
調査（整理）に伴う委託業務

測量業務一式（遺構実測含む）
　　株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
空中写真撮影　九州航空株式会社
整 理 業 務（一次整理業務、遺構・遺物デジタルトレース、遺物実測（土器・石器））
　　株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
自然科学分析　株式会社 古環境研究所
遺物写真撮影　写測量エンジニアリング株式会社

5　報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町沈目 1667 番地）にて実施した。平成 21 年度に一次整理に着手し、平成 22 年度に図版作成、原稿執筆をおこなった。発掘調査及び出土遺物の整理業務は文化財調査第一係が担当し、報告書刊行後の資料管理は文化財資料室で管理している。

（1）本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。
（2）註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。
（3）熊本県教育委員会の過去の刊行物に関しては、下記の略称を使用した。機関名についても、以下、県教委とする。
（4）本書の編集は、文化財調査第一係長 村崎孝宏・文化財資料室長 坂田和弘の指導のもと、長谷部・稲葉がおこなった。



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	長山前田遺跡	11	二本木遺跡群（春日、田崎地区）	21	西片園田遺跡
2	小園遺跡	12	八島町遺跡		西片稲村遺跡
3	西屋敷遺跡		熊本平野条里跡		中片小路遺跡
4	両迫間日渡遺跡	13	上ノ郷遺跡	22	宮地年神遺跡
5	玉名平野条里跡（古閑前地区）	14	川尻下城遺跡		キリシタン寺院跡
	太郎丸遺跡	15	下江中島遺跡		宮地池尻遺跡
	祭田下遺跡	16	小曽部西園遺跡		宮地小畑遺跡
	瀬萩遺跡		南請遺跡		宮地観行寺遺跡
6	稲佐津留遺跡	17	高良柳迫遺跡		古麓城下遺跡
7	西安寺遺跡	18	四百町開		古麓能寺遺跡
8	万楽寺出口遺跡	19	高田手永堤防		古麓城跡
9	北島遺跡・北島北遺跡	20	島田遺跡	23	長野遺跡
10	新馬借遺跡		上日置女夫木遺跡		
	花岡山・万日山遺跡		西片百田遺跡		

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡

第２章　調　査

１　調査地域

（１）　遺跡の位置及び地理的・歴史的背景

【遺跡の位置】玉名平野条里跡（古閑前地区）は、熊本県北部の主要都市である玉名市市域の東部に所在し、阿蘇外輪山を水源とする菊池川の下流域に位置する。菊池川は、緩やかな流れを呈する菊鹿平野を貫流した後、山鹿市を経て川筋を大きく南流させ、凝灰岩台地の間を蛇行しながら玉名平野を通り、有明海へと貫流している。

和水町（旧.菊水町）に所在する近世初頭に加藤清正に最初に設置したとされる白石堰を境に、玉名平野が始まる。平野中央で大きく蛇行し南流していた川筋が、西に向きを変え玉名市高瀬に至る。高瀬を過ぎ、川幅を広げる辺りからは、更に流れが緩やかになり河口に至る。玉名平野に顔を出した後の菊池川は高低差がほとんどないため、白石堰までは、有明海の潮の干満に影響され海水が浸入する。

河口部では、菊池川の作用により運ばれた土砂等により干潟が形成され、小規模な干拓から始められた干拓事業は近世以降、凝灰岩を利用し建造される潮受け堤防、排水樋門等の築造技術が飛躍的に発展し、大規模かつ計画的に干拓が行われ広大な穀倉地帯を形成している。このような歴史的背景を持ち、地域の文化財を語る上で他地域にはない文化財と判断され、文化庁により国指定史跡に指定されている。

このような近世以降における歴史的風景の変化から、当遺跡が形成された弥生時代から古墳時代にかけては、現在の玉名市高瀬付近が玉名平野の端にあたり、海を望む先端部であったことが地形の観察・遺跡の分布等により見て取ることができる。

【地理的環境】地理的環境については、『祭田下遺跡 2008』「第２章　1 調査　B 地理的環境（馬場正弘）」に詳細な記述を掲載しているため参照されたい。

【歴史的背景】当遺跡は名称のとおり、古代に整備された水田が広がる条里遺跡として周知されている遺跡[1]の一つである。条里範囲は菊池川を挟み左右岸に設定され、周知の埋蔵文化財包蔵地として保護されている。歴史的背景に関する記述については、『祭田下遺跡 2008』「歴史的背景」及び「第５章 安楽寺領玉名荘についての文献等調査」、『太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡 2009』「歴史的背景」を参考にされたい。

（２）　既往の調査

周辺地域では、国道バイパス工事、新幹線建設工事、それに伴い整備される道路工事等関連工事で多くの埋蔵文化財の発掘調査が行われている。

平成６年から 11 年度には遺跡から南西へ約 300m に所在する、縄文時代から近世まで続く集落である「柳町遺跡[2]」が一般国道 208 号玉名バイパス改良工事により発掘調査が行われている。

また、平成 18 年から 19 年にかけて玉名市教育委員会が駅前広場でおこなった発掘調査[4]では、弥生時代中期の水田に伴う畦畔が確認され、隣接する調査区で古墳時代中期の祭祀遺構と見られる土師器集中区から共伴する状態で多数の「剣型石製模造品」や「有孔円盤」等が出土するとともに、同一面隣接地でクスノキが大きく根を張った状態での根が検出されるなど、平野上における古墳時代の祭祀形態の一端を垣間見ることができる。

本事業に伴う調査でも平野上で多くの遺跡を確認することができた。菊池川左岸では平成 16 年に発掘調査を実施し、中世の土師器埋納遺構を検出した「祭田下遺跡[5]」、中世の掘立柱建物、土坑墓、道路等を確認し

1　熊本県教育委員会『熊本県の条里跡』熊本県文化財調査第 25 集　1977
2　熊本県教育委員会『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第　集　199
3　熊本県教育委員会『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 218 集　2004
4　玉名市教育委員会『両迫間日渡遺跡』玉名市文化財調査報告第 19 集　2009
5　熊本県教育委員会『祭田下遺跡』熊本県教育委員会 2008

た「太郎丸遺跡[6]」、古墳時代前期の集落跡を確認した「瀬萩遺跡」などがある。また、当遺跡と同じ右岸に位置し、低丘陵性台地縁辺に所在する江戸時代明和四年（1767 年）から明治 31 年（1898 年）まで続く墓石を確認した「西屋敷遺跡」などがある。これらはすべて工事に先立ち、記録・保存として発掘調査を実施した。

（3） 遺跡の名称について

当該地域は、熊本県遺跡地図ならびに玉名市遺跡図中で周知されている「玉名平野条里跡」の範囲に含まれる。近年、本地域は玉名市域における市道整備、各種の民間開発や九州新幹線「新玉名駅」建設に伴う関連事業等により熊本県、玉名市両教育委員会による発掘調査が随時おこなわれている。
その際、遺跡名称については「玉名平野条里跡」を付し、その都度調査区名を付している場合が多く、調査箇所の名称が重複している場合が多い。そこで県教委で現在付している遺跡名称のルールにのっとり、周知の埋蔵文化財包蔵地名に小字名を付した名称を今回の調査区名としている。

（4） 測量

玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査を開始するにあたって、事前に国土座標Ⅱ系による基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は発掘調査の契機となった九州新幹線建設工事に伴い、鉄道・運輸機構が設置した国土座標Ⅱ系（日本測地系）により設置している。

2002 年（平成 14 年） 4 月 1 日から施行された改正測量法に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本事業における基準点がすべて日本地形に基づいていることから、熊本県内における埋蔵文化財発掘調査で設置する基準点はすべて日本測地系基づき設置した。なお、世界測地との整合をとるために設置した基準としている杭の数値を日本測地、世界測地でそれぞれ示す。

点名	日本測地系		世界測地系	
	X 座標	Y 座標	X 座標	Y 座標
1 区 A	-6960	-39325	-6587.4054	-39545.8714
2 区 B	-6990	-39285	-6617.4069	-39505.8701
2 区 C	-7020	-39250	-6647.4079	-39470.8687
2 区 D	-7040	-39225	-6667.8680	-394445.8680

Tab.2　玉名平野条里跡（古閑前地区）基準点成果

（5） 地区割

発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。Grid 番号は本遺跡のみに適用する範囲で設定し、X=6950 Y=-39340 を基点に東西に 1・2…、南北に A・B…と付した。

また、本書の遺構種別は、『発掘調査のてびき』- 整理・報告書編 - 文化庁文化財保護部記念物課編を参考に付している。遺構番号は調査区毎に遺構種別記号に三ケタの数字による番号を付している。

（6）その他

発掘調査は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の三桁の数字の組み合わせにより表記した。

<u>SA（塀 . 柵列）</u>　<u>SB（建物 . 竪穴建物以外）</u>　SC（廊）　<u>SD（溝）</u>　<u>SE（井戸）</u>　SF（道路）　SG（池）　SH（広場）
<u>SI（竪穴建物）</u>　<u>SJ（土器埋納遺構）</u>　<u>SK（土坑）</u>　SL（炉 . カマド）　SM（盛り土）　SN（水田 . 畑）　<u>SP（柱穴）</u>
SS（礎石 . 葺石 . 配石）　<u>ST（墓）</u>　SU（遺物集積）　SW（石垣 . 防護壁）
<u>SX（その他、当遺跡では自然流路もこれに含む）</u>　SY（窯）　SZ（古墳 . 墳丘墓 . 周溝墓）　<u>NR（自然流路）</u>

※当遺跡で使用していない記号も含む。

※当報告で使用している記号には<u>下線</u>で示している。

6　熊本県教育委員会『太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡』熊本県教育委員会 2009

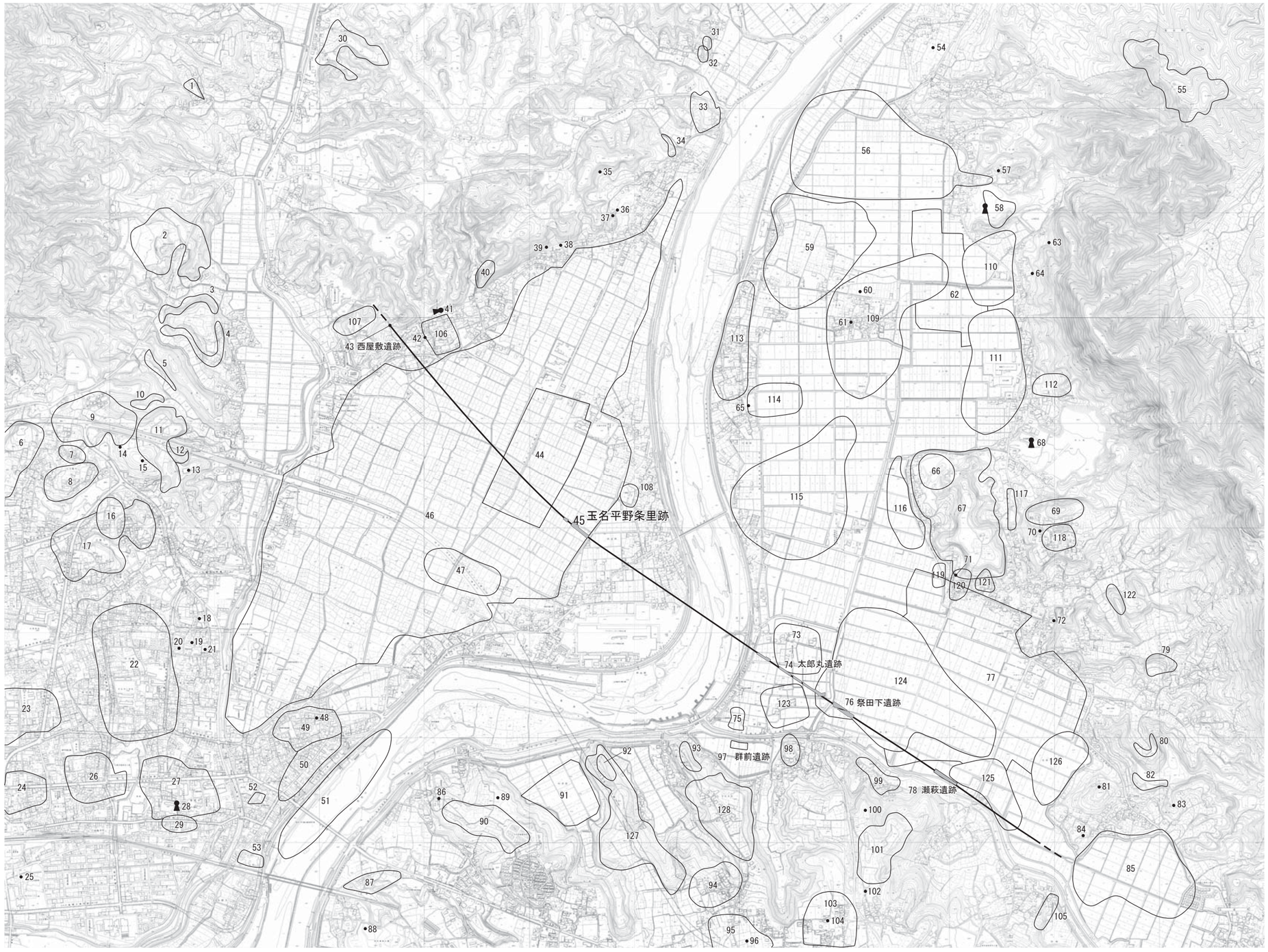


Fig.2 玉名平野遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	上栗山遺跡	弥生後期・古墳
2	岩原	古墳
3	富尾浦谷横穴群	古墳
4	富尾原横穴群A	古墳
5	富尾中尾横穴群	古墳
6	玉名郡家跡	古代
7	松尾原	弥生
8	立願寺跡	古代
9	松尾	古墳
10	富尾板碑横穴群	古墳
11	大塚・惣萩	弥生・古墳
12	冷水横穴群	古墳
13	冷水塚古墳	古墳
14	大塚古墳	古墳
15	小塚古墳	古墳
16	玉名郡倉跡	古代
17	下立願寺	縄文～中世
18	池田地下式横穴群	古墳
19	岩崎古墳	古墳
20	岩崎城跡	中世
21	岩崎古墳参考地	古墳
22	岩崎原	弥生～中世
23	玉名高校校庭	弥生・古墳
24	南出	弥生
25	だいの島古墳	古墳
26	玉名亀甲	縄文～中世
27	繁根木遺跡群	弥生
28	稲荷山古墳	古墳
29	繁根木貝塚	縄文
30	石貫葉柊	弥生・古墳
31	青木横穴	古墳
32	青木磨崖梵字群	古代・中世
33	玉名の平城跡	中世
34	元玉名横穴群	古墳
35	絵下経塚古墳	古墳
36	小路古墳	古墳
37	馬出古墳	古墳
38	永安寺東古墳	古墳
39	永安寺西古墳	古墳
40	岡箱式石棺群	弥生
41	大坊古墳	古墳
42	大坊五輪塔群	中世
43	西屋敷遺跡	中世・近世
44	両迫間日渡遺跡	弥生・古墳
45	**玉名平野条里跡**	**古代・中世**
46	玉名平野条里跡	古代・中世
47	柳町遺跡	縄文～平安
48	保田木貝塚	縄文
49	保田木城跡 高瀬町奉行所跡	中世～近世
50	高瀬本町通	縄文～近世
51	高瀬菊池川河床	古代・中世
52	宝成就寺跡 古塔碑群 石仏群	中世
53	大倉山永徳寺跡	中世
54	南大門 地下式横穴	古墳
55	小路	近世
56	上小田宮の前	弥生
57	上小田下丸塚	古代
58	上小田城跡	中世
59	上小田古屋敷	縄文～中世
60	下小田養寺丸塚	古代
61	養音寺跡	中世
62	玉名平野条里跡	古代・中世
63	長建寺跡	中世
64	諏訪宮跡	中世
65	金光寺跡	中世
66	下村城跡	中世
67	高城	古墳
68	山下古墳	古墳（消滅）
69	秋丸	弥生
70	海福寺跡	中世
71	大宝院跡	中世
72	賢長寺跡	中世
73	安楽寺	中世
74	太郎丸遺跡	中世

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
75	津留中林	縄文～中世
76	祭田下遺跡	古墳・中世
77	玉名平野条里跡	古代・中世
78	瀬萩遺跡	弥生・古墳
79	随岸寺跡	中世
80	浦方染山横穴群	古墳
81	安楽寺京塚	中世
82	蓑田横穴群	古墳
83	長福寺跡	中世
84	随月古墳	古墳
85	中神久	古代・中世
86	松林寺山古墳	古墳
87	桃田貝塚	縄文
88	桃田古墳	古墳
89	飯塚古墳	古墳
90	亀頭迫	弥生～中世
91	玉名平野条里跡	古代・中世
92	城ヶ辻古墳群	古墳
93	寺田古墳群	古墳
94	吉丸	古代・中世
95	吉丸西	縄文～中世
96	ナカント塚古墳	古墳
97	群前	中世
98	花群山吉兆寺跡	中世
99	上津留	縄文～中世
100	上津留古墳	古墳
101	部田	弥生～中世
102	世間部塚古墳	古墳
103	寺田久保	縄文～中世
104	久保地下式横穴	古墳
105	朝日寺跡	中世
106	名称不明	
107	名称不明	
108	名称不明	
109	名称不明	
110	名称不明	
111	名称不明	
112	名称不明	
113	名称不明	
114	名称不明	
115	名称不明	
116	名称不明	
117	名称不明	
118	名称不明	
119	名称不明	
120	名称不明	
121	名称不明	
122	名称不明	
123	名称不明	
124	名称不明	
125	名称不明	
126	名称不明	
127	名称不明	
128	名称不明	

Tab.3 遺跡地名表

2　調査日誌抄【2007 年（平成 19 年度）】

（1）表土剥ぎ及び調査環境整備

6.4　表土剥ぎを開始（藤岡工務店）。調査区東側で方向の違う溝状の遺構を確認。

6.5　表土剥ぎ２日目。１区は調査区内南・東辺に水抜き及び土層断面用の溝を掘削。表土剥ぎ時には弥生時代後期（甕脚部）、須恵器（杯身 .6^{C} 末～ 7^{C} 初）、土師器等が出土。本日より、２区の表土剥ぎを開始。

6.6　表土剥ぎ３日目。２区調査区表土剥ぎ。玉名市教委職員来跡。

6.7　表土剥ぎ４日目、本日で終了。２区も表土剥ぎ最後に、南・東辺に水抜き及び土層断面用の溝を掘削。

（2）１区

6.11　本日より作業員作業開始。北西壁土層断面精査及び調査区内へベルトコンベアの設置作業。

6.12　北西壁土層分層終了。土層断面撮影後、実測。実測作業は本調査遺構実測を受注した㈱埋蔵文化財サポートシステム熊本支店（以下、「埋文サポート」という。）調査員により 1/20 にて実施。

6.13　１区清掃、遺構検出作業。調査区東側で検出としていた溝は、D ～ F-5.6Grid 付近にて３条の溝（溝 SD001 ～ SD003）、３基の柱穴（柱穴 SP001 ～ SP003）と判明。特に溝 SD001 とした東西に延びる溝の周辺からは多くの植物根痕が検出された。

6.14　降雨のため作業は休止。基準点測量業務を受注した長田測量設計㈱と打ち合わせ。

6.15　降雨のため作業は休止。

6.18　降雨のため作業は休止。

6.19　久しぶりの快晴。午前中は調査区内の水抜き作業。午後からは遺構検出作業。

6.20　不明遺構 SX001（自然流路）、柱穴 SP002 検出。調査区全体遺構検出状況（古墳時代、古代）写真撮影。

6.21　柱穴 SP001・SP002、溝 SD003・SD004、不明遺構 SX001 の調査。４基準点測量及びメッシュ杭設置。午前中、２区水抜き作業。

6.22　降雨のため作業は休止。

6.25　前日までの降雨で溜まった雨水の汲み上げのため調査は休止。

6.26　土坑 SK001、柱穴 SP001~003、溝 SD002 の完掘。柵列 SA001（P-1~P-5）半裁。

6.27　不定形遺構 SX001、柵列 SA001（P-1~P-5）掘削。遺構半裁状況撮影。

6.28　不定形遺構 SX001 調査、溝 SD001 調査。

6.29　降水確率が高いため調査休止。遺構デジタルトレース打ち合わせ。

7.2　降雨のため作業休止。

7.3　午前中、調査区水抜き作業。午後より不定形遺構 SX001 調査。

7.4　降雨のため調査休止。

7.5　SK001 として調査をしてきた遺構は、自然地形による落ちと判断し欠番とする。

7.6　降雨のため調査休止。

7.9　降雨のため調査休止。

7.10　降雨のため調査休止。

7.11　作業員２班出勤開始日だが、本日も作業休止。

7.12　台風４号接近のため台風養生を行う。調査は休止。

7.13　降雨のため調査休止。

7.14　不定形遺構 SX001 調査。土層断面清掃、確認。

7.18　弥生時代後半まで調査終了し、完掘状態撮影。不定形遺構 SX001、柵列 SA001 完掘撮影。１区は本日をもって掘削作業は終了。

（3）２区

6.27　遺構検出開始。調査区範囲取り込み。

7.3　遺構検出作業。

7.17　調査区全体の清掃。

7.19　調査区全体の掘下げ。Ｉ～Ｋ -14．15Grid にて近世の粘土採掘坑を検出。高木補佐調査指導のため来跡。

7.20　現場休止。

7.23　２区表土剥ぎ、第２回目を開始。調査区の狭くなる部分から東側を行う。野田資料室長調査指導のため来跡。

7.24　M-14Grid にて遺物多数出土。焼土も混じり始めるため住居跡の可能性が高いと判断。２区表土剥ぎ中。

7.25　Ｉ～Ｋ -14．15Grid 粘土採掘坑を調査。近世磁器片が出土し、遺構の時期を確定させる。

7.26　昨日に引き続き粘土採掘坑の調査。

7.27　２区、東・南側に水抜きと土層断面観察用の側溝を掘削し、その断面から住居跡、柱穴等を多数検出。粘土採掘坑からは、陶器・磁器に混じり弥生土器片が多数出土し、下層に同時期の遺構があることを窺わせる。

7.30　G ～ I-10 ～１２Grid での遺構検出を開始。掘立柱建物 SB001、竪穴住居 SI001 ～ SI003 を検出。同遺構の検出写真撮影も同時に行う。

7.31　掘立柱建物 SB001 の調査を開始。J ～ M-13.14Grid での遺構検出作業を行う。

8.1　竪穴住居 SI001 の埋土掘削終了。住居内の周壁に沿いに巡る溝と貯蔵穴と考えられる土坑状遺構を検出。また、上層から掘り込まれた柱穴等も同時に確認。埋土掘削終了の写真撮影実施。

8.2　台風５号接近のため調査は休止。調査区に張っていたシートを剥ぐ等対応に追われる。

8.3　昨日通過した台風の影響で終日降雨。調査は休止。

8.6　掘立柱建物 SB001 を調査、竪穴住居跡 SI001 は完掘。１区の引き渡しについて鉄道・運輸機構と協議。

8.7　当初、竪穴住居 SI003 ～ SI005 と想定していた重複線は周溝である可能性が高い。周溝内に径 10cm 程度の小柱穴を多数検出）削平が著しいため床面等は残っていない模様。

8.8　粘土採掘坑の掘下げ終了。M,N-19Grid で SX001.007 を完掘する。埋土中からは古墳時代土師器、須恵器が多数出土し周辺に同時期の遺構が残されていることを窺わせる。２区の中央部付近では、一部に灰黄色粘土が薄く広がり全体として判然としない。

8.9　K ～ Q-16 ～ 19Grid 掘削及び遺構検出。竪穴建物 SI001 実測終了、遺物取り上げ。県立玉名高等学校３年生女子２名来跡。

8.10　土坑 SK001 土層断面実測、完掘平面実測。竪穴建物 SI001 完掘状態撮影。その後、張り床を剥がし、掘り方部調査。竪穴建物 SI003 主柱穴確認。掘立柱建物 SB001 完掘状況撮影。

8.11 ～ 8.16 までお盆休み。

8.17　竪穴建物 SI001 掘り方まで調査終了。貯蔵穴最下部から甕胴部とともに、手づくね土器出土。竪穴建物 SI003 掘り方周溝部調査。

8.20　L ～ P-16 ～ 19Grid 掘下げ、遺構検出。G ～ K-12Grid で南北に延びる２条の溝状遺構を検出。

8.21　M ～ P-16 ～ 19Grid 掘下げ。L.M-13 ～ 15Grid 遺構検出。竪穴建物 SI002 完掘。

8.22　H-14Grid 遺物集中区遺構検出。L.M-14.15Grid 遺構検出。N.O-19.20 周辺、Grid ごとに掘削、検出。玉名市教育委員会、末永氏来跡。

8.23　H-14Grid にて天草式製塩土器椀部が出土したため、急遽、植木町教育委員会 中原幹彦文化財係長（現 . 熊本市教育委員会 主

任文化財保護主事）に指導を願う。その結果、荒尾産須恵器と同伴し出土していることが判明。同時に獣骨も出土していることから祭祀を目的とした遺構と考えられ、慎重に調査を進めるよう指導を受ける。J ～ L-12 ～ 14Grid で掘立柱建物と見られる柱穴の並びを検出。

8.24　J ～ M-11 ～ 14Grid 遺構検出。H14Grid における遺構検出は数基からなる遺構が切り合っているため難航。明日以降も遺構検出を継続。玉名市都市計画課 竹田宏治係長来跡。

8.27　掘立柱建物 SB002、SB003（２間×２間）２棟を検出。土坑 SK009 として検出した遺構は、調査の結果、井戸である可能性が高くなった。

8.28　溝 SD001 検出。西側でやや不定形な落ち込みを検出するが、上部からの撹乱と判断し掘削後、溝の検出を行う。J.K-16Grid 掘下げ。掘立柱建物 SB002 平断面実測。

8.29　I.J-15.16Grid 遺構検出。掘立柱建物 SB002、SB003 完掘、平断面実測終了。H-14Grid 天草式製塩土器出土遺物集中区、遺物を残したままでは遺構検出が不十分であるため先に遺物を取り上げることとする。掘立柱建物 SB004（２間×２間）を検出。江本課長補佐、高木課長補佐が来跡。

8.30　降雨のため調査は休止。月末で作業員が少人数であったため、事務所で主要な出土遺物の水洗いを行う。

8.31　昨日に引き続き、降雨のため作業休止。

9.3　午後から、県庁で係会議のため調査は休止。

9.4　K ～ M-15 ～ 17Grid 遺構検出。竪穴建物 SI004 から SI006 を検出。H-14Grid から出土する獣骨は馬骨である可能性が高いと、熊本大学埋蔵文化財調査室 江頭氏より助言を受ける。

9.5　竪穴建物 SI006 調査、粘土採掘穴 SX008 完掘、竪穴建物 SI004 完掘。I ～ K-14.15Grid 柱穴群、半裁し調査。K ～ M-15 ～ 17Grid 遺構検出。溝 SD001 ～ SD003、溝 SD006 平面実測。H-14Grid 馬骨出土状況、SB002,SB003 完掘、竪穴建物 SI006 遺物出土状況撮影。文化財調査第二係 中川文化財保護主事来跡。

9.6　調査を開始するも、10 時 30 分頃から降雨のため、作業は中止。

9.7　掘立柱建物 SB005 柱穴半裁、竪穴建物 SI005 掘削。掘立柱建物 SB004.SB005 平断面図実測。

9.10　北側から N ～ R-20Grid まで全体清掃。再度の遺構検出を実施。竪穴建物 SI006 遺物出土状況実測、掘立柱建物 SB005 平断面実測。

9.11　竪穴建物 SI005, 土坑 SK010 掘削。掘立柱建物 SB004,SB005 完掘。溝 SD004,SD005,D007 調査。竪穴建物 SI006 遺物出土状況、流路 1 平面図、掘立柱建物 SB004 平断面図実測。

9.12　２区全体清掃後、再度遺構検出。竪穴建物 SI010 完掘。竪穴建物 SI006 遺物出土状況実測、掘立柱建物 SB004,SB005,SB002,SB003 完掘、L ～ O-15 ～ 17Grid 検出状況撮影。

9.13　２区 L ～ P-18 ～ 22Grid 清掃、遺構検出。竪穴建物 SI007、土坑 SK013 調査。溝 SD004,SD005 その他、柱穴群調査。竪穴建物 SI006 遺構検出状況実測、掘立柱建物 SD005 個別実測図作成。

9.14　L ～ Q-17 ～ 20Grid 遺構検出、J-14.15.16,I-15.16Grid 柱穴、竪穴建物 SI007, 土坑 SK013 調査。竪穴建物 SI006 遺物出土状況実測。G.H-10 ～ 13Grid 柱穴平面、掘立柱建物 SB005 平面実測。

9.19　溝 SD008.SD009、土坑 SK013 .SK010,H-14Grid 遺構検出。墓 ST001 実測。溝 SD008 検出状況撮影。調査区北側から図面のチェックを実施。

9.20　溝 SD008, 土坑 SK013.SK014, 竪穴建物 SI002, 土坑 SK010 西側（拡張部）調査。墓 ST001 甕棺下甕出土状況実測。

9.21　土坑 SK013 土層注記 ,SK014 半裁、遺物多し。土坑 SK010, 竪穴建物 SI008 出土遺物が多いため廃棄土坑へ転用された可能性が高い。溝 SD006 調査。SK013.SK014 土層断面及び平面実測。

9.25　土坑 SK014.SK013. 竪穴建物 SI002 遺構調査。H-14Grid 遺構検出。溝 SD006. 竪穴建物 SI006 清掃後、遺構内遺構の検出作業。溝 SD006. 墓 ST001. 土坑 SK016 実測。

9.26　土坑 SK013 調査。H-13.14Grid 遺構検出。L ～ Q-15 ～ 17Grid 遺構検出、溝 SD006 調査。竪穴建物 SI002 平面、土坑 SK013 断面図実測。

9.27　竪穴建物 SI002 調査、H13.14Grid 検出。L.M-13 ～ 15Grid 遺構検出。溝 SD006 調査。竪穴建物 SI002 平断面、土坑 SK013、SK014 平面図実測。

9.28　竪穴建物 SI002 炉、土坑 SK014 北西隅の落ち込み調査、溝 SD006 土層観察用ベルト外し、竪穴建物 SI002 炉、土坑 SK014 平面実測。

10.1　10 月になり作業員が全員出勤してきたため、調査区内外の草刈り、調査用具の片づけ等、環境整備を実施。竪穴建物 SI002、H-13.14Grid を中心に遺構の検出作業を繰り返し実施。I ～ K-13Grid 遺構が見えにくいため掘下げ。溝 SD006 平面、SD001、自然流路 1 等土層断面実測。

10.2　H ～ K-13.14Grid 遺構検出、土坑 SK014、竪穴建物 SI011 調査。土坑 SK018 断面実測、土坑 SK010. 竪穴建物 SI008 断面実測。

10.3　H ～ K-13Grid 遺構検出、竪穴建物 SI002、SI013、土坑 SK018 調査。

10.4　J.K-13.14Grid 遺構検出。竪穴建物 SI002、土坑 SK018 調査。

10.5　竪穴建物 SI002 掘り方部調査。H-13Grid 掘下げ、調査。

10.9　降雨のため午前中で調査を終える。午後は室内にて図面整理。

10.10　先日までの降雨で調査現場が水没。終日、水抜き作業を実施。

10.11　昨日からの水抜き作業を行いながら、遺構内の清掃。久しぶりに調査面が十分に濡れたため遺構が見えやすい状況ができ、新たな遺構が見えてくる部分もある。遺構の再検討を行う必要がでてきた。明日以降の課題。

10.12　竪穴建物 SI009.SI010.SI016.SI007.SI011 検出。M-15Grid 検出。G.H-11.12Grid 遺構検出。SX011（粘土採掘坑か）平面実測。

10.15　G-11.12.13、H-11.12.13Grid 遺構検出。

10.16　調査区西側清掃、遺構検出。L ～ O-16.17Grid 遺構検出。

10.17　G-11.12、G-11.12Grid、M ～ P-16 ～ 21Grid 遺構検出。８列から 16 列まで清掃。（遺構完掘写真撮影のため）土坑 SK023 平断面実測。

10.18　K ～ O-15 ～ 19Grid を中心に清掃、遺構検出。遺構完掘写真撮影。自然流路 1 、溝 SD004.SD002.SD006、竪穴建物 SI005.SI002.SI014.SI017.SI013、土坑 SK013Grid

10.19　遺構番号の変更を行う。土坑 SK009 を井戸 SE001、土坑 SK023 を井戸 SE002。15.16 列から東側を清掃し遺構検出を行う。

10.22　15 ～ 18 列 Grid にて清掃後、遺構検出。

10.23　15 ～ 16 列 Grid 遺構検出。

10.24　L.M.N-16 ～ 18Grid 遺構検出。

10.25　調査区東側、北壁土層分層。本日は、作業員が３名のため主に事務所で土器水洗作業。

10.26　昨日に引き続き、調査区東側北壁土層分層作業。作業員は月末のため全員休み。

10.29　月末のため作業員休み。調査員も調整休、各自の業務のため調査は休止。

10.30 ～ 31　月末の出勤簿整理、調整休等、報告書執筆等で各自業務を行う。

11.1　L ～ M-16Grid 遺構検出。

11.2　18 列～ 22 列ま Grid の調査区で遺構検出を実施。一部に地表面が凸凹であったことから検出を容易に行うため水平にならす作業を行う。

11.5　降雨のため 10 時半から作業中止。
11.6　降雨のため作業休止。
11.7　M ～ V-19 ～ 25Grid 遺構検出。Q ～ V-22 ～ 26Grid の清掃。明日以降さらに、遺構検出を行う予定。
11.8　竪穴建物 SI008 検出、溝 SD008 より東側全面清掃。竪穴建物 SI015 床面検出、土坑 SK029、SK020 完掘状況撮影。
11.9　溝 SD008 より東側の遺構検出。SX014 確認用トレンチ掘削。検出した遺構の写真撮影。
11.12　O.P-16 ～ 18Grid 遺構検出。竪穴建物 SI015 主柱穴実測、土坑 SK027 土層断面。
11.13　SX014 トレンチ掘削。平面再度検出、掘下げ。M.N-18Grid、P-17.18Grid 遺構検出。
11.14　SX014（自然流路か）、掘削。
11.15　SX014 の調査を継続。トレンチ断面観察の成果から上層より１、２層と層名を付し層毎に遺物を分け掘下げる。本日は、１層のみ掘下げる。
11.16　昨日に引き続き、SX014 の調査。１、２層を掘下げる。
11.19　昨日に引き続き、SX014 の調査。本日までで、１，２層の掘削を終える。
11.20　SX014 の掘削を継続。２、３層の掘下げを実施。
11.21　宇土市藤本氏来跡。製塩土器の実見。調査は昨日からの継続である。
11.22　SX014、３層、４層、７層の掘削。土坑 SK033 完掘。
11.26　SX014 の掘削を継続。３、４層を継続して掘下げる。
11.27　月末のため作業員少なし。SX014 の掘削を継続。
11.28　SX014 の掘削を継続。土坑 SK033 平断面実測。
11.29　二本木遺跡群（春日地区）出土遺物一次整理委託協議。作業員が少ないため事務所で遺物水洗作業を実施。
11.30　月末のため作業員全員休み。調査員は事務所で出勤簿整理、図面整理を実施。
12.3　調査区東側遺構検出。
12.4　Q ～ T-22 ～ 24Grid 遺構検出。O.P-18Grid 遺構検出。SX014 北側土層断面実測。
12.5　O-17.18Grid 遺構検出。Q ～ T-18 ～ 22Grid でも遺構検出。
12.6　O-17.18Grid で遺構検出。O,P-20.21Grid 清掃後遺構検出。SX014 完掘撮影。遺構完掘面から多数の柱穴に混じり、竪穴住居跡等を検出。
12.7　M.N-17.18Grid 遺構検出。O.P-16.17Grid にて竪穴建物 SI018、SI019、SI020 を検出切り合いが激しく確認できるかどうか不明。
12.10　竪穴建物 SI018.SI021、土坑 SK039 の調査及び P-17Grid 遺構検出。
12.11　SP137 埋土中よりジョッキ形土器が１個、ほぼ完形の状態で出土。平断面図及び写真撮影まで実施。竪穴建物 SI018 平面実測。
12.12　降雨のため作業休止。
12.13　土坑 SK042 を調査。遺構掘削の角度、埋土の状況から井戸と考えられる。SB006 として検出し調査を実施しているところで同時に柱穴間に広がる土坑（SK086.087）は同一遺構であると考えられる。今後の精査が必要か。
12.14　O.P-20.21Grid 遺構検出、竪穴建物 SI023.SI018、掘立柱建物 SB006 調査。SB006 土層半裁状況撮影。
12.17　土坑 SK050、O.P-20.21 柱穴群完掘。竪穴建物 SI018.SI023 調査。土坑 SK047.SK045.SK049 遺物出土状況撮影。
12.18　S ～ L-23 ～ 25Grid 清掃、遺構検出。P-21Grid 竪穴建物、不明遺構確認。P-21Grid 不明遺構遺物出土状況実測。
12.19　R ～ T-22 ～ 26Grid 遺構検出。SI022.SI023 調査。P-18Grid 遺構検出。竪穴建物 SB006 土層断面実測。土坑 SK047.048 遺物出土状況実測。
12.20　SX015 完掘、土坑 SK042 掘削。R.S.T-24.25Grid 柱穴半裁。竪穴建物 SI018 調査。SI018 平断面、SI023 平面実測。土坑 SK049 遺物出土状況、掘立柱建物 SB006 土坑土層断面撮影。本日をもって、本年の作業員を入れての調査は終了。
12.21　SX015 完掘、写真撮影、実測。午後から作業休止。
12.25　土坑 SK042 調査、土層断面実測。土坑 SK042.SX015. 掘立柱建物 SB006 土層注記作業。
12.26　事務所で図面整理、事務所周りの清掃を行う。
12.27　実測を委託している埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の担当者が交代するため図面等の引き継ぎ、協議を行う。調査事務所に来るのは本年最後となる。

2008（平成 20 年）

1.7　朝から降雨のため作業休止。
1.8　竪穴建物 SI018.SI023 掘り方調査。Q ～ T-22.25Grid 柱穴群調査。土坑 SK049 遺物出土状況撮影。
1.9　柱穴 SP197 ～ 205 完掘。竪穴建物 SI018、SI023、SI020、SI029、土坑 SK049 完掘、平断面実測。SI018 完掘写真撮影。
1.10　S ～ U-24.25Grid 柱穴調査。竪穴建物 SI025、土坑 SK055、SK059、SK042 完掘。竪穴建物 SI031 検出、完掘。土坑 SK054、SK056 土層断面実測。SK049 遺物を検出しながら実測、取り上げ。SK051 遺物検出状況実測後、完掘状態まで実測終了。土坑 SK049 は井戸 SE004 へ変更になる。
1.11　降雨のため作業休止。
1.15　P-18Grid 竪穴建物 SI019、SI020、SI023 調査。Q-22Grid 土坑 SK057、SK060 及びその周辺で遺構検出。調査区全体の実測図のもれがないかチェックを開始。掘立柱建物 SB006 に伴う土坑の個別実測図作成。
1.16　Q-22Grid にて炭化物集中区確認。土坑 SK057、SK060、SK049 調査。SK061、SK052、SK059、SK055、SK054 掘削。実測は昨日に引き続き新規調査遺構を実測しながらチェック作業。
1.17　竪穴建物 SI034、SI023、SI036、SI025、SI024、SI035 掘削。土坑 SK055、SK054、SK064 調査。SI019、SI020 完掘状況、井戸 SE004 井戸底遺物出土状況写真撮影。
1.18　土坑 SK065、竪穴建物 SI035 掘削。SI024、SI025、SI036 土層確認後、完掘。午後から調査現場撤収について機構と協議を実施。
1.21　先日（20 日（日））が雨で、調査現場中が水没し、水を抜くも泥はぬかるんでおり作業は休止。調査器材等の洗浄作業を行う。
1.22　朝から降雨のため作業は休止。
1.23　土坑 SK064、SK066、SK062 完掘。この作業以外は昨日の降雨による現場内の泥濘により調査は休止。
1.24　土坑 SK070、SK071、検出掘削。18 列、19 列清掃、検出もれの遺構確認。SK074、SK075、柱穴 SP280、SI033、SI034、SI035、SI038、SI029、SK073、SK065 掘削。今週は、土曜日も調査を実施する旨、吉田から作業員へ周知。
1.25　明日、土曜日に調査区内、弥生時代までの遺構面完掘写真撮影のための清掃を開始。同時に、土坑 SK070、SK071 完掘、SK070 周辺の掘削、竪穴建物 SI033 完掘。
1.26　土曜日だが、調査終了が迫っているため調査を実施。高所作業車（25m）を導入し弥生時代調査面までの完掘写真撮影。M.N-15Grid で遺構検出、掘削。22 列以東、遺構検出。
1.28　降雨のため作業は休止。
1.29　土坑 SK082、SK083、SK84 掘削。遺構実測洩れ及び遺構時期確認のための図面チェック。
1.30　柱穴 SP302、SP303、SP304 掘削。本日をもって本遺跡調査を終了。
記　長谷部、吉田、手柴、坂本、園田
2.4　埋め戻し作業開始。新幹線本線部受託工事業者（JV）が施工。調査事務所では、引き続き、図面整理、遺物整理を実施。

2.5　事務所にて図面整理。実測図のデジタルトレース打ち合わせ。出土遺物を資料室へ搬出する際の台帳作りを始める。
2.6 ～ 2.8　遺物整理及び台帳作り。
2.12　本日より、本調査に参加してきた坂本亜矢子が国土交通省事業植木バイパス工事に伴う「南畑遺跡」へ、吉井英志が同じく国土交通省白川河川改修工事に伴う「新屋敷遺跡」発掘調査現場へ異動。残りは、引き続き図面の整理。
2.13 ～ 2.20　図面整理。
2.21　長谷部、吉田は下江中島遺跡出土木製品保存処理検査のため吉田生物（関西）へ出張。他は、引き続き事務所にて図面の整理。
2.23　長谷部、吉田を除く調査員は事務所にて図面の整理。
2.25 ～ 3.3　図面整理及び図面台帳の作成。
3.4　図面台帳作成を継続。奈良文化財研究所牛嶋 茂氏来跡。
3.10 ～ 3.25　実測図手直し及び台帳の作成、事務所撤収の準備。
3.26　事務所撤収。

玉名平野条里跡（古閑前地区）2010 年 5 月

第３章　遺　構

1　調査１区（Fig.5）

柵列 SA001　調査１区ほぼ中央に位置し、N-35°-W を測り５基からなる柱穴列。P1、P2 間が 6.6m と離れているため柵列としては考えられないかもしれないが、P1 から P5 までを見ると直線に並ぶためここでは柵列として報告する。

柱穴は上部を大幅に削平されているとみられ、中には基底部に近い部分のみ残るものもある。P1.P3.P4 は深さ約 20 ～ 25cm とやや深く、P2.P5 は 10cm 未満と浅く検出した。検出した柱穴間は、総延長 12.25m、P1-P2 間は先にも記したが柱穴中央間で約 6.6m、おそらくは P2 に近い深度の柱穴が存在していた可能性があり約 1.65m を間隔とする４基の柱穴が途中に存在していたと見られる。P2-P3 間は 1.65m、P3-P4 間は 1.9m、P4-P5 間は 2.1m を測る。埋土には柱痕相当部にあたる１層とした部分に黒褐色粘質土が見られ、根固め相当層基底部にあたる部分に１層よりは明るい黄褐色のシルトが残る。P4 土層断面の柱痕から約 10cm 程度の柱が立っていたことが窺える。小規模な柱穴列ということから、遺構内からの遺物は出土しておらず時代を特定することはできないが、弥生土器を埋土に有する溝 SD002 の上部から掘り込まれているため、これ以降の遺構とまでは判断する。

溝 SD001　F-5Grid に位置し調査区南東隅で排水溝に東西を切られ検出した遺構。検出全長 4.8m 幅（A-A'）1.4m、深さ 57cm、方位 W-21°-N を測る。埋土は１～５層に分層される。５層とした薄く U 字状に遺構底部に沿って見られるるシルト質の青灰色土は、４層が入る前の段階に一度掘り直して整えた可能性がある。また、４層の暗褐色粘土上面がが不整形ながら溜まった後、５層を削り水平に均され３，２層が入る。されにその後、１層が上部より掘り込まれ、幾たびもの人為的な行為により維持されていたことが窺える。埋土中からは近世磁器片が出土（小片のため図化していない）しており、近世から近代に相当する時期の遺構と判断される。

溝 SD002　Grid ５．６列上にあたり調査区中央よりやや東側で検出し、北側の調査区外へと続く遺構。検出長 13.3m、幅（A-A'）62cm、深度 8cm、方位 N-29°-E を測る。検出した調査区ラインから 7.6m までは幅 60 ～ 1m 弱であるが、その先端（南側）は幅が 50cm 弱と狭くなり深度も浅くなる。このことから、検出長 7.6m を境にそれまで維持していた溝を延長し掘削した可能性がある。溝の掘削年代であるが、A-A' で図示している断面図で示すように埋土中に弥生時代後期の甕胴部を検出していること、北側土層断面の８層（灰黄褐色土）堆積土（弥生後期から古墳初頭期相当層）を基本とする埋土が遺構内に見られることから弥生時代後期の年代を想定できる。

溝 SD003　溝 SD002 の東側に位置し、東側排水溝により遺構の東側大半を削平する。検出長約 4m、幅約 50cm、方位 N-25°-E を測る。遺構は浅く、本来の形状を残していないため図示していないが、溝 SD002 と断面形状は似る。遺構は、南端部で西側の掘り方の線がやや東へ曲がり始め、変化が見られる。掘り込み面は溝 SD002 とほぼ同じと見られ、灰黄褐色を呈するシルトが埋土の大半を占める。

柱穴 SP001 ～ SP003　E-6Grid 上に位置し、溝 SD002 と SD003 の間で検出され SP002 は SD003 の上部より掘り込む。SP001 と SP003 の中心点間は約 1.4m を測り遺構深度も同規模で、断面形状も似ることから同時期の遺構と判断される。また SP002 も同様の規模であることから関連する遺構であろう。いずれの遺構も、埋土は黒褐色粘質土を主体としているが、土層堆積状況等は分層できなかった。埋土の状態では柵列 SA001 に類似する。遺構の時期は SD003 を切ることから、それと同時期と見られる SD002 よりも新しく、柵列 SA001 と同時期の遺構であると考えられる。

Fig.3 玉名平野条里跡 (古閑前地区) 周辺遺跡分布図 (S=1/5,000)

不明遺構 SX001　D-2Grid で検出した不定形の土坑状遺構。遺構の南側は調査区外へ伸び、全体形は不明。当初、北側に広がる自然流路 NR001 の一部と見て先行して掘削したため、埋土の状況等は分からず、遺構であるかの検証が不十分となった。土坑状遺構の可能性もある。

自然流路 NR001　調査区２～４列上で検出した自然流路。大きくは２段からなる堀り方を呈し、１段目は大きなテラス状の平坦部をなし、最下部は溝状の様相を呈する。最下部は幾重かの土坑が切り合うように見えるが、調査段階では「まだ掘れる。」と迷いながらの掘削であったため、はっきりとした遺構としては確認できていない。よって、自然流路の末端部もしくは、その一部であると判断した。埋土中からの遺物は無いが、埋土が黄色粘土～シルトが主体であること、掘り込み面が明確ではないが５層から下であることなどから近世以前の時代を与えられる遺構であると判断される。

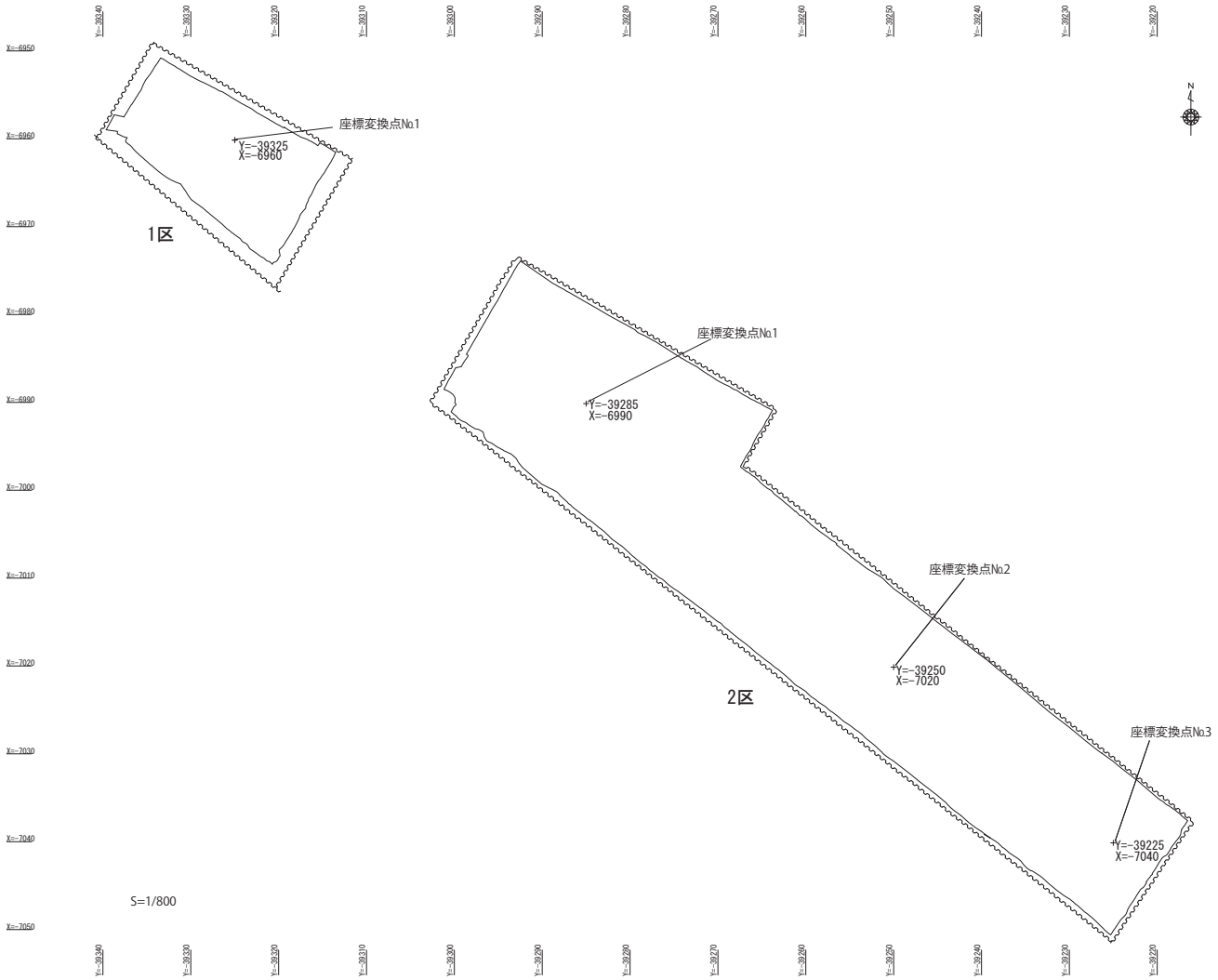


Fig.4　玉名平野条里跡 (古閑前地区) 1 区、2 区座標変換点

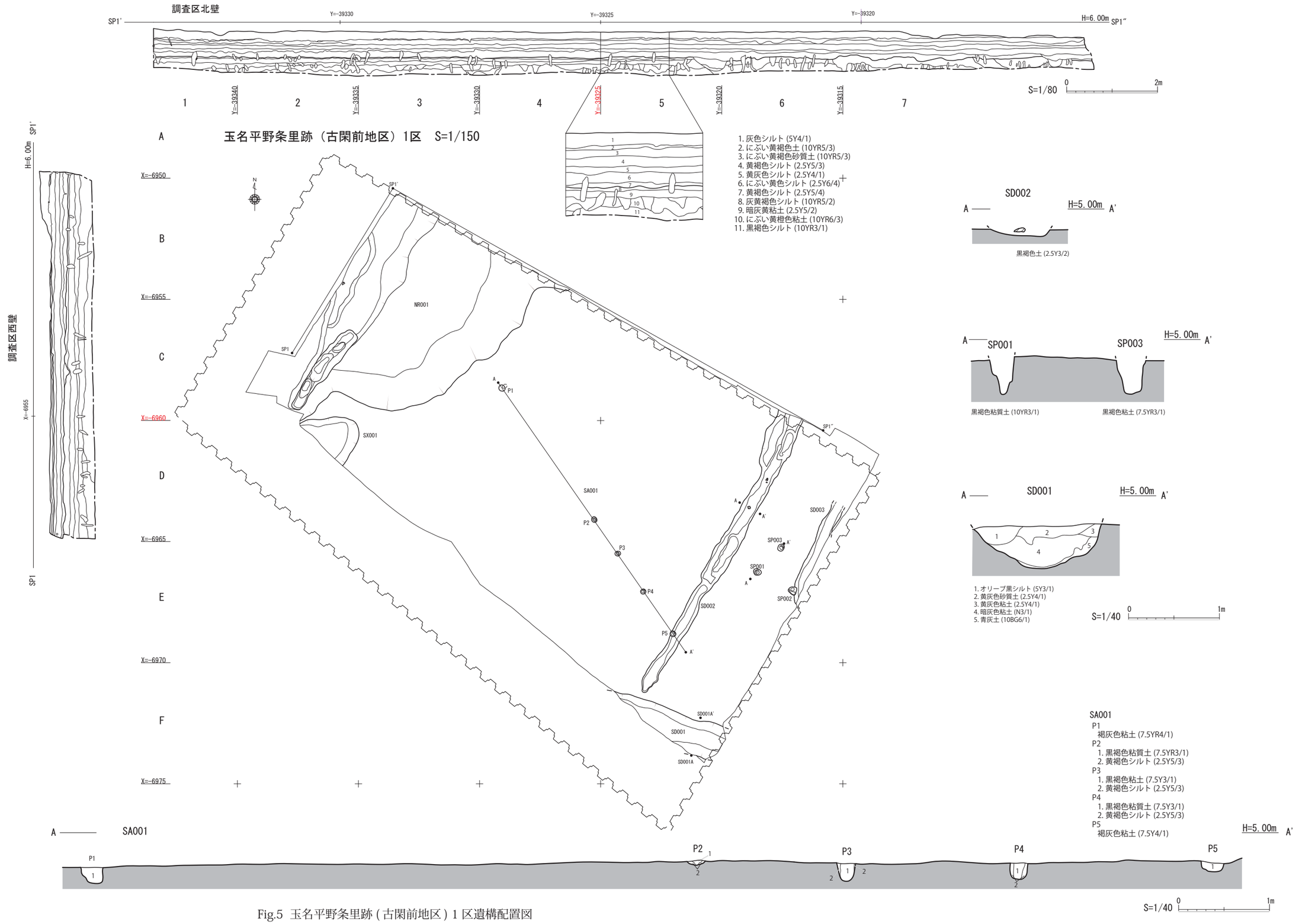


Fig.5 玉名平野条里跡 (古閑前地区) 1 区遺構配置図

2　調査２区（Fig.8）

【弥生時代】

竪穴建物 SI001（Fig.6）２区の北西隅に位置し遺構の北辺、東辺が調査区外にあたる。建物西辺の検出長は 2.70m、南辺 3.42m を測り、主軸は炉と貯蔵穴の中心を結ぶライン上で N-9°-W を測る。深度は検出面から遺構中央部で約 10cm、周壁に向かい１～２cm 程度下がる。硬化面は確認できていない。

掘り方はほぼ垂直で、地山掘削後全面に張り床を施す。張り床上面で検出できた遺構は、地焼炉・貯蔵穴・柱穴・周溝がある。地焼炉は埋土に焼土粒を多く含むことから炉と想定したが、燃焼面は確認できていない。おそらく炉中心は調査区外にあたると考えられる。貯蔵穴は南壁寄りに検出した。埋土の断面（C-C'）からは砂粒や粘性を有する埋土がほぼ水平に堆積しており遺物も縦方向へ乱雑に入ることから、遺構廃棄にあたり人的な埋め戻しは見て取れない。柱穴は、主柱穴と想定されるものを１基西壁近くで確認した。下端に柱座と見られる一段下がった部分を有する。やや、壁際に寄り過ぎの感もあるが、これを主柱穴と想定すると２本柱建物となる。検出した他の柱穴はその位置から建物を支えるための柱穴とは考えにくい。

周溝は西・南壁の張り床上面に見られ、一度貯蔵穴横で切れるが遺構内四辺に配されていたものと考えられる。西壁際では、張り床下の掘り方面で幅約 20cm の周溝が壁に平行に掘削されているのが確認された。

遺構の廃絶にあたっては、住居埋土の残りが少いことから確認しづらい点もあるが、先にもあげた貯蔵穴の埋土の状況から埋め戻されたとは考えにくく、建物としての利用が終わった後はそのままの状態で廃棄されたものと考えることができる。

出土遺物は、貯蔵穴埋土中から弥生土器の甕片とともに手捏土器の杯（32）が出土している。

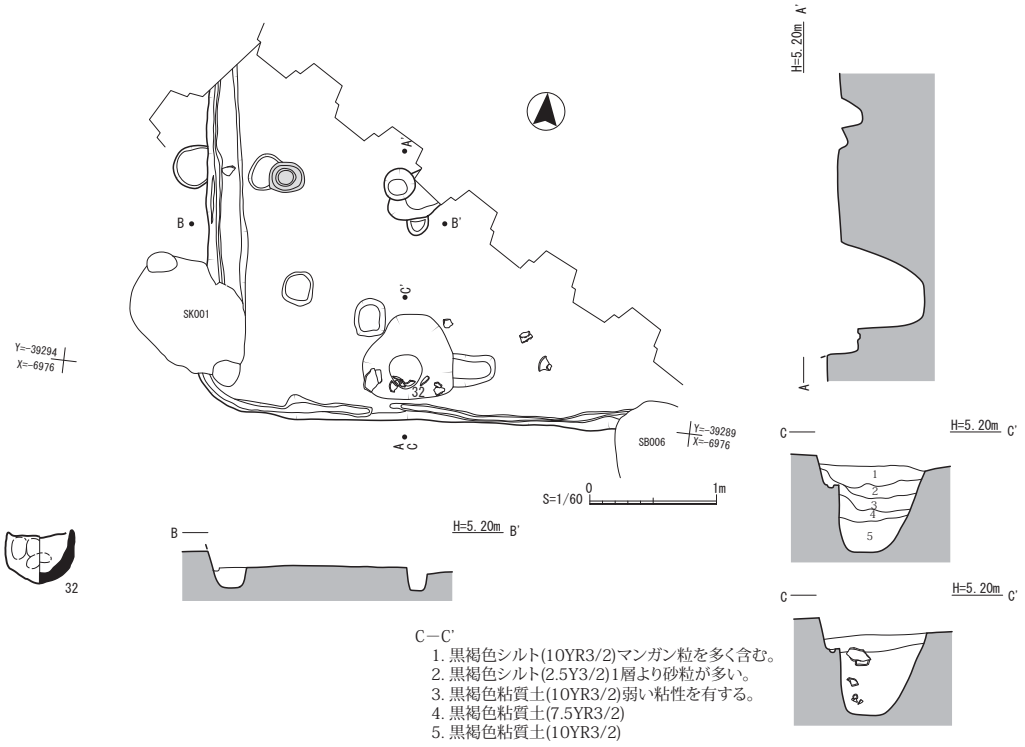
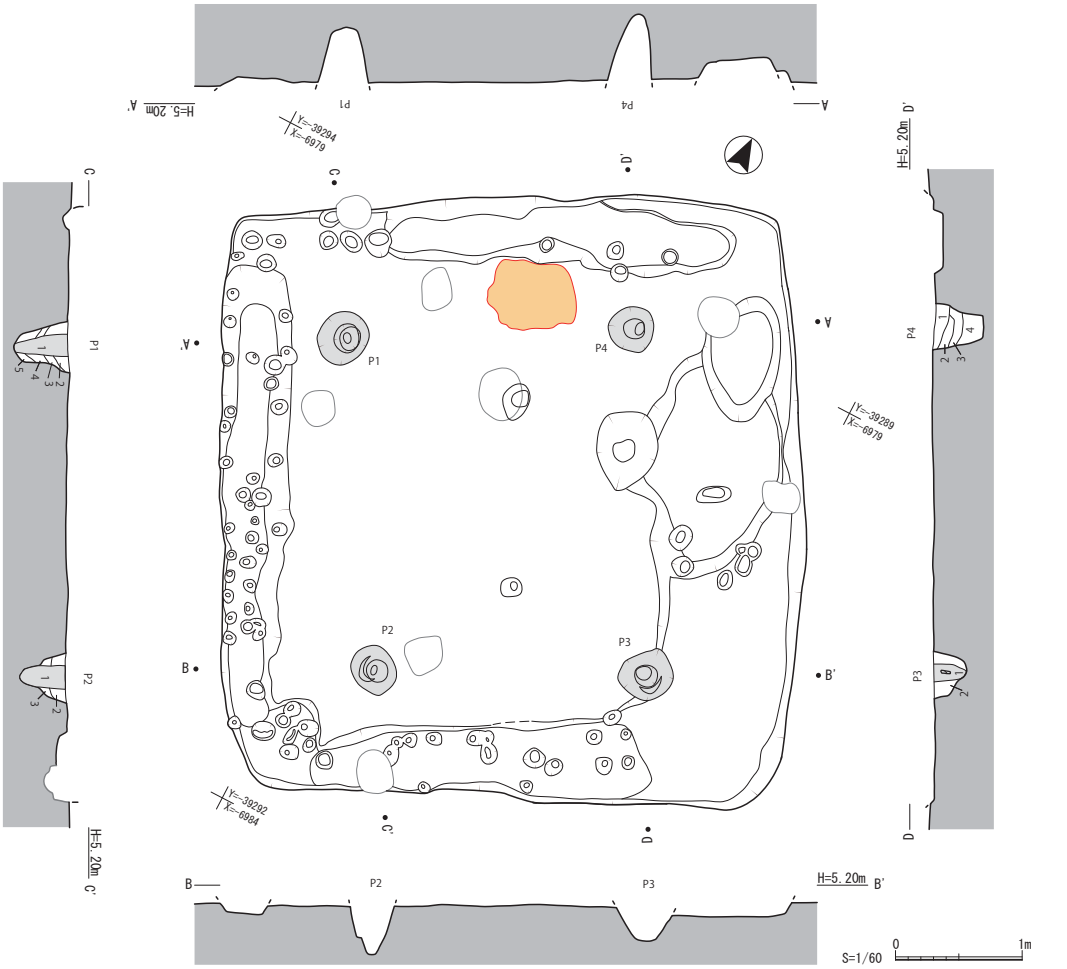


Fig.6　竪穴建物 SI001 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI002（Fig.7）G.H-11.12Grid 上に位置し、竪穴建物 SI001 の南に位置する竪穴建物。本遺構も掘り方の大半が削平を受けており、床面の最下部がわずかに残るのみである。よって埋土、掘り方の土は確認できていない。建物の規模は、南北に 4.79m、東西に 4.58m で、平面形は隅丸方形を呈し、壁両端の方向を基軸とする建物主軸方位は、N-27.5° -W を測る。

遺構と遺構外を区画するものとして、掘り方段階での周溝が検出されている。南北及び西辺には幅約 30cm の浅い溝が壁と平行に走り、東側には浅い土坑状遺構が数基切り合いながら広がっている。また、それら溝状の遺構には、下面で径 10cm 前後の小柱穴が場所によっては２列をなし、それ以外では乱雑に壁際に広がっている。遺構が小さいことから下端形状の把握は困難であったが、ほぼすべてにおいて先端が尖った棒状の杭が周壁沿いに打ち込まれていた可能性もある。この部分からの遺物の出土はない。

遺構北壁近くで、掘り方溝状遺構内区から地山面が焼けた部分が検出できた。東西に広くやや歪な楕円形をなしており、炉床部であろう。主柱穴は４本を検出することが出来た。（A-A',B-B',C-C',D-D'）P1 ～ P3 では断面で柱痕を確認していることから遺構の廃絶の際に柱が立ったままの状態で放棄されたものと考えられる。本遺構に伴う出土遺物はない。



P1
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)
2.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
3.黒褐色粘質土(10YR1/3)
4.暗褐色粘土(10YR3/3)
5.黒褐色粘質土(10YR2/3)

P2
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)
2.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
3.黒褐色粘質土(10YR2/3)

P3
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)
2.暗褐色粘質土(10YR3/3)

P4
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)
2.暗褐色粘質土(10YR3/3)
3.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
4.黒褐色粘土(10YR2/3)

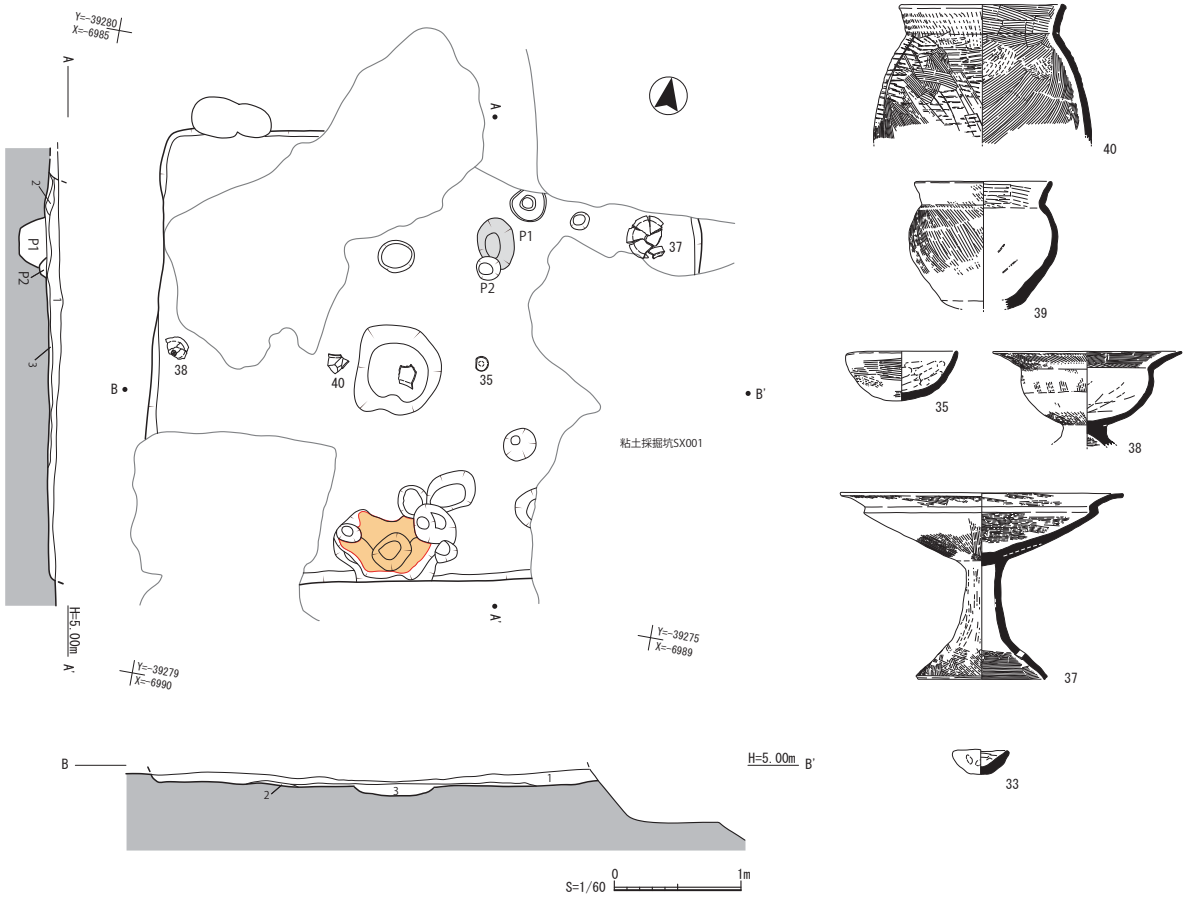
Fig.7　竪穴建物 SI002 実測図

Fig.8　玉名平野条里跡 (古閑前地区) 2 区遺構配置図

竪穴建物 SI003（Fig.9）遺構の切り合いが多い I-14Grid にて検出された竪穴建物。近世の粘土採掘（SX）に切られ、全体形が見えにくい中で検出した。遺構の掘り方は浅く、埋土の状況等は確認できていない。

建物の規模は、南北 3.55m、東西 4.23m で、壁両端の方向を基軸とする建物主軸方位は、N-81° -E を測る。硬化面及び張り床は確認できず、おそらく検出した段階で掘り方まで達していた可能性もある。この面での遺構内で検出した遺構は、炉、南壁際に土坑状遺構、柱穴がある。遺構の中心に位置する不定形の掘り込みは、地山面から炭化物と灰を主体とし、わずかに焼土を有することから炉と想定した。また、南壁近くに埋土に焼土塊を有する下端の一定しない土坑状遺構を検出した。燃焼面が上層でわずかに確認され、その下部から焼土塊が出土していることから、地焼炉である可能性も考えられる。中央に位置する炉との役割の違いについては不明だが、本竪穴住居跡遺構に付随する炉と捉えている。柱穴は、主柱穴に相当する位置が粘土採掘坑 SX に切られているため不明である。 4 本柱建物と考えると P1、P2 がその一部である可能性は高い。

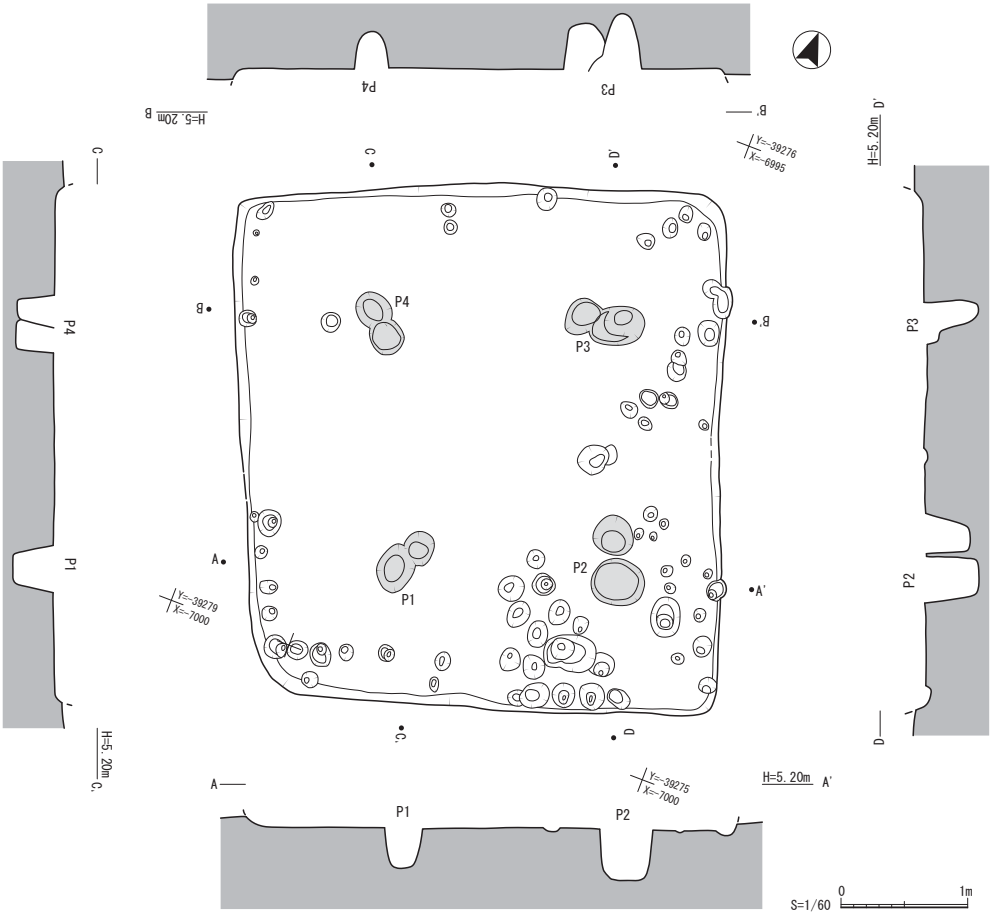
出土遺物は、高杯形土器（37・38）・杯（33・35）・甕（39.40）がある。先にも記したが、遺構が掘り方の最下部近くであることを考慮すると、弥生終末の良好な一括資料である。



A—A'
1. 黒褐色粘質土(10YR3/2)極小のマンガン粒を多く含む。
2. 褐灰色粘質土(10YR4/1)下層部に鉄分が沈着し帯状を呈する。粘性強い。
3. にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)シルトに近く、わずかにマンガン粒を含む。
P1
黒褐色粘質土(10YR3/1)シルトに近く、やや鉄分混じり。
P2
灰黄褐色粘質土(10YR4/2)少量の炭・焼土を含み、粘性が強い。

Fig.9　竪穴建物 SI003 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI004（Fig.10）竪穴建物 SI007 の西側に位置する遺構。本建物も大きく削平されており、検出した面は、床面が削平された状態である。建物検出長は、南北 4.15m、東西 3.81m で、壁両端の方向を基軸とする建物主軸方位は、N-21°-E を測る。主柱穴は 4 本柱で、土層断面を半裁し観察したが、柱痕等、土層の堆積は見ることができなかった。それぞれの柱穴に接し、一部を切り合う形で同規模の柱穴があり、柱のみを途中で建て替えた痕跡を留めている。柱穴はそれぞれ同じ深度を呈し、中段掘り方を有し柱穴位置を調整した跡を認めるものも含まれる（P3)。P2 については、調査時にやや掘りすぎた感がある。本遺構では住居跡周壁に沿い溝状の周溝は認められないが、南側壁・東側壁付近には小柱穴が集中し、特に南側壁近くには二重に列をなすなど竪穴建物 SI003 と共通する特徴が見受けられる。



暗褐色シルト(10YR3/3)焼土を粒状に多く含み、にぶい黄褐色粘土をブロック状に含む。

Fig.10　竪穴建物 SI004 実測図

竪穴建物 SI005（Fig.11）L-15Grid 上に位置し、東側で竪穴建物 SI011 を切り検出した遺構。遺構中央に、本遺跡を確認する際に設定したトレンチが位置している。また、南東隅を排水用の溝が横切る。本遺構も上部を削平されており、住居プランと硬化面を確認できるのみである。

遺構検出壁を基軸とする長径方位を主軸とすると、N-65°-E を測る。平面形は、南北に 3.25m、東西に 4.35m を測る長方形を呈する。床面には発達した硬化面が広がっており、遺構中心に向かいやや高まりを見せる。隅近くではやや内に入り、側壁近くでは壁近くまで広がる。トレンチが入るため、東側では硬化面の広がりは確認できない。

炉は、遺構の中央からやや南東側に位置し、トレンチにより一部を削られた状態で検出した。埋土は暗褐色の砂質土で、平面形は楕円形状を呈している。埋土には焼土粒、炭化物が暗褐色砂質土と混土された状態

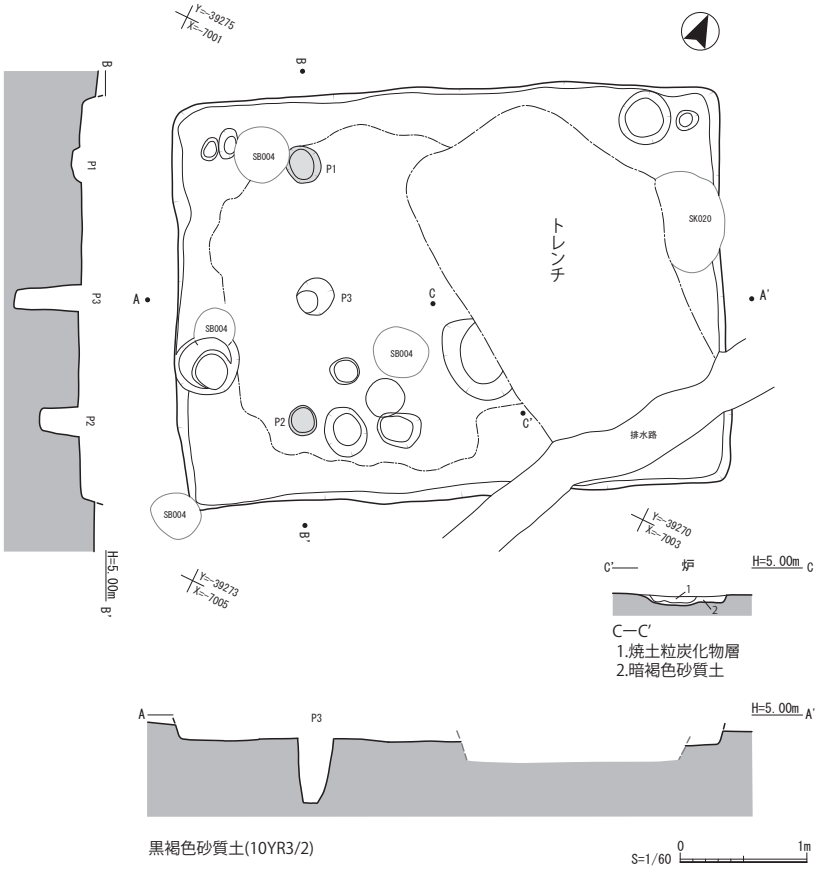


Fig.11　竪穴建物 SI005 実測図

で詰まっており、他に類する遺構がないことから、炉と最終的に判断した。柱穴は、４本柱のうちの P1.P2 の２基と判断するが、その中央に位置する P3 の掘り方も深いことから、P3 を主柱穴のうちの１基と想定することも可能かもしれない。本遺構からは出土遺物がないため時期不明だが、４本柱建物、２本柱建物の２パターンのいずれの可能性かは判断できなかった。貯蔵穴に類する遺構は確認できていない。

竪穴建物 SI006（Fig.12）L-16Grid に位置し、西側で SI005 に切られ検出した遺構。確認できる東側辺を基軸にすると N-4°-W を測り、一辺 3.32 m、南側残存辺で 2.82m を測る。南側は土坑 SK002 や井戸 SE004 により切られ、本来の数字を表しているものではない。遺構は、おそらく長方形を呈すると見られるが、全容は不明。角隅はほぼ直角に曲がり、掘り方はほぼ垂直である。遺構床面では硬化面は確認できず、住居内における床面付近の詳細は不明。検出深度が 10cm 弱であるため、他の竪穴建物で見られるような掘り方は確認できていない。床面からは、北隅付近に炭化した木材片が出土しているが、取り上げ時に小片となり部材調査まではできていない。その南側からは、唯一の出土遺物として鉢型土器が１点出土している。

住居内やや西側に、浅く逆台形を呈する掘り込みがあり、基底部に黒色炭化物層、その上部に暗オリーブ褐色砂質土が見られた。炭化物層を下層に持つことから、炉である可能性が高い。柱穴はすべて確認できなかったが、長径約 50cm の柱穴を確認し、B-B' の図で示すように根固め粘土を有する柱痕を確認した。また、遺構中央部にも浅く小規模な柱穴を確認したが、対になるものではない。

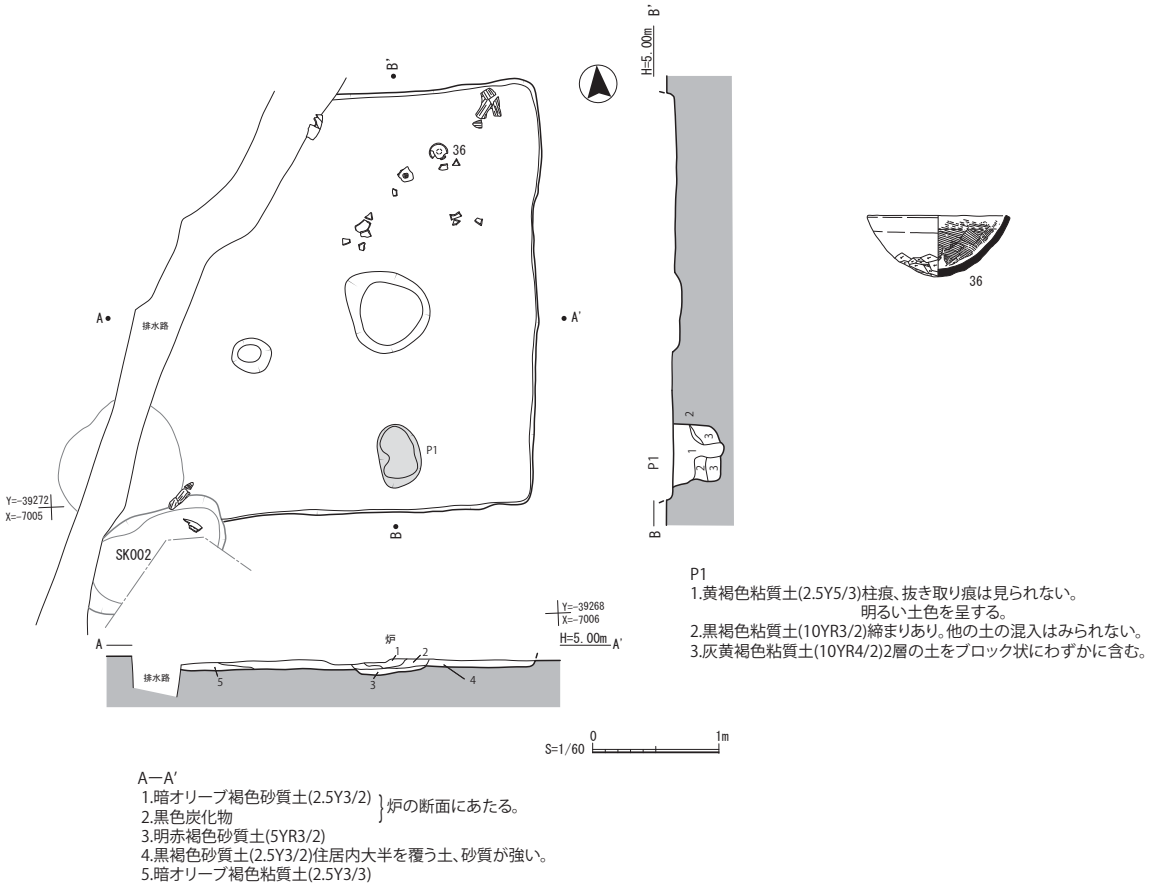


Fig.12　竪穴建物 SI006 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI007（Fig.13）M-14Grid 上に位置し検出された遺構。本遺構は最初に遺物集中部を検出し、その後竪穴建物跡と考えられる遺構の検出に至った。報告にあたり土坑状遺構の可能性も考えられたが、ここでは柱穴を確認したこと、他の竪穴建物にも見られる掘り方部における周溝を 1 辺だが確認できたことから竪穴建物として報告する。遺構範囲の約 1/3 は調査区南側に設置した水抜き用の溝により削平される。そのため、主軸と平面規格は確定できていない。

表土剥ぎ後から見えていた遺物の集中部は、整理の結果おおよそではあるが確認できただけで、甕 2 個体、高杯 1 個体、壺 5 個体、鉢 2 個体の計 11 個体が破砕廃棄されたものと見られる。出土した遺物からは特殊性はなく、日常容器のみの出土であった。このことから、住居廃絶時の遺物廃棄行為の可能性が最も高いと想定する。

竪穴建物 SI008（Fig.14）M-16Grid 上で検出した遺構。他の竪穴建物に比べるとやや小規模であり、一辺が 2.48m × 2.86m を測る。平面形はやや歪であり、各所に屈曲部や張り出し部と見られる部分があるが、おおむね四角を呈する。遺構内には暗褐色の砂質土と黒褐色の砂質土が薄く入り、放棄された後、自然堆積による埋没を示す。床面では硬化面は確認できず、柱穴も対角線上で 2 基で検出しており、おそらくは 4 本柱であった可能性が高い。南側で検出した柱穴（P2）は、深さ 44cm で柱痕を残し、両側には根固の粘質土が詰まった、他の竪穴建物で見られる柱穴に比べると比較的しっかりとした遺構が残る。遺構南側では、柱穴（P2）に切られた状態で、方形の掘り方を有する貯蔵穴と考えられる遺構も検出している。埋土中からは、短く垂直に立ち、二重の口縁を有する壺が出土している。遺構内からは、他にもわずかだが遺物が出土しているが、小片であり器種も不明であったため図化していない。

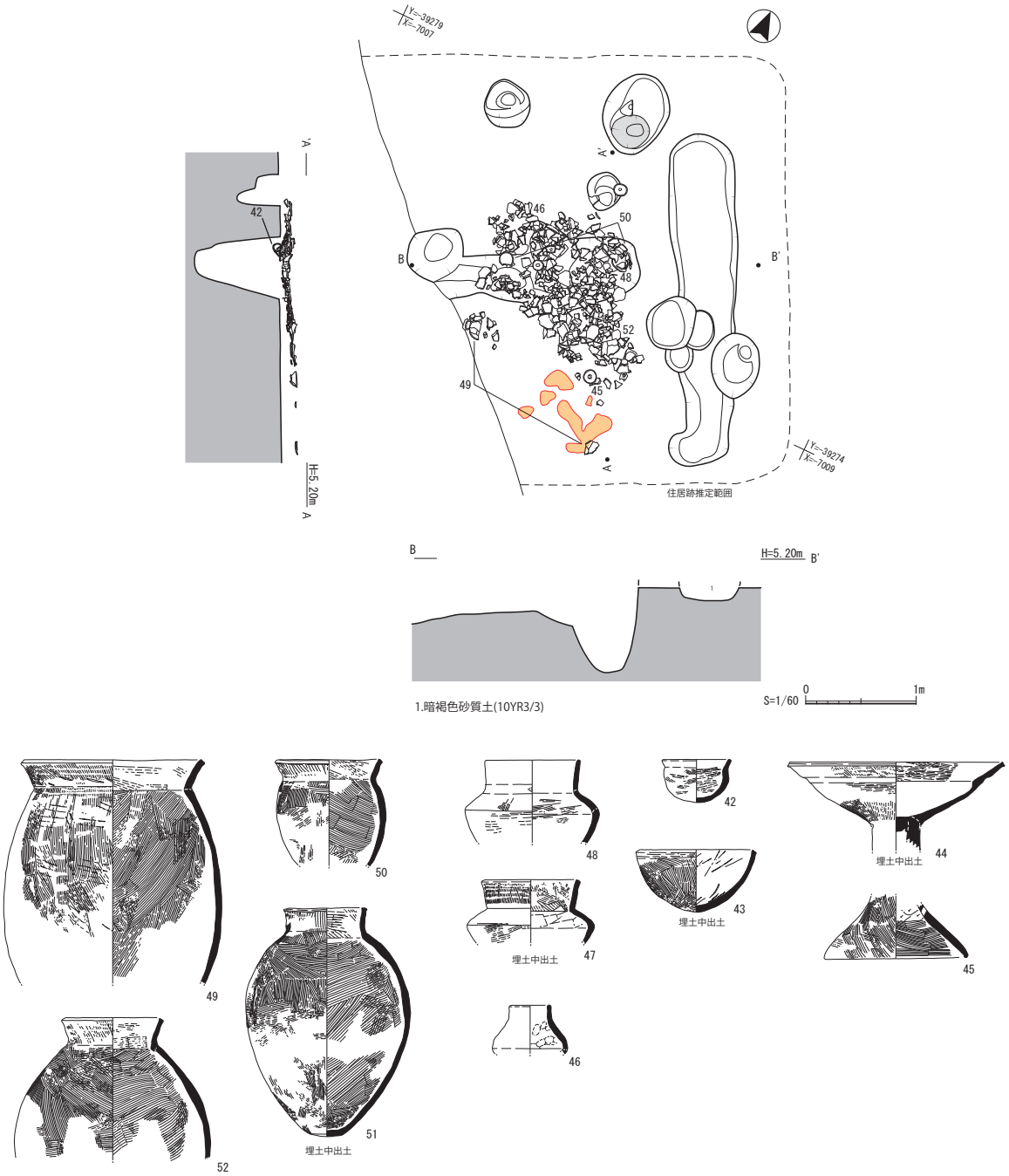


Fig.13　竪穴建物 SI007 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI009（Fig.15）N-16Grid 上で検出した遺構。南北 2.94 m、東西 3.2m、南北壁を基軸とすると N-5° -W を測る。平面形は方形を呈し、隅はやや丸く収める。床面までの深さは浅く、掘り方まで確認できた。壁面はほぼ垂直に立つと見られる。遺物の出土状況から硬化面が残ると見られたが、確認できていない。柱穴は P1、P2（C-C'）を明確に確認したため、４本柱であると考えられる。西壁近くで床面が焼け、赤化した範囲を確認した。その範囲は、約 10cm 前後の範囲で数ヶ所に及び、炉の可能性は低い。壁際からの検出であるため作りつけの竈の可能性も想定したが、床面から出土している土器は弥生後期を示していることから、竈である可能性はないと考える。先にもあげたが、出土した遺物は弥生後期土器であるが、小破片であるため図示はしていない。

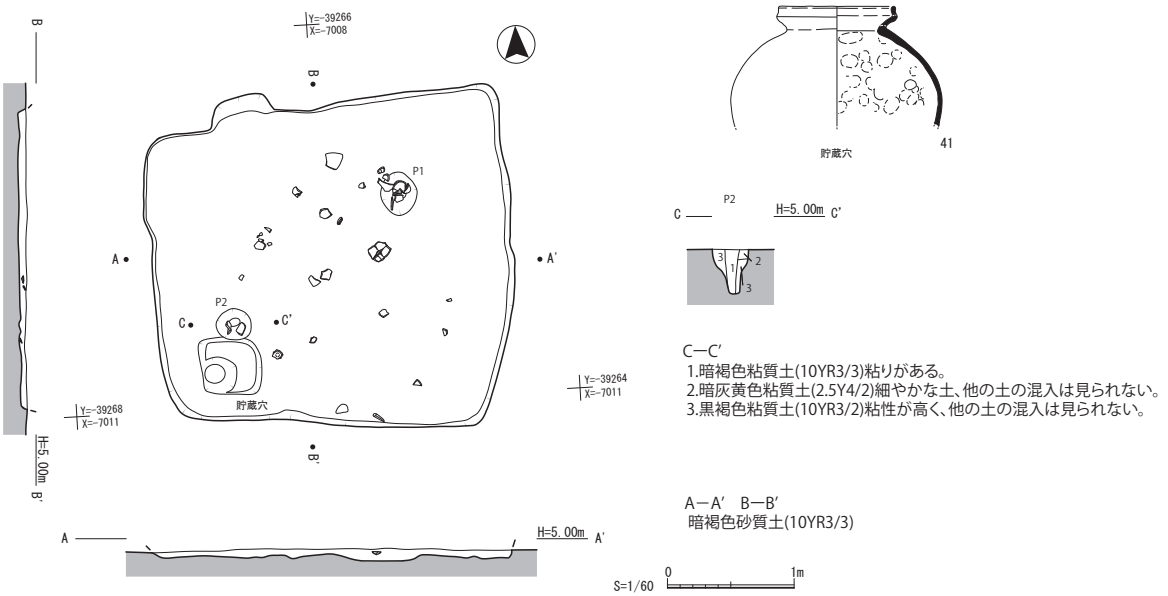


Fig.14　竪穴建物 SI008 実測図及び出土遺物

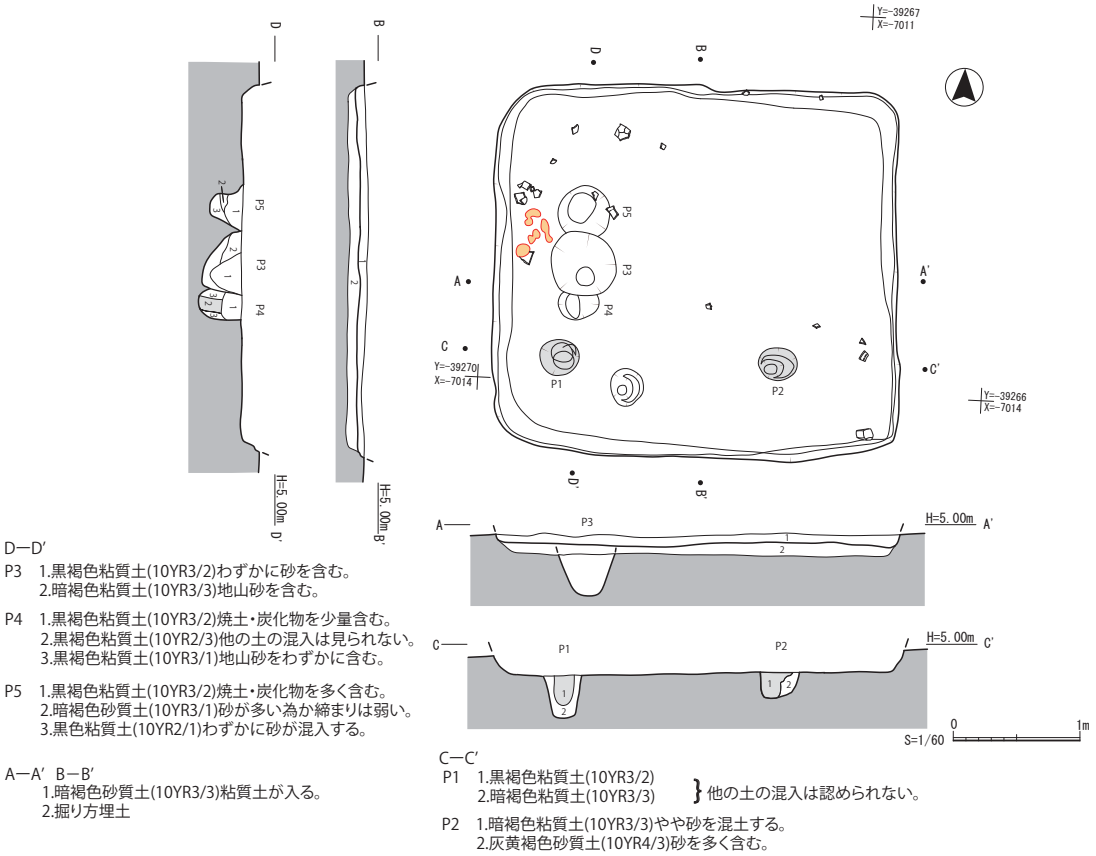


Fig.15　竪穴建物 SI009 実測図

竪穴建物 SI010（Fig.16）O.P-17.18Grid 上で検出した遺構。南西側半分が調査区外にあたり、残る遺構の中心を後世の溝により掘削を受け、住居ラインを切る。平面形は方形で、隅はやや丸く収まる。遺物が多量に出土していることから硬化面の残りも望まれたが、確認はできなかった。

柱穴は、北辺の壁上に 2 基（P1.P2）、壁下に 2 基（P3.P4）、東側壁下で 4 基（P5 ～ P8）が残る。P1、P2 は住居側壁に伴う柱穴の可能性が、また、P3 ～ P8 は住居周壁に伴う柱穴列の可能性がある。P5、P6 のみはやや内に入るためその可能性は低いかもしれない。遺構のほぼ中央に長径 72cm、短径 53cm の浅く掘り窪めた炉を見ることができる。炉の中央部には、赤化した燃焼面が良好な状態で残る。

出土遺物は、炉上にかかるように台付甕（54.55）、脚付鉢（56）が出土し、やや離れた位置で台付甕（53）、ジョッキ形土器（57）が出土し、良好な一括資料である。

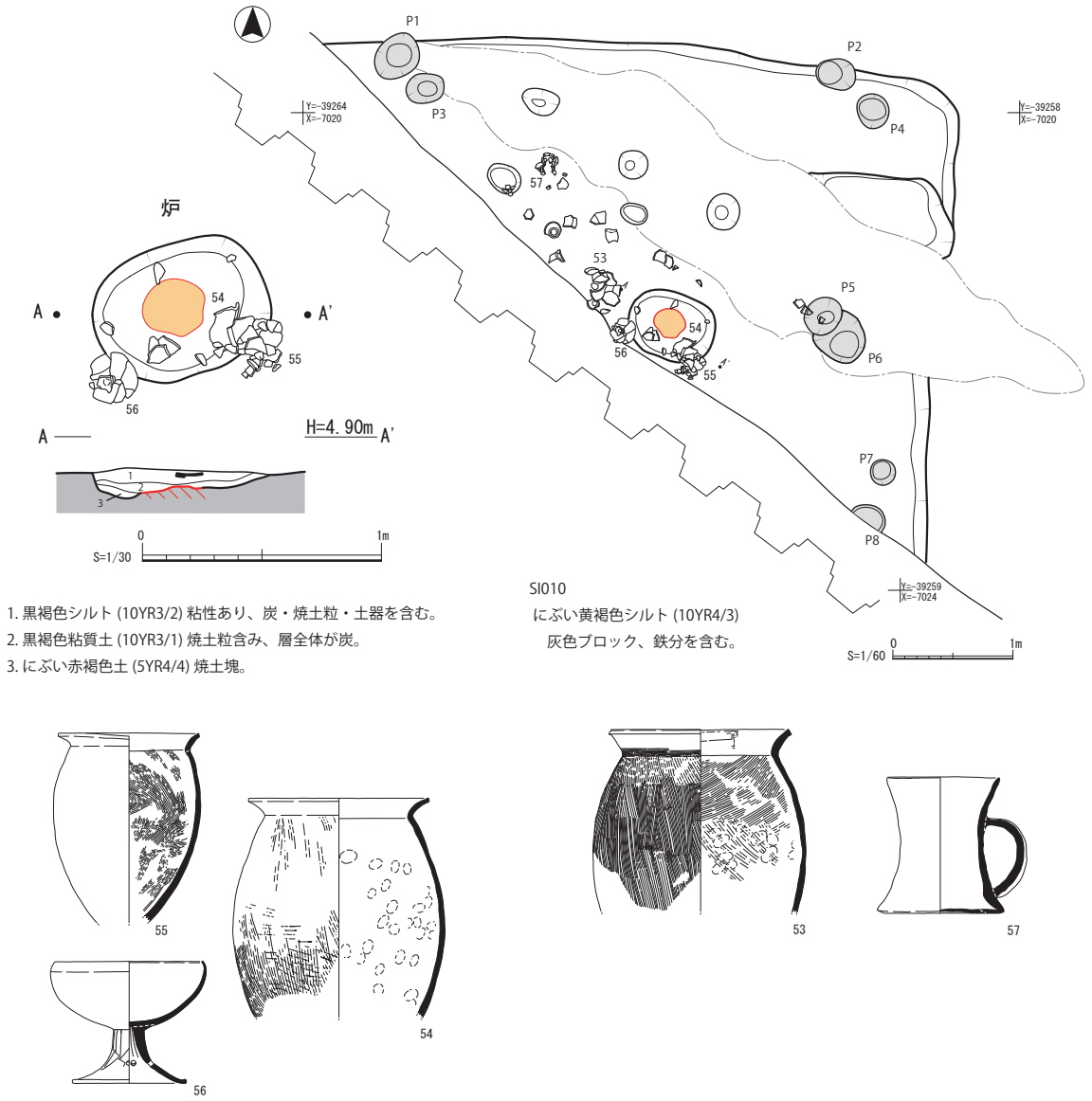


Fig.16　竪穴建物 SI010 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI011（Fig.17）N.O-18Grid 上に位置する遺構。SI012 と重複し、遺構東側を溝 SD008、土坑 SK012 により切られる。北辺は 2.51m、西辺は 2.56m を測り平面形は方形を呈し、隅はやや角張る。遺構西辺を基軸とするライン上で N-12°-W を測る。

炉は、中央部よりやや北に寄った場所に、浅く掘り窪めた掘り込みとして検出した。平面形はやや不定で、小規模な掘り方が重複していると見られ、土層断面（D-D'）に見る層序から炉と判断した。明確な燃焼面は確認できていない。柱穴は、P1 から P4（A-A'）（B-B'）の 4 本柱を確認している。硬化面は確認できていない。

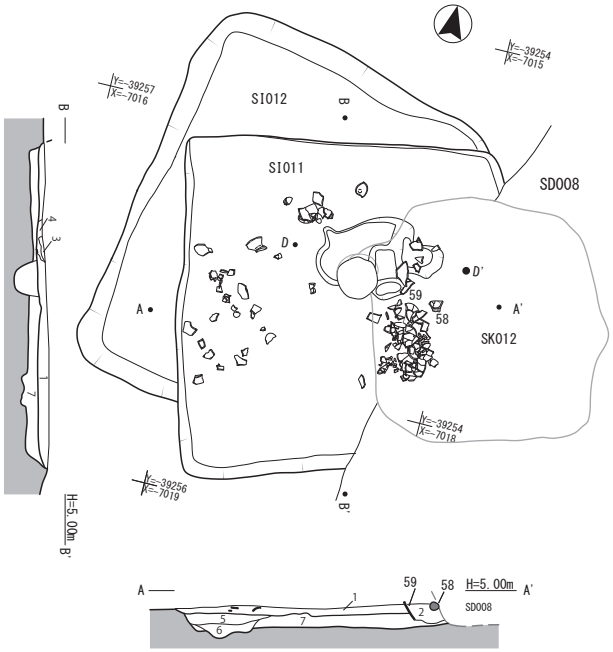
遺物は、土坑 SK013 掘り込み下レベルから、本遺構に関係する遺物が多数出土している。台付甕 1 点（58）、高杯形土器 1 点（59）が集中し破砕された状態で出土している。

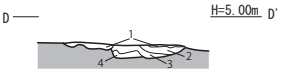
竪穴建物 SI012（Fig.17）先述した竪穴建物 SI011 に切られた状態で検出した遺構。SI011 と同じく西辺を基軸として方位を測ると N-9.9°-E と東へ約 22°主軸が振れる。住居内からは、炉は検出されていない。柱穴は SI011 と同様に P1' から P4'（C-C'）（D-D'）を検出している。遺構内からの出土遺物はない。また、（F-F'）で土坑 SK012 と竪穴建物 SI011 との切り合い状況断面を図示している。

竪穴建物 SI013（Fig.18）P-20Grid 上で検出した遺構。住居跡としてみると残存状況が悪く、遺構確認の際には判断に迷った。隣接し土坑 SK005 が存在しているが、ここで報告する遺構とは関係がないと判断した。竪穴建物とした部分は、平面形に半月状のわずかな掘り方とその内部に見る土坑、柱穴状の掘り込み、断面 A' ポイント近くで検出した周壁沿いに掘ったと見られる周溝状遺構とにより判断した。さらに、半月状掘り込み西側に残る P1、P2 の小柱穴は、周壁沿いに設置された柱穴と見られる。炉は確認できていない。

遺物は、遺構掘り方と見られる範囲中からまとまって破砕された状態で 4 個体が出土している（台付甕 3、高杯形土器 1）。

竪穴建物 SI014・SI015（Fig.19）O-17Grid 上で検出した遺構。２軒の住居が軸を同じくし、遺構の約 1/2 が重なり合う。SI014 は南北 2.85m 東西約 2.98m を測る方形を呈する。この住居跡も他の竪穴建物と同様に遺構深度は浅く、硬化面が検出されていないことから、遺構基底部のみ残っていたものと判断される。遺構北辺近くに不定形を呈する土坑状の掘り込みが見られ、地面の中央部に赤化した部分を見ることができることから、炉である可能性がある（C-C'）。柱穴は南辺に 2 基明確に確認できたことから、北辺では検出できていないが 4 本柱からなるものと見られる。遺物は、南西隅で椀形土器（34）が 1 点出土している。
SI015 は遺構の約半分を SI014 に切られる。遺構規模はほぼ同じであり方形を呈する。遺構西・南辺壁際には中央部でやや間隔をあけ周溝が巡る。中央部に SI014 下から土坑状の掘り方を確認したが本遺構に伴う遺構であるかは確認できていない。遺物は弥生土器片が少数出土したが、詳細な時期判断ができる部位等の出土はなかった。





D—D′
1.褐灰色土(10YR4/3)ややシルト、少し粘性あり。炭を含む。
2.にぶい黄褐色土(10YR4/3)少し地山ブロックが混じり、やや締まる。
3.黒褐色粘質土(10YR3/2)鉄分・地山ブロック・焼土・わずかな炭を含む。
4.暗褐色粘質土(10YR3/3)シルトに近い、炭・焼土・鉄分を含む。

A—A′・B—B′
1.暗褐色シルト(10YR3/3)わずかに締まり、ところどころに灰色粘土のブロックが柱状に入る。にぶい黄褐色の粘土塊と炭を少し含む。
2.褐灰色土(10YR4/1)鉄分を多く含み締まる。遺物が多量出土。
3.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)焼土塊を含む。
4.黒褐色シルト(2.5Y3/1)炭・灰を含む。締まりはない。
5.暗褐色シルト(10YR3/3)粘質土混じりで少し締まる。
6.灰黄褐色シルト(10YR4/2)締まりあり、地山ブロック・焼土粒を含み、粘性がある。
7.灰黄褐色粘質土(10YR4/2)良く締まり、マンガンをわずかに含み、ややシルト質。

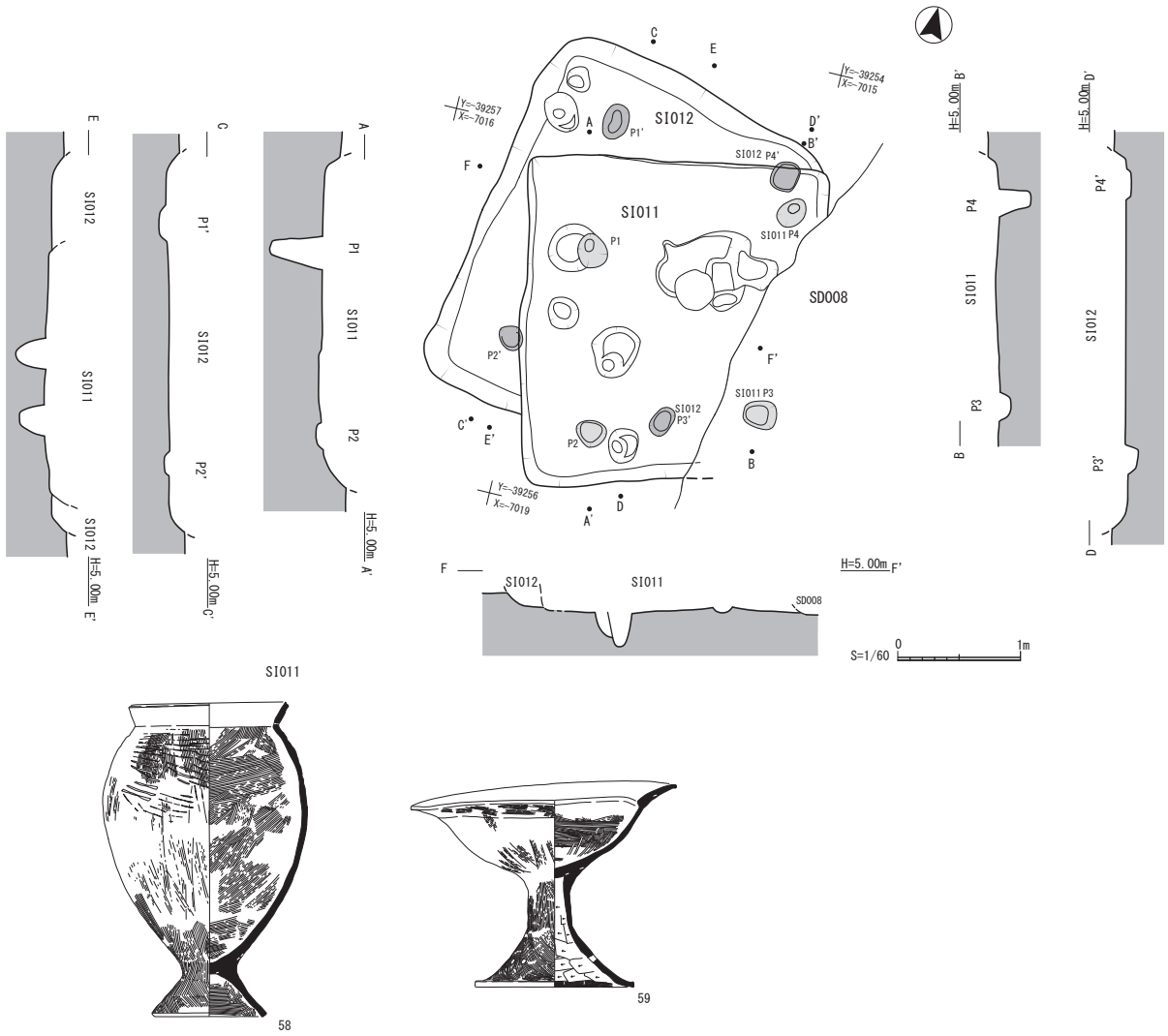


Fig.17　竪穴建物 SI011・SI012 、土坑 SK012 実測図及び出土遺物

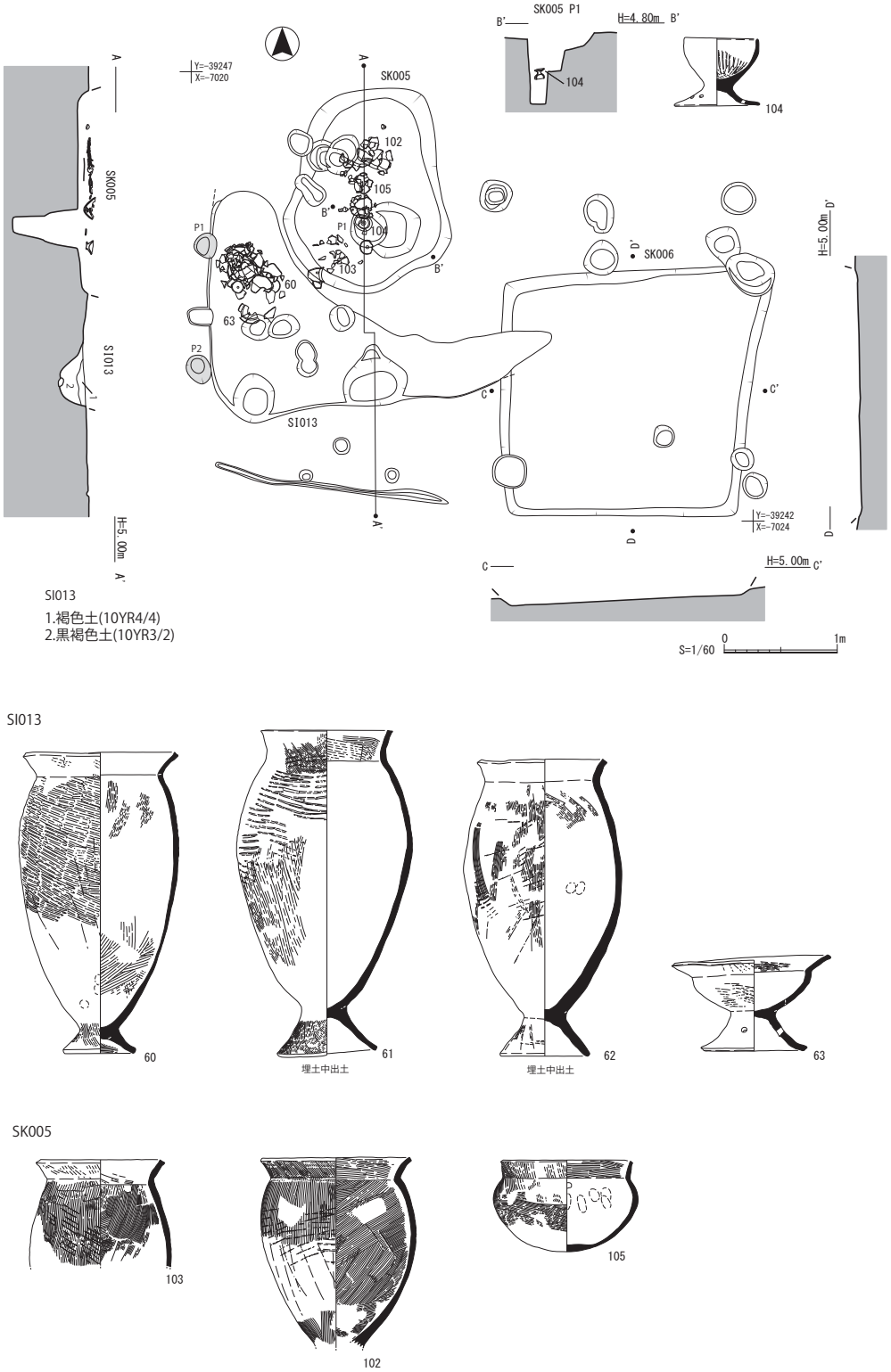
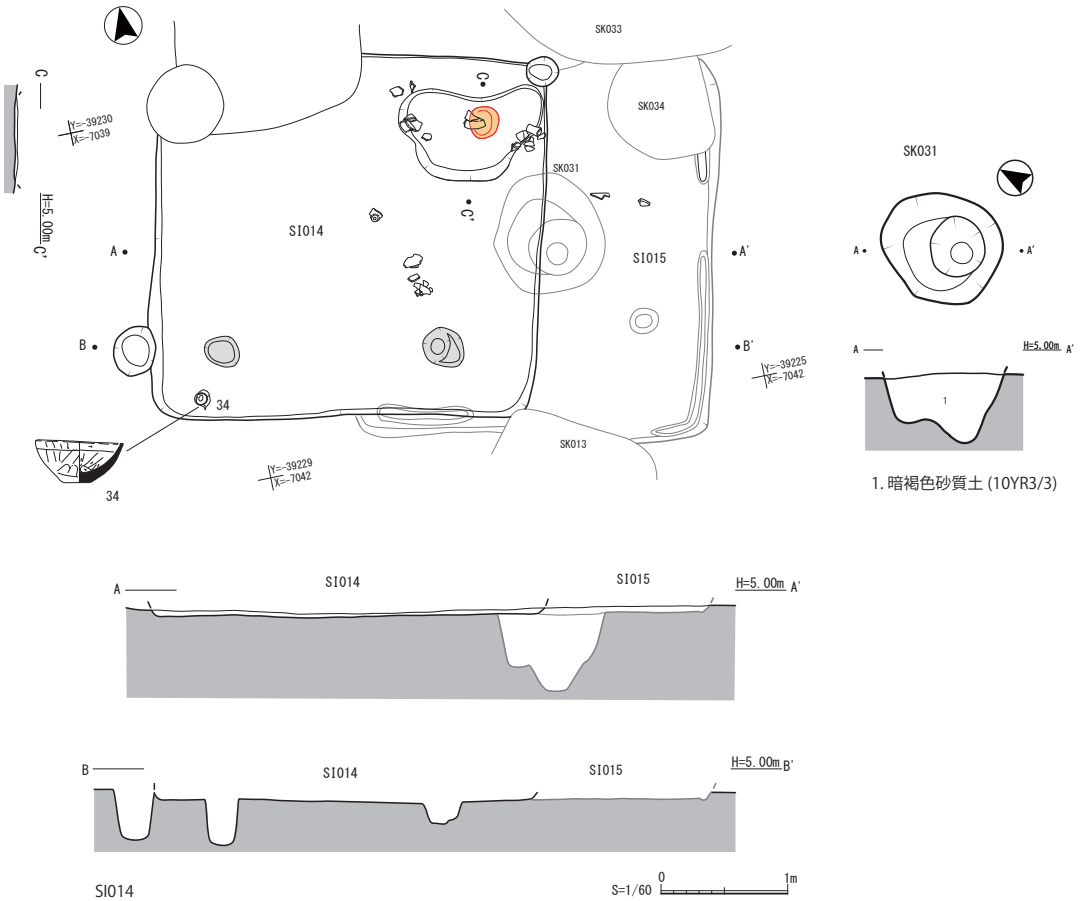


Fig.18　竪穴建物 SI013、土坑 SK005・SK006 実測図及び出土遺物



SI014
黒褐色砂質土(10YR2/3)橙色粒子と炭化物を少量含む。
SI014の炉
暗褐色砂質土(10YR3/3)炭化物と橙色粒子を含む。

SI015
暗褐色砂質土(10YR3/3)橙色粒子と炭化物を少量含む。

Fig.19　竪穴建物 SI014・SI015、土坑 SK031 実測図及び出土遺物

【古墳時代】

竪穴建物 SI016・SI017（Fig.20）H-14Grid 上で検出した遺構。SI016 は遺構の北側大半が調査区外に出ており、詳細は不明。南西部の隅が粘土採掘坑 SX001 により切られる。遺構内からは柱穴状の掘り方が３基検出されている。遺物は、杯が１点（64）出土している。

SI017 は遺構北側が調査区外に伸び、東側は近世の粘土採掘坑により切られる。西側では SI018 と重複し、切り合いが多く複雑な遺構群のなかで検出した遺構。南北約 2.78m、東西 3.2m を測る。西側壁を基軸とするとおおよそ N-13° -W を測る。掘り方は深くはなく、最大で約 15cm 程度である。遺構内では硬化面等生活痕跡は確認できていない。土層断面（A-A'）観察からは、住居埋没過程とは見られない凸凹とした断面を確認している。遺構の中央には方形を呈する掘り方を検出したが、炭化物、焼土等の炉と推測する状況は見られなかった。炉と住居南辺間で検出した小柱穴は、その位置から住居内における役割を判断するには至っていない。本遺構からの出土遺物は多彩で、本遺跡中最も注目される遺構と考えられる。

遺物はすべて土層断面（A-A'）で示す凸凹とした不整合面下と見られる層中から出土している。土師器壺（69）、杯（65）、須恵器模倣杯（66.67.68）、須恵器無蓋高杯（70）、須恵器杯蓋（71.72.73）、杯身（74.75）、天草式製塩土器椀部３個体（76.77.78）、獣骨（馬）、炭化米（約 930 粒）が共伴し出土している。

炭化米、獣骨、須恵器模倣杯に付着する有機質の分析については、巻末に分析結果を付している。

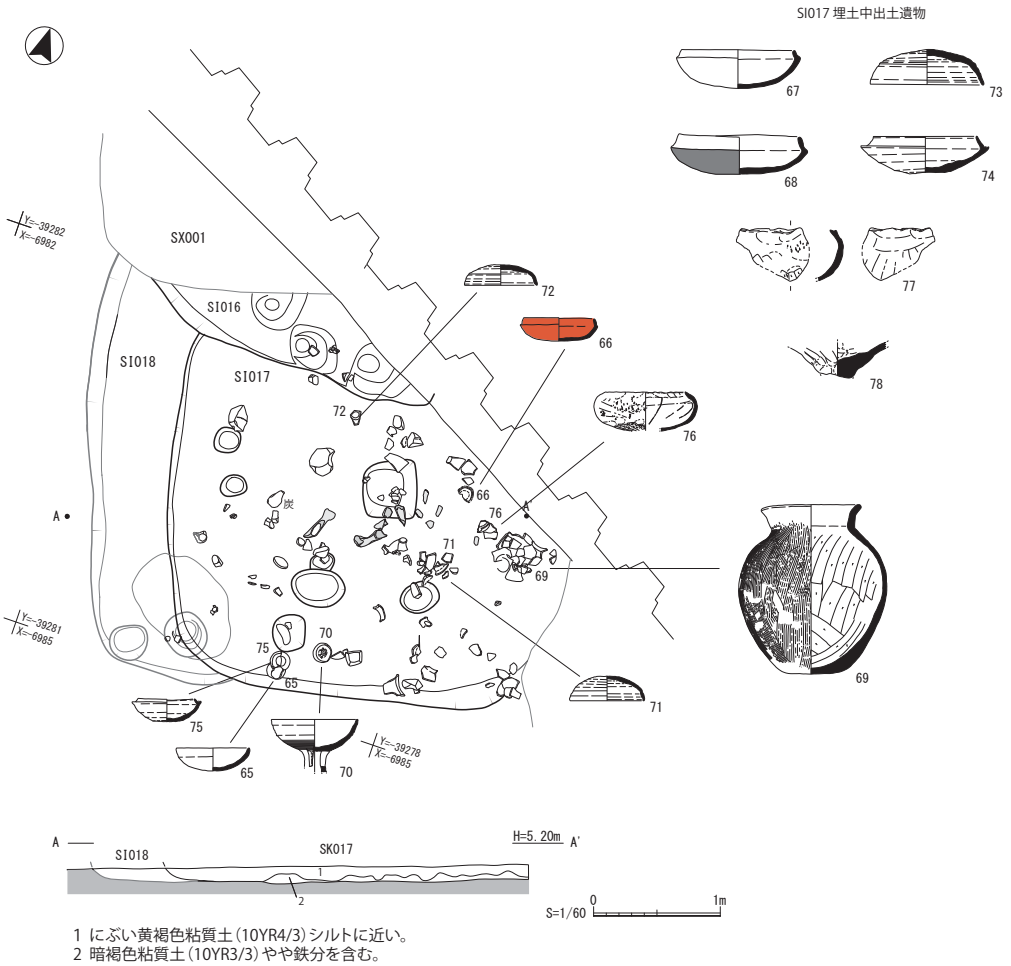


Fig.20　竪穴建物 SI016・SI017 実測図及び遺物出土状況図

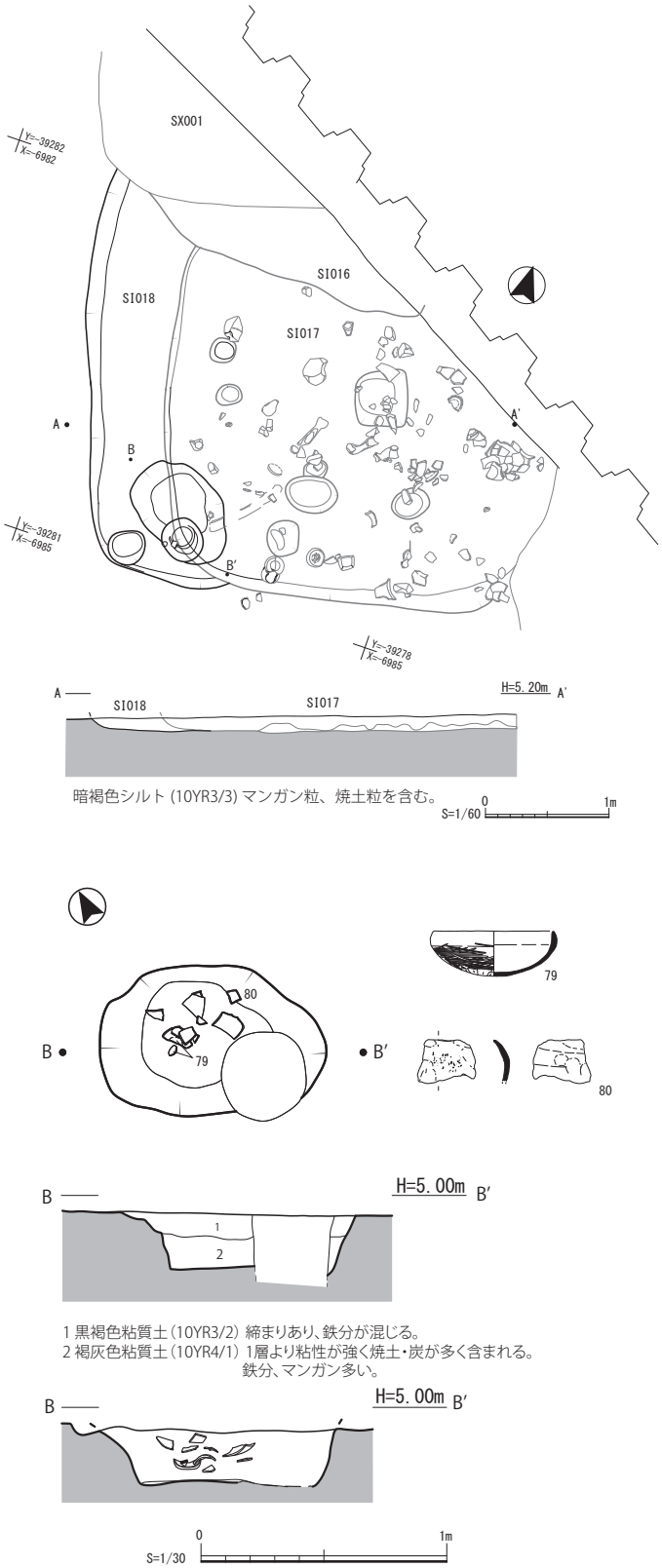


Fig.21　竪穴建物 SI018 実測図及び出土遺物

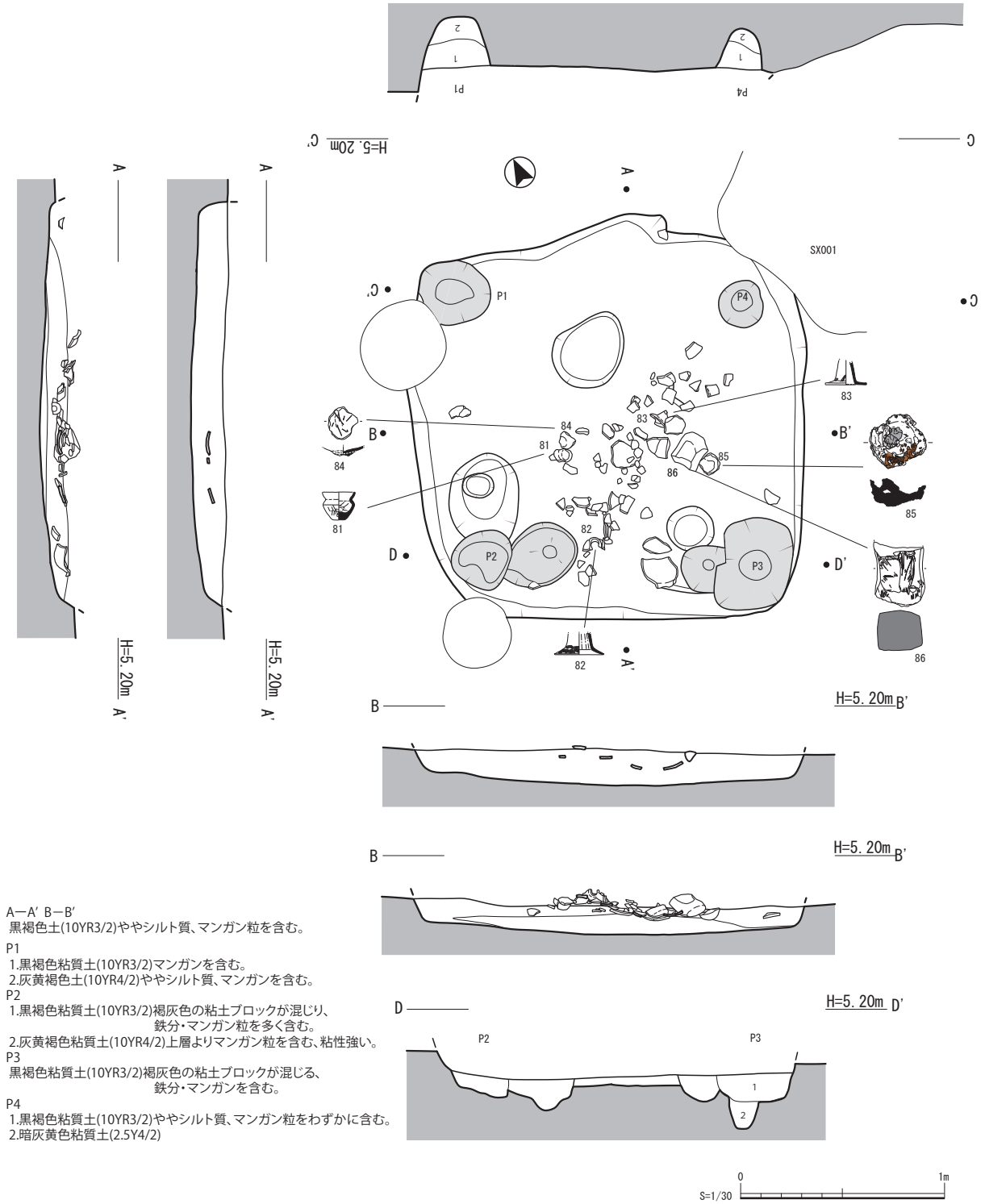
竪穴建物 SI018（Fig.21）東側を SI017 により切られ検出した遺構。西側壁と南西隅が残るのみで、大半は切り合いにより失われている。西壁を基軸とする方位は SI017 とほぼ同じである。硬化面等は確認できていないが、南西隅近くで柱穴に切られた状態で検出した土坑状の遺構からは、SI017 と同時期であることを示す遺物（79.80）が出土している。

竪穴建物 SI019（Fig.22）I-13Grid 上で検出した遺構。南北（A-A')1.99m、東西(B-B')1.92m の正方形を呈する。A-A' 軸を基軸とすると N-29° -E を測る。遺構の掘り方は壁際で約 10cm、遺構中央部で約 18cm を測る。壁の立ち上がりは他の竪穴建物とは違い、やや緩やかな勾配を見せる。遺構の四隅には壁際に柱穴が見られ、南辺にのみ切り合う柱穴を検出した。遺構底面には硬化面は確認できていないが、この遺構でも特殊な遺物が多く出土している。遺物の多くは遺構下端付近よりやや上部の埋土中より出土しているが、出土面がほぼ一様であるため、当時の使用面が遺物出土レベルであった可能性が高い。出土遺物の性格から本遺構は他の竪穴建物と違い、住居としての利用形態ではなく、規模等も含め工房であった可能性がある。

遺物は、土師器小型壺（81）、高杯脚部転用鞴羽口（82.83）、製塩土器椀底部（84）、リソイダイト製砥石（86）、炉底滓（85）がある。

竪穴建物 SI020（Fig.23）L-16.17Grid 上で検出した遺構。南北 3.55m（うち張出し部約 45cm）、東西 3.5m で、主軸方位は遺構中心に設定している土層断面（B-B'）を基軸とすると N-3.1° -W を測る。

遺構南辺には古墳時代後期遺構に一般的に見られる住居外に伸びる煙道状の掘り込みが張り出す。しかし煙道、燃焼面付近で炉体を構成する粘土等が確認されないこと、燃焼面付近で焼土等が残らないことな



A—A′ B—B′
黒褐色土(10YR3/2)ややシルト質、マンガン粒を含む。

P1
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)マンガンを含む。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)ややシルト質、マンガンを含む。

P2
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)褐灰色の粘土ブロックが混じり、
鉄分・マンガン粒を多く含む。
2.灰黄褐色粘質土(10YR4/2)上層よりマンガン粒を含む、粘性強い。

P3
黒褐色粘質土(10YR3/2)褐灰色の粘土ブロックが混じる、
鉄分・マンガンを含む。

P4
1.黒褐色粘質土(10YR3/2)ややシルト質、マンガン粒をわずかに含む。
2.暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)

Fig.22　竪穴建物 SI019 実測図及び遺物出土状況図

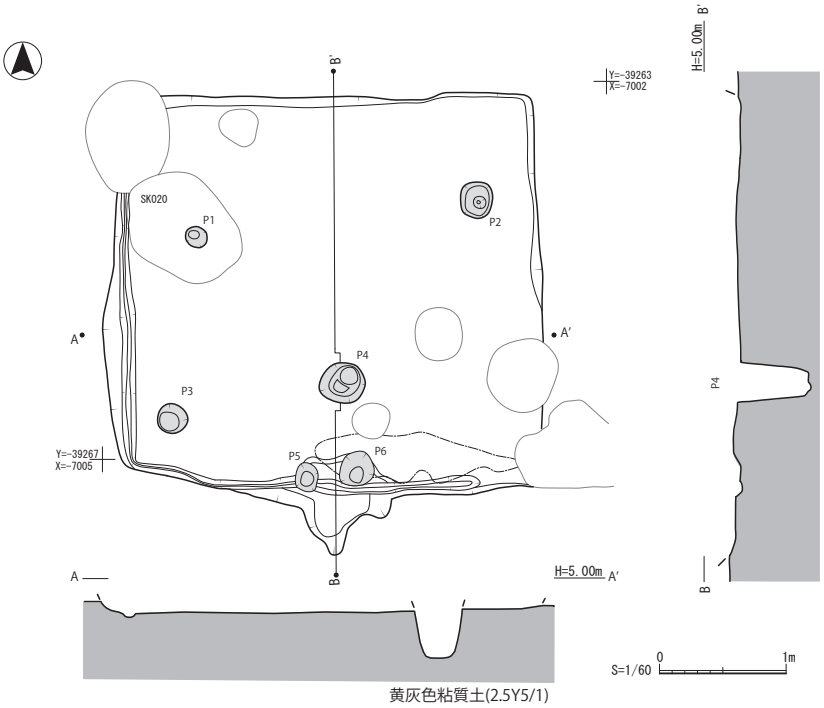


Fig.23　竪穴建物 SI020 実側図

どから、竈として認定するまでには至っていない。また、遺構内における周溝が本遺構下を横断しているため、後の建て替え時に設置されたものとしても、調査段階では確認できる要素はなかった。硬化面は南壁近くから東壁近くに細長く確認できたが、残りが良かった部分が残っていたと見られる。遺構内における柱穴は P1 から P4 までを認め、ほぼ四隅で検出できたが、南東側でのみ確認できていない。張り出し部前にも近い位置で２基を検出したがその役割までは確認できていない。出土遺物はない。

竪穴建物 SI021（Fig.24）N-18Grid 上で検出した遺構。本遺構から SI026 までの６軒はほぼ同じ場所での建て替え住居跡である。
遺構規模は、南北 2.65m 東西 2.6m のほぼ正方形を呈する遺構である。遺構内では硬化面等は確認おらず、炉等の施設も確認していない。また、柱穴は P1、P2 を対角線上で確認したが、他の柱穴は確認できていない。出土遺物はいずれも土師器の小破片であり、図示していない。

竪穴建物 SI022（Fig.24）SI021 に切られ検出した遺構。遺構の中央を土坑 SK022 により切られているため残りは良くはない。遺構規模は SI022 とほぼ同じと見られる。遺構内からは硬化面、柱穴、炉等の遺構は検出できていない。SI021 と同一の長方形の住居跡とも見られたが、遺構の西側ラインがややずれることから別遺構と判断している。出土遺物はない。

竪穴建物 SI023（Fig.24）SI021 に切られている遺構。遺構規模は南北 3.2m、東西 4.15m を、長辺である東西方向のラインを基軸とすると、主軸方位は N-85°-W を測る。遺構内には硬化面は残らず、柱穴も確認していない。遺構掘り方まで掘下げると、壁際に周溝が南辺、東辺、北辺の一部にまで巡り、南辺の一部で楕円に広がる土坑状の掘り方も見られる。出土遺物は硬化面下の掘り方に含むと考えられるが、土師器杯（87.88.89）、須恵器杯身（90）を含む。

竪穴建物 SI024（Fig.24）SI023 に切られ北東側一角を残す遺構。遺構の全体規模は、SI023 下にわずかに残ることから南北 2.88m（東西は不明）を測る。残る東辺を基軸とすると N-1° -W を測る。遺構内からは硬化面、柱穴、掘り方に関する遺構は確認できないが、SI023 との切り合い下から土師器甕（92）、土師器杯（91）が出土している。

竪穴建物 SI025（Fig.24）SI024 に切られ、わずかに北東角が残る遺構。遺構掘り方部に周溝が巡ることが分かる以外には切り合いにより失われており、得られる情報は少ない。規模、方向等は計測不能。出土遺物はない。

竪穴建物 SI026（Fig.24）調査初期には数方向から掘り込まれる溝状遺構と考えられたが、最終的には大型の竪穴建物遺構と判断した遺構。南北 5.65m、東西 6.9m を測り、東辺を基軸とすると N-11° -W を測る。南東隅はラインを明確に確認し、ほぼ直角に西へとるまでは確認するが、SI023 により切られる。北東隅は調査区外に当たり不明、北西隅は周溝掘り方がわずかに残り、繋がらないが西辺は直角に南へと伸び、途中で浅くなり消える。中央を住居跡群により切られているため柱穴、遺物等は不明。

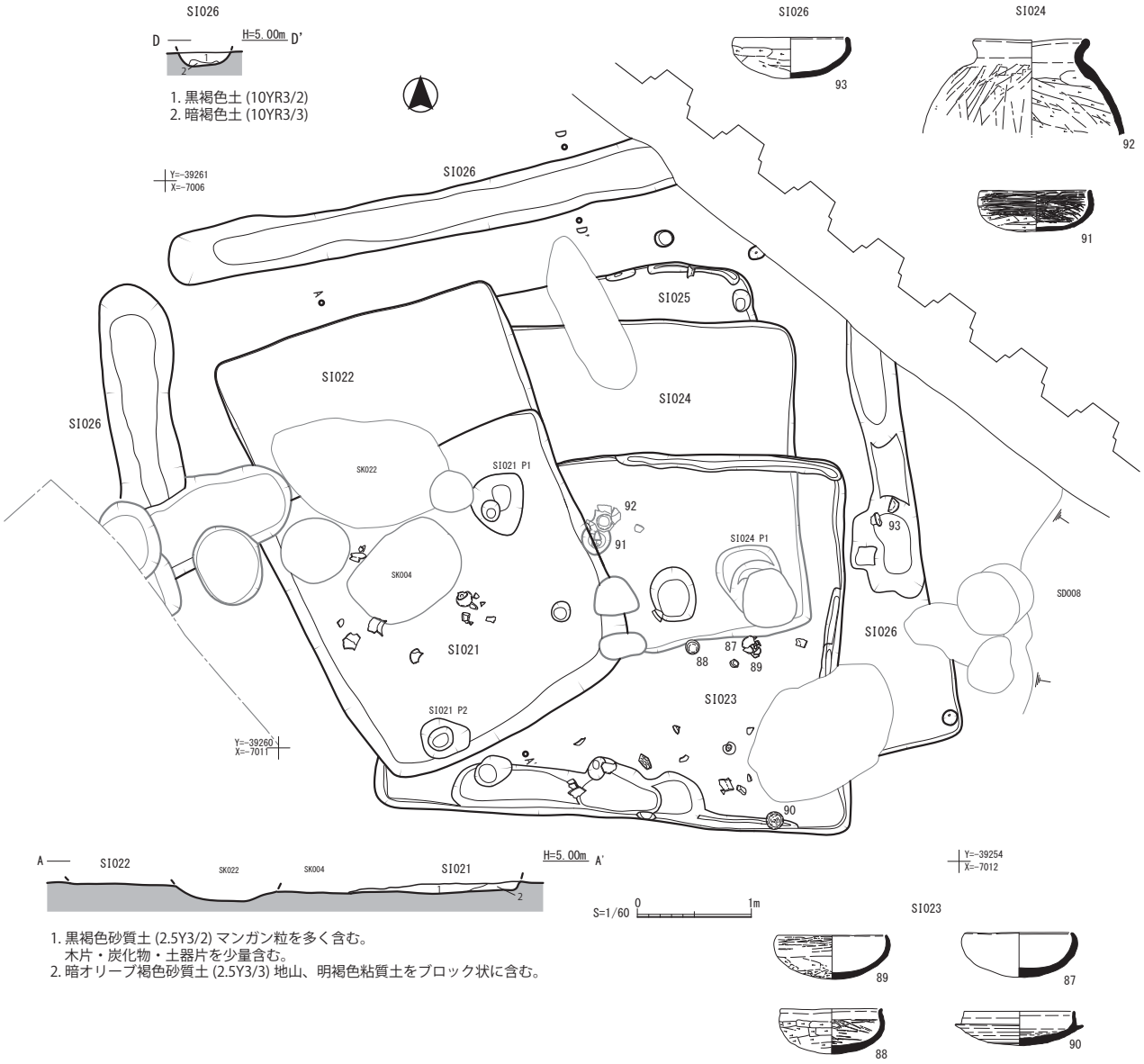
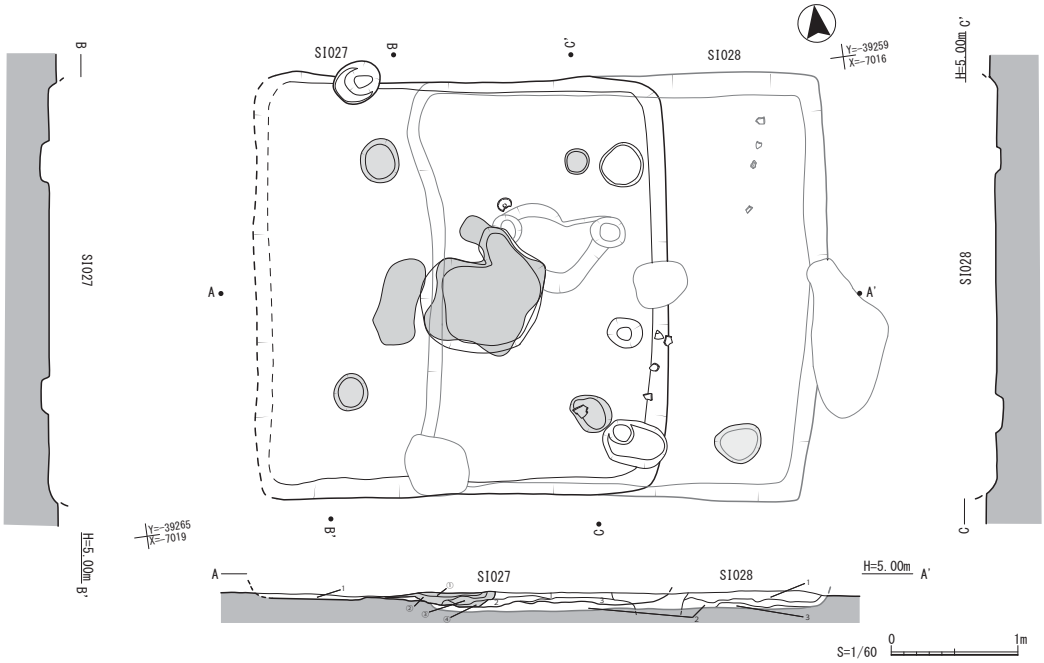


Fig.24　竪穴建物 SI021 ～ SI026 実測図及び出土遺物

竪穴建物 SI027（Fig.25）O-17Grid 上で検出した遺構。遺構規模は南北 3.2m、東西（推定）3.2m、東辺を基軸とすると N-11.5 ° -E を測る。切り合い検出した SI028 に半分以上重なる。柱穴は四隅に 4 本を確認し、中央に浅く掘り窪めた炉を有する。炉の平面は不定形で、燃焼面は確認できないが炭化物を他よりは多く含むことから、炉と判断している。出土遺物はない。

竪穴建物 SI028（Fig.25）SI027 に切られ検出した遺構。SI027 が水平に西へずれ、建て直したと見られ大半は規模を同じくしている。規模、方位等は SI027 とほぼ同じ。硬化面等は確認できず、柱穴も検出しきれていない。



SI027
1.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)わずかに炭粒を含む。
2.暗褐色シルト(10YR3/3)マンガン多い。
3.暗褐色シルト(10YR3/3)混入物なし。

炉の埋土
①.にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)締まりがなく、灰色ブロック・炭をわずかに含む。
②.黒褐色シルト(10YR 3 / 2)炭を多量に含み、粘質土混じりの焼土を含む。
③.褐灰色粘質土(10YR4/1)粘性強くマンガンを粒状に多量含み、灰白色粘土・焼土粒を多く含む。
④.黒褐色粘質土(10YR3/1)粘性が強い。

SI028
1.灰黄褐色シルト(10YR4/2)
2.黒褐色シルト(10YR3/2)炭を含む。
3.褐灰色シルト(10YR4/1)下層に鉄分沈下。

Fig.25　竪穴建物 SI027・SI028 実測図

土坑 SK001（Fig.26）竪穴建物 SI001 南西隅を切り検出した遺構。楕円形を呈し、上端付近に小柱穴を３箇所有する。小柱穴は埋没過程で崩落した一部の可能性もある。土層は本遺構が自然堆積による埋没であることを物語っている。４層とした流れ込み土とともに土器の小片が入り、東側からシルトを中心とする３層が多数の遺物とともに流れ込む。その後、２層が入り埋没していく。遺物は弥生時代後期の遺物を出土するが、図示できる遺物はない。

土坑 SK003（Fig.27）M-17Grid で検出した遺構。平面形は楕円を呈し、２段の掘り方を有する埋土は上下の２層に分層でき、自然堆積によるものと見られる。遺物は１層の埋土とともに入る。弥生後期鉢（97）が１点出土している。

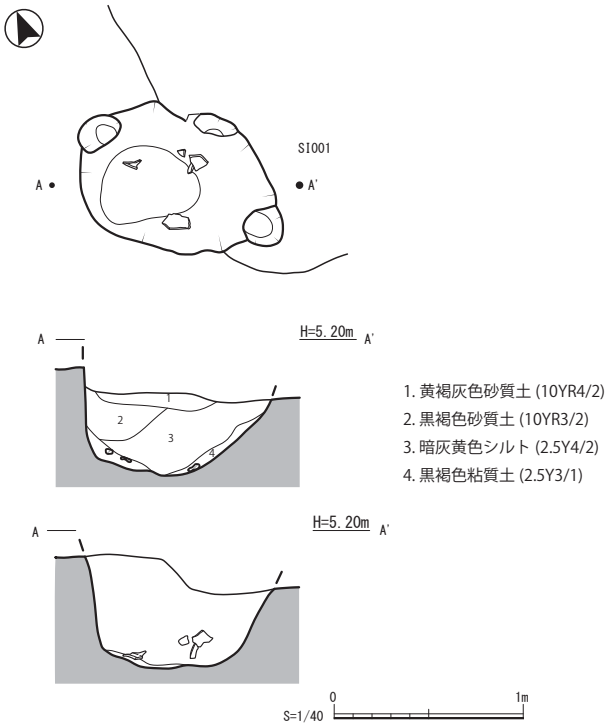


Fig.26　土坑 SK001 実測図

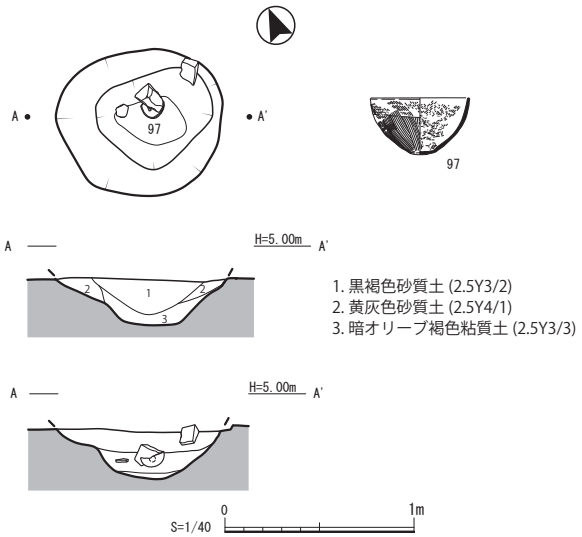


Fig.27　土坑 SK003 実測図及び出土遺物

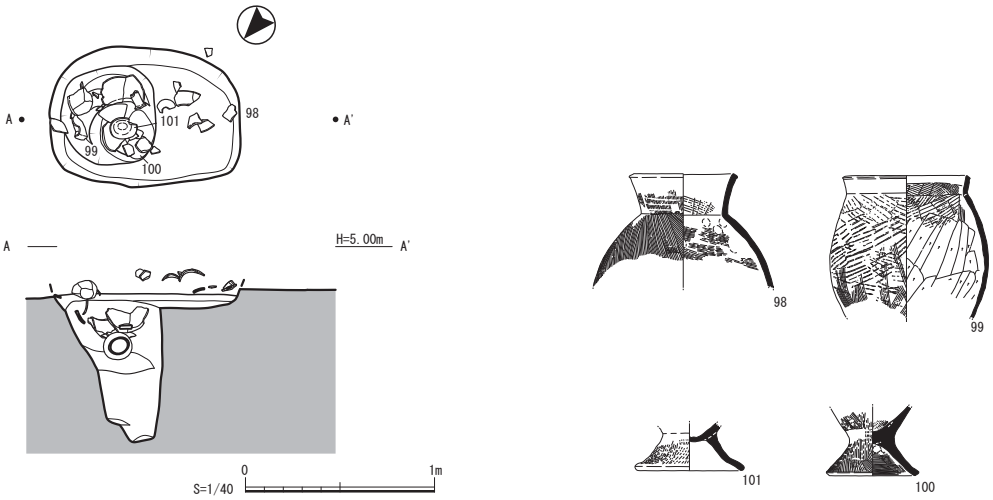


Fig.28　土坑 SK004 実測図及び出土遺物

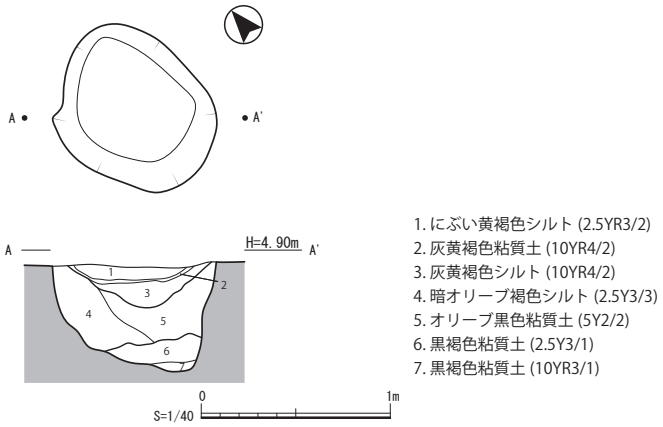


Fig.29　土坑 SK007 実測図

土坑 SK004（Fig.28）竪穴建物 SI021 を切り検出した遺構。長楕円形を呈し、下端付近では柱穴状に縦方向へと伸びる。遺物は主に、柱穴状に伸び始める上段付近から土坑状に広がる範囲で多数出土している。出土した遺物は弥生後期から終末頃の遺物で、壺形土器（98）、台付甕（99.100.101）がある。

土坑 SK005（Fig.18）竪穴建物 SI013 に隣接し検出した遺構。南北方向に楕円形を呈し、下端付近に柱穴状の掘り方を有する。遺物は主に、土坑掘り方の下位にから破砕された状態で出土している。遺物は、弥生終末の台付甕（102.103）、鉢形土器（105）、と遺構内の P1 より脚付鉢（104）が出土している。隣接する SI013 と同じ時期の遺物と見られる。

土坑 SK006（Fig.18）竪穴建物 SI013 に切られ検出した遺構。一辺約 2m の正方形を呈するが、北東隅のみやや外に広がる。小柱穴が周辺も含め数基存在するが、建物としては確認できていない。切り合いの順序から SI013 に先行する弥生期の遺構である。出土遺物はない。

土坑 SK007（Fig.29）K-16Grid 上で検出した遺構。遺構北側が調査区北側の矢板際にあたり、正確な上端ではない。遺構断面を観察すると、本遺構が遺構として安定した時期を３時期に見ることができよう。
それぞれの堆積段階で安定した層位をなし、１・２層の際などには一時この状態で特に安定していたことを物語る土層堆積状況となっている。下端は上端同様、楕円形を呈し、当初素掘りで垂直に掘られたものと見られる。

土坑 SK008（Fig.30）土坑 SK007 に隣接し検出した遺構。遺構の北側は調査区外に伸びており、遺構本来の性格までは把握できていない。ここでは検出した形状が溝状に北へ伸びると見られるが、最後まで確認できていないため土坑として報告する。遺構は上端、下端とも不定形でる。土層も埋まる過程が一様ではなく不整合であったが、大まかな捉え方をして分層した。遺物は主に 1 層の上面に包含される。遺構全体が削平されていることから、遺物が出土する層は、本来は遺構埋土中位にあたる層であったと考えられる。遺物は古墳時代前期の土師器高杯（106.107.108）、土師器甕形土器胴部（109）がある。

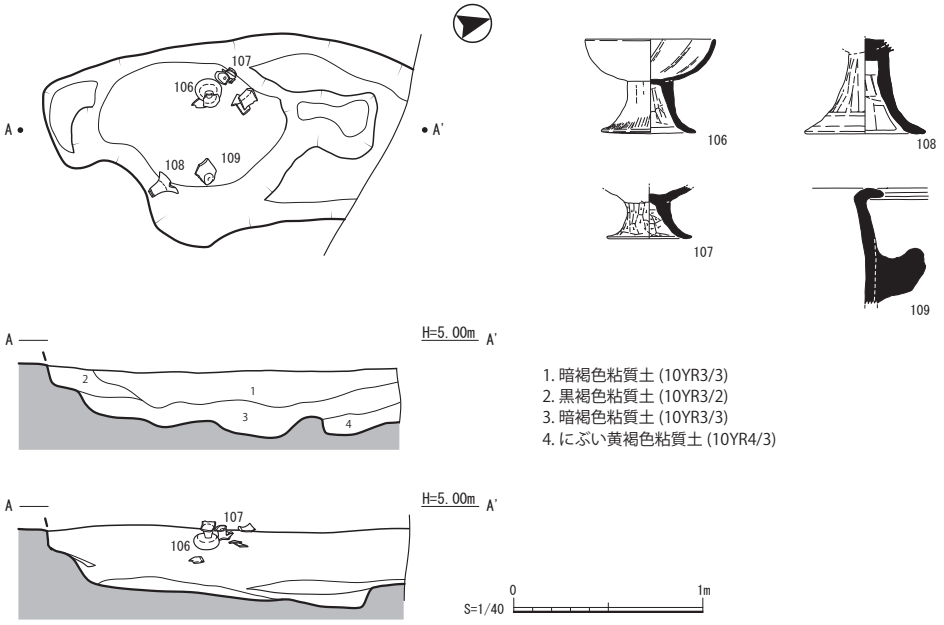


Fig.30　土坑 SK008 実測図及び出土遺物

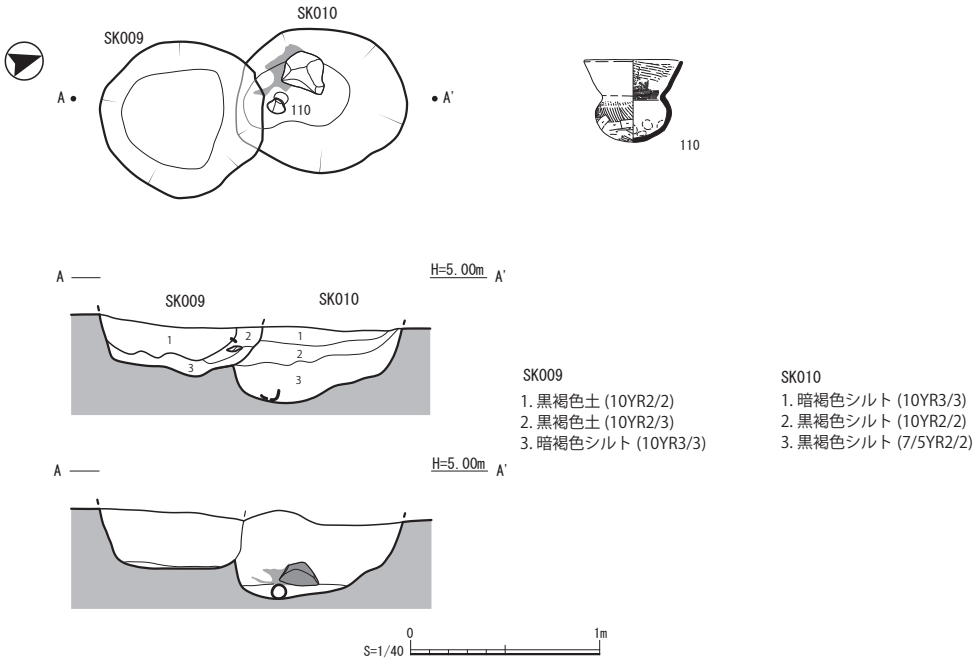


Fig.31　土坑 SK009・SK010 実測図及び出土遺物

土坑 SK009・SK010（Fig.31）M-17Grid 上に位置し、竪穴建物 SI020 に隣接する。２基とも規模はほぼ同じく長径約 80cm 程度で、平面形は楕円を呈する。SK009 が SK010 の後に掘り込まれている。
SK009 は断面の形状が逆台形で上端から下端にかけ緩やかな角度で落ちる。下端はほぼ水平である。土層は３層が遺構全体に入った後、２層が堆積するが調査時には北側のみにしか残らず、１層の堆積が２層を切り入っていることから、１層の埋土は２層を掘り込んでいると見ることができる。この段階で土坑の掘り直し、利用があったことが窺える。
SK010 は SK009 に南端 1/5 を切られた状態で検出した。下端は上端に比べ小さく、やや南に寄る。土層断面はほぼ水平堆積であるため、遺構使用後放棄されたものと考えられる。遺物は１層、３層に見られ、主な遺物として３層中、下端に張り付く状態で小型丸底壺（110）が出土している。また、同時に河原石（砂岩）が隣接し出土しているが、加工痕及び受熱痕跡等はない。

土坑 SK011（Fig.32）O-19Grid 上で検出した遺構。遺構は上端下端とも不定形で、掘り方も垂直に近い。土層（A-A'）は堆積土の流れ込み角度から見ると、北側からの緩やかな流れ込みにより堆積したと見られる。遺物は１、３層から出土しており、主なものとしては、１層から土師甕（111）が１点出土している。３層出土遺物は甕胴部と見られるが、１層出土甕と接合関係はない。

土坑 SK012（Fig.33）O-19Grid 上で検出した遺構。遺構は方形の掘り込みを有し、東西側でやや中央が左右に張出す。南北 1.98m、東西 1.8m（張出し部を除く）を測する。東西に溝 SD008、竪穴建物 SI011 を切っているのを確認した。遺構の切り合い関係については、竪穴建物 SI011（Fig.17）を参照されたい。上端下端とも平面形は方形で柱穴等付属施設は確認できていない。遺構は大幅に削平されていて出土遺物はない。

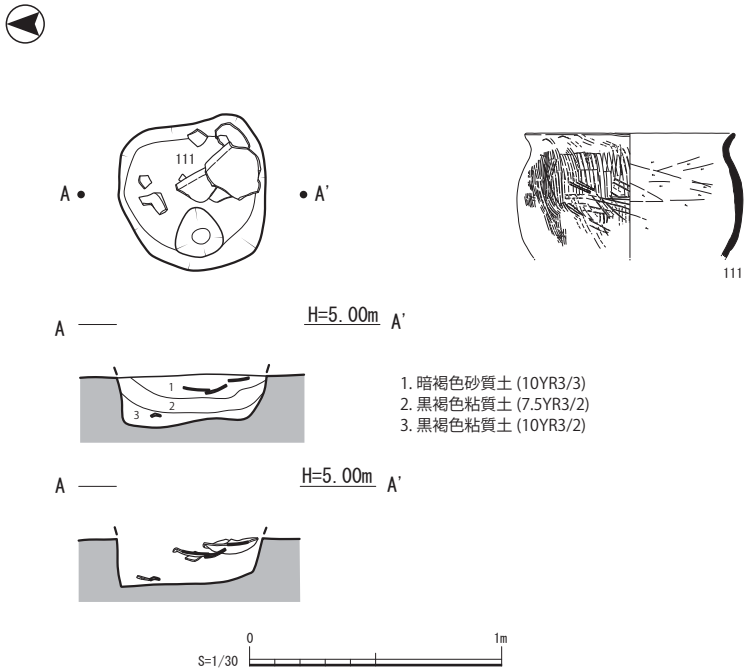


Fig.32　土坑 SK011 実測図及び出土遺物

土坑 SK013（Fig.34）T-24Grid 上で検出した遺構。本遺跡調査区の東端近くにあたり、遺跡が菊池川へ落ち込む最後の平場付近に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸（南北）1.94m、短軸（東西）1.31m を測る。土層の断面は長軸方向で記録しており、北側で三角堆積（３層）を見て取ることができた。３層の埋土は、粘質を有しながらも炭化物･焼土を粒状に含み､隣接する竪穴建物SI014･SI015埋土の流れ込みを予想させる。遺物は、遺構の北西隅に近い位置から床面に張り付き土師甕（112）が１点出土している。

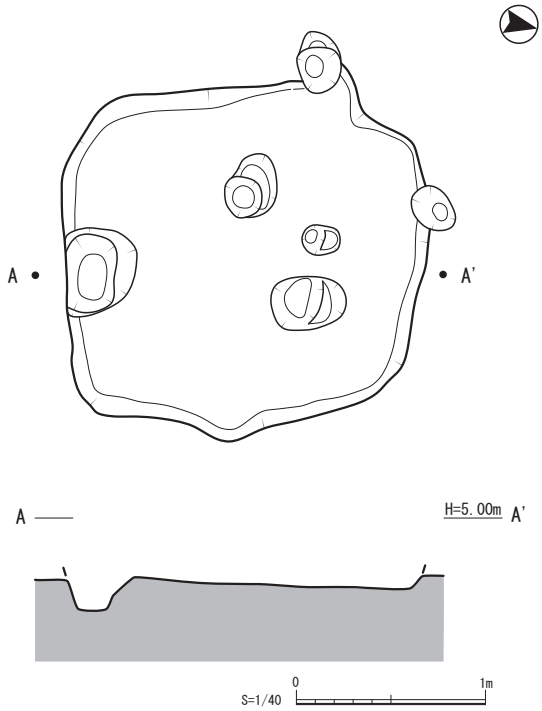


Fig.33　土坑 SK012 実測図

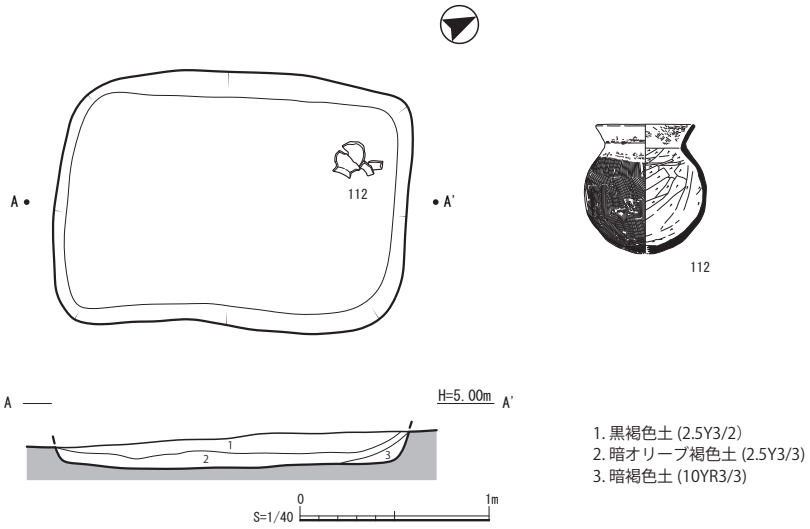


Fig.34　土坑 SK013 実測図及び出土遺物

建物 SB001 から SB004 について（Fig.35 ～ 38）

２軒×２軒を１棟の建物として、SB001 から SB003 が南北にほぼ１列に並ぶ。また、SB003 の東に平行に SB004 を検出している。建物を構成する柱穴からの遺物の出土がないため年代を知ることはできない。しかし、積極的ではないが、古墳時代竪穴建物の遺構配置状況からそれらと重複していないことを考慮し、関連する倉庫群の可能性を想定し記す。将来の近接地の発掘調査成果により遺構の性格が変わる可能性があるが、現時点での判断として報告する[1]。遺構主軸は、建物の配列をもとに南北方向を主軸と考え計測している。

掘立柱建物 SB001（Fig.35）J-13Grid 上で検出した遺構。最終切り合いの柱穴を中心に土層断面等を記録した。建物は柱穴の切り合いから同位置に建て替えをしていると判断している。よって、遺構番号は１棟として扱っている。遺構主軸は N-24° -W を測る。柱穴間の距離は短いところで約 1.5m、最も長いところで 2.1m を呈し一定しない。F-F' 間の柱穴については、３基の柱穴による切り合いが見られる。

掘立柱建物 SB002（Fig.36）K-13Grid 上で検出した遺構。SB001 で見られた建て替えは本遺構では見られない。柱穴規模は 30cm ～ 50cm 程度と変わらない。遺構主軸は N-5° -W を測る。柱穴間の距離は 1.5m から 1.65m を測り、SB001 と比べると数字の振れ幅は少ない。本遺構では土層断面観察の結果、柱痕を残しているものは確認していない。

掘立柱建物 SB003（Fig.37）L-13Grid 上で検出した遺構。本遺構も SB001 で見られた建て替えによる柱穴の切り合いは見られない。南西隅の柱穴は、調査区の排水用溝により切られ消滅している。

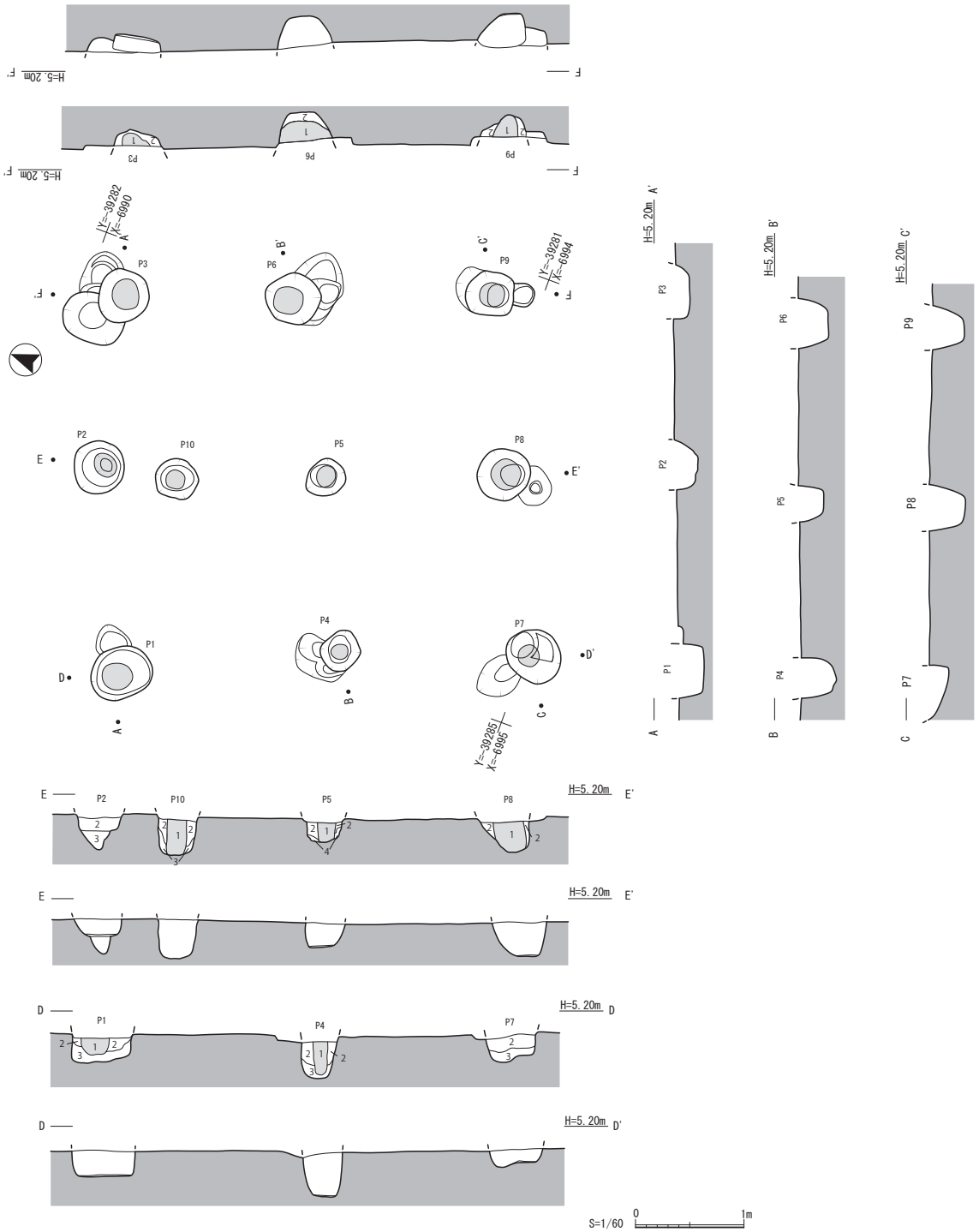
遺構主軸は N-7° -W を測る。柱穴間の距離は最も狭いところで 1.1m（P2-P5 間）、最も広いところで 2.05m（P5-P7）間を測る。A-A' 間で示す柱列は 1.65m、1.75m と比較的安定する。本遺構でも、土層断面観察の結果、柱痕を残す柱穴はない。

掘立柱建物 SB004（Fig.38）L-15Grid 上で検出した遺構。北東隅の柱穴がトレンチにより消滅する。本遺構も柱穴の切り合い等、建て替えの痕跡はない。柱穴は、南東隅の柱穴に一部方形掘り方を有するもの（P8）があるが、ほぼ円形を呈し、直径は約 30cm から 45cm 程度である。P8 は上段で方形に掘り込み、中段を有し、下端からさらに小柱穴状の穴を残す。遺構主軸は N-14° -W を測る。柱穴間の距離は狭いところで 1.34m（P2-P4 間）、広いところで 1.6m（P1-P3 間）を測る。他は 1.4m から 1.5m を測る。

掘立柱建物 SB005（Fig.39）R-21Grid 上に位置する遺構。これまでの建物と比べ主軸方向が約 90°振れ、柱穴規模、柱穴間隔、軒数の違いが見られる。また、柱穴間に挟まれた範囲に方形土坑状遺構を有する。当初、掘立柱建物とは別遺構と考えられたが、調査段階で主軸方向が同一であること、柱穴が土坑を挟むように並ぶことなどから同一遺構と判断した。土坑状遺構は中央を近世の溝に一部、縦断的に切られている。土層を H-H'、I-I'、J-J' と残し観察した。その結果、黒褐色粘質シルトをベースとする粘質土に、黄褐色土をブロック状に有する土を敷き込み、建物下のみ湿気を防ぐかのような土壌改良を行っている痕跡と判断した。中央部は高く残り、主軸方向に左右に長方形の２段掘りによる土坑となる。各層は固く良く締まった状態を保っている。

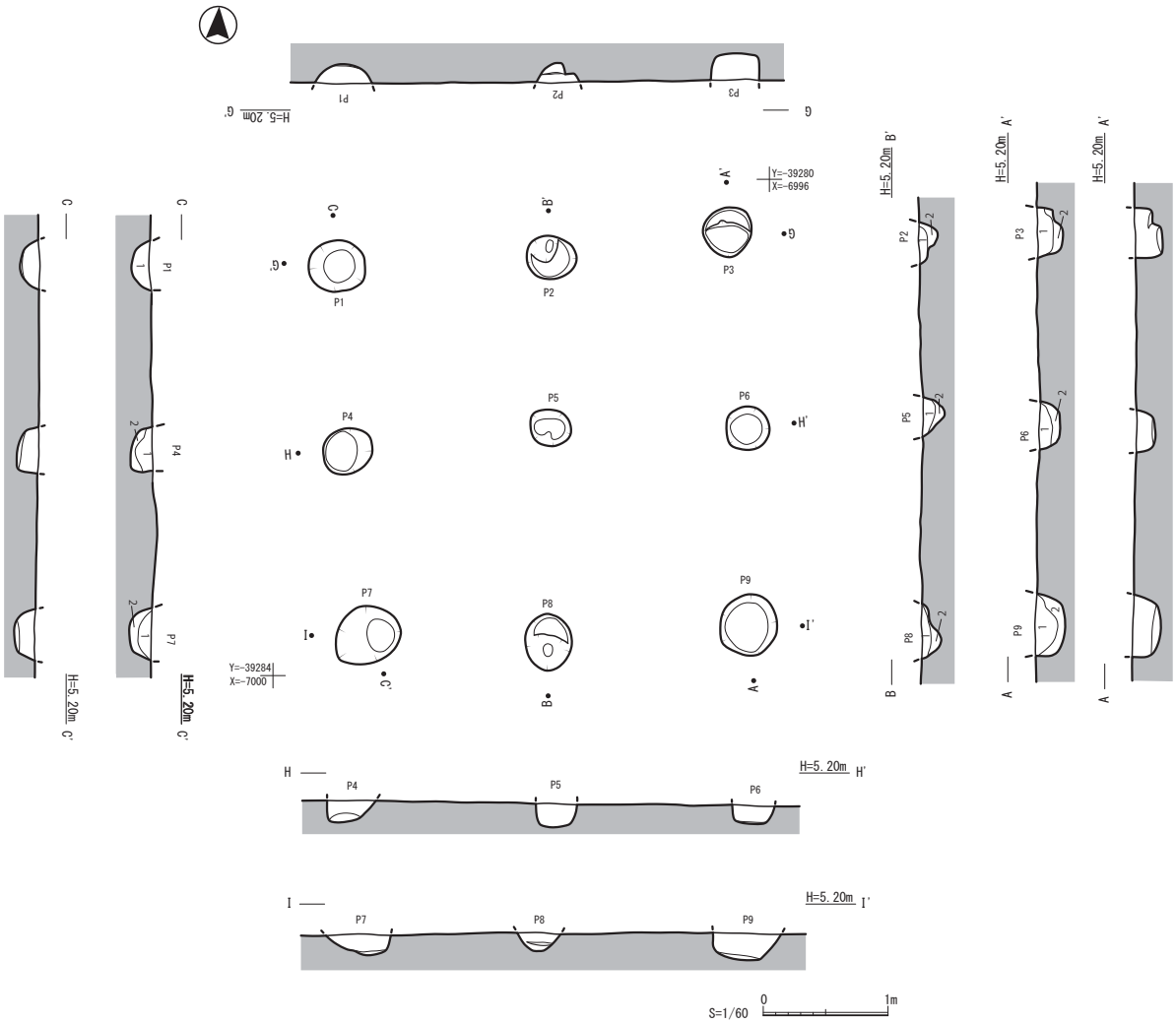
柱穴は２軒×３軒で建物を構成し、西側に一部張出す柱が並ぶ（P16.P17）。建物本体を構成する柱列間は約 1.1m 前後の間隔を有し、他の掘立柱建物と比べると柱間が短い。張出す柱穴のみ、中心線上の柱穴 P16 は P6 との間隔が 2.15m、P17 は P12 との間隔が 1.73m と 1.5 倍から２倍近く離れる。P17 と対になる柱穴はトレンチにより消滅しているが、本来は P1 との距離を約 1.7m 持ち存在していたものと推測される。各柱穴は柱痕が確認できていないことから柱規模は想定できないが、掘り方からしても大きくはない柱であったとみられる。出土遺物はない。

1　熊本県教育委員会『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第 218 集 2004　第Ⅲ章「調査の成果」P88 に類似遺構の報告あり。



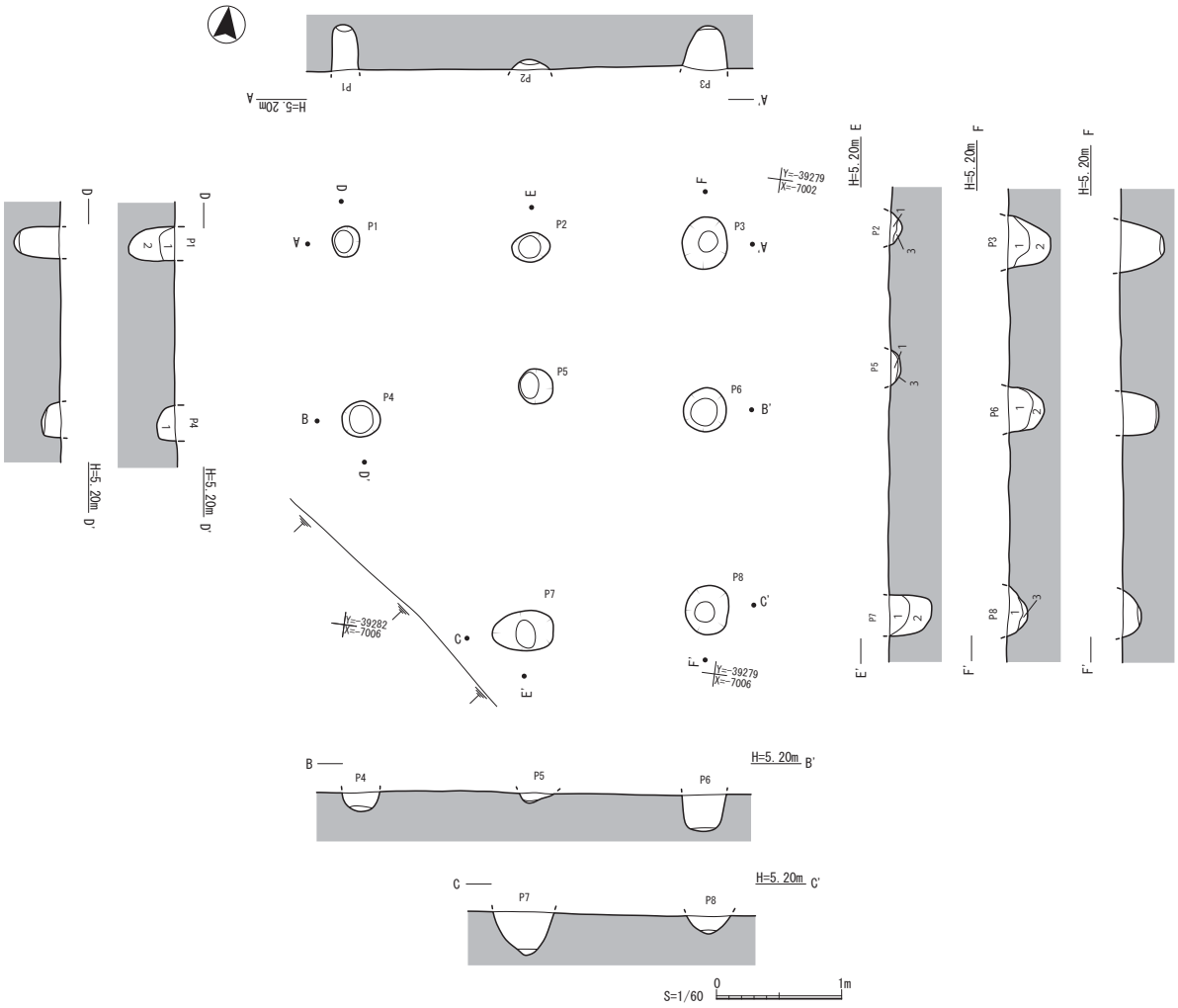
1. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 粘質やや弱く砂・酸化鉄を多量に含み、炭化物を少量含む。
2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 粘質やや弱く砂を含むが、１層より土を含む量が多い。酸化鉄を多量に含む。
3. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 粘質強く砂を少量含み、酸化鉄を多量に含む。
4. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 粘質強く黄褐色地山ブロックが混じる。

Fig.35　掘立柱建物 SB001 実測図



1.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)粘質やや弱く砂を多量に含む。
2.黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 粘質強く砂を少量含む。

Fig.36　掘立柱建物 SB002 実測図

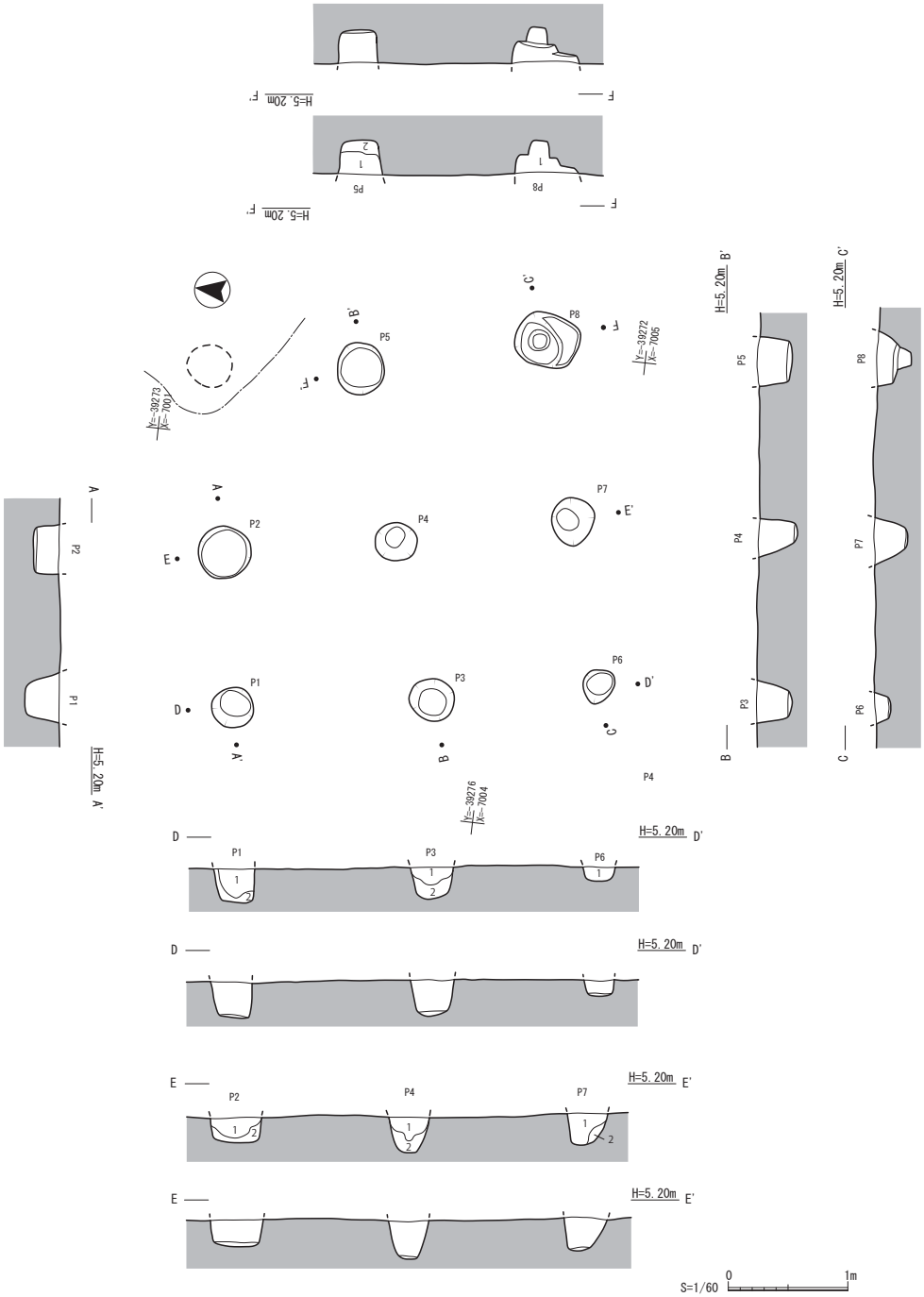


1. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 粘質やや弱く砂を多量に含む。
2. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 粘質強く砂を少量含む。
3 . 2 層の中に黄褐色土（地山）をブロック状に含む。

Fig.37　掘立柱建物 SB003 実測図

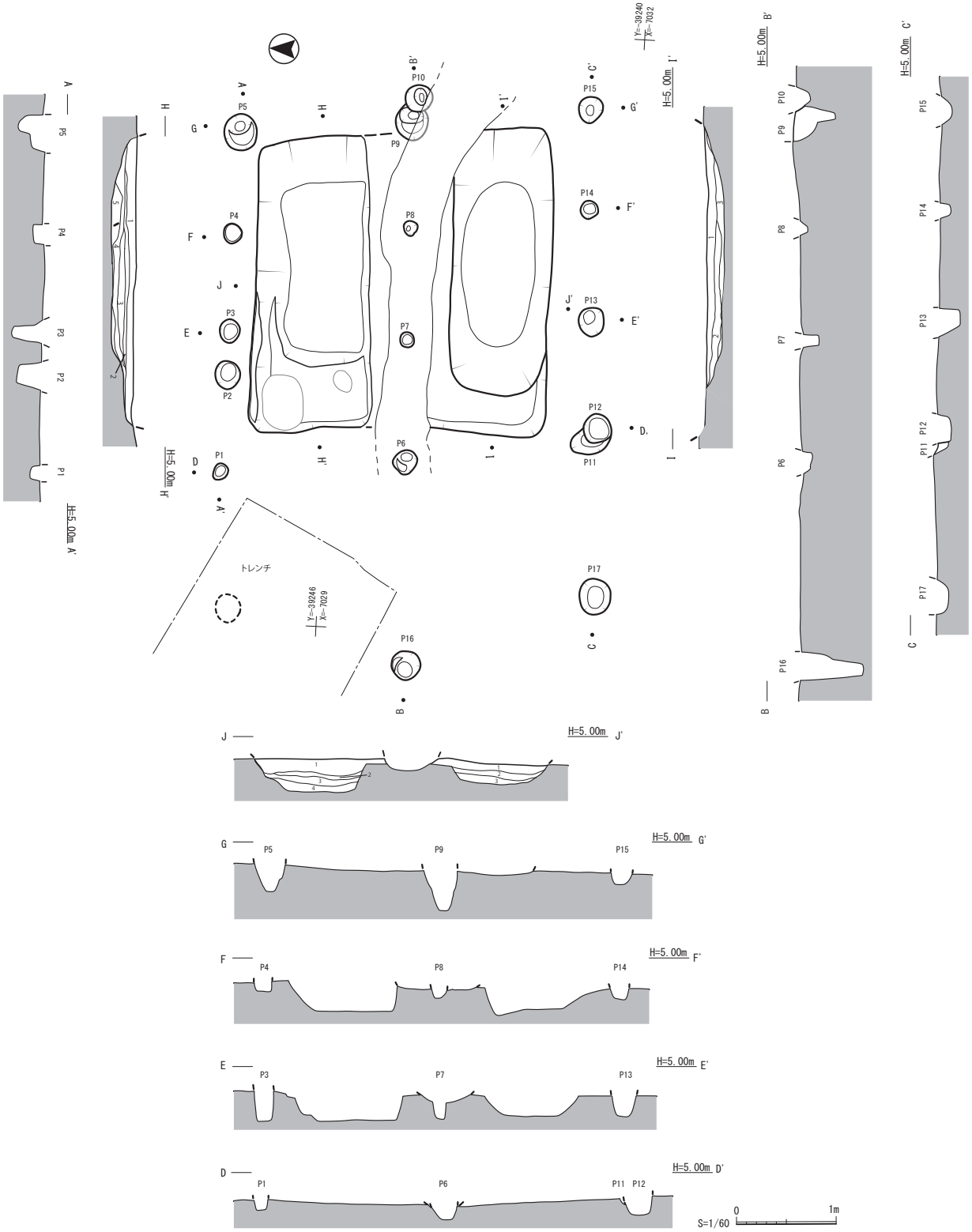
掘立柱建物 SB006（Fig.40）G.H-12.13Grid 上で検出した遺構。遺構の一部が調査区北側に広がり、全体規模は不明。　今回調査を終えた段階で南北に３軒、東西に３軒を測る。柱穴は同数だが、柱穴間の距離は西側列となる B-B' の間隔が P1-P2 間 1.62m、P2-P4 間 2.1m、P4-P7 間 1.29m に比べ、南側列の A-A' の間隔が P7-P8 間 2.11 m、P8-P9 間 2.38m、P9-P10 間 2.38m と軒間の数字に大きな違いがある。このことから、主軸を東西に有する建物として SB005 と同時期の建物と判断する。柱穴形状は A-A' 間の柱穴掘り方が隅丸方形であるのに対し、他はやや形状が不安定な楕円形や不定形の土坑で掘り方、深度も A-A' 間で示しているものとそれ以外では明確な違いがでる。柱痕が残る柱では 20cm 程度の柱痕を呈する。

このことから、本遺跡で検出した建物からすると比較的規模が大きく、しっかりとした柱を有する掘立柱建物であったことが想定される。また、柱穴は途中で一度掘り返しを受け、建て直されたことも確認された。その際の規模はほぼ同じであると想定される。出土遺物はない。



1. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 粘質やや弱く砂と酸化鉄を多量に含み、橙色粒子を少量含む。
2. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 粘質強く砂を少量含み、酸化鉄を多量に含む。

Fig.38　掘立柱建物 SB004 実測図



SB005
P1・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P12・P13・P14・P15
　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)砂・酸化鉄・炭化物を多量に含む。
P2・P3・P11
　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)砂を多く含み、黄褐色土をブロック状に少量含む。

H-H′
1.暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)粘質弱く、炭化物と橙色粒子を少量含む。
2.黒褐色シルト(2.5Y3/2)1層より粘質が強く、炭化物と橙色粒子を少量含む。
3.黒褐色シルト(2.5Y3/2)粘質強く、黄褐色土をブロック状に多量に含み、マンガン粒を少量含む。
4.黒褐色シルト(2.5Y3/2)黄褐色土をブロック状に少量含み、酸化鉄とマンガン粒を少量含む。
5.黒褐色シルト(2.5Y3/2)粘質が強く、黄褐色土をブロック状に含み、酸化鉄とマンガン粒を少量含む。

I-I′
1.暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)粘質弱く、砂・酸化鉄・マンガン粒を多量に含む。
2.暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)1層より粘質が強く、黄褐色土ブロック・酸化鉄とマンガン粒を多く含む。
3.暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)粘質が少し強く、黄褐色土ブロック・酸化鉄とマンガン粒を多く含む。

Fig.39　掘立柱建物 SB005 実測図

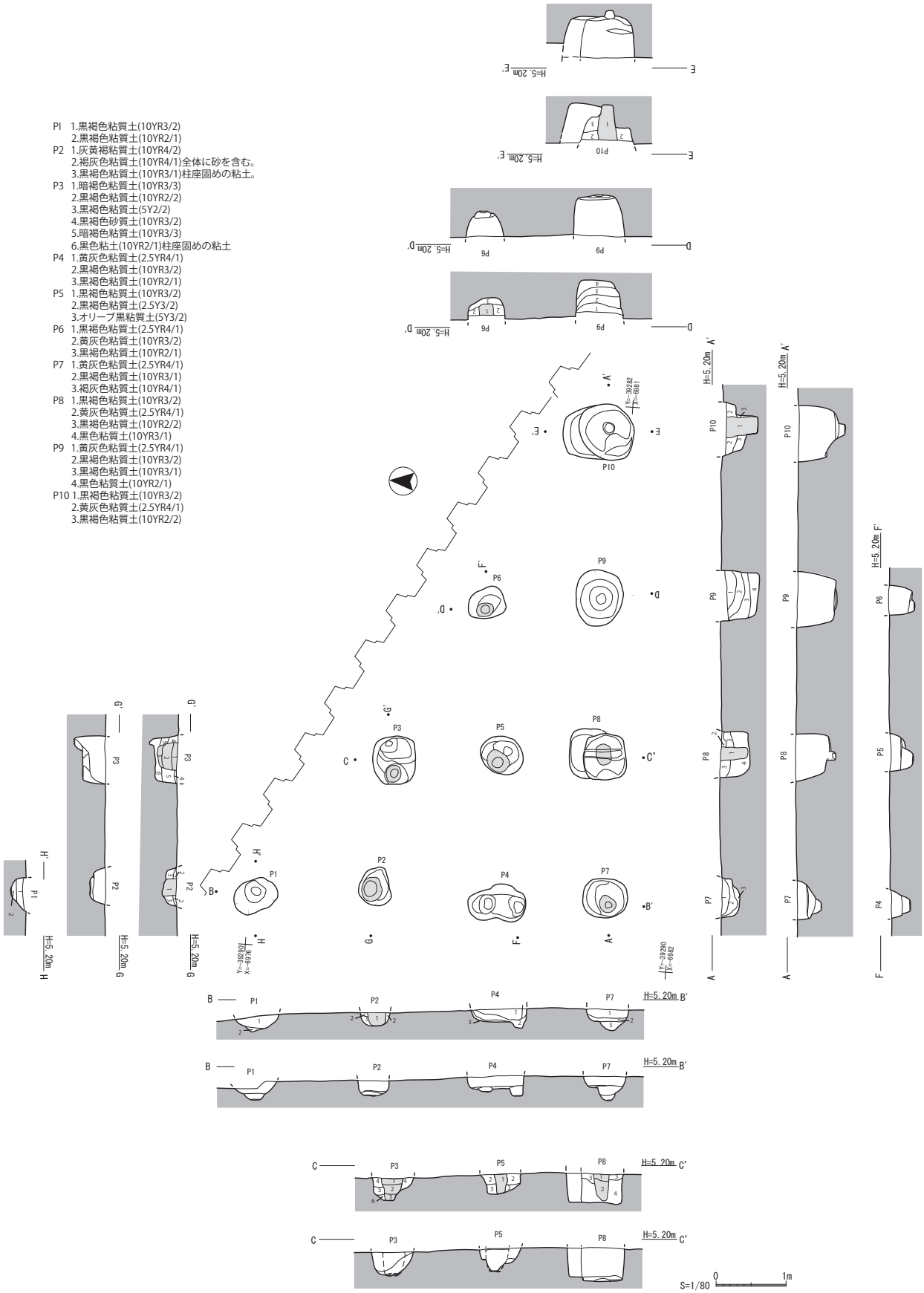


Fig.40　掘立柱建物 SB006 実測図

井戸 SE001（Fig.41）O-20Grid 上に位置する遺構。遺構直径は約 2.0m、深度は約 1.18m、平面形は一部、一段深く削平を受けていることから方形を呈しているが、本来はほぼ円形の掘り方であったと考えられる。土層は 16 層に分層できるが、大局的に見ると埋まる過程が３期（層）に分類できよう。下層から見ると、12 層を境に一度水平となり、安定層を形成している。その後、11 層の三角堆積部分を皮切りに６層まで角度を有しつつ薄く堆積し、窪地状態となり、最終的に遺物を入れるなどして埋まってしまったものと見られる。遺物は投げ込まれた状態ではなく、口縁部が欠損した壺形土器の口縁に蓋をするかのように礫が置かれ、埋められたと見られる。この段階では遺構を埋めるという、行為を意識した遺物埋納であった可能性もある。

下端では掘り方に地山で角度が変わる部分（２ヶ所）を見ることができ、その線の歪みは 13 層と 15 層、15 層と 16 層を隔てる土層線にまで影響を及ぼしていることから、本来は井戸枠があった可能性がある。

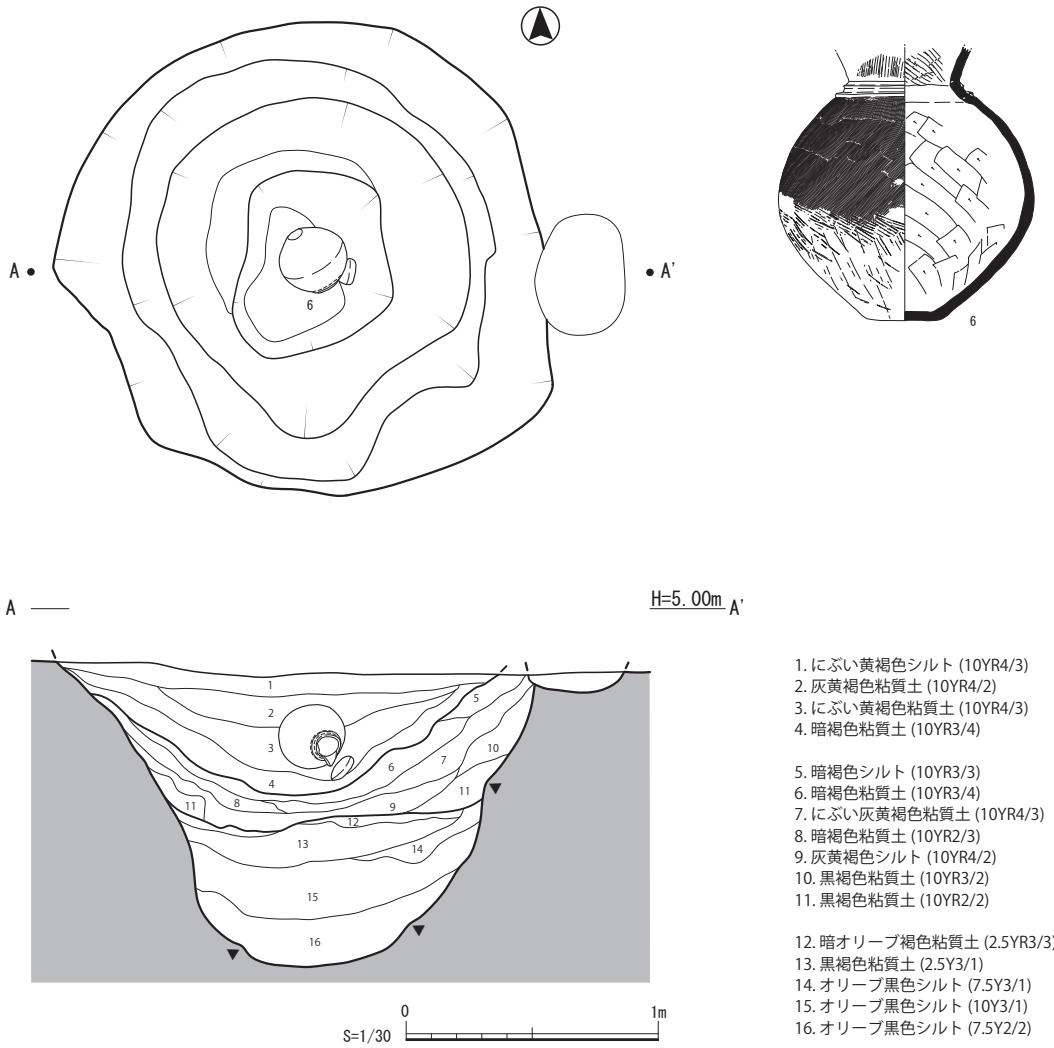
井戸 SE002（Fig.42）Q-19Grid で検出した遺構。遺構長径約 1.68m、短径 1.3m、深度は 1.88m を測り、東西方向にやや楕円形を呈する。遺構断面は、検出面から約 70cm から 80cm 付近で角度を変え、さらに約 1.3m 付近でやや下方に向かい狭くなり下端に至る。上層から遺構中位にかけ遺物が多数出土していたため土層を残さず調査を進めた結果、土層から埋まっていく過程をみることはできないが、ここでは遺物が出土している状況から埋没過程を振り返りたい。

下端付近は調査時にも水が浸み出す状況で、当初掘削時にはこのレベルでの井戸の使用状況があったものと見られる。最も下層から出土する遺物は、壺形土器（19）とジョッキ形土器（28）である。壺形土器は口縁部が欠損しているが、破片が出土していないことからこの状態で投げ込まれたと見られ、ジョッキ形土器も完形品であることから、井戸が使用されていた時期に投げ込まれた可能性のある一括資料と考えられる。

遺構中位より上半部からは、投げ込まれた状況を示すように遺物は破砕されている。投げ込まれた遺物は土層が埋まっていく課程か、緩い U 字状の堆積をしている。

井戸 SE003（Fig.43）J-12Grid 上で検出した遺構。平面直径は約 1.46m、深度は約 91cm を測り、平面はほぼ円形を呈する。溝 SD006 を切り、掘り込まれる。断面は、他の井戸同様に下端からやや上がった部分に角度の変化点を見ることができる。しかし、本遺構では土層がほぼ水平堆積であること、遺構深度が他と比べてやや浅いこと、遺物が出土していないことなどから、積極的に遺構の性格にまで踏み込み判断するには材料が乏しい。遺跡内で検出した遺構の類似性から井戸として報告する。

井戸 SE004（Fig.44）L-15Grid 上で検出した遺構。平面長径は約１m、深度も約１m を測り、遺構の中心を幅約 40cm の排水用の溝により切られた状態で検出している。平面形は南北にやや広がる楕円形を呈する。遺構断面は、半裁の段階では３段に掘削が及ぶかとみられたが、完掘時には段掘りの痕跡は確認できていない。しかし、本遺構でも下端からやや上がった部分で屈曲する線が確認され、他の井戸との類似性もある。
出土遺物は、おおまかに上下２層に分かれ出土している。下層（９層）出土遺物は、投げ込まれた状態で破砕された土師壺（29.30）が２点出土している。上層（３．４層）からは土師高杯（31）が礫とともに出土している。



1. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
3. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
4. 暗褐色粘質土 (10YR3/4)

5. 暗褐色シルト (10YR3/3)
6. 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
7. にぶい灰黄褐色粘質土 (10YR4/3)
8. 暗褐色粘質土 (10YR2/3)
9. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
10. 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
11. 黒褐色粘質土 (10YR2/2)

12. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5YR3/3)
13. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)
14. オリーブ黒色シルト (7.5Y3/1)
15. オリーブ黒色シルト (10Y3/1)
16. オリーブ黒色シルト (7.5Y2/2)

Fig.41　井戸 SE001 実測図及び出土遺物

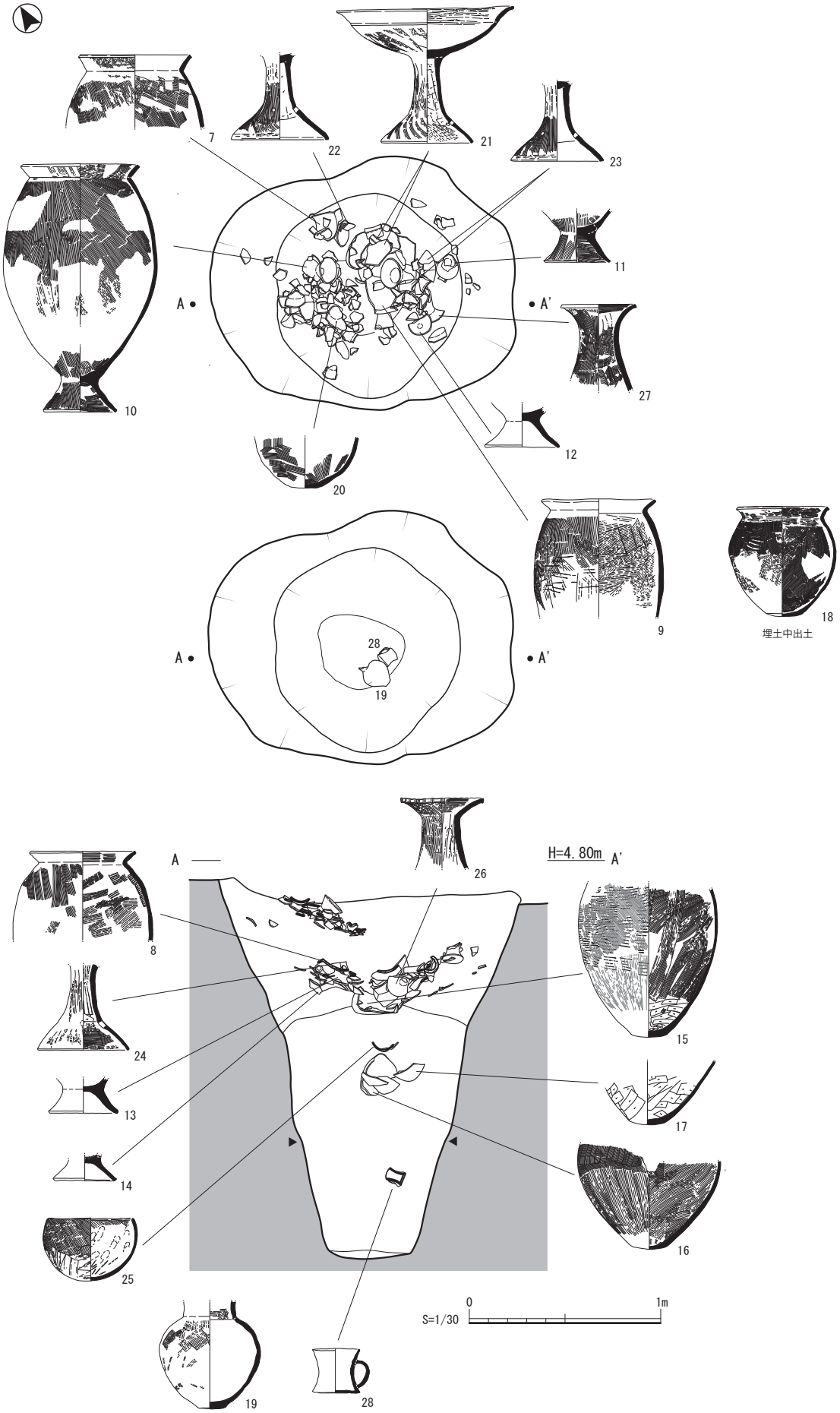


Fig.42　井戸 SE002 実測図及び遺物出土状況図

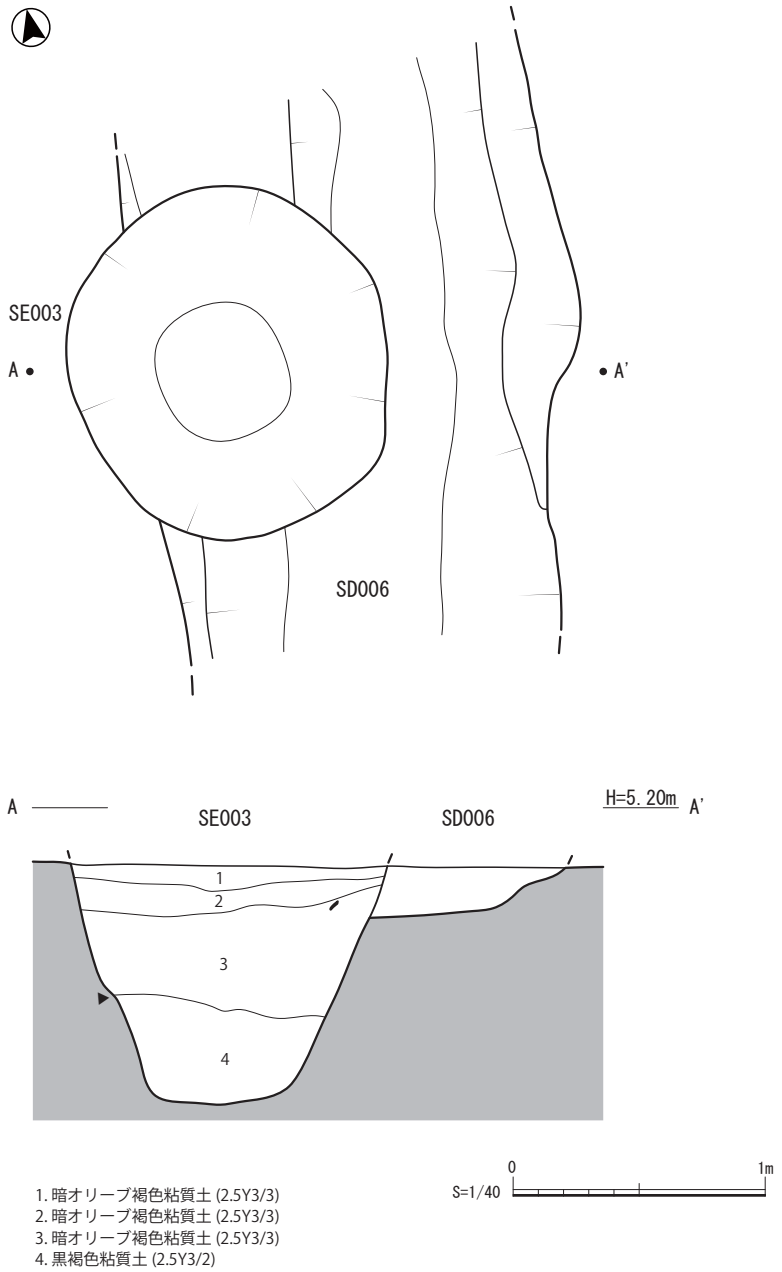


Fig.43　井戸 SE003 実測図

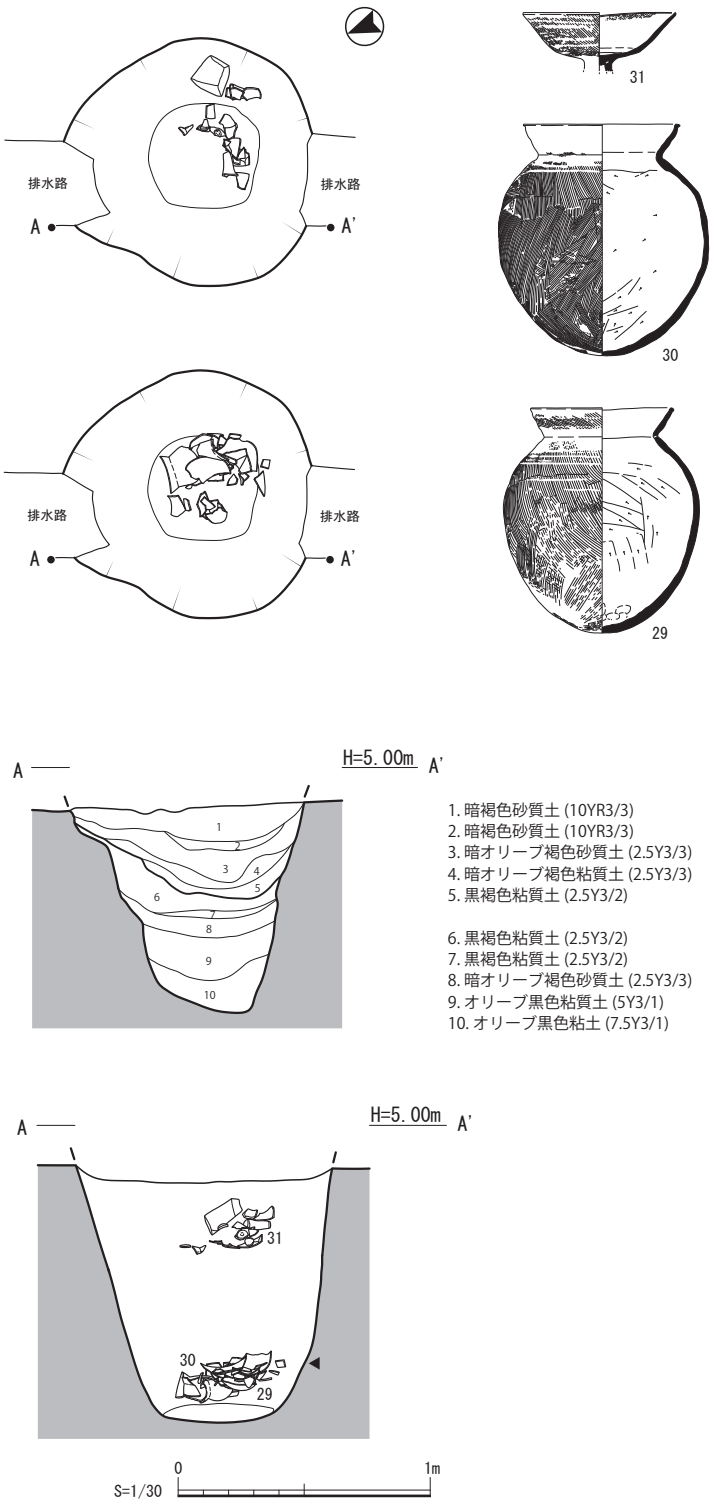


Fig.44　井戸 SE004 実測図及び出土遺物

埋納遺構 SJ001（Fig.45）N-18Grid 上で検出した遺構。当初、調査面の清掃を行う時点で周辺に遺物が多数出土していたため、実測しながら遺物を取り上げ、その後に遺構検出作業をおこなった。その際に横倒し状態で出土したのが、のちに埋設遺構に関連すると判断した弥生後期の壺形土器（94）である。この遺物を取り上げ後、柱穴状遺構を検出し半裁をしたところ、ジョッキ形土器が出土した。

この遺構は、他の周辺の柱穴状遺構とは違い、ジョッキ形土器が置かれた面で平坦に終わっており、それ以上の掘削はなかった。遺構は平面がほぼ円形で、直径 35cm、掘削深度 25cm、下端幅 30cm を測る。ジョッキ形土器は一部口縁部が欠損した状態で、南に把手をおき据えられていた。埋土は暗オリーブ褐色を呈するシルトで、本遺跡で弥生の遺構と判断する際に指標としていた土である。砂粒をわずかに含み、褐色粘土ブロックも含む。埋土全体に炭化物を多量に含んでいたのが他の遺構との違いであったと見られる。

同様の埋土を有する遺構、本遺構と並列する建物を構成する遺構等確認作業を実施したが、関連があると見られる遺構は検出できなかった。

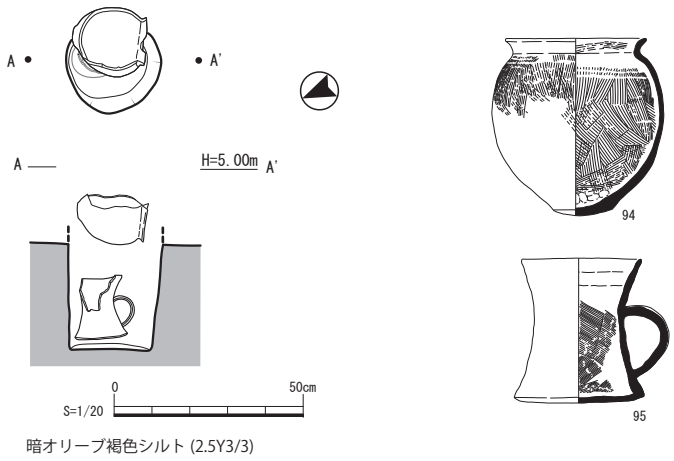


Fig.45　埋納遺構 SJ001 実測図及び出土遺物

柵列 SA001（Fig.46）N.O-18Grid で検出した遺構。埋設遺構 SJ001 の西側に位置する。平面形は周辺の柱穴状遺構よりひと回り大きく、長径 40cm から 45cm を測る。柱穴間は P1-P2 間が 1.5m、P2-P3 間が 1.4m とほぼ同間隔と考えてよい範囲内に収まる。いずれも、直径 18cm 前後の柱痕を有する。P3 のみが掘削深度がやや深く、検出面から約 30cm 掘り込む。埋土は埋設遺構 SJ001 同様の暗オリーブ褐色土で、弥生期の遺構の可能性を示している。出土遺物はない。

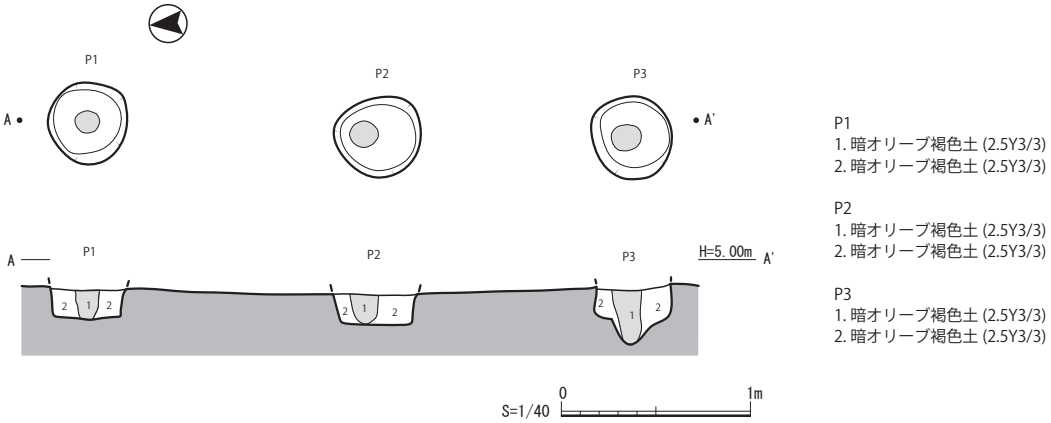


Fig.46　柵列 SA001 実測図

墓 ST001（Fig.47）M-16Grid で検出した遺構。検出時は土器の埋設遺構と考えられたが、土器を露出させ遺構平面プランを確認した結果、甕棺であると判断した。検出した土器は甕棺の下甕で掘り方の下端に対し、ほぼ水平に横たえられ埋め置かれた状態であった。検出できた掘り方は、隅丸方形の土坑状遺構であり、下甕が入ってしまっていることからおそらくは２段掘りの墓坑であった可能性が考えられる。

墓坑は、下端がほぼ水平で掘り方立ち上がりも緩やかであり、掘り方自体に方向性は認められない。出土した土器の主軸は N-49° -W を図る。

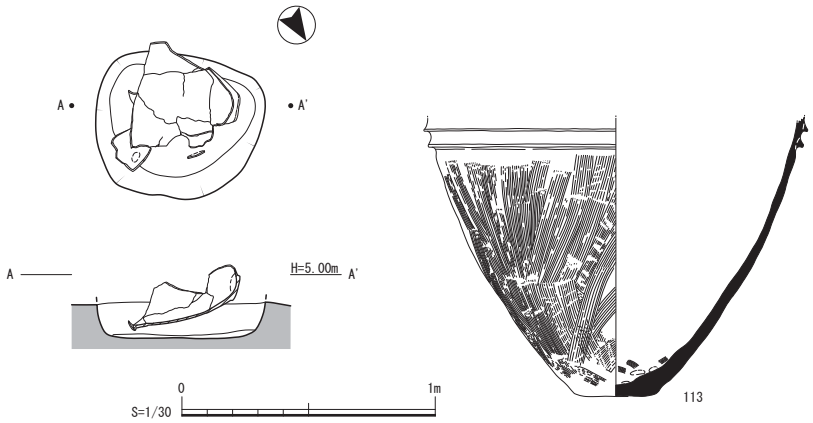


FIg.47　墓 ST001 実測図及び出土遺物

溝 SD001（Fig.48）J-10.11Grid 上で検出した遺構。遺構南側が調査区外に伸び全容は不明であるが、現状で長さ 4.7m、幅約 81cm、深度は掘削範囲内で最深部約 80cm を測る。上端、下端とも遺構ラインが安定しないことから自然流路（NR）の可能性もあったが、調査段階では溝状遺構と判断した。埋土中からは、８世紀後半と想定される須恵器の摘み付き蓋（1）、輪状摘み付き蓋（2）、高台付き杯（3）が埋土中より出土している。

溝 SD002（Fig.48,49）調査２区のほぼ中央を横切り検出した溝状の遺構。全長は西側の自然流路 NR001 で切られた部分から、東は NR004 に切られるまで約 58m を測る。全体が１本を呈するが、掘り方を詳細にみると西側から５本の溝の単位をみることができる。１本当たりの長さの単位は一定しないが、L-14Grid から O-18Grid 間に掘削される 25.6m 区間が最後に掘られた切り合いを確認した。この間の幅は約 40cm ～ 50cm と他の部分より広い。その他の部分は幅が約 30cm から 40cm とやや狭い。深度は浅く、検出面から 20cm を超える部分はない。全般に弥生後期の遺物を出土する遺構を切っていることから、弥生後期の溝と判断される。出土遺物は弥生後期土器片がわずかに出土しているが、図示できる遺物はない。

溝 SD003（Fig.48）北西側を自然流路 NR003 に、南東側を SD002 に切られ検出した遺構。確認できた範囲で全長 16.4m、幅は平均して約 50cm、深度は最深部で 12cm を測る。遺構断面は緩い U 字状を呈し、部分によっては逆台形を呈するところもある。SD002、SD004 同様に屈曲する部分はなく、ほぼ直線で掘削されている。出土遺物はない。

溝 SD004（Fig.48）J-12Grid で溝 SD003 に切られ、J-16Grid まで伸びる遺構。遺構北辺は調査区外に伸び、南側では SD003 に切られる。確認できた範囲で全長約 22.4m、幅約 40cm、最深部で約 22cm を測る。J-16Grid で確認した遺構端部は丸く収まる。本遺構も、SD002 で見られるように幾度からの掘削痕を見ることができ、一単位あたり最も長い部分で約 8.6m を測る。

溝 SD005（Fig.48）のちに記すが、溝 SD006 に沿い、その規模から側溝と見られる遺構。全長 18.2m、幅約 30cm、深度は約 10cm を測る。遺構断面は緩い U 字状を呈する。SD002、SD003、SD004 とは違い、遺構平面中位付近で緩く曲がる。

溝 SD006（Fig.48）遺構 12.13Grid 列で南北方向に検出された遺構。調査区北辺で幅 6.2m、南辺で 2.2m を測る。遺構の主軸は２段掘りの中位を主軸として測ると N-11°-E を示す。
溝は断面（A-A'）で示すが、中央部が１段下がり埋土に粘質土を有する。本遺構も掘削単位等は確認できていないが、調査区内ではほぼ直線で検出している。出土遺物はない。

溝 SD007（Fig.48）調査区 Grid13 列で検出した遺構。全長 11.1m、幅約 40 ～ 50cm、深度は約７～ 10cm を測る。断面径は緩い U 字状で、掘り方は比較的緩い。本遺構も、SD006 に沿い検出されていること、また SD005 も含め、遺構の切り合いが最も古いことから、SD006 に伴う側溝の様相を有する遺構と考えられる。出土遺物はない。

溝 SD008（Fig.49）調査区 19Grid 列上で検出した遺構。遺構北側は調査区北辺より外に伸び全容は不明である。確認できた範囲内で全長約 12.8m、幅（A-A')1.35m、深度は平均して約 10cm ～ 15cm を測る。本遺構は SD006 と類似点を多く見ることができる。遺構の内部で段を有し深くなること、遺構の軸が N-10°-E で SD006 の N-11°-E とほぼ軸を同じくすることである。遺構南は、浅くなり不定形な状態で上端が消えて行くことから、削平により消滅していることが窺える。埋土中からは高杯形土器（４）、脚付鉢（5）が出土

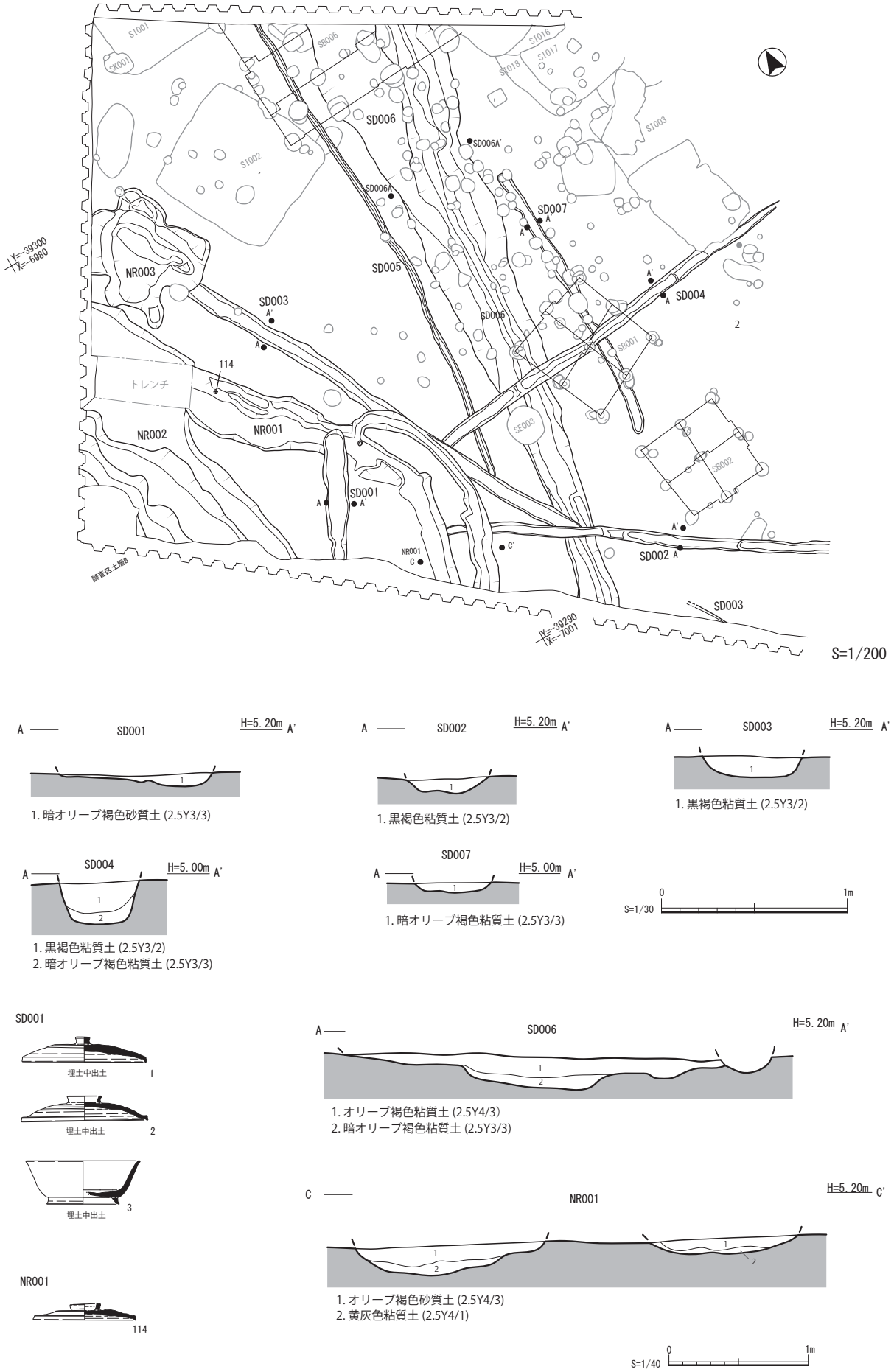


Fig.48　溝 SD001 ～ SD007、自然流路 NR001 ～ NR003 実測図及び出土遺物

している。

自然流路 NR001（Fig.48）調査区の南西部で検出した自然流路。上端下端とも不定形で遺構の深度も一定しない。層には砂質土、粘質土を有し水性堆積による埋没により埋まったものと考えられる。I-10Grid で須恵器の輪状摘みが付く蓋（114）が完形で出土している。

自然流路 NR002・003(Fig.48)調査区南西端付近で検出。上端下端とも不定形な形状をなす。出土遺物はない。

自然流路 NR004（Fig.50） R-20Grid から S-26Grid まで広がる不定形な流路。多数の遺構を切り、近世に形成されたものと考えられる。出土遺物は近世の肥前系磁器や陶器が小片で多数入る。また、R-25Grid 壁際で土師器壺（115）が完形で出土しているが、おそらく近接して古い遺構があったものと考えられる。

自然流路 NR005（Fig.50）U-24.25Grid 上で検出した不定形な平面形を呈する流路。調査区南端に位置するため調査区外に沿い断面を残し調査を実施した。２層として分層した層中から須恵器の「権（116）」が１点出土している。他に年代を示す遺物が出土していないため、詳細は不明だが本流路の直接の年代を示す遺物ではないと見られる。

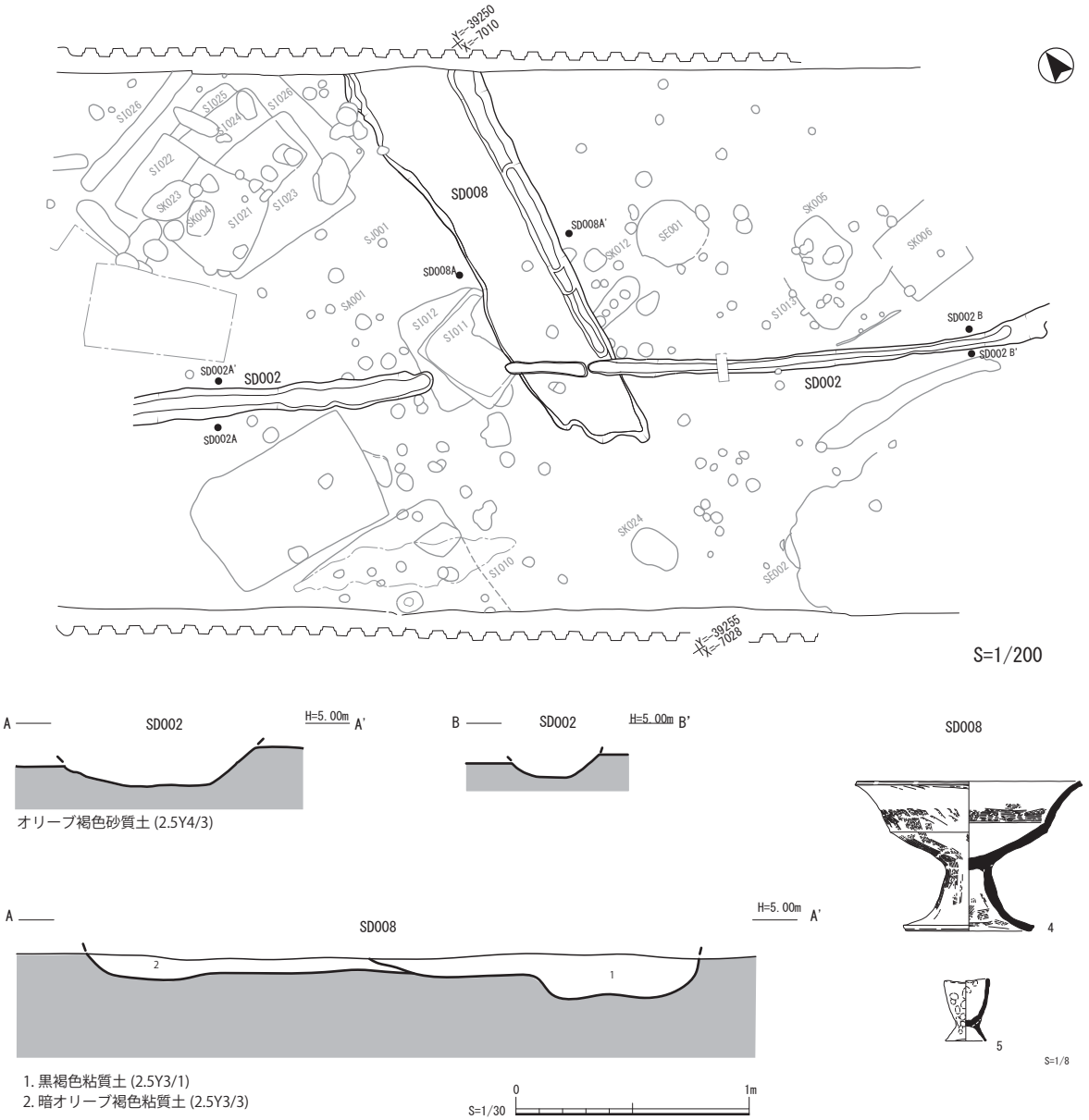
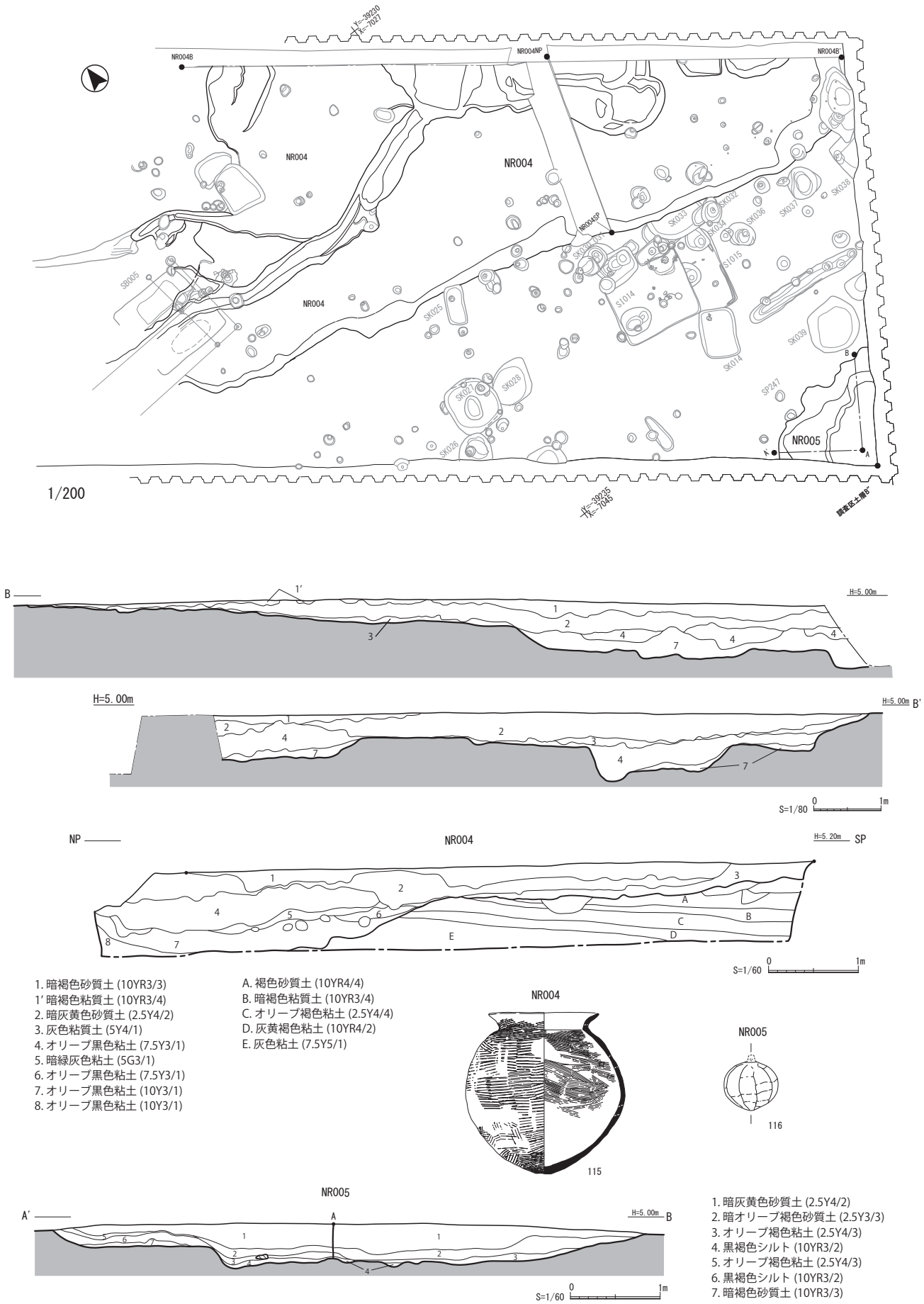


Fig.49 溝 SD002・SD008 実測図及び出土遺物



1. 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
1′暗褐色粘質土 (10YR3/4)
2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
3. 灰色粘質土 (5Y4/1)
4. オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1)
5. 暗緑灰色粘土 (5G3/1)
6. オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1)
7. オリーブ黒色粘土 (10Y3/1)
8. オリーブ黒色粘土 (10Y3/1)

A. 褐色砂質土 (10YR4/4)
B. 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
C. オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/4)
D. 灰黄褐色粘土 (10YR4/2)
E. 灰色粘土 (7.5Y5/1)

1. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
2. 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3)
3. オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/3)
4. 黒褐色シルト (10YR3/2)
5. オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/3)
6. 黒褐色シルト (10YR3/2)
7. 暗褐色砂質土 (10YR3/3)

Fig.50 自然流路 NR004・NR005 実測図及び出土遺物

第４章　遺　物

調査２区全域から、弥生時代後期後半から近世にいたる各時代の土器類が出土した。弥生時代の遺構でとくに土器が多数出土し、良好な一括資料と認められたの は竪穴建物 SI003、SI007、SI010、井戸 SE001、SE002、埋納遺構 SJ001 がある。古墳時代初頭は、古式土師器を出土する遺構として竪穴建物 SI013、布留式甕が２個体出土している井戸 SE004 がある。さらに、古墳時代後期の竪穴建物 SI017 からは須恵器蓋杯、杯身、無蓋高杯、土師甕などを始め、須恵器模倣杯、天草式製塩土器椀部が出土している。

１　土　器

弥生時代前期、弥生時代後期、終末期から古墳時代初頭、古代の土器等の器種名称及び年代は、遺跡が近接し、資料整理・報告がおこなわれている『柳町Ⅰ[1]』『柳町Ⅱ[2]』に従う。また、同時期の遺跡で菊池川流域の基準資料として取り扱われている『津袋大塚[3]』『うてな[4]』『蒲生・上の原[5]』を参考とした。

２　製塩土器

古墳時代後期に入り、竪穴建物 SI017 等から６世紀後半期の須恵器、土師器等とともに製塩土器が出土している。製塩土器を知る上で参考とした文献は、主に概説書として近藤義郎『日本土器製塩研究[6]』、調査報告書として『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ[7]』、最新の資料を掲載する資料として、藤本貴仁『天草式製塩土器の再検討[8]』等を引用・参考文献として活用させていただいた。その他、参考とした文献も含め以下のとおり。

1　熊本県教育委員会『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 200 集　2001
2　熊本県教育委員会『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第 218 集　2004
3　高木正文『古文化談叢』第６集　1979
4　熊本県教育委員会『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第 121 集　1992
5　熊本県教育委員会『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第 158 集　1996
6　近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店　1994
7　熊本県教育委員会『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』熊本県文化財調査　1979
8　藤本貴仁「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第２号　熊本古墳研究会　2004

植木町教育委員会『石川遺跡』植木町文化財調査報告第 14 集　2002
熊本市教育委員会「二本木遺跡群第 18 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第７号　2005
熊本市教育委員会「上高橋高田遺跡群第２次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第２号　1999
熊本市教育委員会「上代町遺跡群第１次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第９号　2007
泗水町教育委員会『篠原遺跡』泗水町文化財調査第３集　1998
中原幹彦「宇城産須恵器のひろがり」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市　2003
松根恭子「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』第２号　熊本古墳研究会　2004

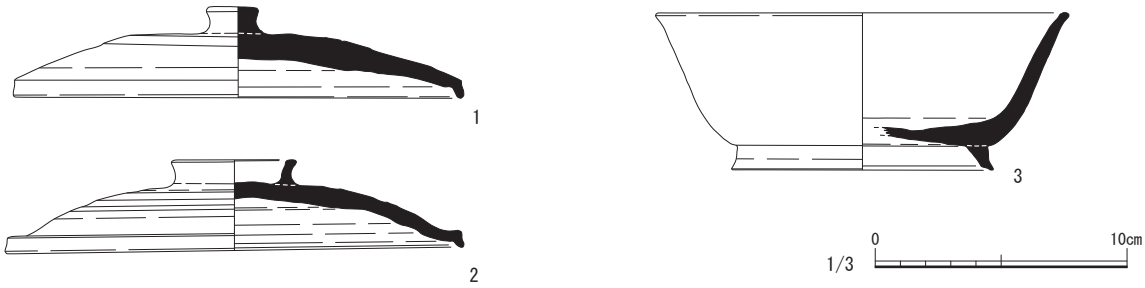


Fig.51　溝 SD001（1 ～ 3）出土遺物実測図

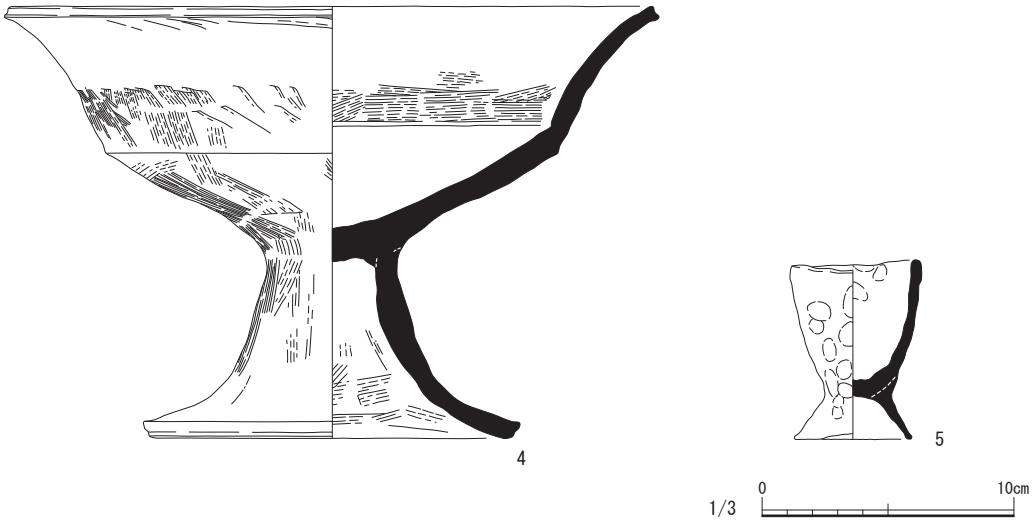


Fig.52　溝 SD008（4.5）出土遺物実測図

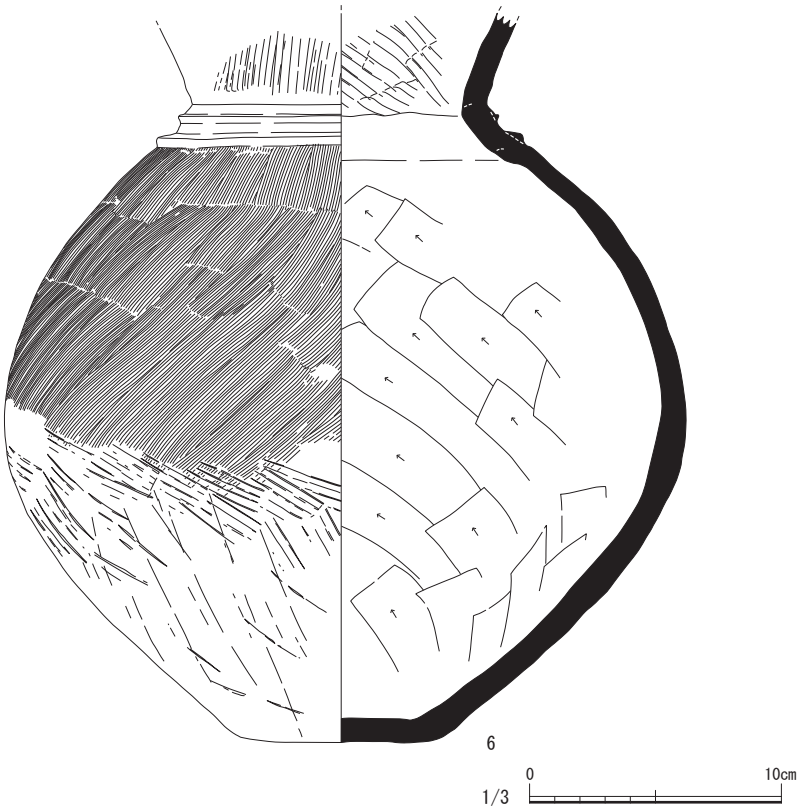


Fig.53　井戸 SE001（6）出土遺物実測図

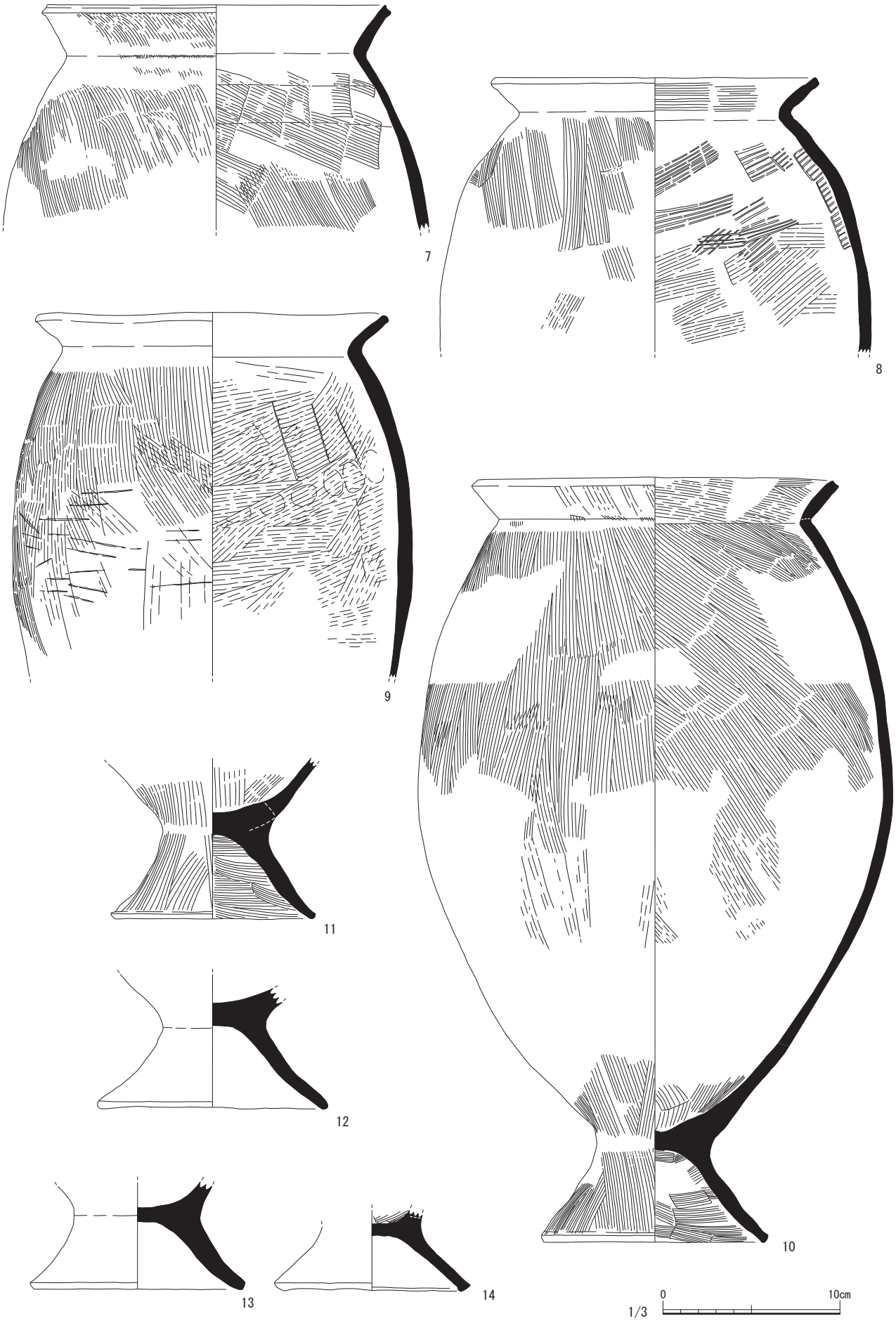


Fig.54　井戸 SE002（7 ～ 14）出土遺物実測図－①

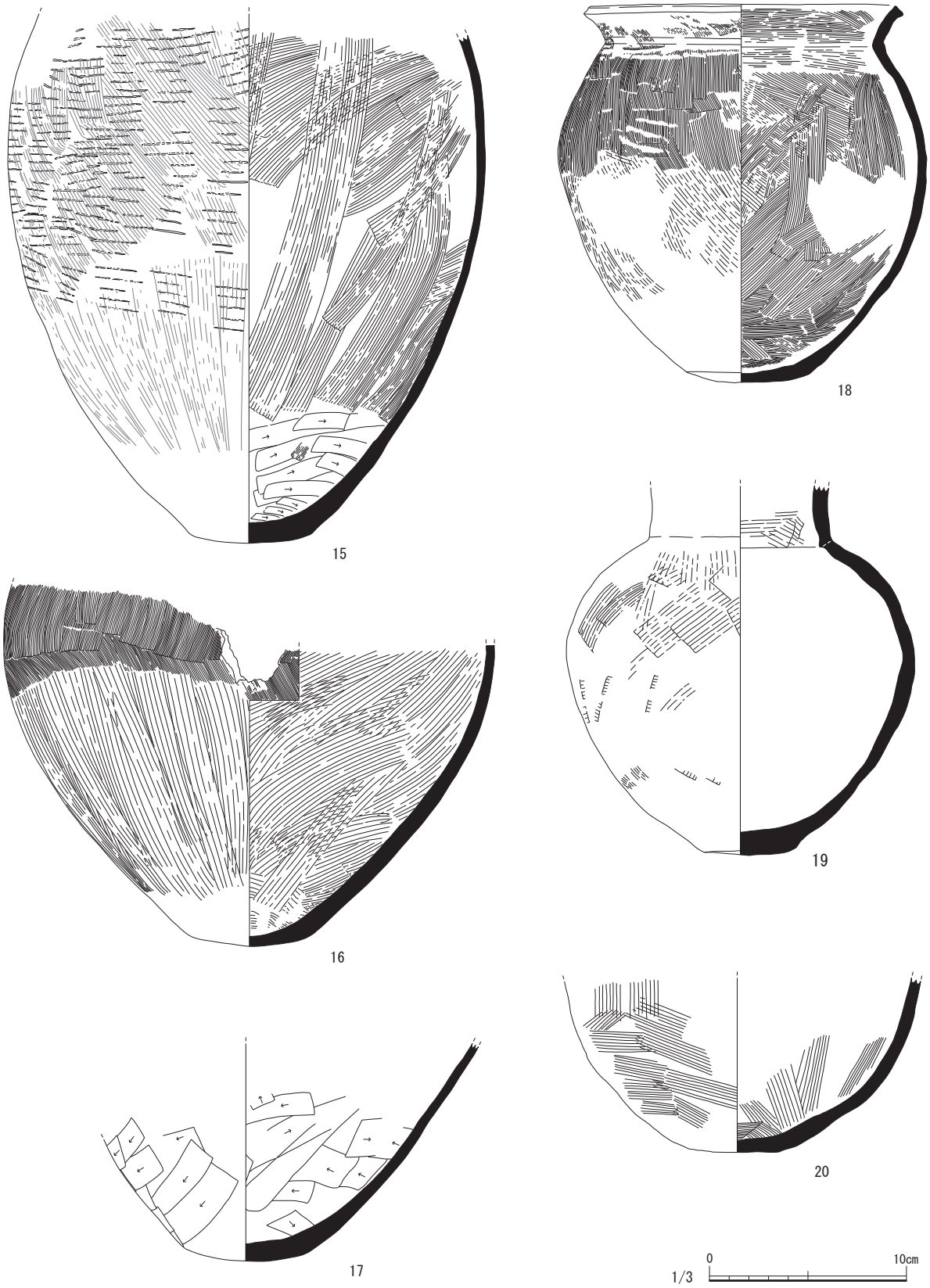


Fig.55　井戸 SE002（15 ～ 20）出土遺物実測図－②

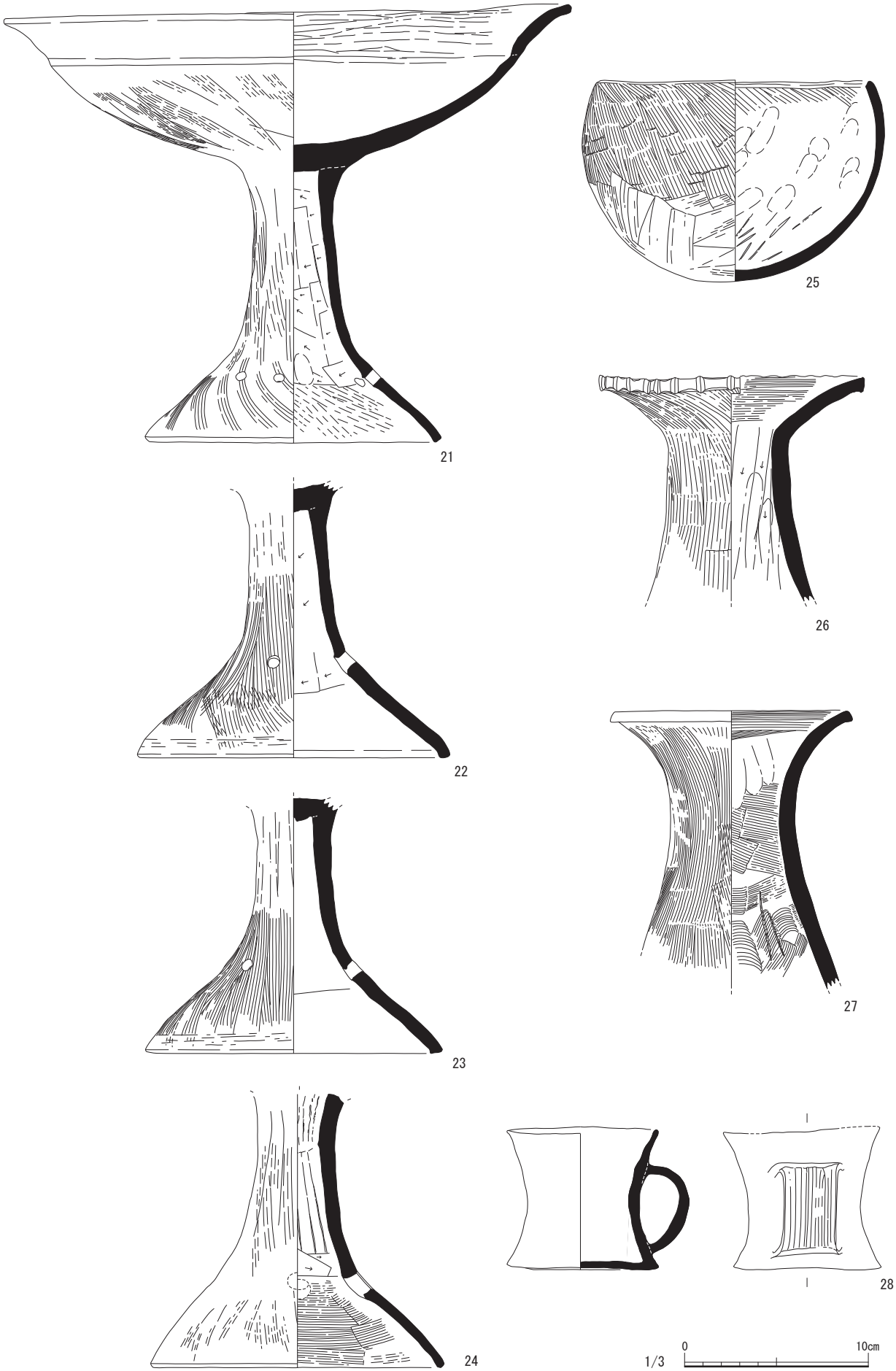


Fig.56　井戸 SE002（21 ～ 28）出土遺物実測図－③

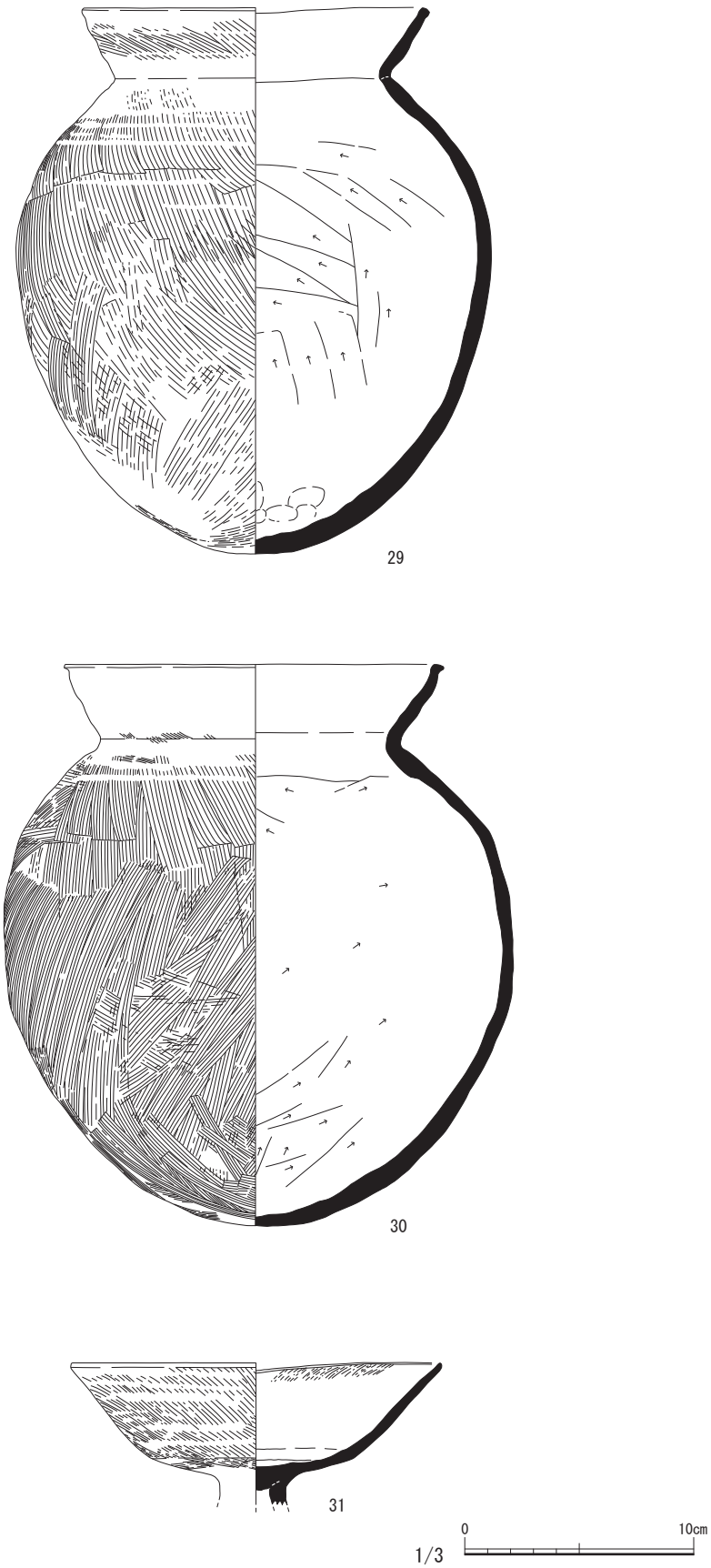


Fig.57　井戸 SE004（29 ～ 31）出土遺物実測図

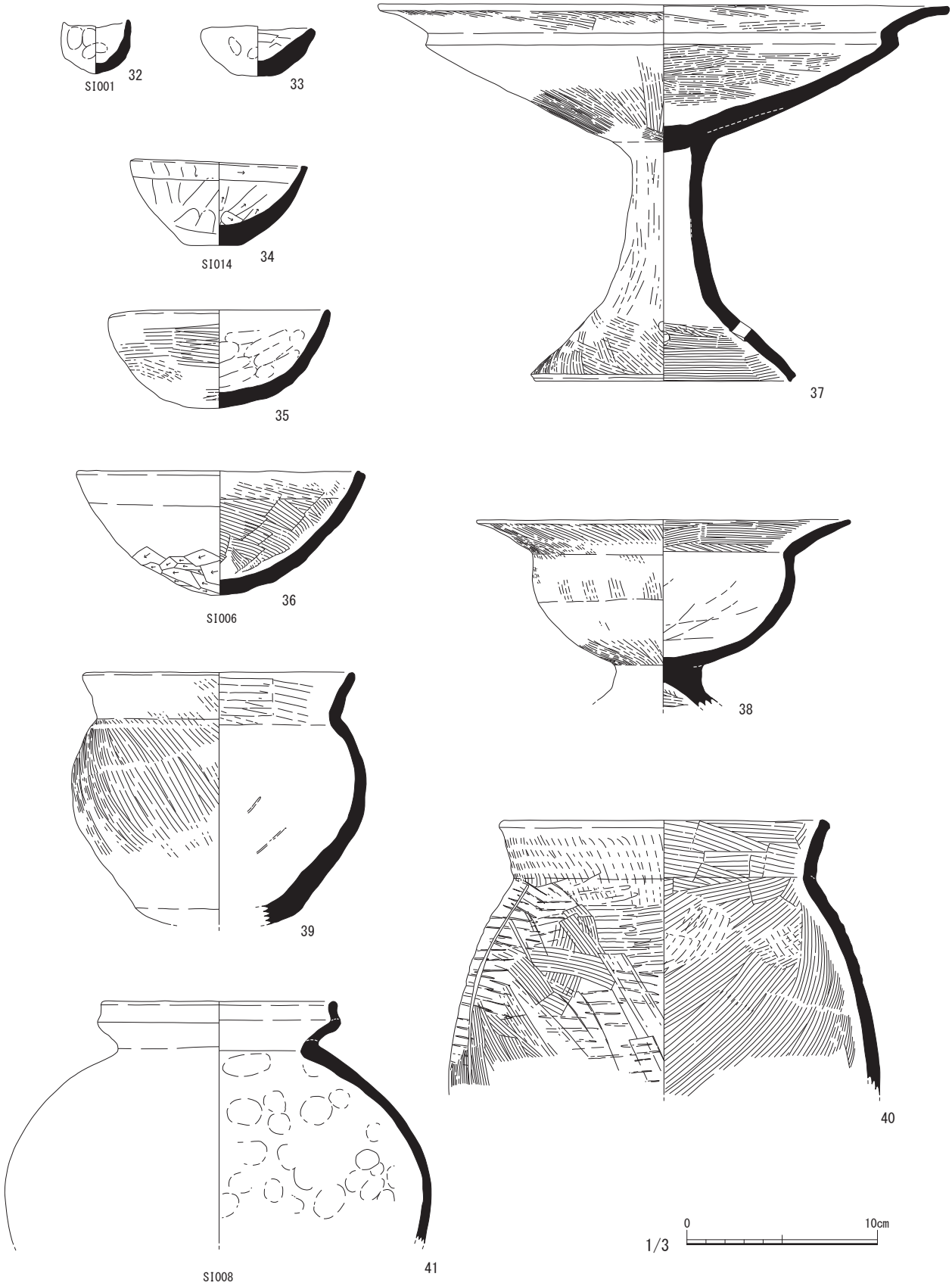


Fig.58　竪穴建物 SI001（32）・SI003（33.35.37 ～ 40）・SI006（36）・SI008（41）・SI014（34）出土遺物実測図

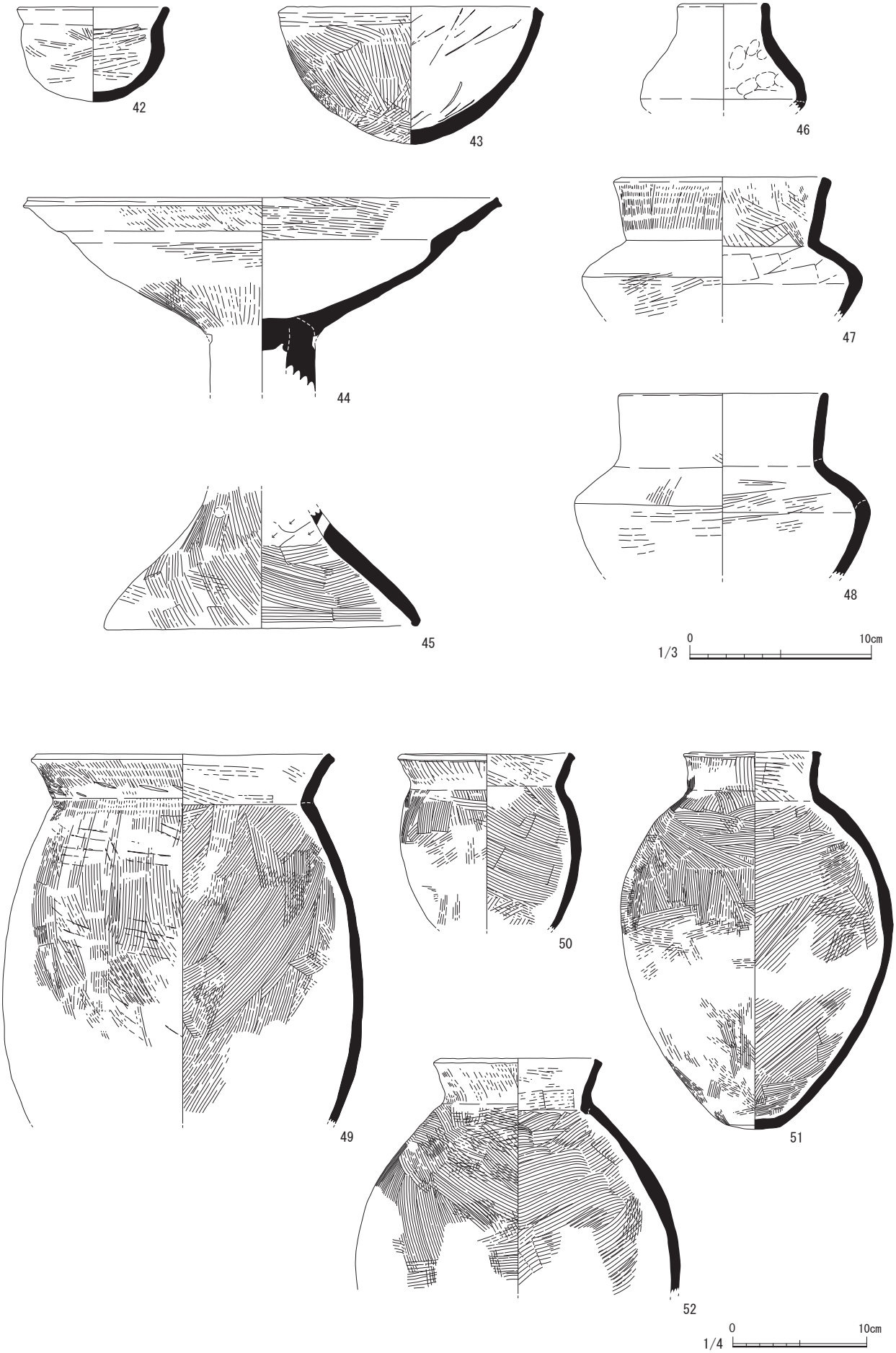


Fig.59　竪穴建物 SI007（42 ～ 52）出土遺物実測図

Fig.60　竪穴建物 SI010（53 ～ 57）出土遺物実測図

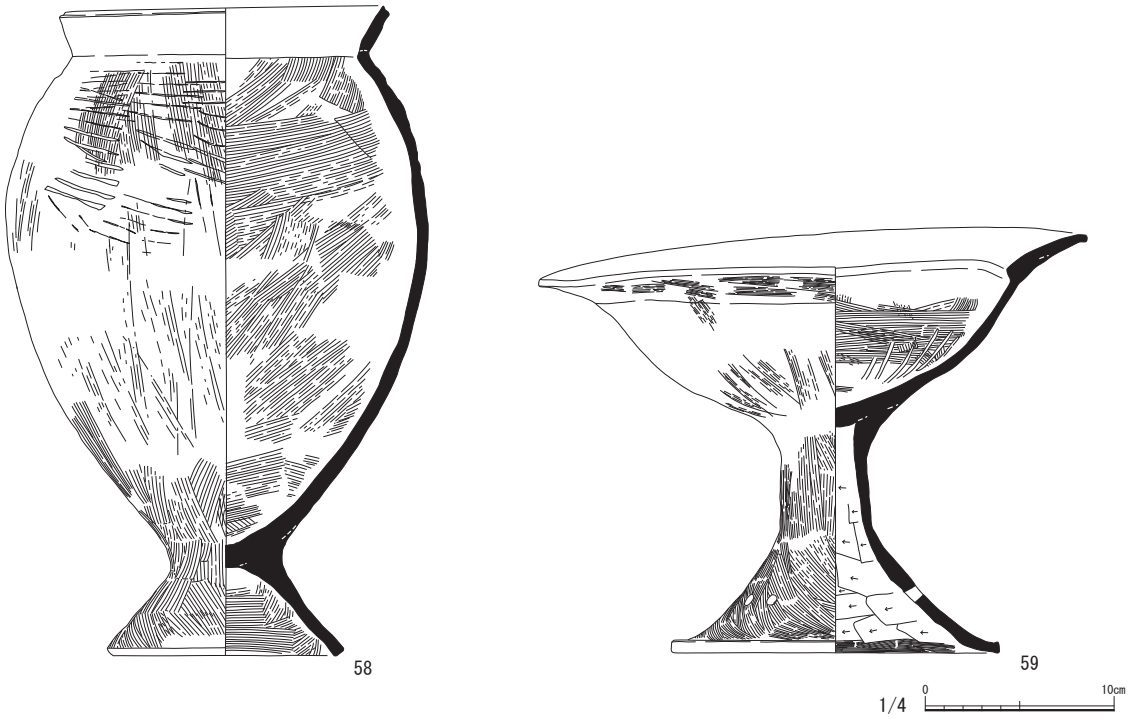


Fig.61　竪穴建物 SI011（58.59）出土遺物実測図

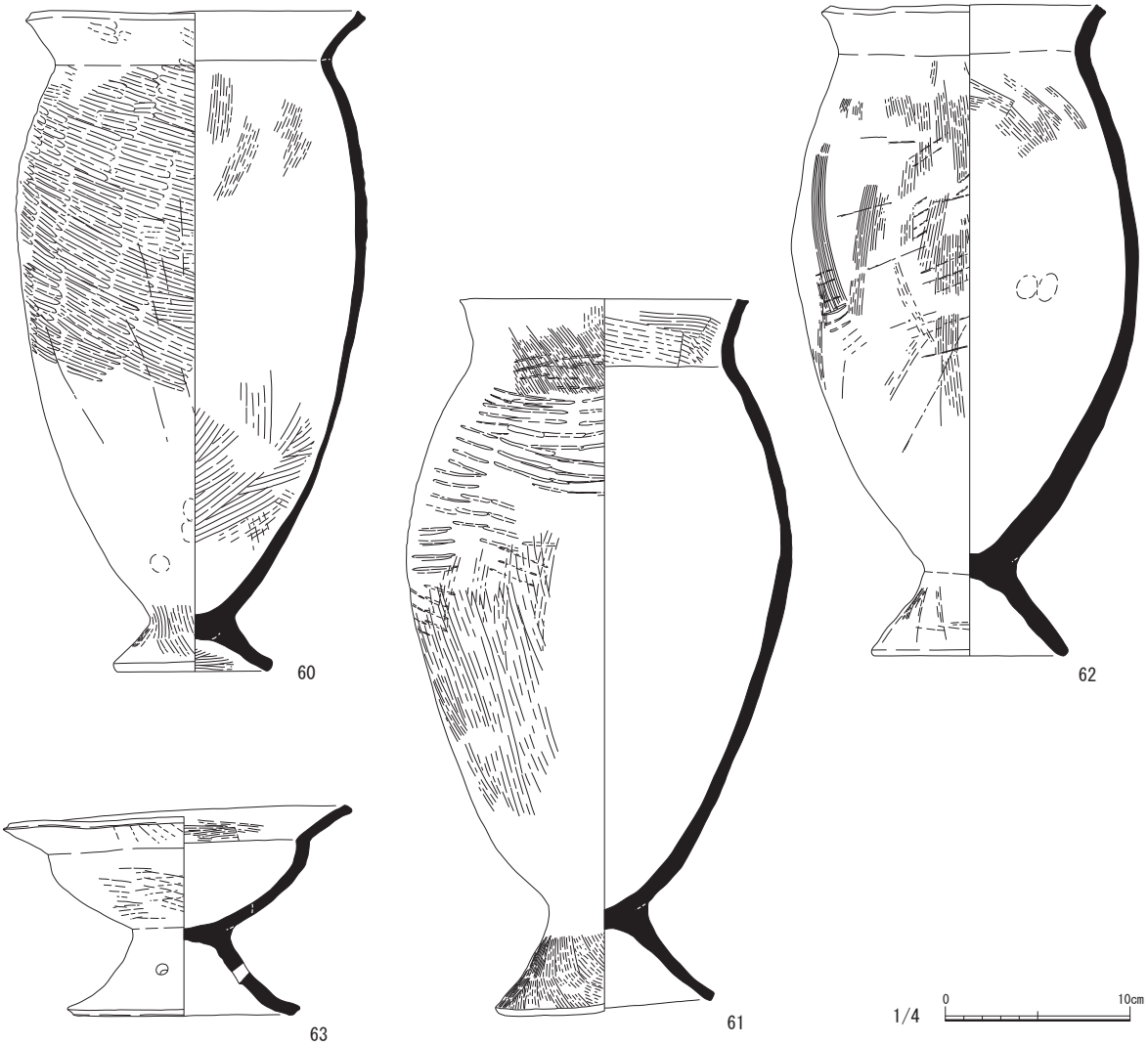


Fig.62　竪穴建物 SI013（60 ～ 63）出土遺物実測図

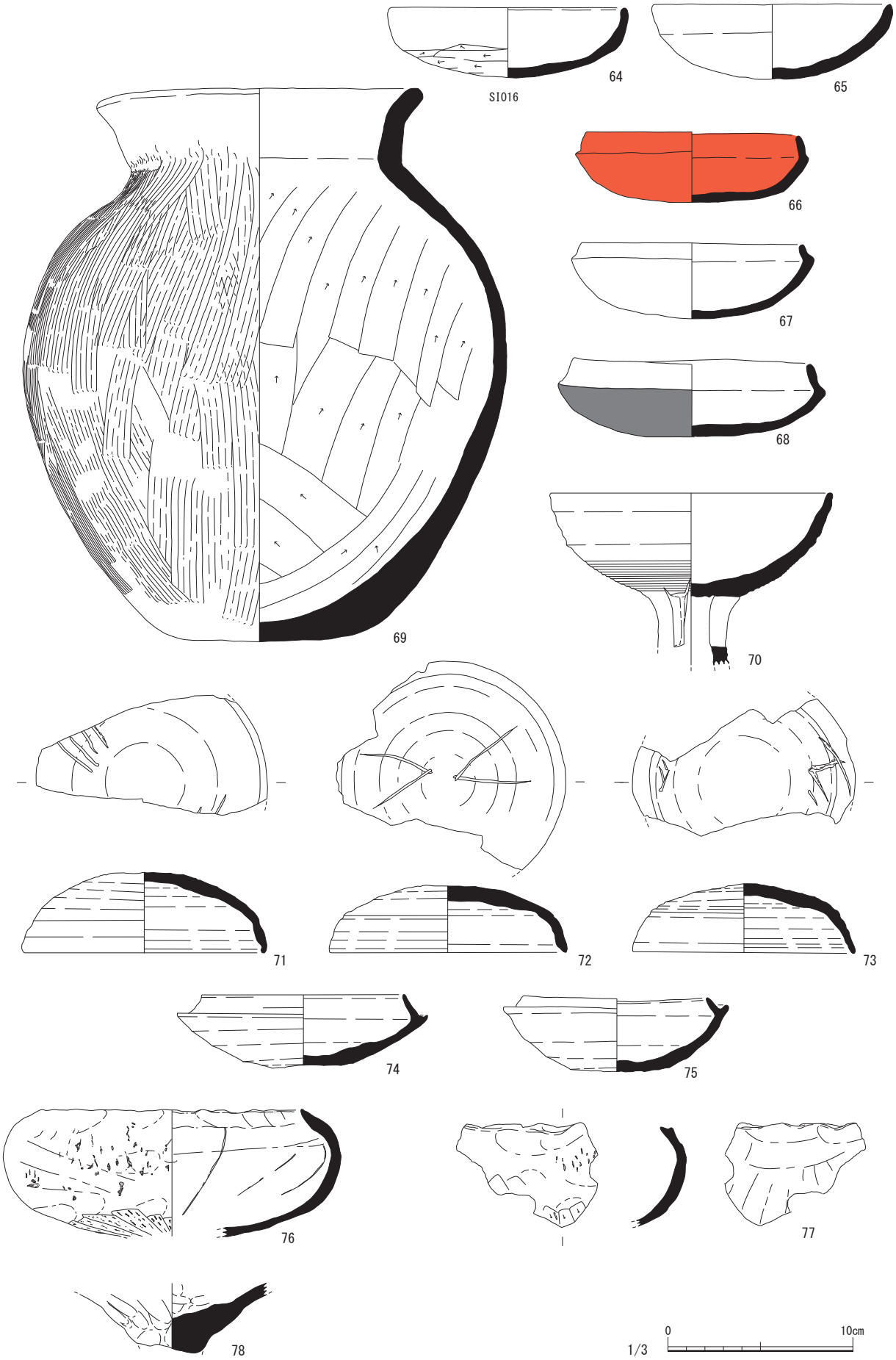


Fig.63　竪穴建物 SI016（64）・SI017（65 ～ 78）出土遺物実測図

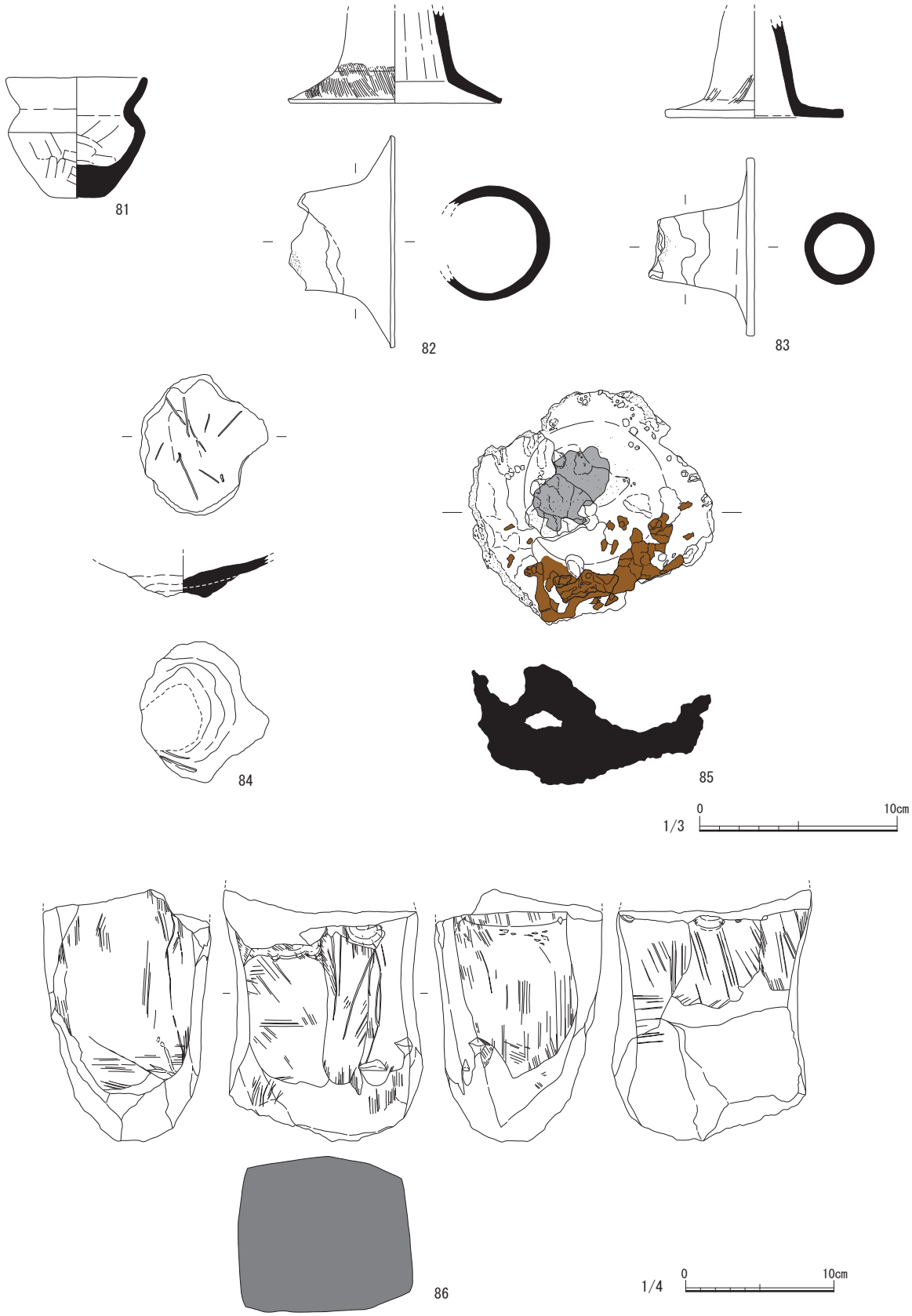


Fig.64　竪穴建物 SI019（81 ～ 86）出土遺物実測図

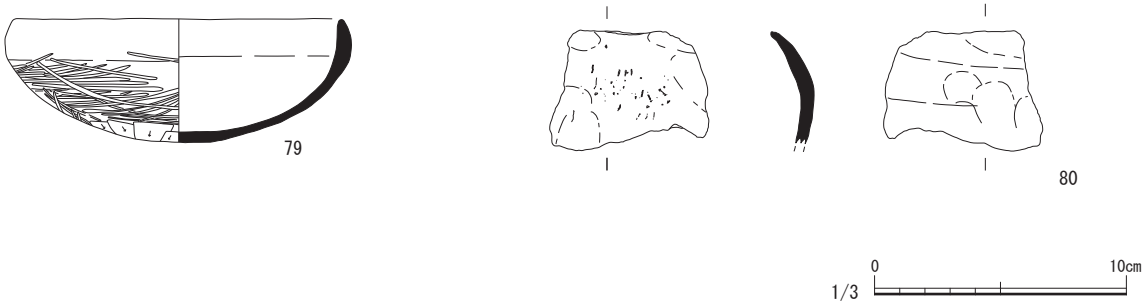


Fig.65　竪穴建物 SI018（79.80）出土遺物実測図

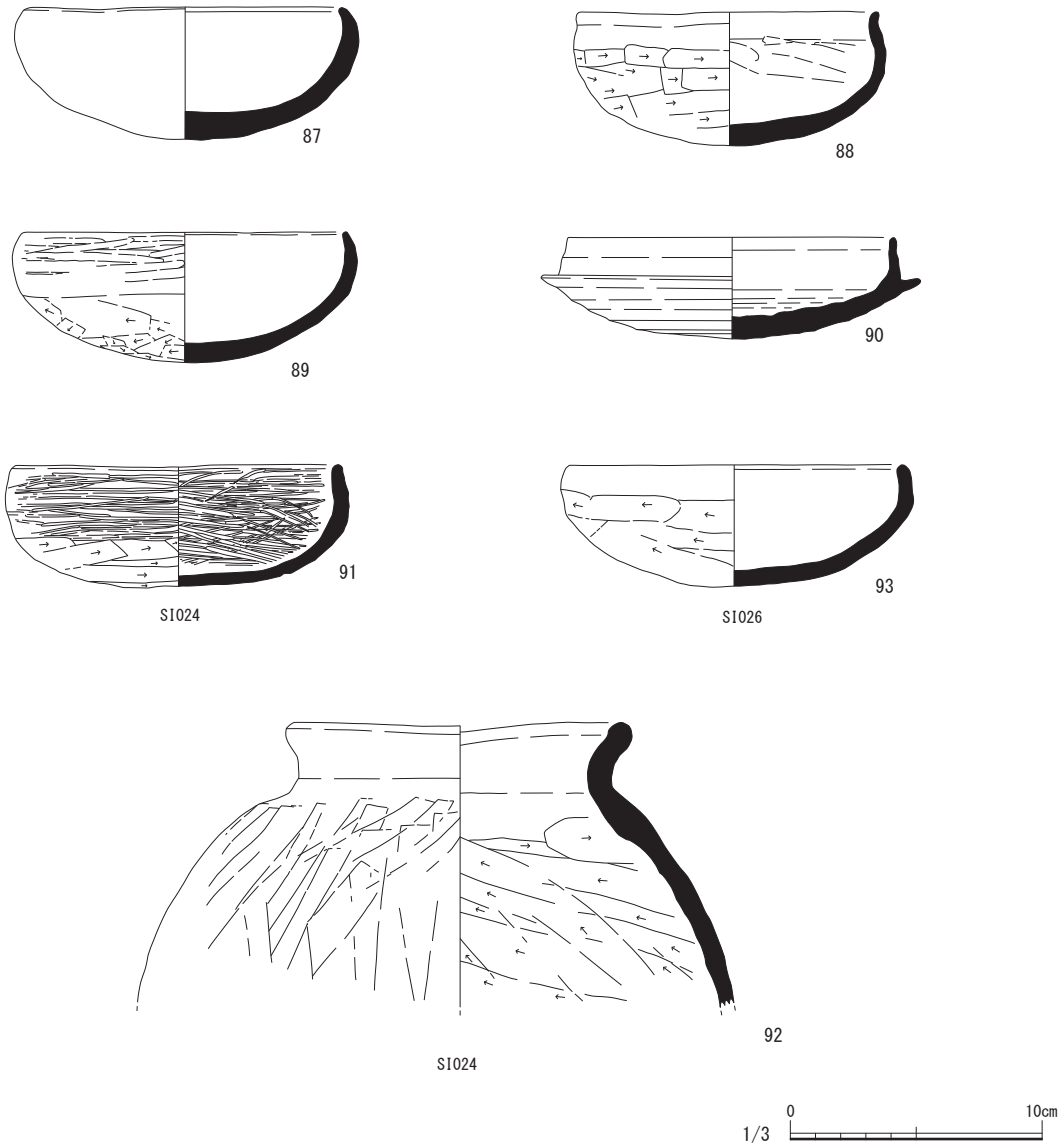


Fig.66　竪穴建物 SI023（87 ～ 90）・SI024（91.92）・SI026（93）出土遺物実測図

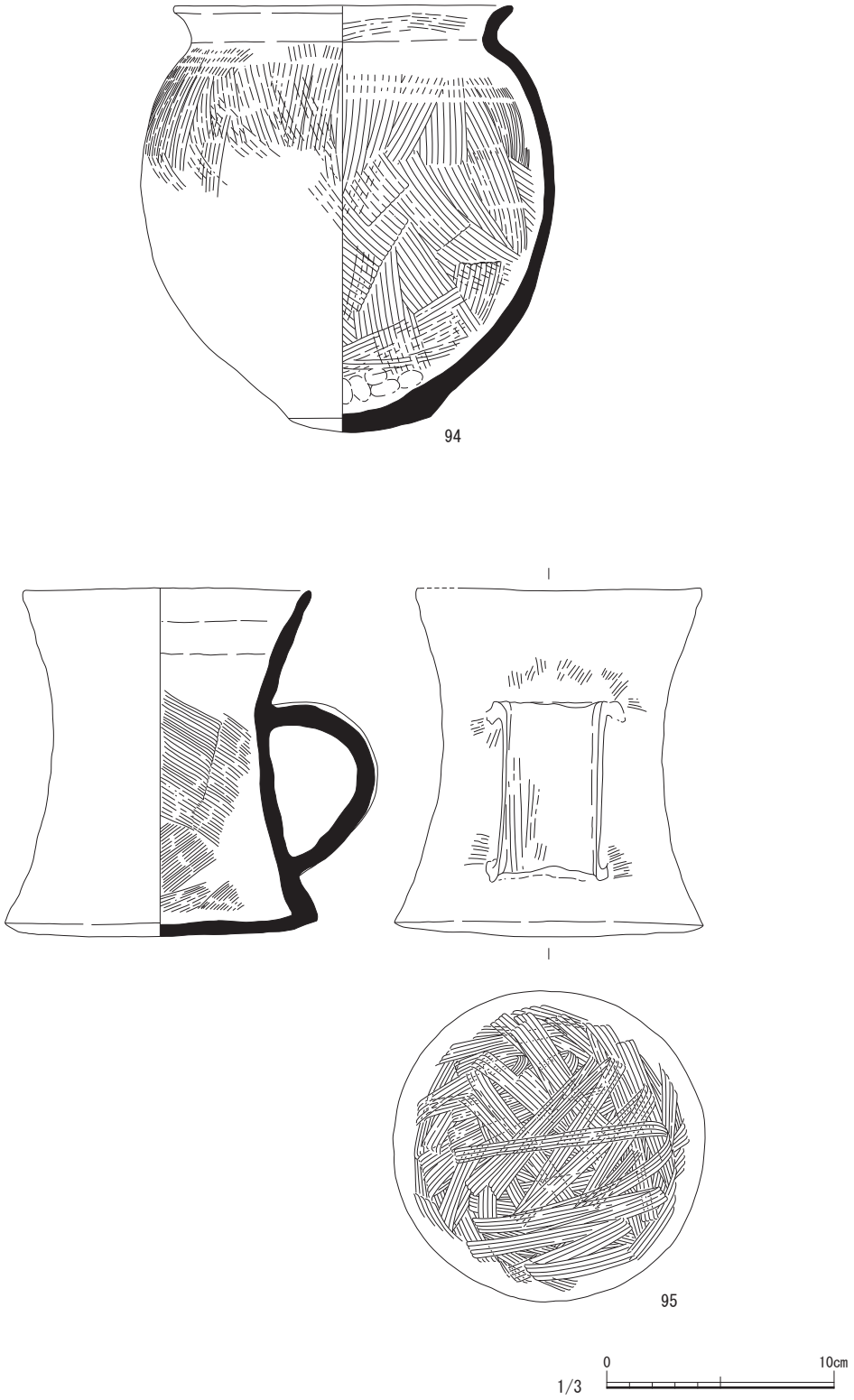


Fig.67　埋納遺構 SJ001（94.95）出土遺物実測図

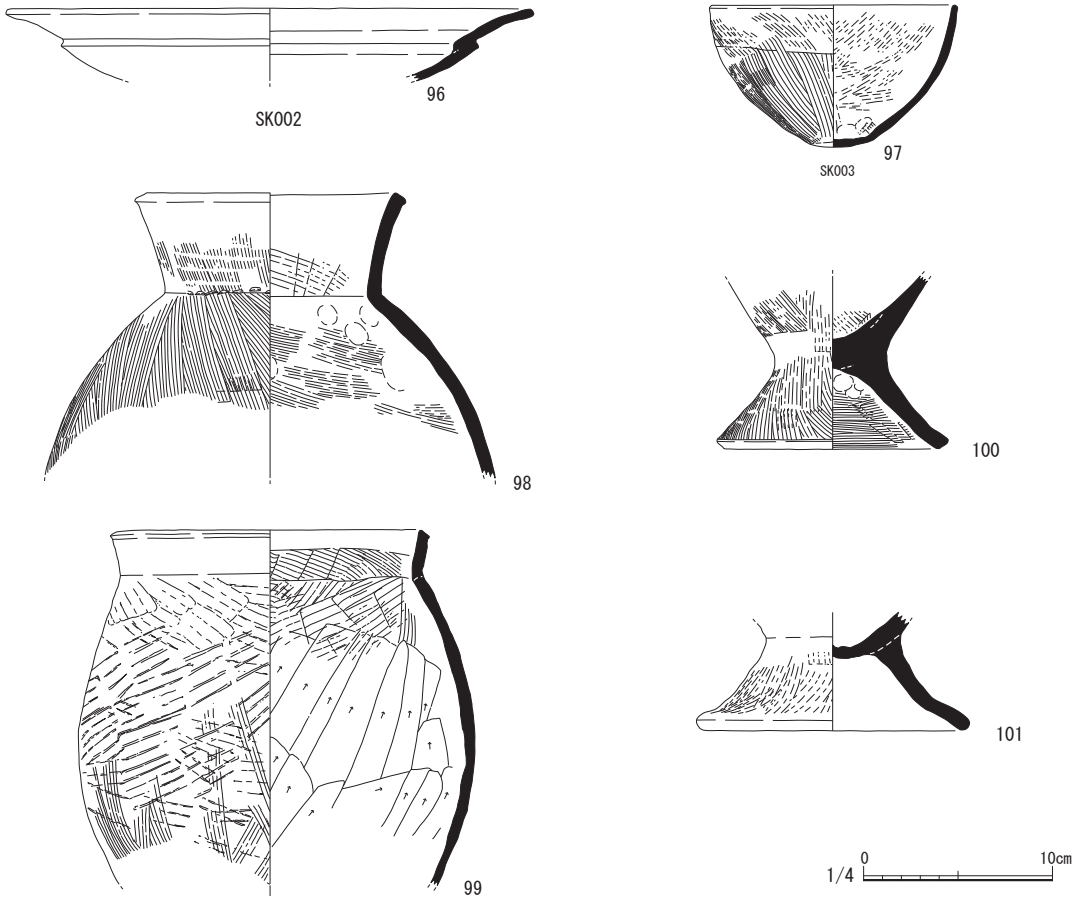


Fig.68　土坑 SK002（96）・SK003（97）・SK004（98 ～ 101）出土遺物実測図

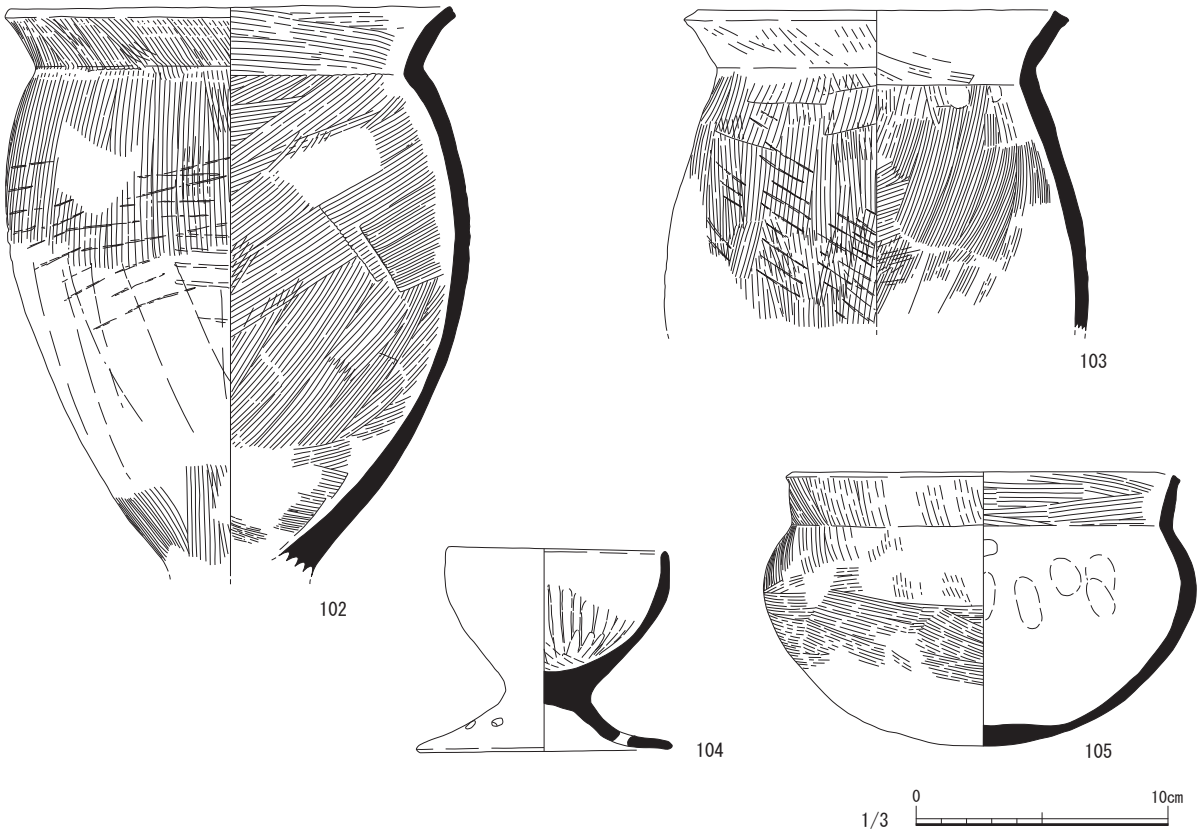


Fig.69　土坑 SK005（102 ～ 105）出土遺物実測図

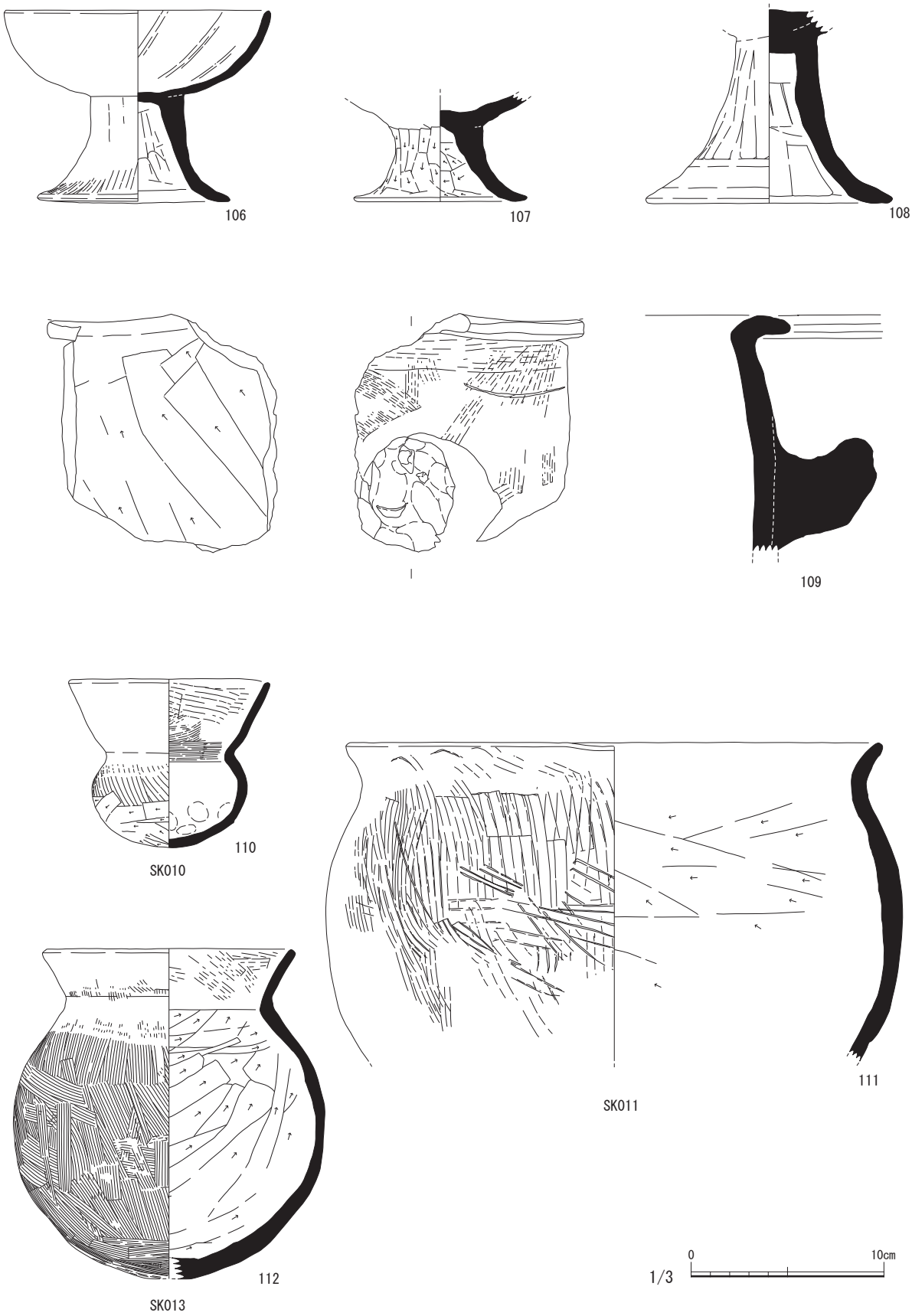


Fig.70　土坑 SK008（106 ～ 109）・SK010（110）・SK011（111）・SK013（112）出土遺物実測図

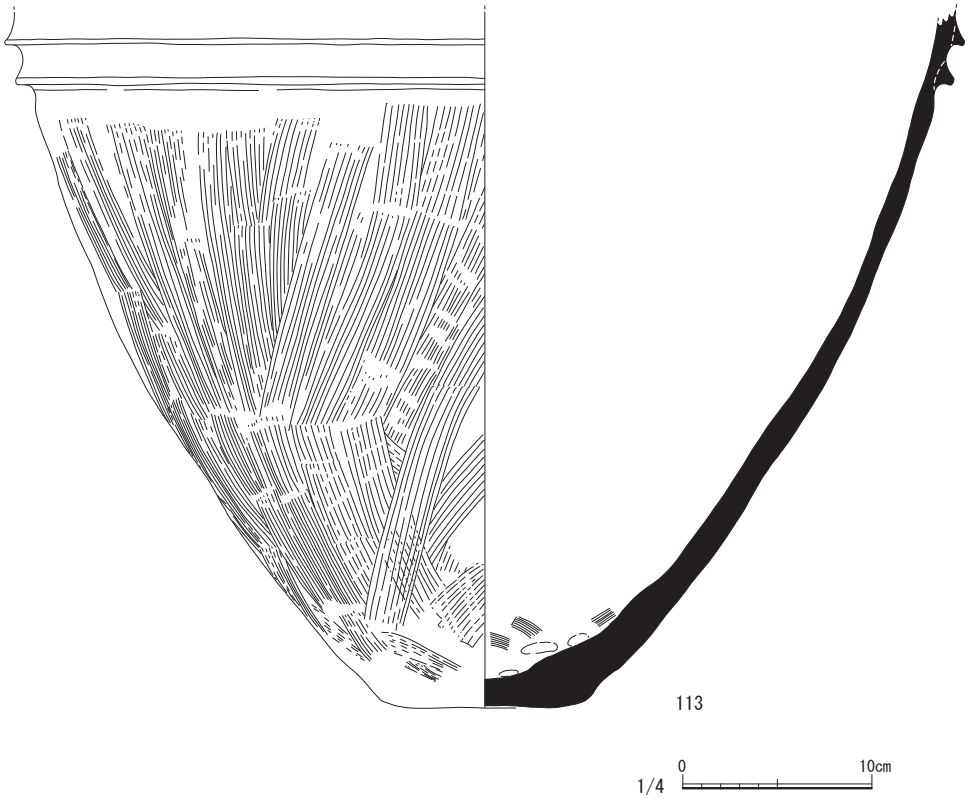


Fig.71　墓 ST001（113）出土遺物実測図

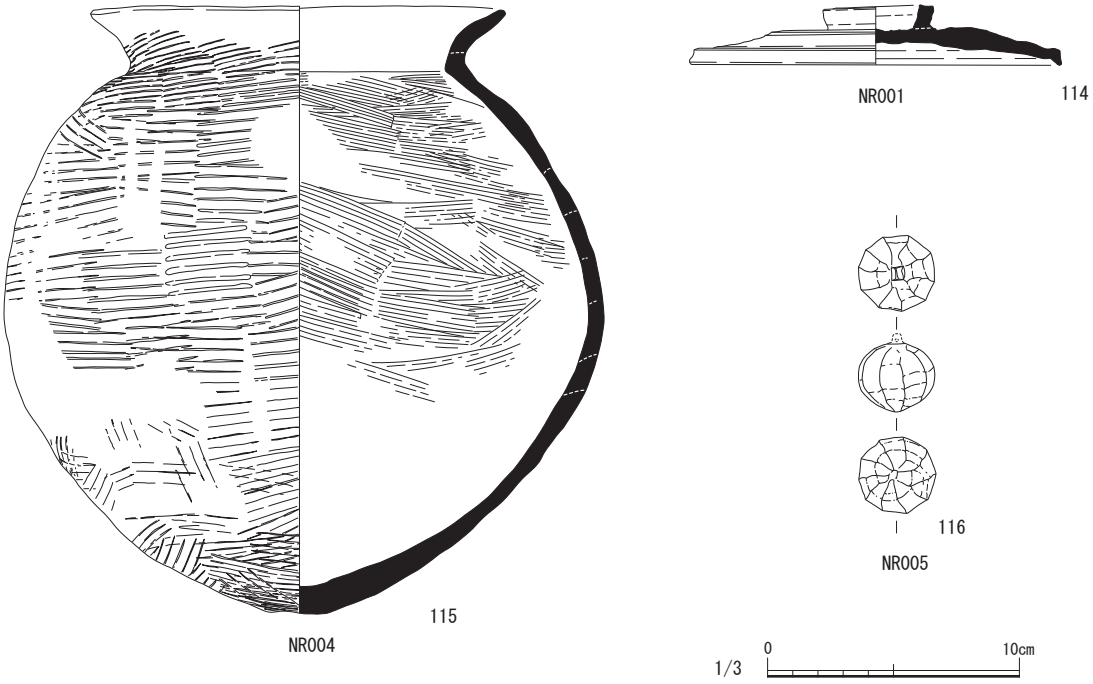


Fig.72　自然流路 NR001（114）・NR004（115）・NR005（116）出土遺物実測図

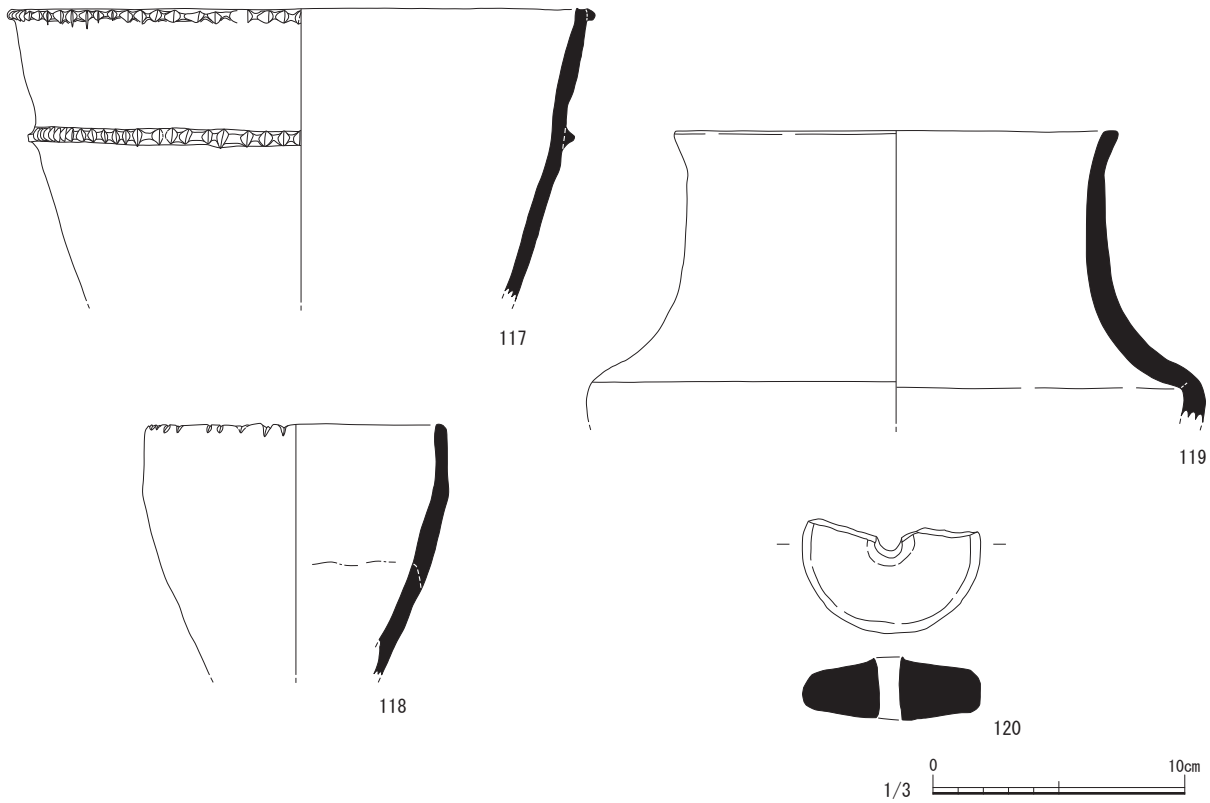


Fig.73　J-13Grid（117 ～ 120）出土遺物実測図

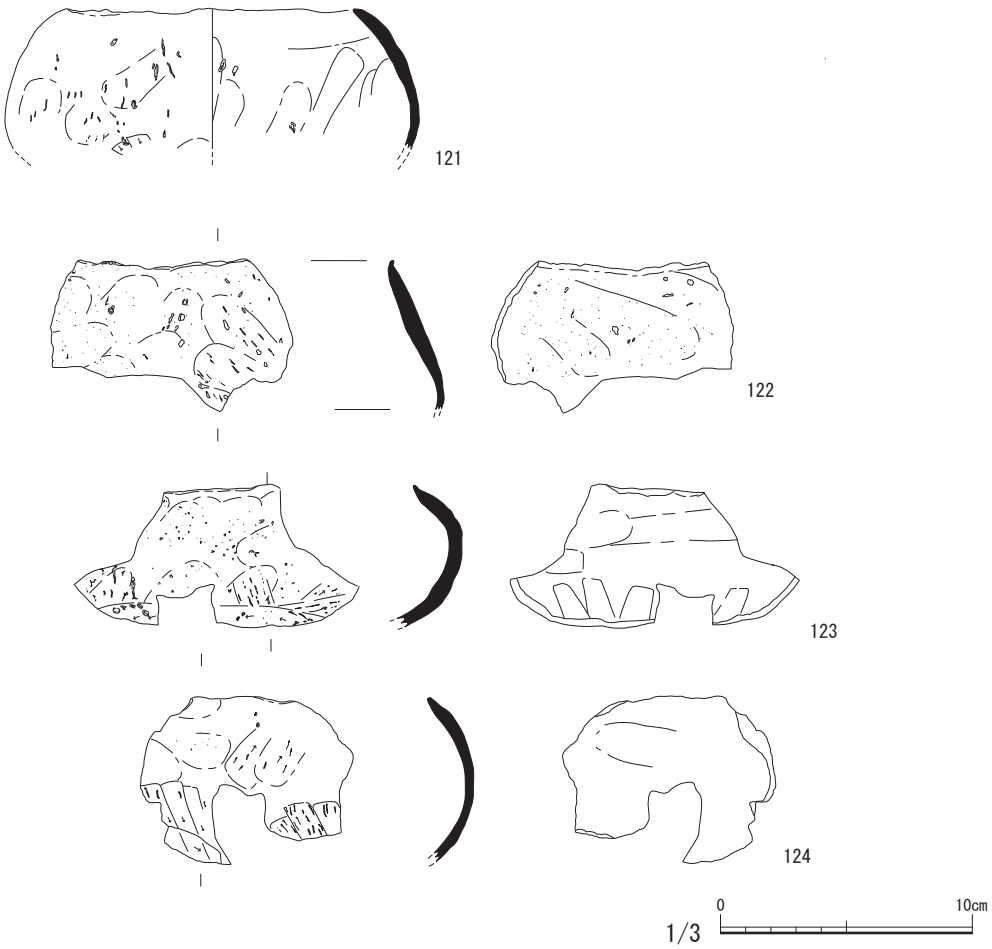


Fig.74　調査区内（121 ～ 124）出土遺物実測図

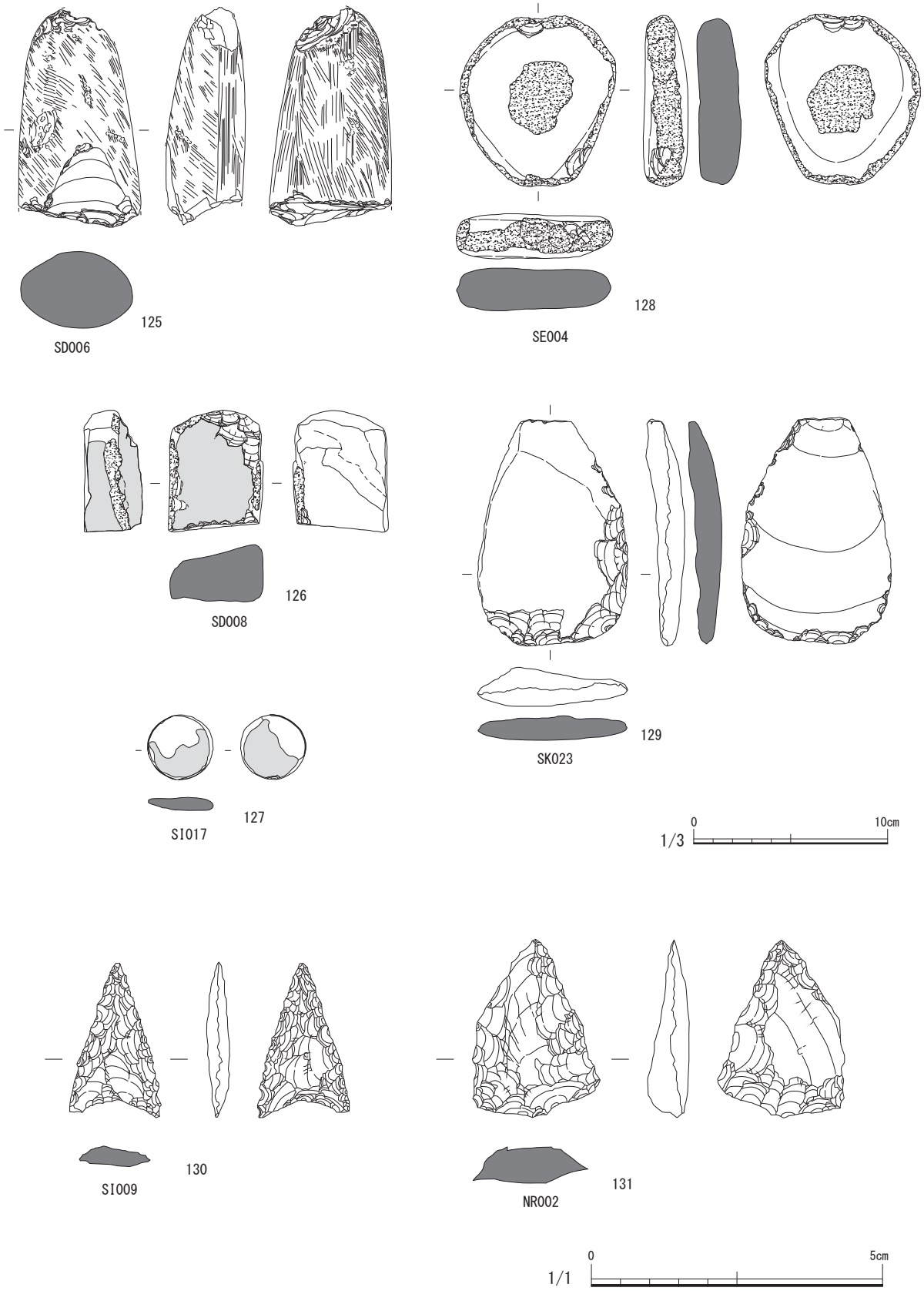


Fig.75　石器（125 ～ 131）実測図－①

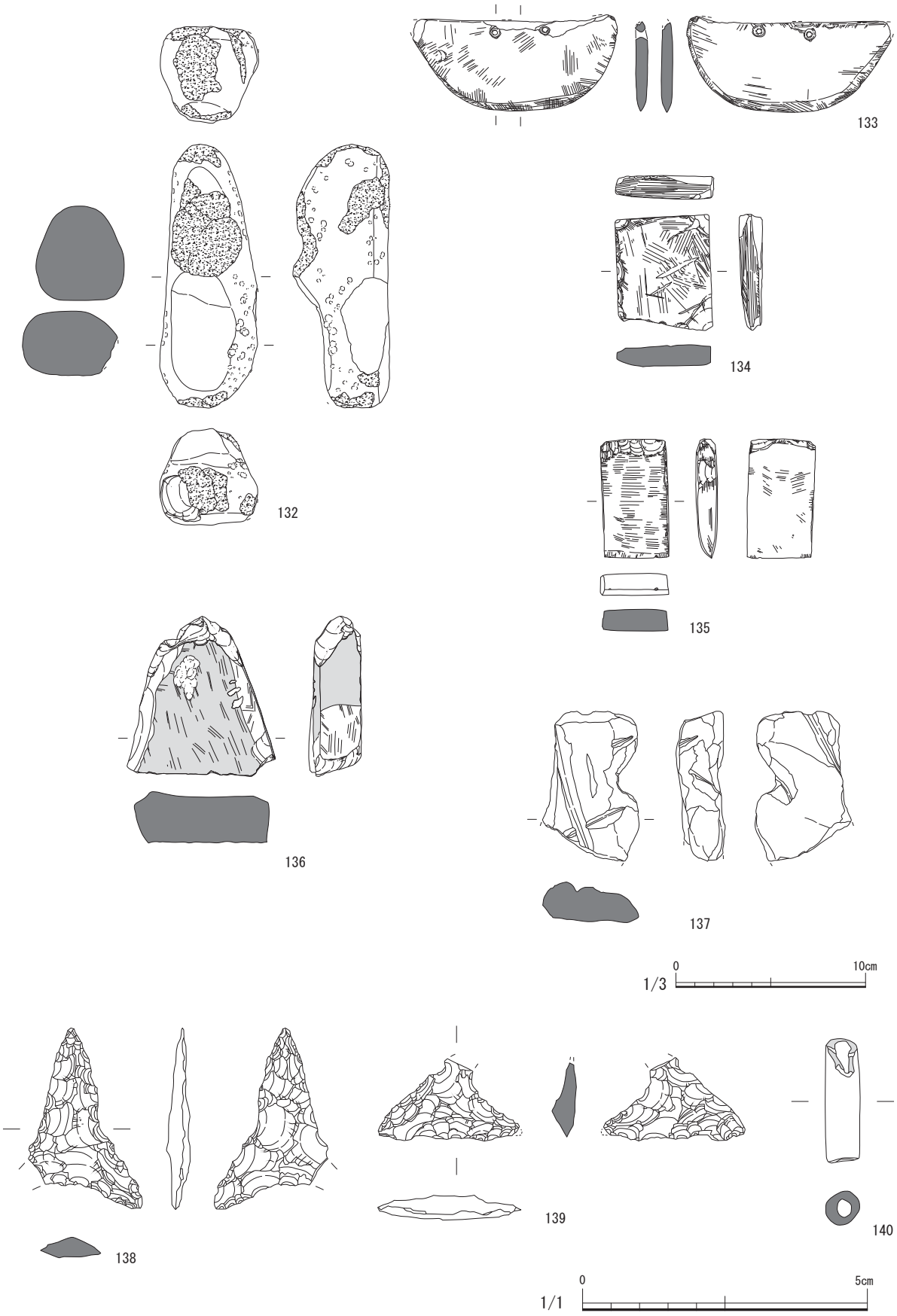


Fig.76　石器（132 ～ 140）実測図－②

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調	
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
1	51	30	SD001	須恵器	蓋	17.9	−	−	3.7	褐灰10YR5/1	灰褐7.5YR6/2
2			SD001	須恵器	蓋	(18.2)	−	−	3.5	灰白N7/	灰白2.5Y7/1
3			SD001	須恵器	杯	(16.4)	(10.4)	−	6.3	灰白N7/ 灰褐7.5YR4/2	灰N6/
4	52	31	SD008	弥生土器	高杯	(26.0)	(15.0)	−	17.1	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/4
5			SD008	弥生土器	脚付鉢	4.9	4.6	−	7.1	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR6/4
6	53		SE001	弥生土器	壺	−	8.1	27.0	28.8	浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3
7	54	−	SE002	弥生土器	台付甕	(19.8)	−	−	13.0	橙5YR6/6	橙5YR6/6
8			SE002	弥生土器	台付甕	−	(18.6)	−	15.5	浅黄橙10YR8/3	浅き橙10YR8/3
9		32	SE002	弥生土器	台付甕	(19.8)		(22.4)	20.5	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4
10			SE002	弥生土器	台付甕	(20.6)	12.8	(26.6)	43.0	にぶい橙5YR6/4 にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR5/3,5/4
11			SE002	弥生土器	台付甕	−	11.5	−	9.1	橙5YR6/8	灰褐7.5YR4/2
12			SE002	弥生土器	台付甕	−	13.0	−	7.6	橙5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4
13			SE002	弥生土器	台付甕	−	12.1	−	6.0	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8
14			SE002	弥生土器	台付甕	−	11.0	−	4.6	橙7.5YR7/6	橙5YR6/6
15	55	33	SE002	弥生土器	甕	−	3.1	24.2	26.8	にぶい橙7.5YR6/4	橙5YR6/6
16		33 36	SE002	弥生土器	甕		2.9	25	2.9	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5Y5/3
17			SE002	弥生土器	甕	−	6.1	−	11.1	にぶい黄橙10YR7/2	灰白2.5Y7/1
18		33 35	SE002	弥生土器	甕	16.2	6.3	18.7	19.2	橙5YR7/6	橙5YR6/6
19		33 36	SE002	弥生土器	壺	−	4.5	−	18.7	浅黄2.5Y7/3	灰黄2.5Y7/2
20		−	SE002	弥生土器	ー	−	4.6	−	8.8	橙7.5YR6/6	橙5YR6/6
21	56	34 35	SE002	弥生土器	高杯	30.9	16.1	−	23.8	橙2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6,6.5YR7/6
22		34	SE002	弥生土器	高杯	−	脚径 17.0	−	14.6	橙7.5YR6/6	橙5Y6/6
23			SE002	弥生土器	高杯	−	脚径 (16.2)	−	13.8	橙7.5YR6/6	褐灰10YR4/1 にぶい橙7.5YR6/4
24			SE002	弥生土器	高杯	−	脚径 (16.0)	−	14.9	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3	灰黄2.5Y7/2
25		34 35	SE002	弥生土器	鉢	15.0	−	−	11.0	にぶい橙7.5YR6/4 灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2
26		34	SE002	弥生土器	器台		(14.4)	−	12.2	にぶい黄橙10YR6/6	橙7.5YR6/6
27			SE002	弥生土器	器台	13.2	−	−	15.1	明赤褐2.5YR5/8	明赤褐2.5YR5/8
28		34 36	SE002	弥生土器	ジョッキ形土器	8.1	8.2	−	7.8	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2
29	57	31	SE004	土師器	甕	15.2	−	20.7	23.8	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4
30			SE004	土師器	甕	16.6	−	22.2	24.5	淡黄2.5Y8/3 にぶい黄橙10YR7/3	淡黄2.5Y8/3 黒N2/
31			SE004	土師器	高杯	16.2	−	−	6.2	橙7.5YR7/6	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4
32	58	37	SI 001	弥生土器	杯	3.5	−	−	2.8	橙5YR7/6	橙5YR6/6

Tab.4　2区出土遺物観察表－①

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
精良. 長石	横ナデ.　ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ. ナデ	－	－	つまみ径2.1cm 内面中央部指おさえ後ナデ	1
精良. 長石	横ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ. 指ナデ	－	－	輪状つまみ径5.0cm	2
精良	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	高台付	3
金雲母. 赤褐色粒	ナデ. ハケ目	ハケ目	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	脚部下部に黒斑あり	4
長石. 石英. 雲母	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	手捏土器、鉄分付着痕あり	5
雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ハケ目 ナデ	－	－	底部、平底。外面に黒斑あり	6
長石. 石英. 雲母 角閃石. 赤色酸化粒	ハケ目 ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	－	－	外器面一部にスス付着	7
石英. 角閃石 雲母. 赤色酸化粒	ナデ. ハケ目 ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	－	－	内、外器面一部にスス付着	8
角閃石. 雲母	タタキ. ハケ目 ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	口縁部歪	9
長石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目	ハケ目	外面胴部に黒斑あり	10
石英. 角閃石. 長石 雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目	－	－	(脚部)内面、脚部にスス付着	11
石英. 角閃石. 長石 雲母	ナデ	ナデ	－	－	(脚部)	12
石英. 長石. 雲母	ナデ	ナデ	－	－	(脚部)	13
石英. 長石. 雲母	ナデ	ナデ	－	－	(脚部)	14
石英. 長石	タタキ. ハケ目 ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ	ハケ目. ナデ	凸レンズ状底部	15
長石. 石英. 雲母 角閃石. 赤色酸化粒	ハケ目	ハケ目	－	－	凸レンズ状底部 胴部に打ち欠いた痕跡あり	16
石英. 角閃石. 長石 赤色酸化粒	ヘラ調整による ナデ	ヘラ調整による ナデ	－	－	凸レンズ状底部 内、外器面一部にスス付着	17
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	ハケ目	凸レンズ状底部。外面に黒斑あり	18
金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ	－	凸レンズ状底部	19
石英. 角閃石. 長石 雲母	ハケ目	ハケ目	－	－	凸レンズ状底部 底部近くの外面にスス付着	20
角閃石. 石英. 金雲母	ナデ　　ハケ目	ヘラ磨き. ナデ	ナデ. ヘラ削り ハケ目	ヘラ削り. ハケ目 指頭圧痕	2×3箇所の穿孔	21
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	(脚部)　穿孔3箇所 底部に黒斑あり	22
角閃石. 石英. 金雲母	ナデ. ハケ目	ナデ	－	－	(脚部)穿孔3箇所 外面にスス付着	23
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ヘラ削り ナデ	－	－	(脚部)　1/6残存の為不正確だが、 孔は3個。外面にスス付着	24
雲母	ハケ目. ヘラ削り、 ナデ	ハケ目. ナデ	－	工具痕 指頭圧痕	(丸底)外面に黒斑あり	25
長石. 石英. 雲母 角閃石. 赤色酸化粒	ハケ目後ナデ 刻み目	ハケ目. ヘラナデ	－	－		26
長石. 角閃石. 雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. 指ナデ	－	－	上半部のみ	27
長石. 石英. 赤褐色粒	ナデ. ハケ目	ハケ目. ナデ	ナデ	指ナデ. ナデ	外面に黒斑あり	28
金雲母. 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	指頭圧痕	布留系甕。外面にスス付着	29
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	布留系甕。外面胴部に黒斑あり 内面スス付着	30
角閃石. 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	(杯部)　内面に幅1.8cm前後の重 ね焼き痕あり	31
長石. 角閃石. 石英 赤褐色粒	指ナデ	指ナデ	－	－	手捏土器 内外面とも指頭圧痕あり	32

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量cm				色調	
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
33	58	37	SI 003	弥生土器	杯	5.7	2.6	−	2.6	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/4
34			SI014	弥生土器	鉢	9.3	2.8	−	4.6	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/3
35			SI 003	弥生土器	杯	11.6	−	−	5.2	にぶい黄橙10YR8/4 にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙10YR8/4 にぶい橙7.5YR7/4
36		−	SI 006	弥生土器	鉢	15.1	−	−	6.6	浅黄橙10YR8/3 にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2
37		37	SI 003	弥生土器	高杯	30.0	13.8	−	20.0	にぶい黄橙10YR7/3 灰黄褐10YR6/2	にぶい黄橙10YR7/3
38			SI 003	弥生土器	高杯	(19.6)	−	−	9.9	灰白10YR8/2	浅黄橙10YR8/3
39			SI 003	弥生土器	甕	(14.2)	(8.7)	(15.4)	13.3	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR7/3
40			SI 003	弥生土器	甕	(17.4)	−	−	14.4	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
41			SI 008	弥生土器	壺	12.4	−	(22.2)	12.7	にぶい黄橙10YR6/3	橙5YR6/6
42	59	38	SI 007	弥生土器	鉢	8.2	−	−	5.2	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4
43			SI 007	弥生土器	鉢	(14.6)	−	−	7.6	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
44		−	SI 007	弥生土器	高杯	(26.4)	−	−	10.7	浅黄橙10YR8/3 にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙7.5YR8/4
45			SI 007	弥生土器	高杯	−	17.5	−	7.7	にぶい橙7.5YR7/4	灰白10YR8/1
46		38	SI 007	弥生土器	壺	(5.1)	−	−	5.9	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
47		−	SI 007	弥生土器	壺	(12.0)	−	(15.4)	7.7	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3
48		38	SI 007	弥生土器	壺	11.6	−	−	10.0	にぶい黄橙 10YR7/2・7/3	にぶい黄橙10YR7/3
49			SI 007	弥生土器	甕	(22.2)	−	(26.4)	27.1	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR6/3
50			SI 007	弥生土器	甕	13.0	−	−	13.0	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR7/4
51			SI 007	弥生土器	壺	10.1	4.1	−	27.8	浅黄橙10YR8/3 灰黄褐10YR6/2	浅黄橙10YR8/3
52			SI 007	弥生土器	壺	12.4	−	−	17.3	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙7.5YR7/4
53	60	39	SI010	弥生土器	甕	20.3	−	(23.8)	20.4	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2
54			SI010	弥生土器	甕	(20.1)	−	(23.6)	24.5	褐灰10YR4/1	橙5YR6/6
55			SI010	弥生土器	甕	15.8	−	−	21.0	橙2.5YR6/6 にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
56			SI010	弥生土器	脚付鉢	(16.4)	(12.7)	−	13.6	灰白7.5YR8/1	灰白7.5YR8/1
57			SI010	弥生土器	ジョッキ形土器	(12.4)	14.1	−	15.2	橙2.5YR7/6	灰白10YR8/2
58	61	40	SI011	弥生土器	甕	17.4	12.6	22.4	34.4	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
59			SI011	弥生土器	高杯	24.0	17.4	−	22.5	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3
60	62	41	SI013	弥生土器	甕	18.3	8.6	18.9	35.8	灰白10YR8/2 浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4
61			SI013	弥生土器	甕	(15.6)	12.0	(20.3)	(38.8)	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄2.5Y7/2
62			SI013	弥生土器	甕	(15.4)	10.6	−	35.2	にぶい黄橙 10YR7/2、7/4	浅黄橙10YR8/4
63			SI013	弥生土器	高杯	18.8	(13.7)	−	11.3	橙5YR6/6 浅黄橙10YR8/3	橙5YR6/6
64	63	−	SI 016	土師器	杯	(12.8)	−	−	3.8	浅黄橙7.5YR8/3	灰白10YR8/1

Tab.5　2区出土遺物観察表－②

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石. 赤褐色粒	指ナデ	ナデ	－	－	手捏土器。底部に黒斑あり	33
砂粒. 角閃石. 雲母	ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	内面に籾殻の痕あり	34
角閃石. 長石	ハケ目、ナデ	指ナデ	－	－	（丸底）外面底に黒斑あり	35
金雲母. 石英. 角閃石	ナデ	ハケ目. ナデ	手持ちヘラ削り	－	外面にスス付着	36
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ ヘラ削り	脚部に穿孔4箇所 外面下部に黒斑あり	37
角閃石. 石英 茶褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ ヘラ削り	－	－		38
角閃石. 石英	ハケ目. ナデ	ナデ. 工具痕 ハケ目	手持ちヘラ削り	－	凸レンズ状底部。屈曲口縁鉢型土器。外面にスス付着	39
角閃石. 石英	タタキ. ハケ目 ヘラ削り. ナデ	ハケ目	－	－	外面に黒斑あり、スス付着 一部文様風ヘラ痕あり	40
雲母. 角閃石	ナデ	ナデ. 指頭圧痕	－	－	外面に黒斑あり	41
金雲母. 角閃石. 石英	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	小型丸底。外面に黒斑あり	42
金雲母. 長石. 角閃石	ハケ目. ナデ	ナデ. 工具痕	－	－	外面に黒斑あり	43
金雲母. 角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	（杯部）	44
雲母. 角閃石. 長石	ナデ. ハケ目	ナデ. ハケ目	－	ナデ. ハケ目 ヘラ削り	（脚部）3ケ所の穿孔あり	45
金雲母. 角閃石	ナデ	ナデ. 指頭圧痕	－	－	外面に黒斑あり	46
角閃石. 石英	ハケ目. ナデ	ハケ目 ヘラ削り. ナデ	－	－	外面に黒斑あり	47
角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	外面に黒斑あり	48
金雲母. 長石. 角閃石 石英	タタキ. ハケ目 ヘラ削り. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	外面に黒斑あり。スス付着	49
角閃石. 長石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	外面に黒斑あり	50
金雲母. 角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	凸レンズ状底部	51
金雲母. 角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	直口壺	52
角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ 指頭圧痕	－	－	外面に黒斑あり。内面にスス付着	53
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	タタキ. ハケ目 ナデ	ナデ. 指頭圧痕	―	―	脚付甕	54
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	脚付甕。外面に黒斑あり　熱による劣化著しい	55
雲母. 砂粒	ナデ	ナデ	ヘラ削り. ナデ	ヘラ削り. ナデ	脚部に穿孔あり	56
長石. 角閃石. 石英 金雲母. 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ		57
金雲母. 角閃石	タタキ. ハケ目 ヘラ削り. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. 」ナデ	外面にスス付着 脚台底縁に黒斑あり	58
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ ハケ目	脚部に2個×3組の穿孔あり。 外面に黒斑あり	59
長石. 角閃石	タタキ. ヘラ削り ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ	外面に黒斑あり。スス付着、磨耗の為、調整不明多い	60
金雲母. 角閃石	タタキ. ハケ目 ヘラ削り. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	外面胴部に黒斑あり	61
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	タタキ. ハケ目 ナデ	ハケ目. ナデ 指頭圧痕	ハケ目. ナデ	ナデ	外面に黒斑あり 内外面にスス付着	62
金雲母. 石英	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ	ナデ	穿孔3個あり。外面に黒斑あり	63
角閃石. 石英 茶褐色粒	ナデ	ナデ	手持ちヘラ削り	ナデ		64

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調	
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
65	63	42 43	SI017	土師器	杯	12.8	−	−	4.0	橙5YR6/6	明赤褐5YR5/6
66			SI017	土師器	杯	11.5	−	−	3.8	橙2.5YR6/8	明赤褐2.5YR5/8
67			SI017	土師器	杯	11.8	−	−	4.1	浅黄橙7.5YR8/4	橙5YR7/6
68			SI017	土師器	杯	12.7	−	−	4.3	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
69			SI017	土師器	甕	17.6	−	−	29.9	橙5YR6/5	橙5YR6/5
70			SI017	土師器	高杯	15.2	−	−	9.3以上	灰白2.5Y8/1	灰黄2.5Y8/3
71		42	SI017	須恵器	蓋杯(蓋)	(13.0)	−	−	4.3	黄灰2.5Y6/1	灰白2.5Y7/1
72			SI017	須恵器	蓋杯(蓋)	(12.8)	−	−	3.6	褐灰10YR6/1	褐灰10YR6/1
73			SI017	須恵器	蓋杯(蓋)	11.9	−	−	3.8	灰N6/	灰N6/
74			SI017	須恵器	蓋杯(身)	10.9	−	−	4.0	褐灰10YR6/1	灰白10YR7/1
75			SI017	須恵器	蓋杯(身)	9.9	−	−	4.1	灰白10YR7/1	にぶい黄橙10YR7/2
76		42 43	SI017	製塩土器	杯	(14.0)	−	−	6.9	明褐灰7.5YR7/1	灰白10YR8/2
77			SI017	製塩土器	杯	−	−	−	5.5	明褐灰7.5YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2
78			SI017	製塩土器	杯	−	−	−	3.5	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4
79	65	−	SI018	土師器	杯	(13.0)	−	−	4.9	褐灰10YR4/1 黒10YR2/1	褐灰10YR4/1
80			SI018	製塩土器	杯	−	−	−	4.7	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR7/3
81	64	44	SI019	土師器	甕	(6.8)	(2.8)	−	6.1	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR7/1
82			SI019	土師器	高杯	−	10.8	−	5.35	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい橙7.5YR7/4
83			SI019	土師器	高杯	−	9.0	−	5.4	橙5YR6/6	橙7.5YR6/6
84			SI019	製塩土器	杯	−	−	−	2.2	橙2.5YR6/6)	橙5YR6/6
87	66	45	SI023	土師器	杯	(12.8)	−	−	5.3	にぶい黄橙(10YR7/2	浅黄橙7.5YR8/3 にぶい黄橙10YR7/2
88			SI023	土師器	杯	11.9	−	−	5.3	橙7.5YR6/6 黄灰2.5Y6/1	灰黄褐10YR4/2 黄灰2.5Y7/2
89			SI023	土師器	杯	(12.8)	−	−	5.2	にぶい黄橙10YR7/3 灰 黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR6/3 灰黄2.5Y6/2
90			SI023	須恵器	杯	13.1	−	−	4.1	灰N7/	灰白N8/
91			SI024	土師器	杯	13.0	−	−	4.9	褐灰10YR4/1 黒2.5Y2/1	黒2.5Y2/1
92			SI024	土師器	壺	13.4	−	−	11.3	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい橙7.5YR6/4 にぶい黄橙10YR7/3
93			SI026	土師器	杯	13.3	−	−	4.8	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
94	67	46	SJ001	土師器	壺	(14.9)	6.3	−	18.3	にぶい橙7.5YR6/4 灰黄2.5Y7/2	浅黄2.5Y7/3
95			SJ001	弥生土器	ジョッキ形土器	(12.5)	13.7	−	15.3	灰白2.5Y8/1	灰白7.5YR8/1

Tab.6　2区出土遺物観察表－③

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
赤褐色粒	ナデ	ナデ	－	－		65
長石. 赤褐色粒	横ナデ. ヘラ磨き	横ナデ	手持ちヘラ削り	ナデ	須恵器杯身模倣。朱塗り後磨き	66
長石. 赤褐色粒	横ナデ. ヘラ磨き	横ナデ	手持ちヘラ削り	ナデ	須恵器杯身模倣。黒斑あり	67
長石	横ナデ. ヘラ磨き	横ナデ	手持ちヘラ削り	ナデ	須恵器杯身模倣。外面黒塗り	68
長石. 石英 赤色酸化粒	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	0	焼歪みがかなり見られる。外面は ハケで不規則になでた跡が残る。 下部スス付着	69
長石. 石英. 赤褐色粒	横ナデ. ハケ目	横ナデ	－	－	模倣高杯の杯部 透かし窓3ヶ所あり	70
長石	回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	－	－	ヘラ記号あり	71
長石	回転ヘラ削り 回転ナデ	ナデ	－	－	ヘラ記号あり	72
長石	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ	－	－	ヘラ記号あり	73
長石. 石英	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ	－	－		74
長石. 石英	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ	－	－		75
小石. 石英. 雲母 砂粒	ナデ. ヘラ削り	ナデ. 工具痕	－	－		76
砂粒. 角閃石. 雲母	ナデ. ヘラ削り	ナデ	－	－		77
長石. 角閃石	ナデ	ナデ. 指頭圧痕	－	－		78
雲母	ヘラ削り. ナデ ヘラ磨き	ナデ. ヘラ磨き	－	－	内外面共研磨 須恵器模倣杯身の可能性あり	79
砂粒. 角閃石. 雲母	ナデ	ナデ	－	－		80
長石. 赤褐色粒	ヘラ削り後ナデ	ヘラ削り後ナデ	ナデ	指頭圧痕		81
長石. 角閃石. 石英 雲母. 赤色酸化粒	ヘラ削り後ナデ ハケ目	ヘラ削り. ナデ	－	－	（脚部） 高杯の脚部を鞴の羽口に 転用	82
長石. 角閃石. 雲母 赤色酸化粒	ヘラ削り後ナデ　ハ ケ目	ヘラ削り後ナデ ハケ目	－	－	（脚部） 高杯の脚部を鞴の羽口に 転用	83
砂粒. 角閃石. 小石 赤色酸化粒	ナデ. 工具痕	ナデ. 工具痕	－	－	脚部の粘土継ぎ痕アリ	84
雲母. 角閃石 茶褐色粒	ヘラ削り. ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き ナデ(磨耗)	－	－	摩耗、剥離が著しい	87
角閃石. 石英. 雲母	ヘラ削り. ナデ 磨き(摩耗)	ヘラ磨き	－	－		88
赤褐色粒	ヘラ削り. ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き(磨耗)	－	－	外面の口縁一部に黒斑あり。内面 スス付着	89
角閃石. 石英	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ(磨耗)	－	－		90
石英. 雲母	ヘラ削り. ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き. ナデ	－	－	黒色土器	91
金雲母. 角閃石 赤褐色粒	ヘラ削り. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－		92
雲母. 赤褐色粒	ヘラ削り. ナデ	ナデ	－	－	外面剥離	93
金雲母. 角閃石 茶褐色粒	ハケ目. ナデ 横ナデ	ハケ目. 横ナデ	ナデ	ナデ	凸レンズ状底部。外面に黒斑あ り。 口縁楕円の為、復元は器形 重視で任意	94
長石. 石英. 雲母	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	ハケ目	ナデ	外面一部黒斑あり	95

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量cm				色調	
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
96	68	–	SK002	弥生土器	高杯	(28.0)	–	–	3.8	浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4, 7.5YR8/6
97			SK003	弥生土器	鉢	13.1	3.3	–	7.5	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4
98		47	SK004	弥生土器	壺	14.3	–	–	15.1	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
99			SK004	土師器	甕	16.9	–	–	18.8	浅黄橙7.5YR8/3	橙5YR7/6
100			SK004	弥生土器	台付甕		12.2	–	9.2	にぶい橙7.5YR6/4 灰黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR6/4
101			SK004	弥生土器	台付甕		–	–	6.3	にぶい黄橙10YR6/3	灰黄2.5Y6/2
102	69	48	SK005	弥生土器	甕	17.9	–	17.8	22.6	橙5YR6/6 灰黄褐10YR5/2	橙5YR6/6
103			SK005	弥生土器	甕	(15.2)	–	–	12.7	にぶい黄橙10YR7/3	灰白10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/4
104			SK005	弥生土器	脚台鉢	8.6	(脚) 10.2	–	8.2	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4
105			SK005	弥生土器	鉢	(15.6)	–	(16.8)	10.9	にぶい橙5YR6/4 にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/3
106	70		SK008	土師器	高杯	(13.8)	(10.0)	–	9.9	浅黄橙7.5YR8/6 灰黄2.5Y7/2	橙7.5YR7/6
107			SK008	土師器	高杯	–	(9.0)	–	5.5	にぶい橙7.5YR7/3 赤彩:明赤褐2.5YR5/8	にぶい橙7.5YR7/4 灰黄2.5Y7/2
108			SK008	土師器	高杯	–	12.8	–	10.0	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/3 にぶい黄橙10YR7/2
109			SK008	土師器	甕	–	–	–	12.1	にぶい褐7.5YR6/3	にぶい橙5YR6/4
110		49	SK010	土師器	壺	10.4	–	–	8.8	橙7.5YR7/6 にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4
111			SK011	土師器	甕	(27.8)	–	(29.8)	16.5	暗灰黄2.5Y5/2 にぶい黄橙10YR7/4	黒褐10YR3/1
112		49	SK013	土師器	甕	(13.2)	–	(16.2)	17.1	暗灰黄2.5Y5/2	黄灰2.5Y4/1 にぶい黄2.5Y6/3
113	71		ST001	土師器	甕棺	–	10.8	(50.6)	36.8	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3
114	72	30	NR001	須恵器	蓋	14.8	–	–	2.4	灰N5/ にぶい赤褐5YR4/3	褐灰10YR5/1 灰褐7.5YR5/2
115		49	NR004	土師器	甕	16.5	–	–	24.1	浅黄橙 7.5YR8/4,10YR8/3	浅黄橙7.5YR8/4 橙7.5YR7/6
116		30	NR005	須恵器	陶権	幅 3.0	重さ 23.3g	–	厚み 2.8以上	橙7.5YR7/6 灰N7/	–
117	73	49	J-13	弥生土器	深鉢	(23.4)	–	–	11.6	灰白10YR8/2	にぶい黄橙10YR7/3
118			J-13	弥生土器	深鉢	(11.8)	–	–	9.9	にぶい黄橙10YR7/4	浅黄橙10YR8/3
119			J-13	弥生土器	壺	(17.7)	–	–	11.6	浅黄橙10YR8/4	橙7.5YR6/6
120			J-13	弥生土器	紡錘車	全幅 7.1	孔径 0.8	–	器厚 2.5	にぶい黄橙10YR7/3	–
121	74	50		製塩土器	杯	(11.4)	–	–	5.6	灰白10YR8/1	灰白10YR8/2
122				製塩土器	杯	–	–	–	5.9	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR7/8
123				製塩土器	杯	–	–	–	5.6	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3
124				製塩土器	杯	–	–	–	6.5	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR7/8

Tab.7　2区出土遺物観察表－④

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
金雲母. 角閃石 赤褐色粒	ナデ	ナデ	－	－	(杯部)	96
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ヘラ削り後ナデ	指頭圧痕	内外面に黒斑あり	97
角閃石. 石英	ハケ目. ナデ 刺突文	ハケ目. ナデ 指頭圧痕	－	－		98
角閃石. 石英. 金雲母	タタキ. ハケ目 ナデ	ナデ. ハケ目 ヘラケズリ	－	－	外面に黒斑あり。スス付着	99
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ 指頭圧痕	脚下部にスス付着	100
雲母. 角閃石. 石英 茶褐色粒	ハケ目. ナデ	ナデ	－	－	脚下部にスス付着	101
角閃石. 石英. 雲母	ハケ目. タタキ 横ナデ	ハケ目. ナデ 横ナデ	－	－	脚台付甕 外面胴部と口縁に黒斑あり	102
石英. 金雲母	タタキ後ハケ目 ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	脚台付甕。外面に黒斑あり	103
角閃石. 石英. 金雲母	ヘラ削り後ナデ	ナデ ヘラ磨き暗文	ナデ	ナデ	脚台付鉢。 脚部に2個×3組の穿孔あり。 外面に黒斑あり	104
金雲母. 角閃石. 石英 赤褐色粒	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ 指頭圧痕	－	－	外面に黒斑あり	105
赤褐色粒. 雲母	ヘラ. ナデ	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ ハケ目	ヘラ削り. ナデ	黒斑有り 赤彩痕:明赤褐(2.5YR5/8) あり	106
雲母. 赤褐色粒	ヘラ削り. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	(脚部) 外内面に赤彩:明赤褐 (2.5YR5/8) あり	107
石英. 長石. 茶褐色粒	ヘラ削り. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	(脚部)	108
金雲母. 角閃石	ハケ目. ナデ	ヘラ削り	－	－	甕もしくは甑の可能性あり	109
角閃石. 石英. 雲母	ヘラ削り. 横ナデ ハケ目. ナデ	ハケ目. 横ナデ ナデ	－	－	小型丸底	110
角閃石. 石英	ハケ目. ナデ	ヘラ削り. ナデ	－	－	外面口縁～内面全体にかけて黒斑あり外面スス付着	111
角閃石. 石英. 金雲母	ハケ目. ナデ	ヘラ削り ハケ目. ナデ		－	外面底に黒斑あり 外内面スス付着。	112
小石. 長石. 石英 角閃石	ハケ目. ナデ	ハケ目. ナデ	ナデ	ナデ	胴部に2条の突帯あり	113
精良	回転ヘラ削り 横ナデ	ナデ	－	－	輪状つまみ径4.4cm	114
角閃石. 石英 赤褐色粒	タタキ. ナデ	ハケ目. ナデ	－	－	外面に黒斑。スス付着	115
長石. 雲母	ヘラ	－	－	－	竿秤にかけるおもり 上部下げる部分で欠損	116
長石. 雲母. 石英 角閃石. 赤色粒	ナデ. 刻み目突帯	ナデ	－	－	刻目突帯文土器	117
長石. 石英. 雲母 赤色粒	ナデ. 刻み目	ナデ	－	－	刻目土器	118
長石. 雲母. 石英 角閃石. 赤色粒	ナデ. ヘラ磨き	ナデ. ヘラ磨き	－	－		119
長石. 石英. 雲母 赤褐色粒	－	－	－	－		120
小石. 砂粒. 石英 角閃石	ナデ. ヘラ削り	横ナデ. ナデ	－	－		121
小石. 砂粒	ナデ	ナデ	－	－		122
砂粒. 角閃石. 小石 赤色酸化粒	ナデ. ヘラ削り	ナデ. 工具痕	－	－		123
砂粒. 雲母	ナデ. ヘラ削り	ナデ	－	－		124

Tab.8　２区出土遺物（石器）観察表

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	グリッド	法量 全長(cm)	法量 幅(cm)	法量 孔径(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	色調	石材	備考	遺物番号
86	64	－	SI019	磨製石器	砥石	№6		17.0	13.5	－	11.3	3,150	灰白2.5Y8/2	不明	1/2程度残存	86
125	75	50	SD006	磨製石器	石斧			11.2	6.3	－	4.1	400	灰白N5/	頁岩	1/2程度残存	125
126			SD008	磨製石器	磨石			6.3	4.8	－	3.0	135	灰白7.5Y8/1	流紋岩	完形	126
127			SI017	磨製石器	石製品			3.3	3.4	－	0.7	6.1	灰7.5Y4/1	安山岩	完形	127
128			SE004	打製石器	石皿			8.9	8.0	－	2.3	260	灰白N6/	安山岩	完形	128
129			SK023	打製石器	石斧			11.7	7.7	－	2.0	159.4	灰白2.5Y7/1	安山岩	完形	129
130			SI009	打製石器	石鏃	埋土中		2.7	1.6	－	0.4	1.2	黄灰2.5Y4/1	安山岩	ほぼ完形	130
131			NR002	打製石器	石鏃			3.1	2.2	－	0.7	3.6	灰白N6/	安山岩	完形	131
132	76		－	磨製石器	敲石		H-14	13.9	5.2	－	5.1	430	褐灰10YR6/1	安山岩	ほぼ完形	132
133				磨製石器	石庖丁		R-22	5.1	10.8	－	0.6	56.6	灰10Y6/1	滑石	ほぼ完形	133
134				磨製石器	砥石		P-20	6.1	4.2	－	1.2	55.9	灰白5Y7/1	頁岩	完形	134
135			－	磨製石器	柱状片刃石斧		K-13	6.3	3.6	－	1.2	54.1	灰白7.5Y7/1	シルト質頁岩	完形	135
136			粘土採掘抗	磨製石器	砥石			8.4	7.8	－	2.8	230	灰白5Y7/2	砂岩	完形	136
137			－	磨製石器	砥石		I-12	7.9	5.1	－	2.6	113	浅黄2.5Y7/3	砂岩	ほぼ完形	137
138			－	打製石器	石鏃		K-13	3.2	2.0	－	0.4	1.3	灰白N6/	安山岩	左脚部欠損	138
139			－	打製石器	石匙		I-12	1.5	2.5	－	0.4	0.9	黄灰2.5Y6/1	安山岩	ほぼ完形	139
140		－		磨製石器	管玉		S-23	2.2	1.1	－	0.6	1.2	オリーブ灰2.5GY5/1	蛇紋岩	完形	140

Tab.9　２区出土遺物（鉄器）観察表

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	備考
85	64	44	SI019	鉄滓	11.5	10.3	長径×短径(厚さ5.4mm)
141	未掲載	51	SI002	袋状鉄斧	7.0	3.7	
142			NR002	鉄鎌	3.8	2.7	
143			K-16	袋状鉄斧	5.2	3.8	(基部)
144			K-16	鉄鎌	8.3	2.4	
145			O-15	袋状鉄斧	5.4	3.5	
146			S-22	鋤	8.3	2	

（1）包含層出土遺物

層位として確認した資料ではないが、今回の表土剥ぎ後の遺構検出の際に遺構外から出土し土圧により個体が潰れた状態で出土した遺物。

甕形土器（117）口縁口唇部に接し、突帯を施し刻み目を入れる。突帯は 4.5cm の幅を置き、体部にも一条巡る。刻み目の単位は口縁部より大きい。柳町Ⅲ期に相当。甕形土器（118）口唇部に小さく直接刻み目を施す。体部外器面に貝殻条痕を施す。壺形土器（119）口縁口唇部下に赤彩が残る。本来は外器面全面と内器面の頸部にまで赤彩が施され、磨きを施していたものと見られる。柳町Ⅱ期に相当。

（2）遺構出土遺物

【弥生時代後期後半から終末】

溝 SD008（Fig.49.52）高杯（4）内外器面ともに刷毛目調整を施す。口縁は強く外反し開き、脚部は短く端部近くで開く。脚付鉢（5）手捏ねによる成形土器。内外器面に指頭圧痕が多数残る。

井戸 SE001（Fig.41.53）壺（6）口縁は口縁中位で欠損、体部と口縁部の境に二条の突帯を有する。体部は丸みを帯び底部は平底。

井戸 SE002（Fig.42.54.55.56）脚台付甕（9.10）「く」の字口縁で体部は長胴型を呈し、（10）は体部に丸みを帯びる脚台付甕。甕（18）「く」の字口縁を呈する。底部がレンズ状を呈する。

壺（19）口縁は頸部中位で欠損し形状は不明。体部は最大径部が上位にあり、底部はレンズ状底部を呈する。高杯（21.22.23.24）、（21）は杯部に緩やかに外反する二重口縁を有する。脚部は長く筒状で内部を削る。底部では横位の刷毛目を施す。穿孔あり。ジョッキ形土器（28）は壺（19）と伴に、井戸最下部から出土。把手に刷毛目を残す。

竪穴建物 SI003（Fig.9.58）甕（39）底部がレンズ状を呈する。高杯（38）柳町で言う、有稜高杯 B 類に相当する。甕（40）長胴形の甕で、柳町 A 類の甕に相当する。

竪穴建物 SI007（Fig.13.59）鉢（43）単純口縁で浅鉢と深鉢の中位に位置する。高杯（44.45）直線的に伸び、口縁部が二重を呈する。甕（49.50）「く」の字口縁で体部中位に最大径部を有する。（49）は脚台が付く可能性がある。（50）は小型甕に分類できよう。壺（51.52）直立もしくはやや外に開く口縁を呈する。口縁端部で内面に稜を有する。

竪穴建物 SI008（Fig.14.58）壺（41）短く屈曲し二重口縁を呈する。山陰系二重口縁甕に相当する。

竪穴建物 SI010（Fig.16.60）甕（53.54.55）「く」の字口縁でやや丸みを帯びる体部を有する。柳町 B 類に相当する。（55）は中型の甕。脚付鉢（56）脚部に穿孔を施す。ジョッキ形土器（57）把手貼り付け部付近と把手外面に刷毛目が残る。底部には成形痕が明瞭に残る。

竪穴建物 SI011（Fig.17.61）甕（58）脚台付長胴甕で後期に近い土器と見られる。高杯（59）二重口縁の杯部を有する。口縁部に大きく歪みが生じている。成形時もしくは焼成時のものか。

竪穴建物 SI013（Fig.18.62）大型の脚台付甕（60.61.62）「く」の字口縁が頸部付近で緩くなり、（61.62）は頸部で明確な稜が残らないくらいに間延びする。うてな B 期で報告される甕に酷似する。高杯（63）脚部に穿孔を施す。

【古墳時代初頭から後期】

井戸 SE004（Fig.44.57）甕（29.30）両器種とも体部は球体に近い位にまで丸く、口縁は外反しながら口唇外端部でわずかに稜をなす。外器面ヘラ削りは縦方向を中心に下部に行くに従い雑となる。外器面全面に刷毛目調整を施し、内面ヘラ削りと底部に指頭圧痕を残す。口縁は、（29）は直線的であるが、（30）はやや内湾ぎみに開く。両方とも口縁端部外器面で稜をなす。典型的な布留系甕である。高杯（31）無蓋高杯の杯部。直線的に外反し、端部はやや尖り気味に治める。

竪穴建物 SI017（Fig.20.63）須恵器模倣杯（66 ～ 68）杯身を模倣し、（66）は赤彩後磨き、（67）は外器面底部に黒斑を有する。（68）は拡大スコープを利用した観察で有機質が固着した状態を観察[9]することができたため、自然科学分析を実施している（P.124 ～ P.126 参照）。須恵器蓋杯の蓋（71 ～ 73）横ナデによる成形痕を明瞭に残す。肩部には稜が残らず、丸みを帯びる。（72）の口唇部内面にわずかだが稜を有する。天井部に対になるように対向する位置にヘラ記号が残る。須恵器蓋杯の身（74.75）立ち上がりは内傾し、受部は短く上を向く。製塩土器（76 ～ 78）、（77）は椀部。内湾する口縁の外口唇部には稜を有する。内器面には指ナデ痕を残す。（78）は椀底部。脚部は欠損する。外器面はヘラ状の工具により削りが施される。内器面は指ナデにより滑らかな仕上がりを施す。（76）は椀部。全体の 2/3 の部位が出土している。口縁は口唇部でやや尖り、内器面にわずかに稜を有する。全体には指ナデによる調整が明瞭に残り、底部にヘラ状の工具を用いての削り調整が残る。椀部の全体が平たく、丸みを帯び、底部には脚部を接合した痕跡を有する。

竪穴建物 SI019（Fig.22.64）遺構中央より炉底滓（85）が出土している。茶色に着色した範囲の鉄分が多い。底部は炉の形状を明瞭に残す。高杯（82.83）高杯脚部。脚部のみの出土で、２点とも高温にさらされた状況が窺え、先端部が薄く欠落する。基部に向かい変色している。柳町 C 類に近い器形を呈する。製塩土器（84）外底面にはヘラ状の工具により削り調整が施され、中央に脚部が欠落した痕跡を残す。砥石（86）リソイダイト（通称：天草陶石）を用いている。３面の利用面があり、メインとなる面以外は刃部を研ぐ際に用いた溝状の擦痕が残る。

竪穴建物 SI023（Fig.24.66）土師器杯（87 ～ 89）88 は口縁口唇部でわずかに屈曲し垂直に立ち上がる。89 は外器面口唇部下に横方向に磨き調整、底部に削り調整を施す。須恵器杯身（90）立ち上がりは垂直に立ち、受けは水平に短く伸びる。全体に杯部は浅い。

竪穴建物 SI024（Fig.24.66）土師器杯（91）内外面ともに細磨き調整を施す。外器面底部は、手持ちヘラ削りケズリ調整。土師器壺（92）短く外反する口縁は口唇部内面で丸みを帯び僅かに稜をなす。体部は緩く丸みを帯び、長胴をなす。

土坑 SK003（Fig.27.68）鉢（97）底部がレンズ状の底部を呈する。

土坑 SK004（Fig.28.68）壺（98）口縁は直立し、わずかに外反する。内器面にわずかに指頭圧痕を残す。甕（99）「く」の字口縁を呈するが、頸部での締まりがなく最大径部を胴部中位に置くことから、やや間延びした感を与える器形を呈する。口唇部外面では端部が下がっており、稜を有する。

【古代（平安時代）】

溝 SD001（Fig.48.51）須恵器蓋（1.2）1 は天井中央に擬宝珠形の摘みを貼り付ける。2 は輪状摘みを貼り付け天井部がやや丸みを帯びる。熊本県北部、荒尾産。高台付杯（3）底部屈曲部よりわずかに内に入った位置に高台が張り付く。

自然流路 NR001（Fig.48.72）須恵器蓋（114）前出の 2 で報告した器種と同形体であるが法量の違いが見られる。また、輪状の摘みの断面計にもわずかな違いが見える。

9　熊本県立装飾古墳館学芸課 池田朋生参事に依頼し観察した結果判明。

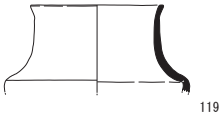
新玉名駅から調査区方面

第５章　調査の成果

１　弥生時代

（１）前期

この時期の土器は、当遺跡から南に位置し、報告書が刊行されている「柳町遺跡Ⅰ」「柳町遺跡Ⅱ」で、自然流路等からまとまった数量が出土し詳細に分析が加えられているため、そこでの分類とする。出土している刻目文土器は２点である。117 は土器表面に突帯を貼り巡らしその頂部に刻目を施す「刻目突帯文土器」と呼称されるものである。体部が下位にいくに従いすぼまることから「柳町Ⅰ」（突帯文土器～弥生前期土器編年表 - 甕 -」に示される、Ⅲ期に相当する遺物と判断される。また、119 に示す土器は口縁口唇部に直接刻目を施すもので刻目文土器である。また、同時に壺も出土しており胴部と口縁径の比率、口唇部で端部付近でわずかに反りが強くなる等の特徴から前期中葉頃のものとみることができる。



（２）後期中葉から後葉　～　甕　～

井戸 SE002 出土資料、竪穴建物 SI007、SI011 出土資料と良好な一括資料が出土している。口縁「く」字状で体部が長胴でやや丸みを帯び、脚台を有する台付甕で、熊本県北部域で言ういわゆる「野辺田式土器」と呼ばれる弥生後期後葉段階とする土器相の指標となった土器である。

本遺跡内では、脚台まですべて残る資料は少ないが、おおよそ口縁から胴部までの形状と器面調整とで判断し分類した。この中でも古段階とする資料は、井戸 SE002 で出土している（10）、竪穴建物 SI007 の（49）、竪穴建物 SI010 の（53.54）とした。器面調整が内外器面ともハケ目のみで仕上げられ、内器面にわずかに指頭圧痕を残す。その後、竪穴建物 SI011 で器面調整に横位の叩きを有する台付甕が出現する。しかしこの段階ではまだ、内器面に明瞭なハケ目調整を残す（58）。当地域と土器形式が直接結びつくものではないが、畿内で弥生時代を通した土器形式のうち、弥生後期中葉以降に盛行する「第Ⅴ様式甕」の調整技法が全国的な流れの中で当地域にももたらされ、在地系土器に用いられたと考える。その次の段階として、竪穴建物 SI013 にいたって、器形自体に変化が生じ始め、長胴だが胴部に丸みを帯びず、直線的な胴部を有する土器が出現する（60.61.62）。本格的に叩き痕を残し、内器面のハケ目調整は粗雑化していく。

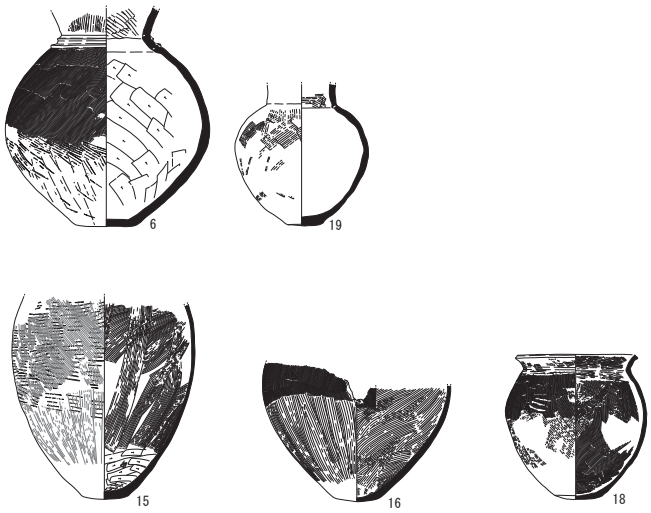
凸レンズ状底部を有する土器　～　甕・壺　～

本遺跡で出土する壺・甕類の中には先にあげた台付甕に混じり、底部が平底または凸レンズ状底部を有するものも出土している。下記にはその資料を提示している。

土器底部の形態変化の中に、後期段階で平底から丸底への変化が見られ、その中間に凸レンズ状底部を有するものが見られることは周知のことである。

北部九州でこの変化は明瞭に見られ、常松[1]が土器相をⅠ～Ⅵに分類し、Ⅱ式（弥生後期中葉）からⅢ式（弥生後期後葉）にその変化点をおき、それぞれに年代を与えている。

この変化を熊本県内特有の台付甕と共伴する凸レンズ底出現の時期と比べてみてもおおよその時期は当てはまろう。このことから、当遺跡の弥生後期の資料を見る限り、集落としての始まりを後期中葉頃に求めることができる。



埋納遺構出土遺物（埋納 SJ001 出土資料）

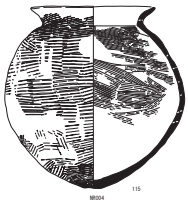
本資料は、柱穴状遺構で出土したジョッキ形土器（95）とその上部に置かれていた小型甕（94）との２点を指す。（Fig.45 出土状況参照）

ジョッキ形土器は、熊本県内の弥生後期の遺跡から一般的に出土する資料である。上部に横倒しで出土した小型甕が、井戸 SE002 出土の小型甕と類似し、凸レンズ底を呈していることから、後期中葉頃の時期と考えられる。小型甕とジョッキ形土器の置かれていた本来の意味は窺い知ることはできないが、柱穴状遺構の底にジョッキ形土器が水平に置かれていたことから一般的に考え、祭祀的な意味を有する遺構であると考える。

２　古墳時代

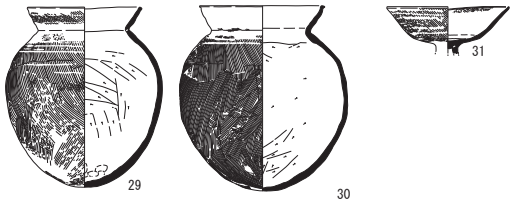
（１）庄内系土師器甕について（NR004 出土遺物）

近世の自然流路横に設置したトレンチからの出土遺物。トレンチが近世自然流路と切り合ったため遺構を把握できなかったが、ほぼ完形の遺物であることから、遺構があった可能性が高い。ここで紹介する土器は、本遺跡で出土するほかの土師器とは一見し胎土、焼成に明らかに違いの見られる資料である。外器面に叩き痕を明瞭に残し、器形は胴部中位で最大径を有し、球体を呈する。わずかに残る平底は底部が極小化し、一見すると尖底もしくは丸底状に見える。内器面は上半部を中心にハケ調整を受ける。口縁は短く外反する。



（２）布留系土師器甕・高杯について（井戸 SE004 出土資料）

井戸から出土した資料。体部外器面全面にハケ調整、内器面はヘラ削りをおこない底部付近に指頭圧痕を残す。外器面肩部に丁寧な横ハケ調整を施す。口縁はやや内湾ぎみに立ち上がり、体部は球体をなす。同時に高杯が出土する。高杯は口縁部径と底面の径の差が大きく、底部が平底に近い。底部と体部との境では僅かに屈曲し稜線を残す。外器面にはハケ調整を施す。

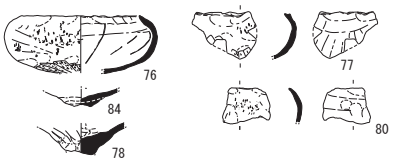


1　常松幹雄「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会 1991

（３）製塩土器について（竪穴建物 SI017、SI018、SI019 出土資料）

最初に、ここで示す製塩土器とは、広く天草諸島から宇土半島沿岸部の有明海沿岸地域で見られる広口の椀形で脚部が付属する「天草式製塩土器」のことを指す。（以下、「製塩土器」と言う。）

製塩土器の分類は、石川遺跡（2002）[1]第Ⅳ章４で編著者の中原氏により目視による胎土の違いにより分類されているのでそれにならうこととする。



製塩土器胎土中の砂粒が少ないものＡ類（代表遺跡は天草下島、五和町沖ノ原遺跡５世紀後半～６世紀中頃）、角がない砂粒が入るＢ類（代表遺跡は宇土半島の三角町大田尾製塩遺跡、６世紀後半から７世紀前半）の２類に大別され、その中でさらに砂粒の多寡により個体差を見出されている。

当遺跡で出土した製塩土器は、竪穴建物 SI017（76 ～ 78）、SI018（80）、SI019（84）で、須恵器、土師器を含む年代を決定するに有効な一括資料とともに出土している。さらに、Grid で取り上げた細片まで含めると多量の製塩土器が出土している。（PL.50）

以下、製塩土器が出土した遺構ごとに共伴資料と遺構の性格について記する。

①　竪穴建物 SI017 出土遺物について

竪穴建物 SI017　遺構内からは土師器壺（69）、杯（65）、須恵器模倣杯（66 ～ 68）、須恵器蓋杯（71 ～ 73）、杯身（74.75）、高杯（70）、製塩土器（76 ～ 78）、獣骨、炭化米が出土している。須恵器は、器形は天井部と体部との境が明瞭でなく丸みを帯び始め、境に沈線を意識するかのように横ナデが細かくなり、口縁部では口唇部内面に段を持つ（71.72）。杯身は立ち上がりがやや内傾し口唇部では丸みを帯び始めている（75）。このことから、須恵器蓋杯、杯身を陶邑編年を元にあてはめると、Ⅱ型式第４～５段階、TK43 ～ TK209 期相当と見られ、６世紀後半と想定した。

本遺構出土の製塩土器としては、椀部の 2/3 が残り直径が復元値で約 20cm を測るもの（76）を始め、口縁端部に稜を有するもの（77）、脚部は出土していないが、脚部との接合面であった底部（78）が出土している。遺構掘削中に出土した細片まで含めると、胎土の違いから、おおよそ４ないし５個体の製塩土器が出土している。

両遺構から出土した製塩土器は、削り、ナデにより砂粒が図示できるほど、多くの角の取れた小石と砂粒を胎土中に含むなど、Ｂ類に分類された資料が多くを占める（76.77）。しかし、椀底部のみで出土した資料には目立った砂粒は認められず、きめ細かな胎土で成形され、別個体資料と考えられる。単純に、基底部と椀体部付近での素材の違いと考えることも想定されるが、おそらくは当初から違う土を用いた可能性が高い。こちらの胎土は石川遺跡分類ではＡ類に近い胎土を示す（78）。

同時に出土した共伴資料と認められる「獣骨」、「炭化米」、「須恵器模倣杯（黒）」の３つについては、遺物の特殊性を考慮し、理解を深めるために自然科学分析を実施した。分析結果は附編で結果を掲載しているため参照されたい。

②竪穴建物 SI018 出土遺物について

本遺構から出土している製塩土器としては、椀部口縁を１点出土している。体部は丸みを帯び、内器面は丁寧な横ナデでわずかに指頭圧痕を残し、外器面は荒い削りまたは横ナデを施す。胎土はきめ細かく砂粒の引きずりなどはない。石川遺跡分類ではＡ類に近い胎土を示す（80）。

③竪穴建物 SI019 出土遺物について

一辺が２m 四方の小型竪穴建物で、四隅に柱穴を有する。その中心部付近から製塩土器とともに、炉底滓、転用鞴羽口（土師器高杯）、砥石等が出土している。鞴羽口として二次利用されている高杯は、杯部との接点が羽口利用により溶解し欠損するが、復元すると低脚で裾部で強く屈曲するもの（82）、裾部で強く屈曲し底部が平坦面をなすもの（83）の２例に分けられる。この特徴から、庄内系の系譜を引き継ぐ高杯で、５世紀後半から６世紀にかけて作られた可能性が高い。また、同時に出土している土師器杯は、外器面底部をヘラ削りし、体部下半を磨いており、高杯と同時期の年代と考える。

1　植木町教育委員会『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第 14 集 2002

3　玉名平野条里跡 (古閑前地区) の集落の変遷について（Fig.77、Fig.78）

最後に、今回の発掘調査で分かった当遺跡の遺構の変遷をたどる。遺跡は、図面向かって東側（右）方向が菊池川方向、西側（左）が平野内となる。

弥生時代の遺構配置図は、前期の遺物は出土しているが遺構は確認していないため、後期段階での遺構配置図となる（Fig.77）。後期は、他の時代に比べ主要な遺構が調査区全域に広く展開する。この時期は当該地域が他の時期に比べ菊池川河道の変化等により比較的安定した時期であったようで、竪穴建物 SI014、SI015 が作られるなど遺構の広がりがあったことが窺える。

古墳時代は土器の項で示したように、前期・後期の２期があったことが分かっているが、遺構配置としては合わせて図示している。弥生時代に比べ主要遺構は調査区中央部に展開し、竪穴建物、掘立柱建物等が多く作られている。掘立柱建物が４棟並ぶなど平野上の水田としての開発が進み、穀倉地帯としての一時余剰米の保管機能を併せもった集落であった可能性がある。

古代に入ると遺構の数は少なくなるが、掘立柱建物 SB004 のような３間×３間以上の規格を持つ大型の総柱建物が作られる。また、調査区東側には、２基の土坑上に、前面に庇状の張出しを有する２間×３間の総柱建物が作られている。周囲には同時期の建物はなく、離れた位置に柵列 SA001 があるのみである。庇の張出しを正面と見れば、西に面し、背後に菊池川を背負うこととなる。

近現代に入ると、生活痕跡はなく、菊池川寄りに一部湿地と化した自然流路が残る。東に向かい下がり幅が広くなる。また、水田下の粘土を採掘した跡であろうか、粘土採掘痕も検出している。

2010 年（平成 22 年）10 月 11 日脱稿

参考文献

[論文・資料紹介等]（直接引用した文献は、脚注として随時掲載しているためここでは参考とした文献を記する）

高野陽子「庄内式甕の出現」『京都府埋蔵文化財情報第 92 号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 年６月

藤尾慎一郎「西日本における弥生甕の成立」『考古論集－河瀬正利先生体感記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会編 2004 年３月

藤本貴仁「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」『古墳時代の海人集団を再検討する -「海の生産用具」から 20 年 - 別刷』第 56 回埋蔵文化財研究集会 2007 年９月１日

藤本貴仁「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第２号熊本古墳研究会 2004 年 10 月

中原幹彦「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論－古墳時代後期集落成立の背景－」『大王の棺を運ぶ実験航海－研究編－』石棺文化研究会 2007 年 10 月

松根恭子「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』第２号　熊本古墳研究会 2004 年 10 月

中原幹彦「宇城産須恵器のひろがり」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市 2003 年

杉井　健「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」

重藤輝幸「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」

檀　佳克「人吉盆地における古墳時代の土師器編年について－系統的視点からみた併行関係の再検討－」『熊本古墳研究』第２号熊本古墳研究会 2004 年 10 月

[調査報告書]（直接引用した文献は、脚注として随時掲載しているためここでは参考とした文献を記する）

宇土市教育委員会「西岡台遺跡　石ノ瀬遺跡　上松山遺跡」新宇土市史基礎資料第９集　2001

泗水町教育委員会『篠原遺跡』泗水町文化財調査報告第３集 1998

熊本県教育委員会『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』熊本県文化財調査報告第　集 1979

隈　昭志編『沖ノ原遺跡』五和町文化財調査報告第　集 1984

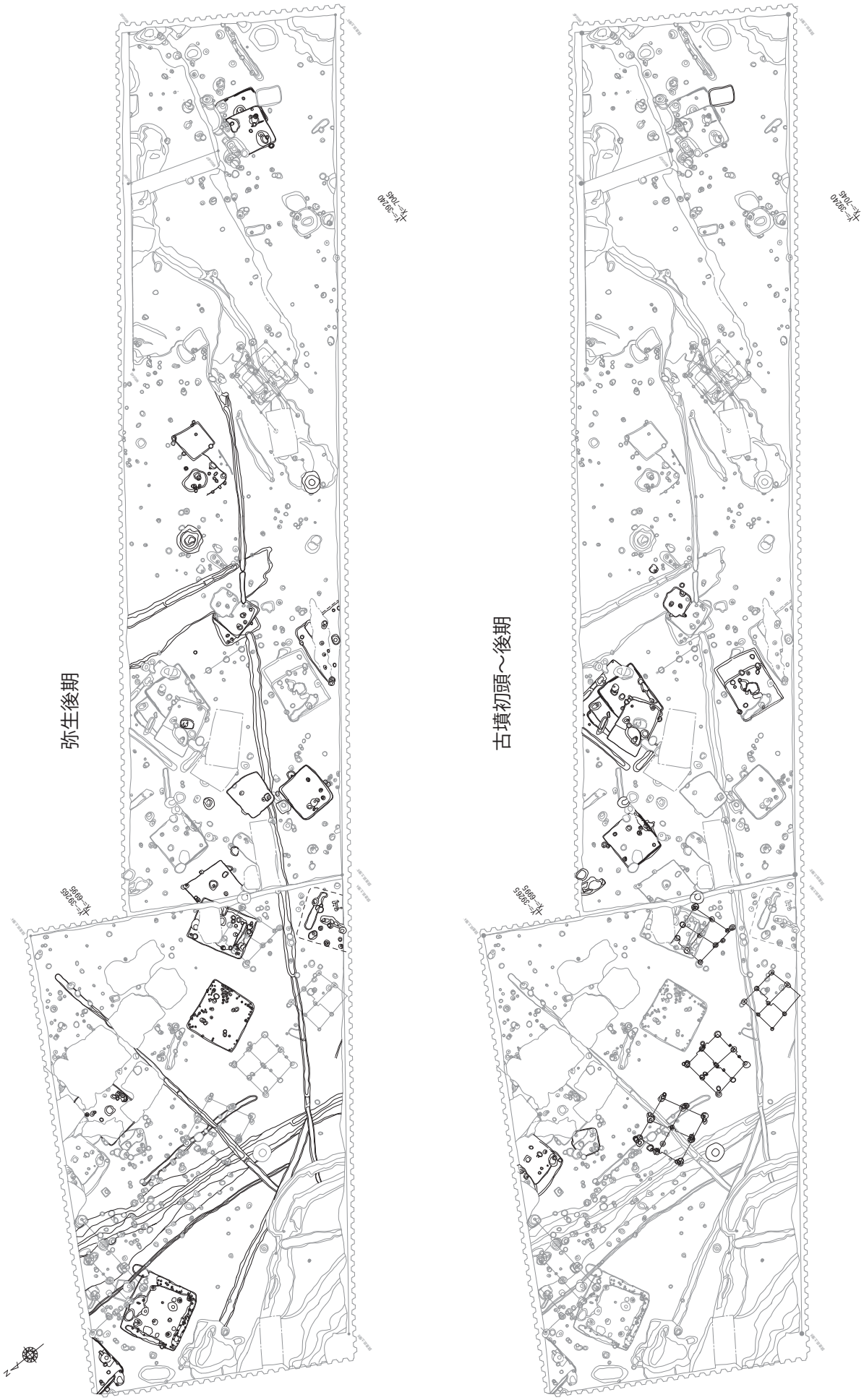


Fig.77　時代別遺構配置図（弥生、古墳）

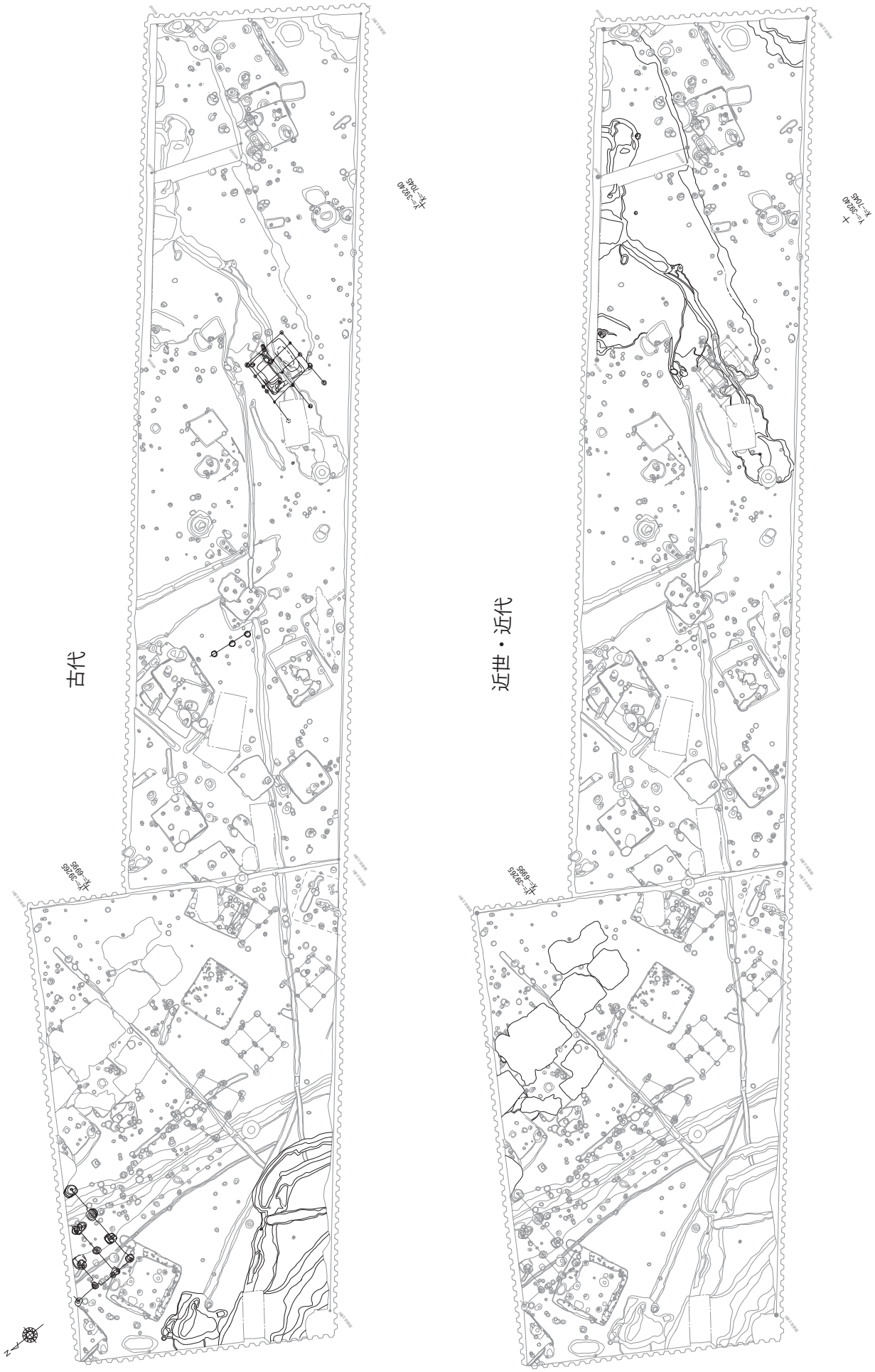


Fig.78　時代別遺構配置図（古代、近世・近代）

No.	遺跡名	種別	所在地	No.	遺跡名	種別	所在地
1	玉名平野条里跡(古閑前地区)	消費	玉名市両迫間	11	南請遺跡	消費	宇城市不知火町小曽部
2	稲佐津留遺跡	消費	玉名市玉東町	12	黒田貝塚	生産	宇城市不知火町永尾
3	篠原遺跡	消費	菊池市泗水町田島	13	小鹿里遺跡	生産	宇城市三角町
4	石川遺跡	消費	熊本市植木町	14	大田尾製塩生産	生産	宇城市三角町太田尾,佛天川
5	八反原遺跡	消費	合志市西合志合生,弘生	15	串遺跡	生産	上天草市大矢野町上江後
6	二本木遺跡群(春日、田崎地区)	消費	熊本市二本木	16	小波戸遺跡	生産	上天草市大矢野町上小波戸
7	八島町遺跡	消費	熊本市蓮台寺	17	荒潮遺跡	生産	天草市有明町大浦
8	下江中島遺跡	消費	熊本市富合町古閑	18	中の尾遺跡	生産	天草市五和町御領
9	迎原西遺跡	消費	熊本市城南町沈目	19	沖ノ原遺跡	生産	天草市五和町二江
10	石ノ瀬遺跡	消費	宇土市石小路				

Fig.80　製塩土器出土遺跡の分布図

附　　編

自然科学分析調査報告

Ⅰ．自然科学分析の概要

Ⅱ．炭化種実同定

Ⅲ．炭化米の DNA 分析

Ⅳ．放射性炭素年代測定

動物遺存体同定

土器付着物分析

株式会社　古環境研究所

自然科学分析

Ⅰ．自然科学分析の概要

玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査では、古墳時代後期とされる廃棄住居跡（H-14）の土坑内から多数の炭化種実（炭化米）が検出された。ここでは､炭化種実の種類や系統およびその年代を把握する目的で、種実同定、DNA 分析、放射性炭素年代測定を行った。

Ⅱ．炭化種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、廃棄住居跡（H-14）の土坑内から採取された水洗選別済みの炭化種実（1461 粒）である。

３．分析法

炭化種実について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

種実同定の結果、炭化種実はすべてイネの炭化果実（炭化米）と同定された。また、試料には炭化材片も少量含まれていた。表１に同定結果を示し、炭化米の長さと幅の計測値を表２に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

イネ　*Oryza sativa* L.　炭化果実　イネ科

炭化して黒色を呈している。楕円形を呈し胚の部分がくぼむ。表面には数本の縦の筋が走る。横方向の亀裂や発泡が認められるものが多いことから、明らかに熱を受けていると考えられる。また、破片で発泡が著しいものが多いことから、熱によって発泡し劣化したため破片となったとみなされる。なお、炭化米の７粒については部分的に頴が残存していた（写真参照）。

種実が２/３以上残存しているものを１個体とし、残りを破片として計数したところ、イネ果実 580 個、破片 881 個であった。任意に 100 個体について計測したところ、長さは 3.74 ～ 5.29㎜（平均 4.54㎜）、幅は 2.05 ～ 3.30㎜（平均 2.51㎜）であった。

５．考察

廃棄住居跡（H-14）の土坑内から出土した炭化種実（1461 粒）は、すべてイネ炭化果実（炭化米）と同定された。炭化米は、横方向の亀裂や発泡が認められるものが多いことから、明らかに熱を受けていると考えられる。また、部分的に頴が残存しているものがあることから、当初は籾の状態であった可能性も考えられる。

炭化米の粒形とその大きさ（表３）は、佐藤敏也（1988）による分類では短粒で極小のものが半分強の

52％を占め、28％は短粒で小に分類される。このような粒径と大きさは、古墳時代の炭化米に普通にみられるものである。

文献

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165 － 174.
佐藤敏也（1988）弥生のイネ．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版株式会社，p.97-111.

表１　玉名平野条里跡における炭化種実同定結果

分類群		部位	
学名	和名		H-14
Herb	草本		
Oryza sativa L.	イネ	炭化果実	580
		(穎破片付)	(5)
		破片	881
		(穎破片付)	(2)
Total	合計		1461
	備考		炭化材片7

表２　玉名平野条里跡における炭化米の計測値

試料	長さ（mm）	幅（mm）	試料	長さ（mm）	幅（mm）
1	5.06	3.22	51	4.80	2.38
2	4.18	2.64	52	4.05	2.40
3	4.69	2.44	53	4.19	2.59
4	4.21	2.60	54	4.78	2.23
5	4.19	2.10	55	4.66	2.31
6	4.30	2.80	56	4.35	2.38
7	4.44	2.23	57	4.92	2.63
8	5.15	2.64	58	4.85	2.49
9	6.89	2.64	59	4.09	2.16
10	4.44	2.67	60	4.89	2.31
11	5.08	2.60	61	4.82	2.71
12	4.32	2.41	62	4.21	2.63
13	5.13	2.90	63	5.06	2.59
14	4.69	2.57	64	4.73	2.31
15	4.02	2.64	65	4.33	2.16
16	4.92	3.30	66	4.23	2.59
17	4.67	2.76	67	4.52	2.68
18	4.57	2.67	68	4.09	2.56
19	4.53	2.60	69	4.80	2.59
20	4.37	2.48	70	4.05	2.49
21	4.51	2.46	71	4.56	2.05
22	4.76	2.37	72	4.23	2.35
23	4.62	2.71	73	4.49	2.40
24	3.95	2.23	74	3.88	2.21
25	4.16	2.14	75	4.21	2.59
26	4.74	3.40	76	4.78	2.52
27	4.85	2.46	77	4.45	2.23
28	4.35	2.76	78	4.21	2.49
29	4.64	2.23	79	4.05	2.49
30	4.51	2.92	80	3.79	2.21
31	4.60	2.55	81	5.03	2.78
32	4.87	2.64	82	3.76	2.07
33	4.57	2.30	83	3.74	2.68
34	4.80	3.03	84	3.95	2.42
35	4.44	2.37	85	4.49	2.23
36	4.39	2.30	86	4.94	2.52
37	4.41	2.30	87	4.92	2.35
38	4.60	2.83	88	4.45	2.26
39	4.14	2.46	89	5.06	2.63
40	5.06	2.60	90	4.47	2.23
41	4.38	2.21	91	5.29	2.56
42	4.40	2.66	92	4.00	2.49
43	5.03	2.78	93	4.56	2.26
44	4.78	2.49	94	5.03	2.33
45	4.96	2.52	95	5.01	2.78
46	4.38	2.59	96	4.21	2.59
47	4.80	2.33	97	4.40	2.28
48	4.45	2.66	98	4.52	2.26
49	4.59	2.71	99	4.21	2.54
50	3.88	2.26	100	4.59	2.52

	長さ（mm）	幅（mm）
平均	4.54	2.51
最大	5.29	3.30
最小	3.74	2.05

表３　玉名平野条里跡における炭化米の粒形と粒大

粒形 ＼ 粒大		極々小 ～ 8	極小 ～ 12	小 ～ 16	中 ～	合計	%
長粒 *L*	2.6-3.0 *Ll*				1	1	15
	2.3-2.6 *Lm*					0	
	2.0-2.3 *Ls*		13	1		14	
短粒 *S*	1.8-2.0 *Sl*	1	22	15		38	83
	1.6-1.8 *Sm*		26	9		35	
	1.4-1.6 *Ss*		4	4	2	10	
円粒 *R*	1.2-1.4 *Rl*		1		1	2	2
	1.0-1.2 *Rm*					0	
合計		1	66	29	4	100	
%		1	66	29	4	100	

＊粒形は粒長/粒幅で示し、粒大は粒長×粒幅で示す。

玉名平野条里跡（古閑前地区）の種実 Ⅰ

1　イネ炭化果実

2　イネ炭化果実

3　イネ炭化果実

4　イネ炭化果実

1.0㎜

5　イネ炭化果実

6　イネ炭化果実

7　イネ炭化果実

8　イネ炭化果実

1.0㎜

9　イネ炭化果実

10　イネ炭化果実

11　イネ炭化果実

12　イネ炭化果実

1.0㎜

13　イネ炭化果実

14　イネ炭化果実

15　イネ炭化果実

16　イネ炭化果実

1.0㎜

玉名平野条里跡（古閑前地区）の種実 Ⅱ

1　イネ炭化果実（穎破片付）　2　同左拡大

1.0㎜　0.1㎜

3　イネ炭化果実（穎破片付）　4　同左拡大

1.0㎜　0.5㎜

5　イネ炭化果実（穎破片付）　6　同左拡大

1.0㎜　0.1㎜

7　イネ穎（現生）　8　同左拡大

1.0㎜　0.1㎜

9　イネ炭化果実破片（熱による発泡が著しい）　10　イネ炭化果実破片（熱による発泡が著しい）

1.0㎜　1.0㎜

Ⅲ．炭化米の DNA 分析

１．はじめに

DNA（デオキシリボ核酸）は、あらゆる生物のほとんどの細胞内にある遺伝子の本体であり、生命活動の設計図ともなっている物質である。DNA は同じ個体の細胞がすべて同じセットを持ち、さまざまな領域が種や個体に固有の構造を持つ性質がある。また、DNA はすぐれた自己保存性と複製能力を持つため、生体のみならずミイラなどの遺体中にもよく保存されている。遺跡から出土した植物遺体から DNA を抽出して解析することで、植物の種や品種および個体の異同などを高い精度で識別することが可能である。

２．試料

分析試料は、廃棄住居跡（H-14）の土坑内から採取された水洗選別済みの炭化米（30 粒）である。

３．方法

光学顕微鏡により形態観察を行い、デジタル撮影した画像について ImageJ ソフトを用いて長さと幅を計測した。超音波洗浄の後、70％エタノールを噴霧して表面を除菌し、滅菌済みのステンレスビーズ（分銅）とともにサンプルを滅菌チューブに入れて、マルチビーズショッカーにより粉砕した。

全 DNA の抽出は、NaOH を用いたアルカリ抽出法を一部改変した改変アルカリ抽出法を用いた（青木ほか , 1999）。この手法は、出土遺物の DNA を抽出する際に用いられており、ここでは核・葉緑体の全 DNA を抽出した。DNA 抽出後、カラムによる精製を行った。なお、コンタミネーションの確認のため、ネガティブ・コントロールとして脱イオン蒸留水（滅菌蒸留水）を用いた。

抽出した DNA は、以下の 4 つの領域について Takara Ex Taq を用いて PCR（Polymerase Chain Reaction）法により DNA を増幅した。

①葉緑体 DNA の *rpl14* と *rpl16* との遺伝子間領域（Nakamura et al, 1997）。PS-ID 領域と呼ばれ、イネの品種あるいは品種群を同定できる。

②葉緑体 DNA の *orf100* 領域（Takahashi et al., 2008）。イネの品種群を同定できる。

③葉緑体 DNA の *petN* と *trnC* との遺伝子間領域。イネの品種群を同定できる。

④イネ第 6 染色体長腕 (Ch6) に座乗する領域。イネの温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとを区別できる。

各領域について、１度目の PCR 産物を用いてさらに同じプライマーで PCR 増幅を行った。PCR 増幅の温度条件、反応液の組成などは定法によった。増幅された PCR 産物について、3.0％アガロースゲルで電気泳動を行って期待サイズの DNA 断片を確認し、ABI PRISM337 Genetic Analyzer（Applied Biosystems, USA）により塩基配列を解読した。今回使用したプライマーの配列を表２に示す。

４．結果と考察

炭化米 30 点について DNA の抽出を行い PCR 増幅した結果、①（*rpl14-rpl16*）の領域では３点（サンプル３、６、21）、②（*orf100*）の領域では２点（サンプル５、30）で期待サイズの DNA が認められた（図３、図４）。これらの PCR 産物について塩基配列を解析したところ、現生のジャポニカと同じ配列であった。

③（*petN* と *trnC* との遺伝子間領域）および④（イネ第 6 染色体領域 : ch6）については、期待サイズの DNA は増幅できなかった。これは経年変化や被熱によって DNA が断片化し、比較的長い領域を増幅できなかったためと考えられる。温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとを区別する④の領域が増幅できないことから、今回の分析では両者を確認するには至らなかった。

今回の DNA 分析では、DNA が増幅できた試料のすべてがジャポニカと確認された。近年、DNA 分析により遺跡から出土したイネ遺存体について検討が進められているが、九州における古代から現代までの連続したイネの栽培状況や伝播の過程を把握するには、さらなるデータの蓄積が必要である。このため今回の解析結果は貴重なデータになると考えられる。

文献

青木千佳、西村隆雄、安井修二他 (1999) マルチビーズショッカーによるイネ生葉からの DNA および RNA 抽出法の改良、育種学研究第 1 巻別冊 2 号 : 18

佐藤洋一郎（1999）DNA 考古学．東洋書店，pp201．

Nakamura I, Kameya N, Kato K, Yamanaka SI, Jomori H, Sato YI (1997) A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breeding Science 47: 385-388

H. Takahashi, Y. I. Sato and I. Nakamura (2008) Evolutionary analysis for two plastid DNA sequences in cultivated and wild species of *Oryza*. Breeding Science 58: 225-233

表１　DNA分析に用いた炭化米のリスト

試料番号	長さ(mm)	幅(mm)	粒形	粒大(mm^2)	*rpl14-rpl16*[1)]	*orf100*[1)]	*petN-trnC*[1)]	ch6[1)]
1	5.13	2.34	2.19	12.0	-	-	-	-
2	4.87	2.28	2.14	11.1	-	-	-	-
3	4.43	2.44	1.82	10.8	J	-	-	-
4	4.18	2.50	1.67	10.5	-	-	-	-
5	4.49	2.47	1.82	11.1	-	J	-	-
6	4.84	3.04	1.59	14.7	-	-	-	-
7	4.68	2.78	1.68	13.0	-	-	-	-
8	4.75	2.91	1.63	13.8	J	-	-	-
9	5.06	2.66	1.90	13.5	-	-	-	-
10	4.68	2.78	1.68	13.0	-	-	-	-
11	4.68	2.56	1.83	12.0	-	-	-	-
12	4.97	2.79	1.78	13.9	-	-	-	-
13	4.87	2.56	1.90	12.5	-	-	-	-
14	4.24	2.75	1.54	11.7	-	-	-	-
15	4.68	2.91	1.61	13.6	-	-	-	-
16	5.06	2.47	2.05	12.5	-	-	-	-
17	4.81	2.72	1.77	13.1	-	-	-	-
18	4.40	2.31	1.90	10.2	-	-	-	-
19	4.91	2.50	1.96	12.3	-	-	-	-
20	4.59	2.47	1.86	11.3	-	-	-	-
21	4.87	2.47	1.97	12.0	J	-	-	-
22	4.30	2.37	1.81	10.2	-	-	-	-
23	4.27	2.69	1.59	11.5	-	-	-	-
24	4.91	2.53	1.94	12.4	-	-	-	-
25	4.56	2.44	1.87	11.1	-	-	-	-
26	4.30	2.63	1.63	11.3	-	-	-	-
27	4.84	2.47	1.96	12.0	-	-	-	-
28	5.44	2.75	1.98	15.0	-	-	-	-
29	4.53	2.47	1.83	11.2	-	-	-	-
30	4.75	3.01	1.58	14.3	-	J	-	-
最小	4.18	2.28	1.54	10.16	-	-	-	-
最大	5.44	3.04	2.19	14.96	-	-	-	-
平均	4.70	2.60	1.82	12.25	-	-	-	-
分散	0.09	0.04	0.03	1.72	-	-	-	-

[1)] J: 塩基配列が現代のジャポニカと同じであったサンプル

表２　PCR増幅に使用したプライマー

増幅領域	フォワード（F），リバース（R）プライマー（5’ to 3’）	
rpl14-rpl16	F	TCAATTTCTTCGGTTAGAAATA
	R	GAAAGAAATATTGTCTTTCCAG
orf100	F	TGGATTTCGAAAGTCAATTTT
	R1	CCTTTTCCCACTCGCTCTCTA
	R2	TCCATGATTCCTATTTCCAAG
petN-trnC	F	ATCAGTTCAAAGAATTTACTC
	R	TATTTATACTTAATGCTCCCC
ch6	F	TGACCGGTTCTGTAGCAGTG
	R1	CCAGTTTAATGTTTTYTCATTGCC
	R2	GATTTTCCGTTTTCCGTGCC

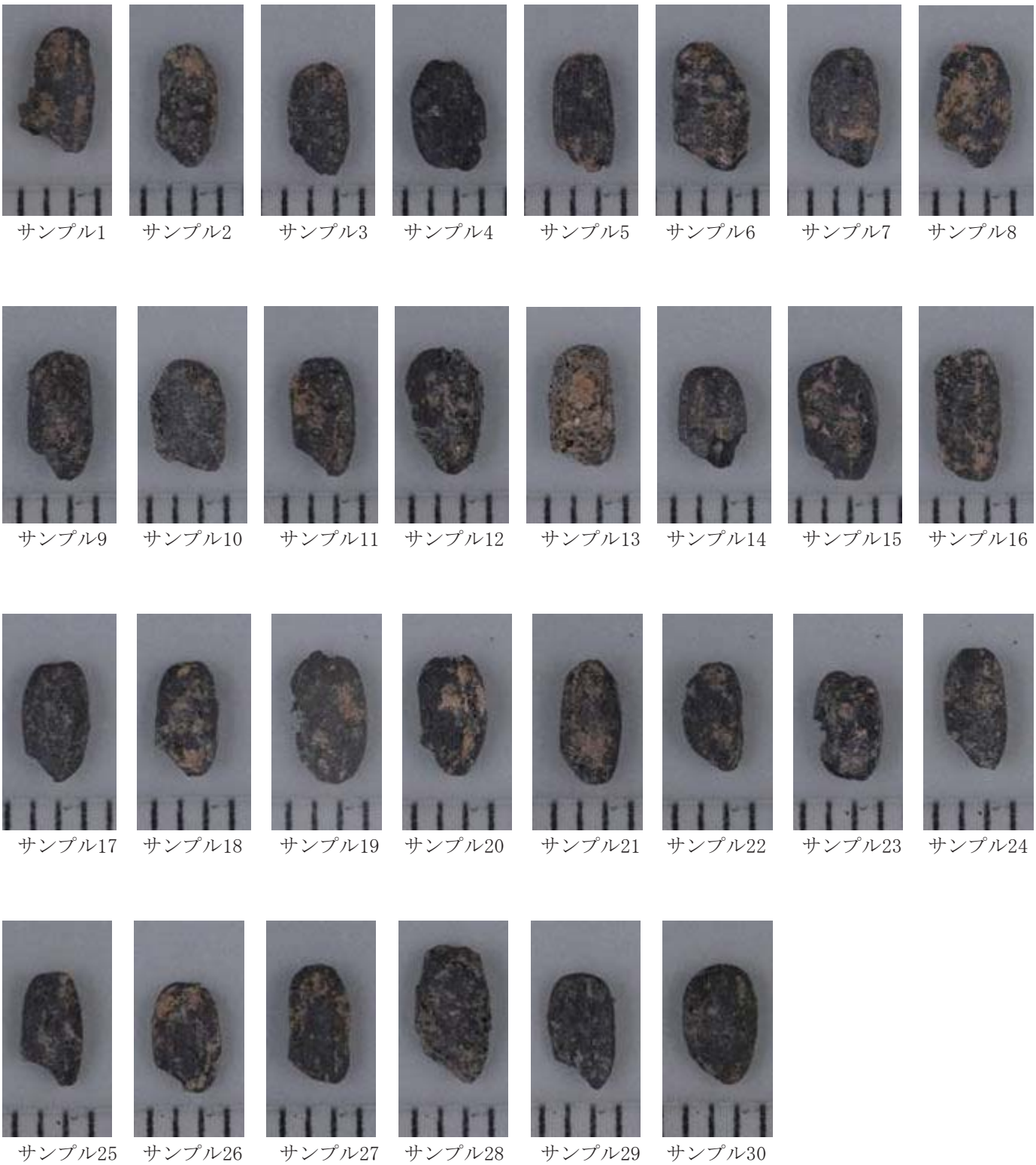


図１　DNA分析に用いた炭化米

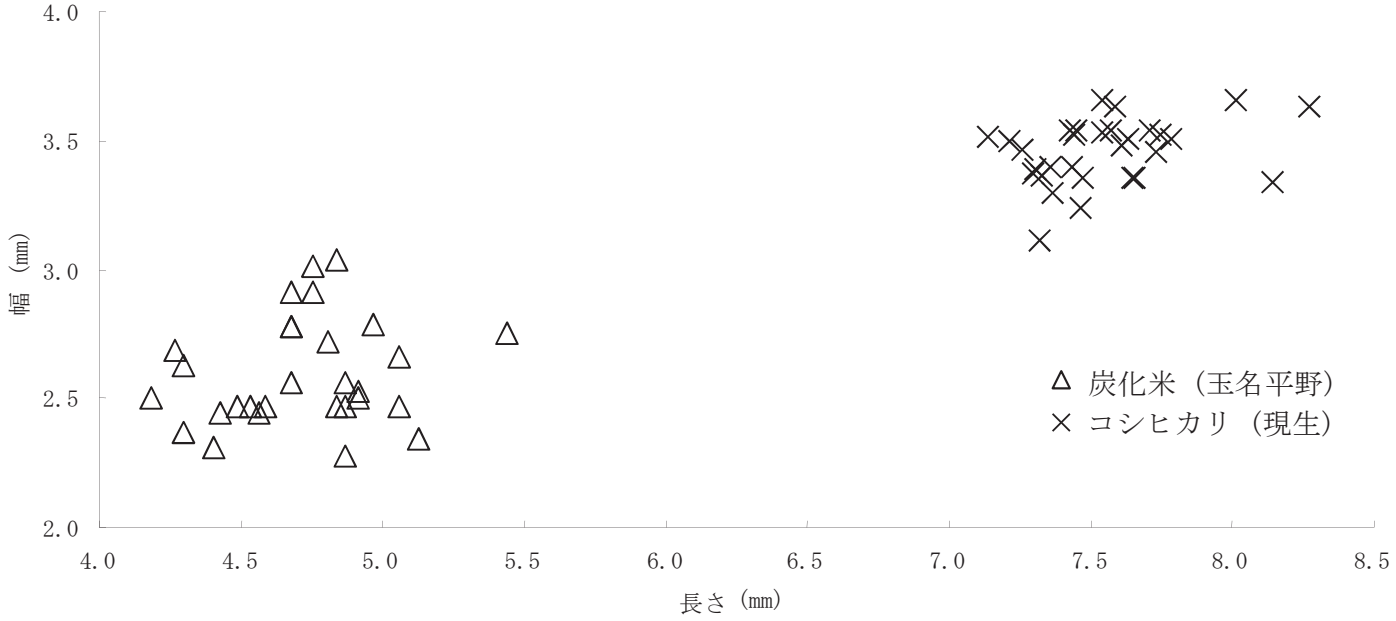


図２　DNA分析に用いた炭化米の長さと幅の散布図

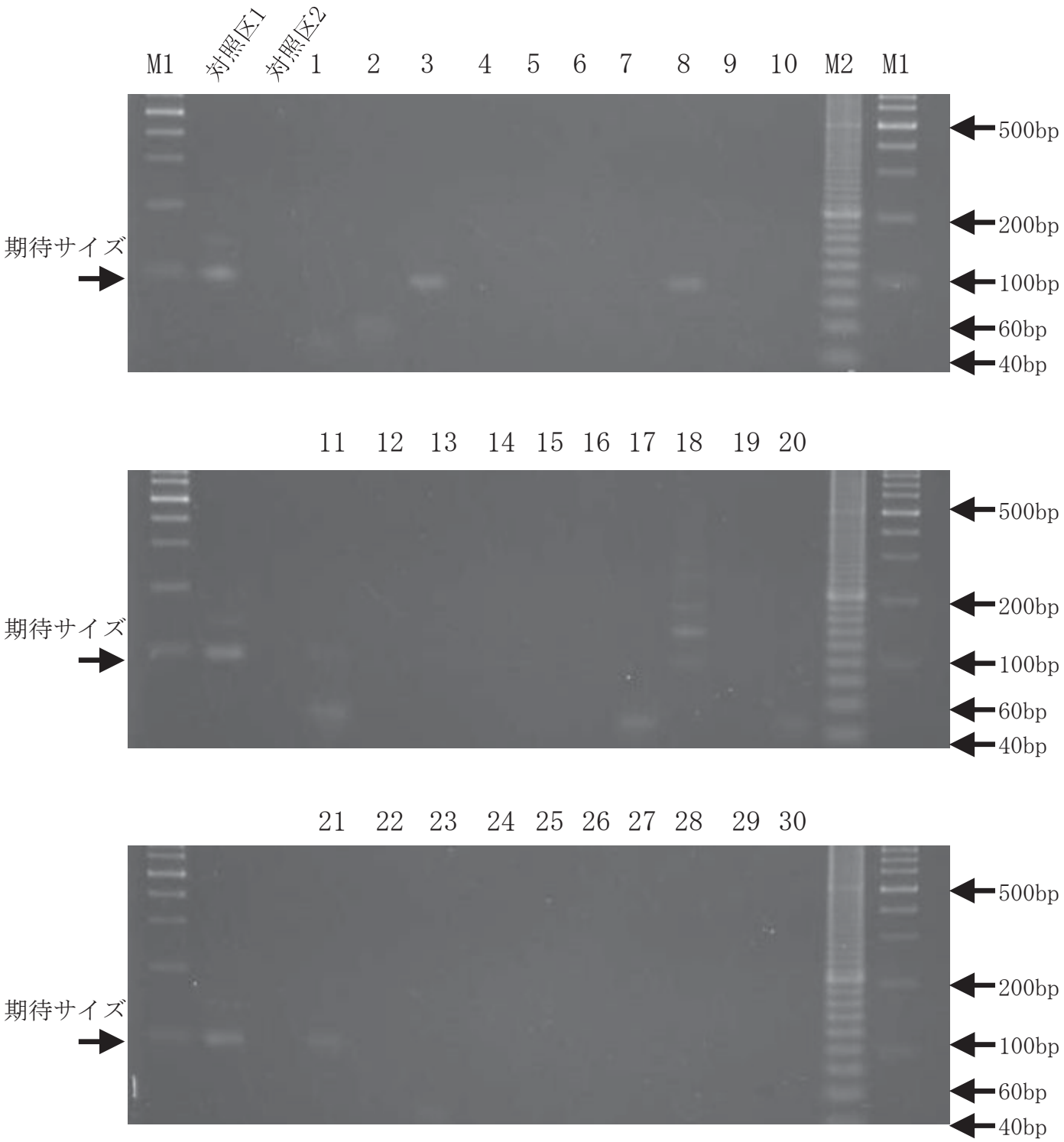


図３　炭化米におけるPS-ID領域（*Rpl16-Rpl14*）の電気泳動
1-30: 炭化米, M1=: 100bp DNA Ladder (Biolabs, USA), M2: 20bp DNA Ladder (Biolabs, USA)
対照区1: ジャポニカ, 対照区2: 滅菌蒸留水
M1、M2、対照区1、対照区2は上1枚と下2枚の泳動で同じレーンに泳動した。

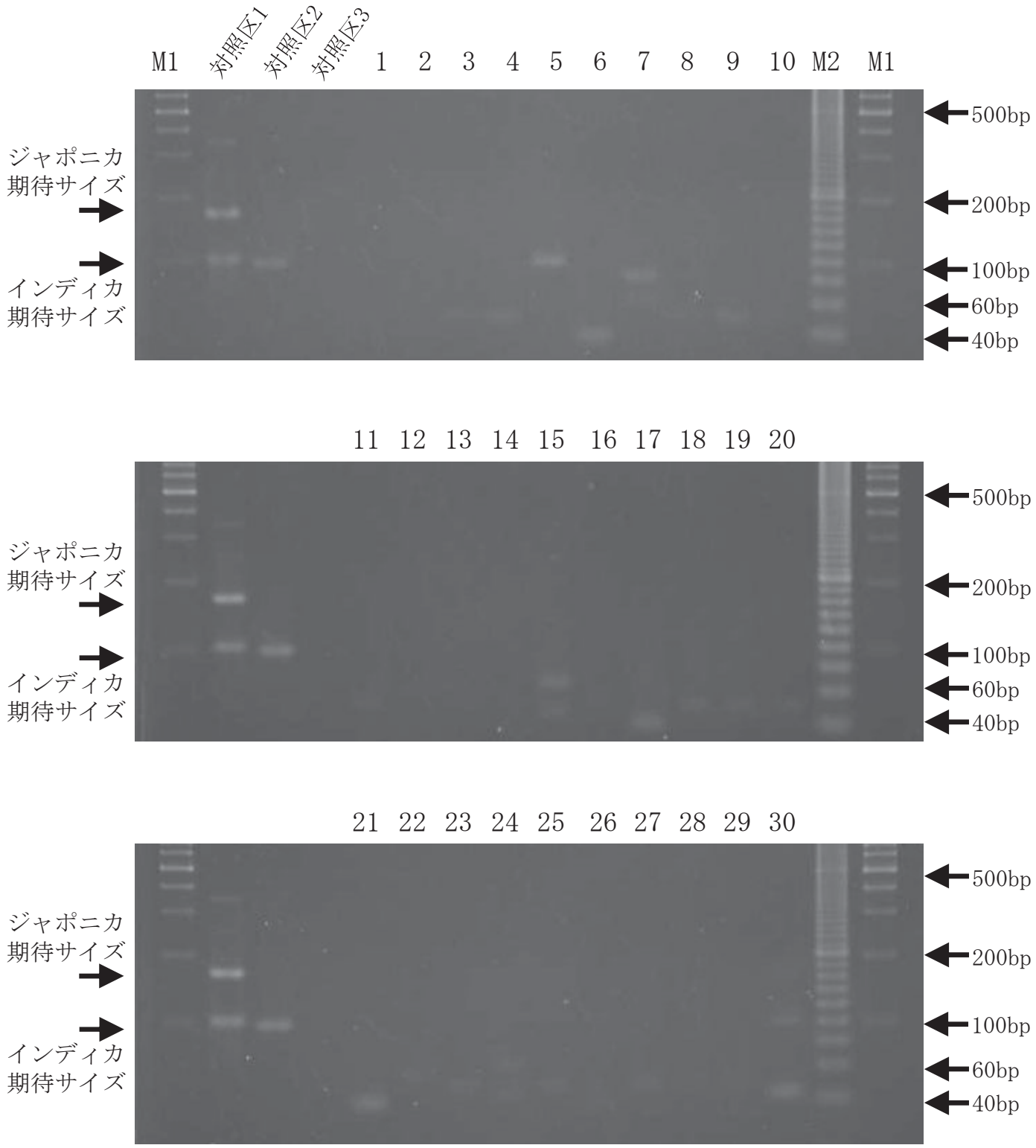


図４　炭化米における*Orf100*領域の電気泳動
1-30: 炭化米, M1=: 100bp DNA Ladder (Biolabs, USA), M2: 20bp DNA Ladder (Biolabs, USA)
対照区1: ジャポニカ, 対照区2: インディカ, 対照区3: 滅菌蒸留水
M1、M2、対照区1、対照区2、対照区3は上1枚と下2枚の泳動で同じレーンに泳動した。

Ⅳ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14 C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

２．試料と方法

測定試料の採取箇所や種類、放射性炭素年代測定の前処理および測定法を次表に示す。

試料No.	地点・層準	種類	前処理	測定法
No.１	廃棄住居跡（H-14），土坑内	炭化米	超音波洗浄，酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸処理	AMS
No.２	廃棄住居跡（H-14），土坑内	炭化米	超音波洗浄，酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸処理	AMS
No.３	廃棄住居跡（H-14），土坑内	炭化米	超音波洗浄，酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸処理	AMS

３．測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた ^{14}C 濃度について、同位体分別効果の補正を行った後に、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示し、図１に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

試料No.	測定No. (PED-)	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代（較正年代）	
					１σ（68.2％確率）	２σ（95.4％確率）
No.１	16244	-23.38 ± 0.10	1499 ± 17	1500 ± 15	AD550-595(68.2%)	AD540-610(95.4%)
No.２	16245	-23.20 ± 0.14	1526 ± 17	1525 ± 15	AD470-480(1.1%) AD530-580(67.1%)	AD430-490(18.6%) AD530-600(76.8%)
No.３	16246	-20.48 ± 0.11	1499 ± 16	1500 ± 15	AD550-595(68.2%)	AD540-605(95.4%)

BP：Before Physics（Present），BC：紀元前，AD：紀元後

（１）δ（デルタ）^{13}C 測定値

試料の測定 ^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ ^{13}C 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の ^{14}C/^{12}C 比から、現在(AD1950 年基点)から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。統計誤差（±）は１σ（シグマ）（68.2％確率）である。^{14}C 年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

（３）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正するこ

とで、放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により１σ（シグマ）（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。() 内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№１の炭化米では 1500 ± 15 年 BP（２σの暦年代で AD540 ～ 610 年）、№２の炭化米では 1525 ± 15（AD430 ～ 490，530 ～ 600 年）、№３の炭化米では 1500 ± 15（AD540 ～ 605 年）の年代値が得られた。このうち、№２の炭化米では暦年代の年代幅が比較的広くなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。３試料とも年代測定値は近似しており、統計誤差の幅で重なることから、ほぼ同時期のものと考えられる。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代 , p.3-20.

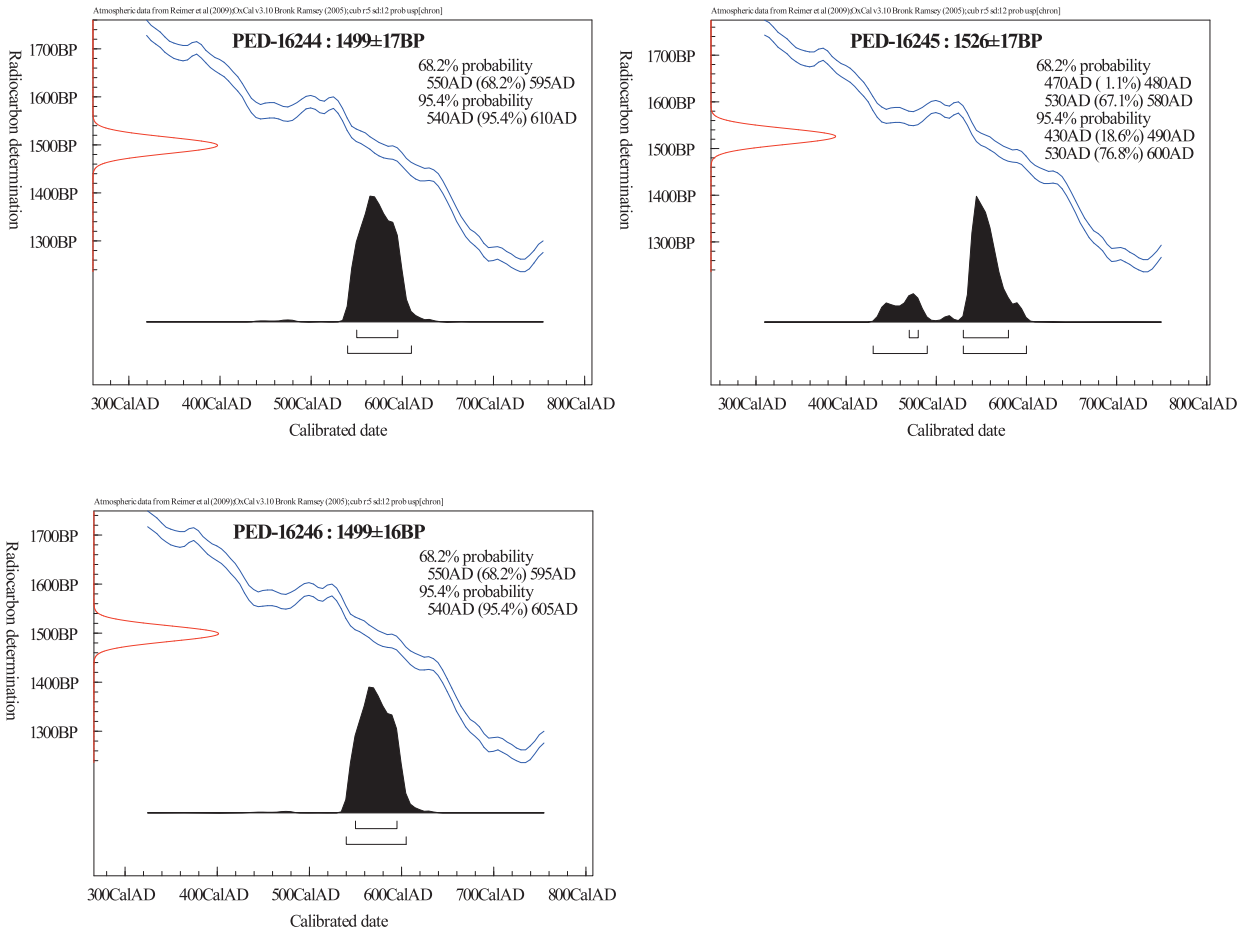

Atmospheric data from Reimer et al (2009);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005);cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-16244 : 1499±17BP
68.2% probability
550AD (68.2%) 595AD
95.4% probability
540AD (95.4%) 610AD
PED-16245 : 1526±17BP
68.2% probability
470AD (1.1%) 480AD
530AD (67.1%) 580AD
95.4% probability
430AD (18.6%) 490AD
530AD (76.8%) 600AD
PED-16246 : 1499±16BP
68.2% probability
550AD (68.2%) 595AD
95.4% probability
540AD (95.4%) 605AD
Radiocarbon determination
1700BP
1600BP
1500BP
1400BP
1300BP
300CalAD
400CalAD
500CalAD
600CalAD
700CalAD
800CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果

動物遺存体同定

１．はじめに

一般的に日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、高温多湿のモンスーン気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれない。このため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて残らず、遺跡で動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的である。なお、近年では湿地環境の遺跡や遺構からの出土が報告されており、本遺跡の資料も水分の豊かな土壌環境によって現代まで遺存したと考えられる。こうした断片的な資料を蓄積することで、当時の人々の動物利用の実体が解明されると期待される。

２．試料

試料は、古墳時代後期の廃棄住居跡（H-14）から出土した動物遺存体１式（６分割）である。

３．方法

試料を肉眼で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を対比して同定を行った。

４．結果

動物遺存体の同定結果を表１に示し、主要な分類群の写真を示す。動物の種類や部位が同定されたのは、ウマの上顎骨１点、遊離歯１点、ウマあるいはウシの上腕骨（左）１点、ウマあるいはウシと思われる四肢骨１点と不明部位１点である。

ウマ：

脊椎動物門 Vertebrata　哺乳綱 Mammalia　奇蹄目 Perissodactyla　ウマ科 Equidae　ウマ *Equus caballus*

５．考察

ウマの上顎骨は顎骨の大部分が破損しており、上顎第２臼歯および第３臼歯が植立した状態である。西中川ら（1991）による歯冠高からの年齢推定式に当てはめると、第２大臼歯が歯冠高 48.3㎜、第３大臼歯が歯冠高 62.8㎜を測り、生後４～５年の若齢馬と推定される。

また、遊離歯は上顎第２大臼歯であり、残存している歯冠高で 45.2㎜を測り、生後５～６年の若齢馬と推定される。しかし、破損していることを考慮するとそれよりやや歯冠高の値は大きくなり、年齢が若くなる可能性がある。この遊離歯は、出土状況や推定年齢から上記の上顎骨と同一個体の可能性が高い。また、ウマの切歯が１点出土しており、上記のものと同一個体の可能性がある。

ウマあるいはウシの上腕骨は、遠位端内側によって種類を特定したが、取り上げ後の乾燥によって破片化した骨幹部も保存されている。このほかウマあるいはウシと思われる大型哺乳類の骨があるが、これらの試料で種類を特定することは困難である。

これらの試料は廃棄住居跡から出土しているが、いずれも同一個体のものであるかは定かではない。ウマの上顎骨、遊離歯とウマあるいはウシと同定した上腕骨が同一個体であったとすれば、出土位置から見て、これらが交連状態ではない（骨格の正位置を保持しない）ことから、埋葬された個体ではないと考えられる。一方、住居跡埋土が攪乱を受けている堆積環境を示すならば、１頭のウマが埋葬されていた可能性も考えられる。

文献
西中川駿編（1991）古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告．

表１　玉名平野条里跡（古閑前地区）における動物遺存体同定結果

№.	遺構・包含層	種別	取り上げ№.	大分類	小分類	部位	左右	部分	計測	備考
1	H-14	A	070906	哺乳綱	ウマ	上顎骨	左	上顎臼歯(P2,P3)	P2(歯冠高48.29,長37.81,幅19.61) P3(歯冠高62.77,長30.35,幅27.28)	顎骨はほとんど残らず、臼歯が保存
1	H-14	B	070906	哺乳綱	ウマ	遊離歯	右	上顎P2	歯冠高45.22,長38.96,幅21.99	
2	H-14		070906	哺乳綱	ウマ	遊離歯	-	切歯	不可	細片化、上下左右不明
7	H-14		070906	哺乳綱	ウマ/ウシ?	不明	-			保存状態不良、ウシ/ウマ程度の大きさ
14	H-14		070906	哺乳綱	ウマ/ウシ	上腕骨	左	遠位端	不可	ほか同一個体と思われる破片多数
15	H-14		070906	哺乳綱	ウマ/ウシ?	四肢骨？	-			保存状態不良、ウシ/ウマ程度の大きさ

玉名平野条里跡（古閑前地区）の動物遺存体

1　ウマ　上顎骨(左)上顎臼歯

1.0cm

2　ウマ　遊離歯(右)上顎

1.0cm

3　ウマ　遊離歯　切歯

1.0cm

4　ウマ/ウシ　上腕骨(左)遠位端

1.0cm

土器付着物分析

１．はじめに

玉名平野条里跡（古閑前地区）では、黒色物質が付着した古墳時代後期の土器（土師器）が出土しており、漆などが塗布されている可能性が指摘されていた。ここでは、黒色付着物の有機成分を調べる目的で赤外分光分析（FT-IR 分析）、無機成分を調べる目的で蛍光Ｘ線分析を行った。

２．試料

土師器に付着しているのは、光沢のある薄い黒色物質で、おもに土師器の外面（側面）に付着しており、口縁部付近にも認められる。ここでは、土師器の口縁部付近（№１）と側面（№２）の２箇所について分析を行った。図１に黒色物質の付着状況と分析箇所およびその拡大写真を示す。

３．方法

（１）赤外分光分析

メスを用いて試料表面（黒色部分）を削り取り、厚さ１mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

（２）蛍光Ｘ線分析

粘着カーボンテープを用いて黒色部５mm 角程度を採取し、真鍮製の試料台に固定した後、金蒸着を行った。分析は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による二次電子像の観察を行い、エネルギー分散型Ｘ線分析装置（同 JED-2200）を用いて各４箇所について蛍光Ｘ線分析を行った。

３．結果

（１）赤外分光分析

図２に、分析試料および生漆の赤外吸収スペクトル図を示す。スペクトル図の縦軸は透過率（％Ｒ）、横軸は波数（Wavenumber (cm-1)；カイザー）である。なお、スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。

分析の結果、各試料とも有機成分に見られる吸収（№１、№２）はほとんど認められず、劣化等に伴う大きな吸収（№９など）が認められた。なお、生漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（№６～№８）は認められなかった。

（２）蛍光Ｘ線分析

分析の結果、黒色物質では炭素（C）の含量が 50.8 ～ 58.8％、酸化ケイ素（SiO2）が 12.2 ～ 32.9％、酸化銅（CuO）が 3.7 ～ 8.4％、酸化アルミニウム（Al2O3）が 3.1 ～ 8.2％、酸化亜鉛（ZnO）が 2.0 ～ 7.7％、酸化鉄（FeO）が 2.1 ～ 5.7％などであり、炭素が主成分となっている（表１）。なお、酸化ケイ素や酸化アルミニウムなどについては、土器胎土に由来する可能性が考えられる。

４．考察

土器（土師器）に付着した黒色物質について、赤外線分光分析およびＸ線分析を行った。その結果、黒色物質は炭素（カーボン）を主成分とした無機物と考えられ、漆の成分は認められなかった。炭素の給源としては、木材燃料から排出されたタールの劣化物や煤類などが考えられる。

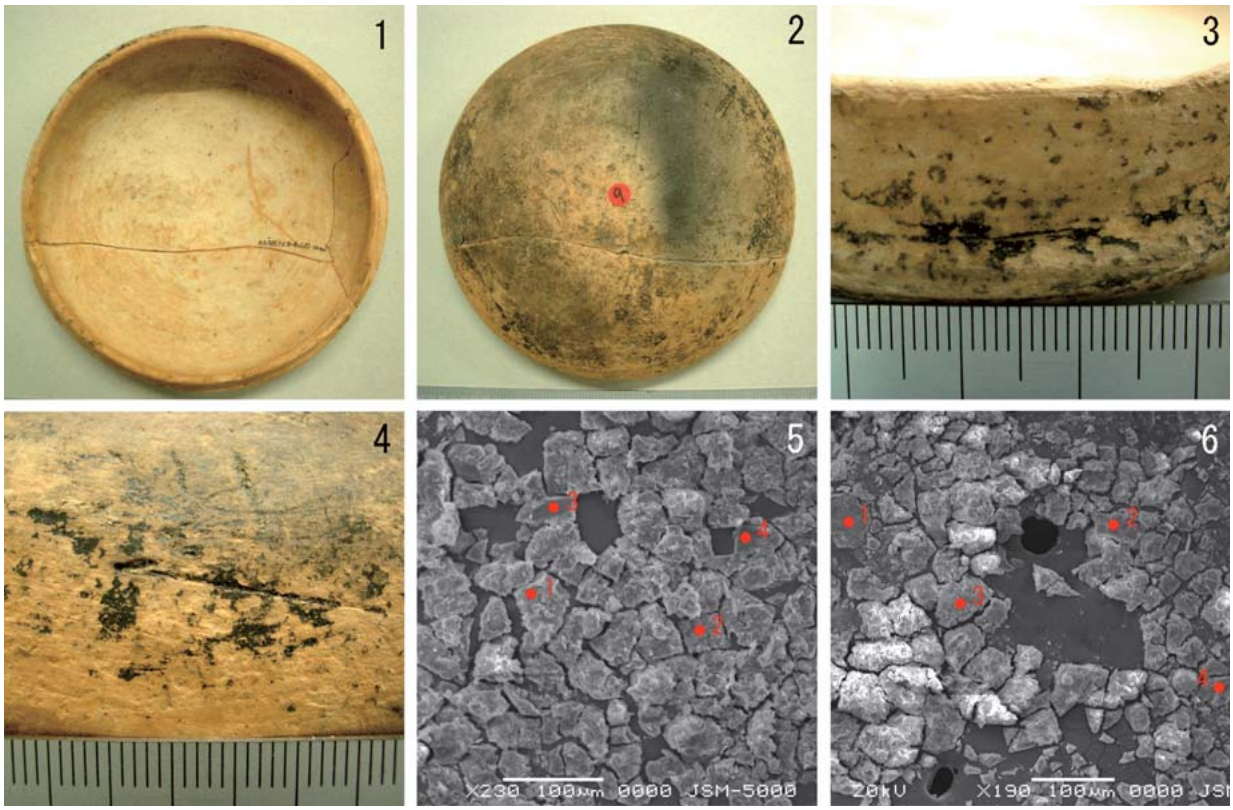


図１　土師器の黒色付着物および分析箇所
１．内面　２．外面　３．分析№１　４．分析№２　５．№１の拡大　６．№２の拡大

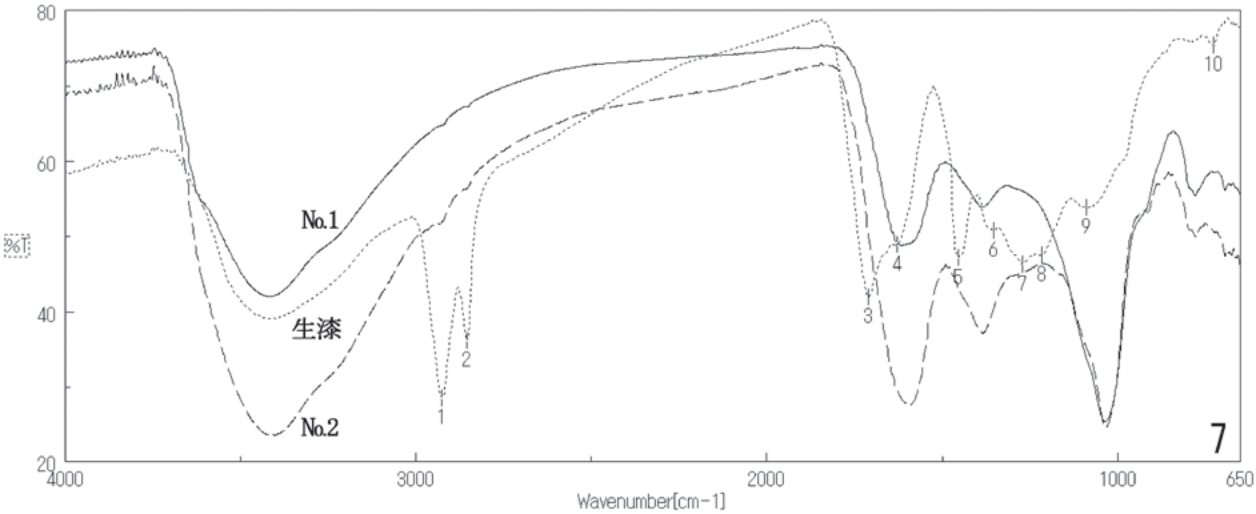


図２　赤外吸収スペクトル図
縦軸：透過率（％Ｒ）　横軸：波数（Wave number）
実線：№１　破線：№２　点線：生漆（番号は生漆の吸収）

表１　土器付着物の蛍光Ｘ線分析結果（単位:%）

試料No.	点No.	C	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	FeO	CuO	ZnO	total
1	1	55.65	0.00	0.17	3.07	32.87	0.00	0.00	0.10	0.29	2.11	3.72	2.01	99.99
	2	50.77	1.75	1.14	7.09	13.55	0.00	0.00	0.38	5.23	4.78	7.75	7.57	100.01
	3	57.85	0.00	0.30	6.54	19.50	0.00	0.00	0.29	0.98	5.52	5.53	3.50	100.01
	4	53.28	0.55	1.65	8.17	12.16	0.00	0.00	0.50	6.05	2.52	8.43	6.70	100.01
2	1	58.80	0.38	0.00	6.31	19.26	0.00	0.00	0.29	0.98	5.74	4.80	3.43	99.99
	2	57.41	0.78	0.12	6.39	19.68	0.00	0.00	0.47	1.13	5.52	5.41	3.10	100.01
	3	57.85	0.00	0.30	6.54	19.50	0.00	0.00	0.29	0.98	5.52	5.53	3.50	100.01
	4	58.80	0.46	0.41	6.22	18.50	0.00	0.00	0.41	1.08	5.70	5.71	2.71	100.00
最小値		50.77	0.00	0.00	3.07	12.16	0.00	0.00	0.10	0.29	2.11	3.72	2.01	
最大値		58.80	1.75	1.65	8.17	32.87	0.00	0.00	0.50	6.05	5.74	8.43	7.57	

PLATE

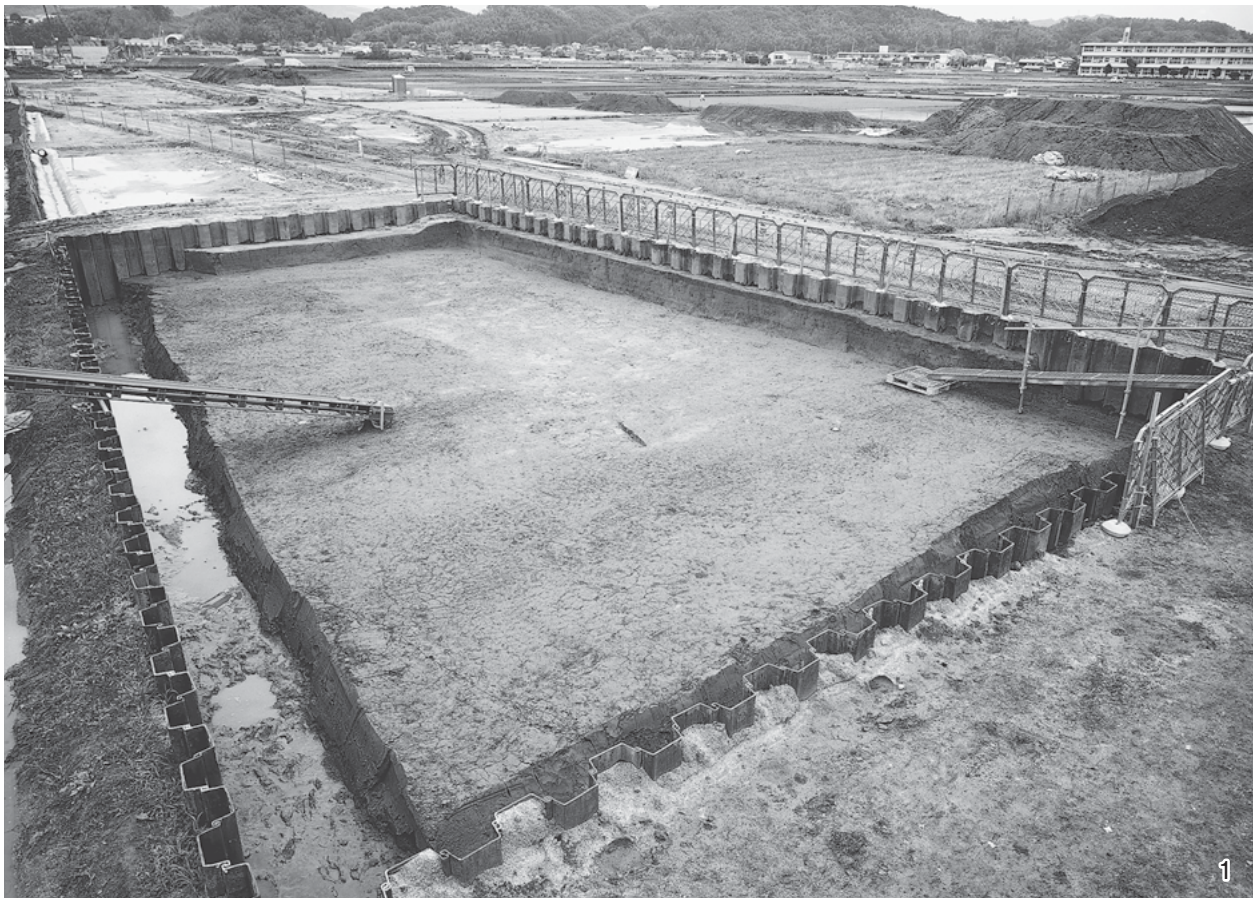
写真図版

撮影機材及び使用フィルム

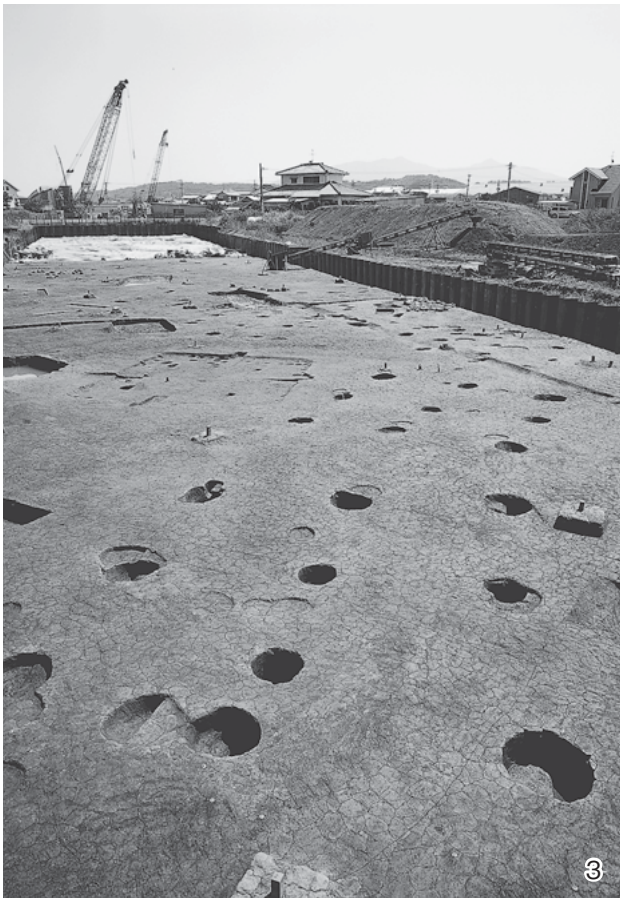
カメラ　リンホフスーパーテヒニカ

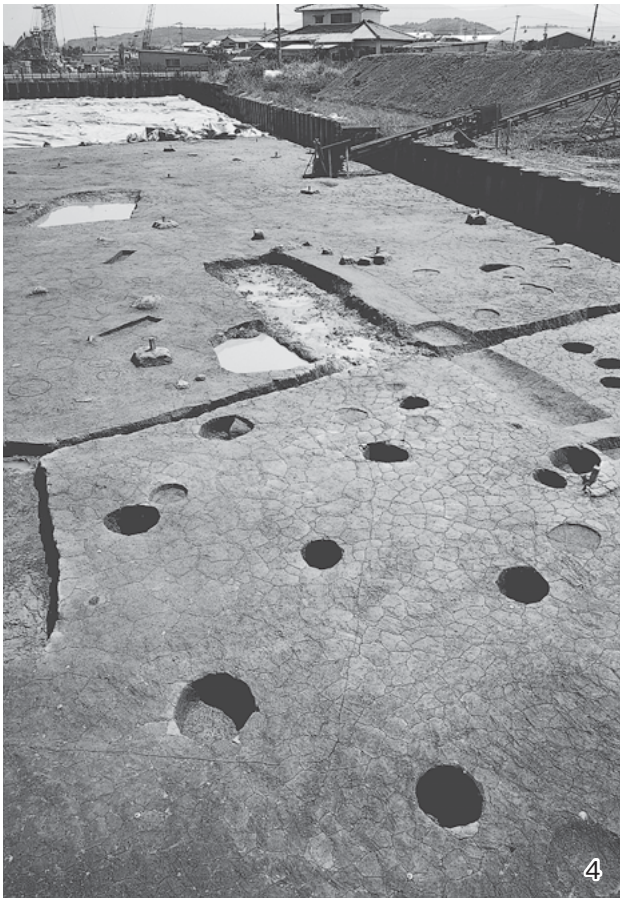
レンズ　Nikon90mmSW、FUJINONW125mm

フィルム　Kodak T-max100、Kodak E100G



1．１区検出状況（南より）
2．１区完掘状況（南より）

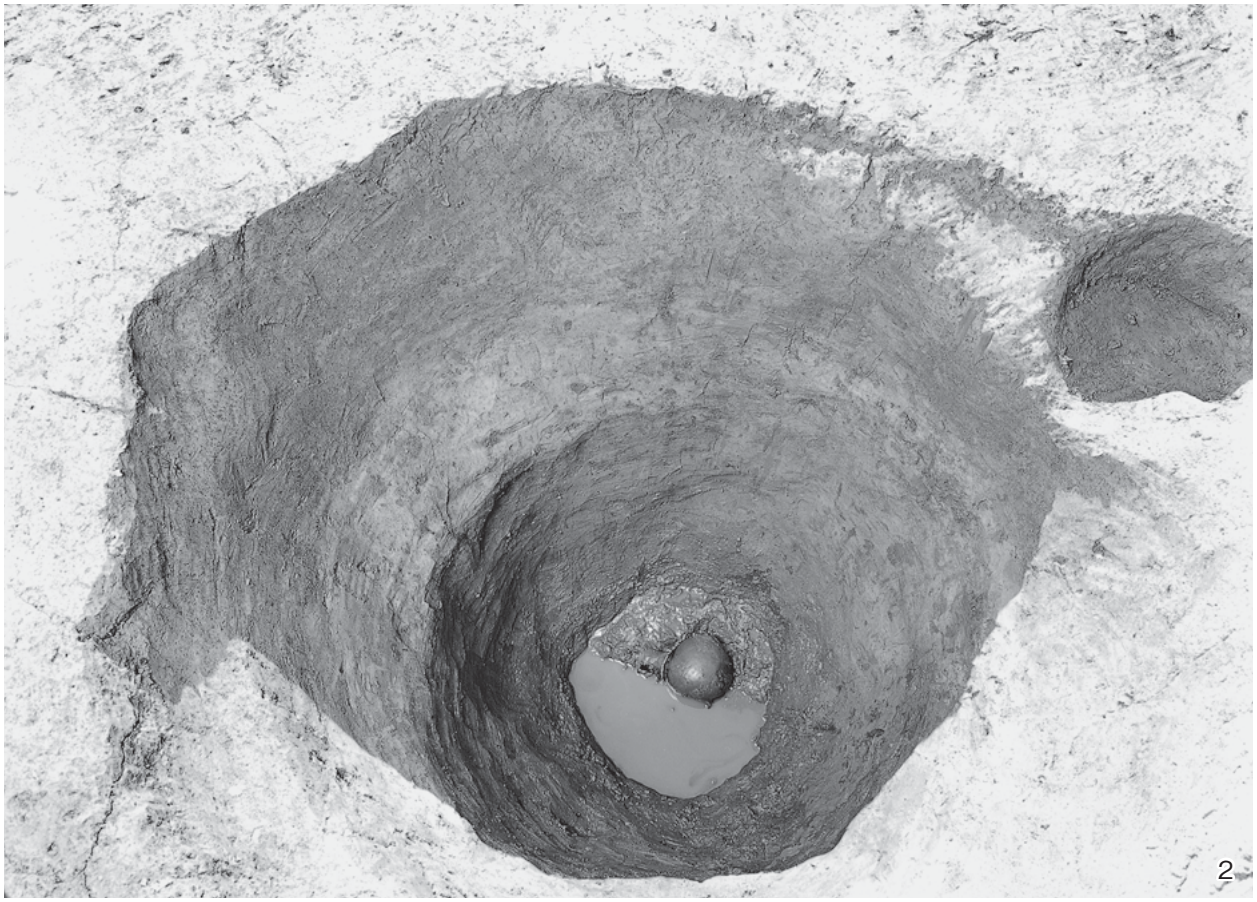




1．２区堀立柱建物SB002・SB003 検出状況（南より）
2．２区堀立柱建物SB002・SB003 完掘状況（南より）
3．２区堀立柱建物SB001・SB002・SB003 完掘状況（北より）
4．２区堀立柱建物SB004 完掘状況（北より）

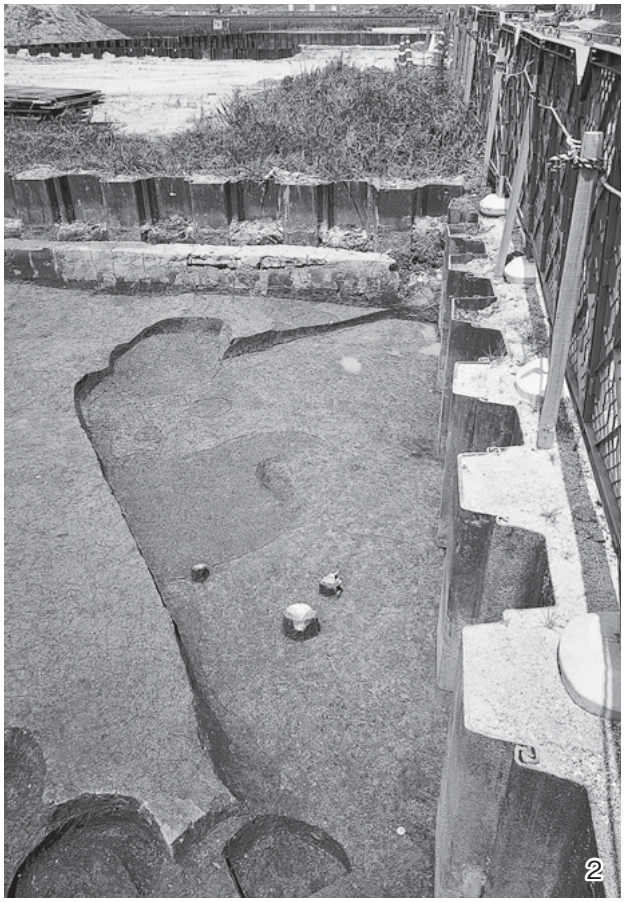
1．２区堀立柱建物SBO05 検出状況
2．２区堀立柱建物SBO05 完掘状況

1．２区堀立柱建物SB006 完掘状況（西より）
2．２区溝SD002 完掘状況（東より）　3．２区溝SD004 完掘状況（南西より）



1．２区井戸SE002 遺物出土状況（南東より）
2．２区井戸SE002 遺物出土状況（北より）

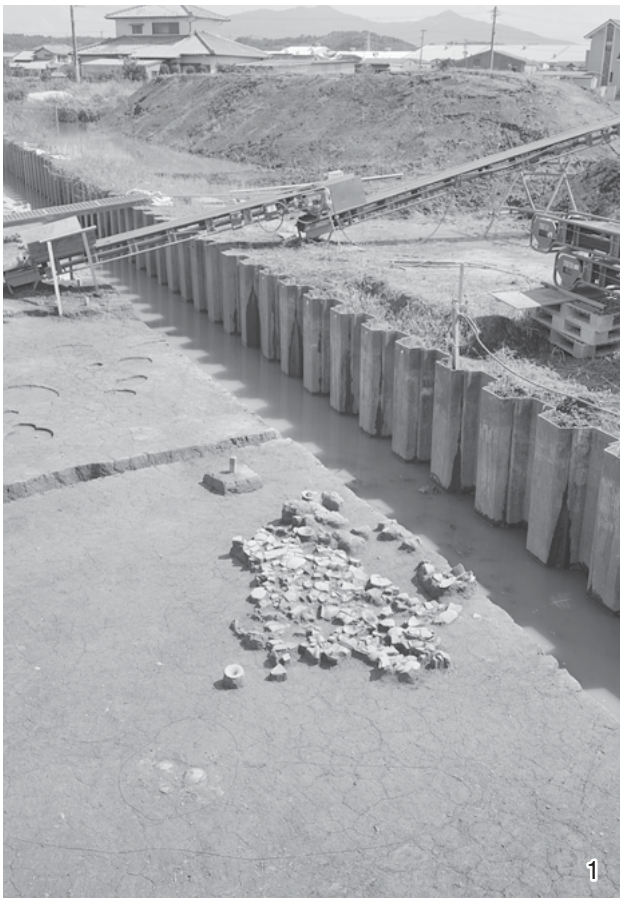
1．２区井戸SE002 完掘状況（北より）　2．２区井戸SE001 完掘状況
3．２区井戸SE003 完掘状況　4．２区井戸SE004 遺物出土状況（東より）

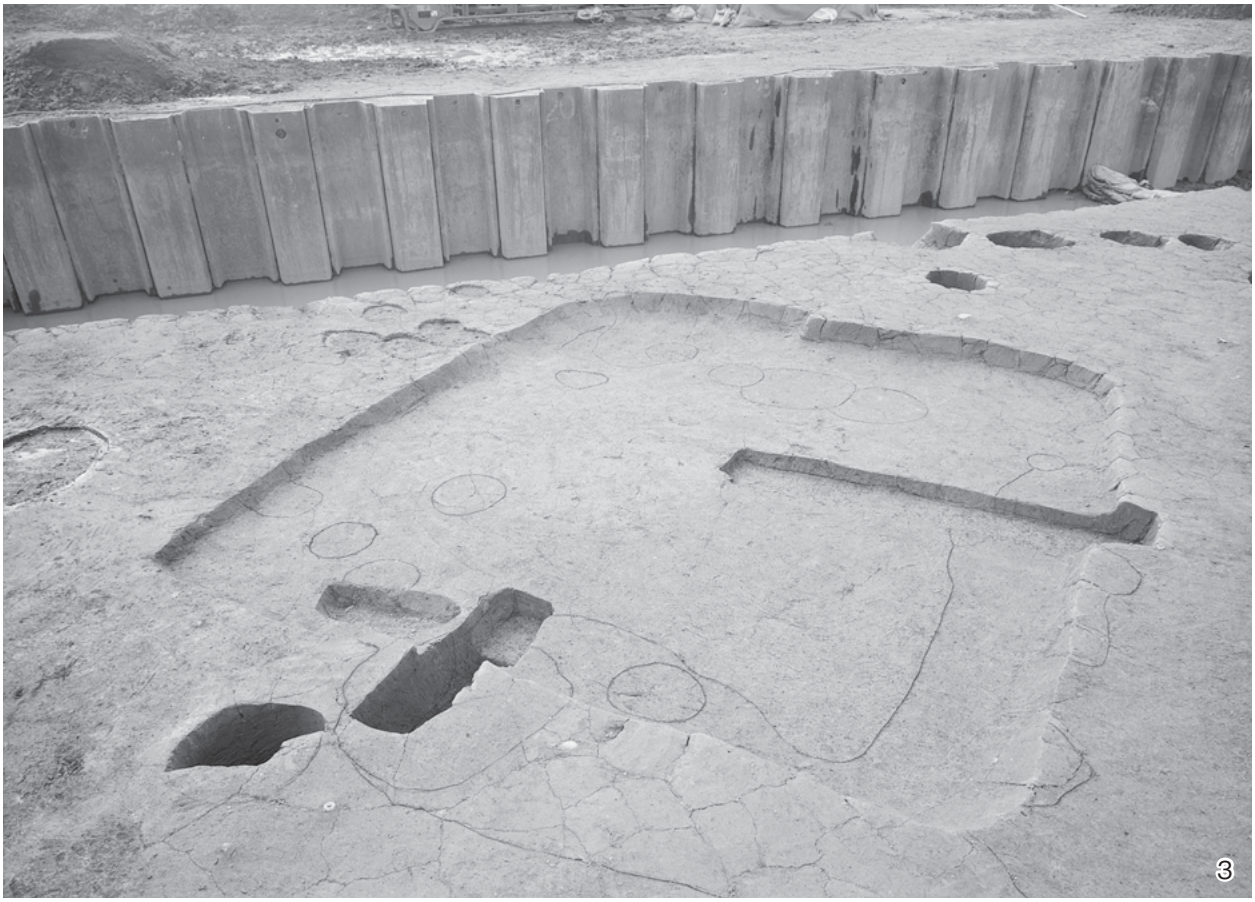


1．２区竪穴建物SI001 検出状況（南より）　2．２区竪穴建物SI001内貯蔵穴 検出状況（東より）
3．２区竪穴建物SI001 完掘状況（西より）

1．２区竪穴建物SI002 検出状況（東より）
2．２区竪穴建物SI002 完掘状況（南東より）

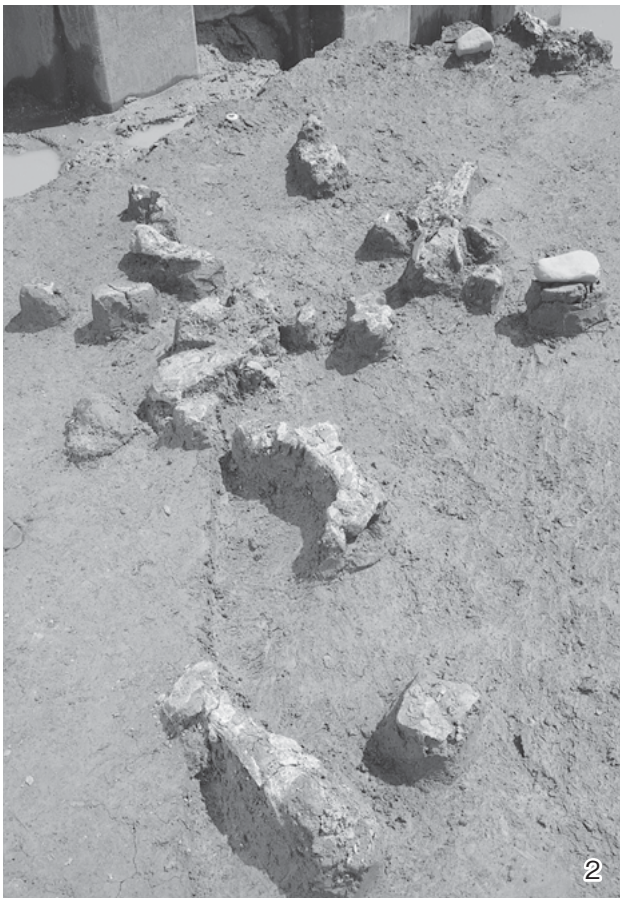
1．２区竪穴建物SI003・土坑SK019 完掘状況（西より）
2．２区竪穴建物SI004 完掘状況（南東より）

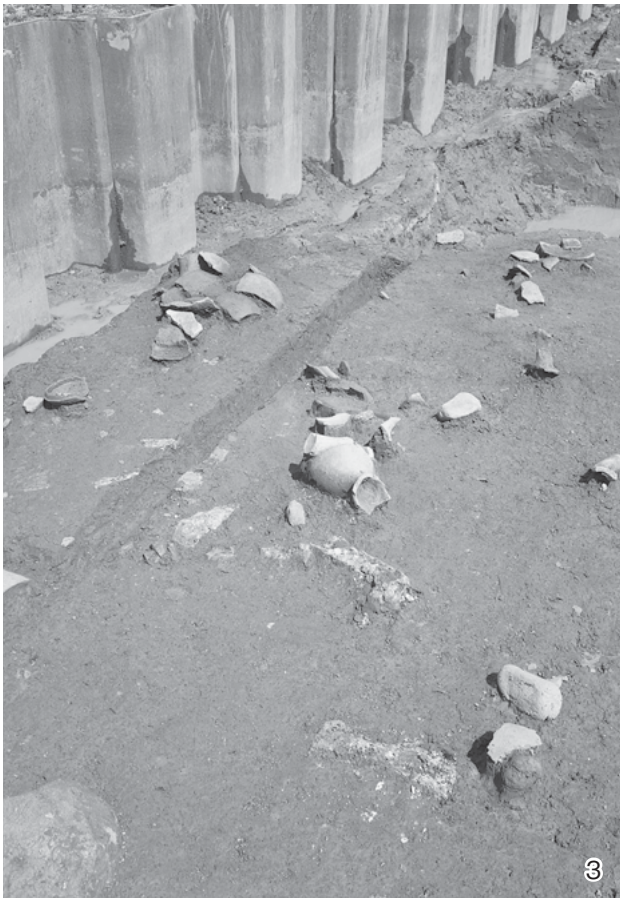


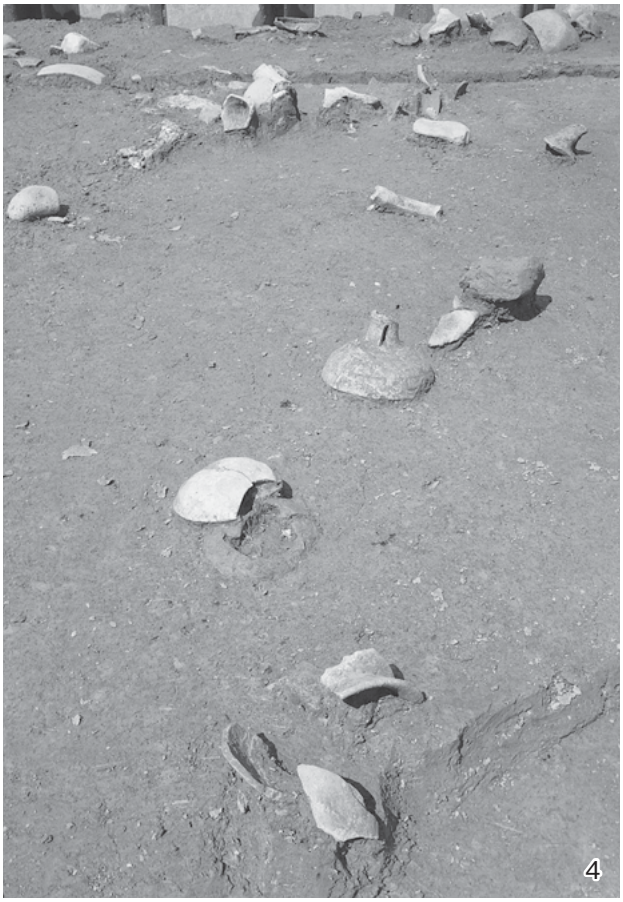


1．２区竪穴建物SI007 遺構検出状況　　2．２区竪穴建物SI007 遺物出土状況
3．２区竪穴建物SI009 床面検出状況（東より）

1．２区竪穴建物SI011・012、土坑SK013 検出状況（東より）
2．２区竪穴建物SI011 完掘状況（南西より）







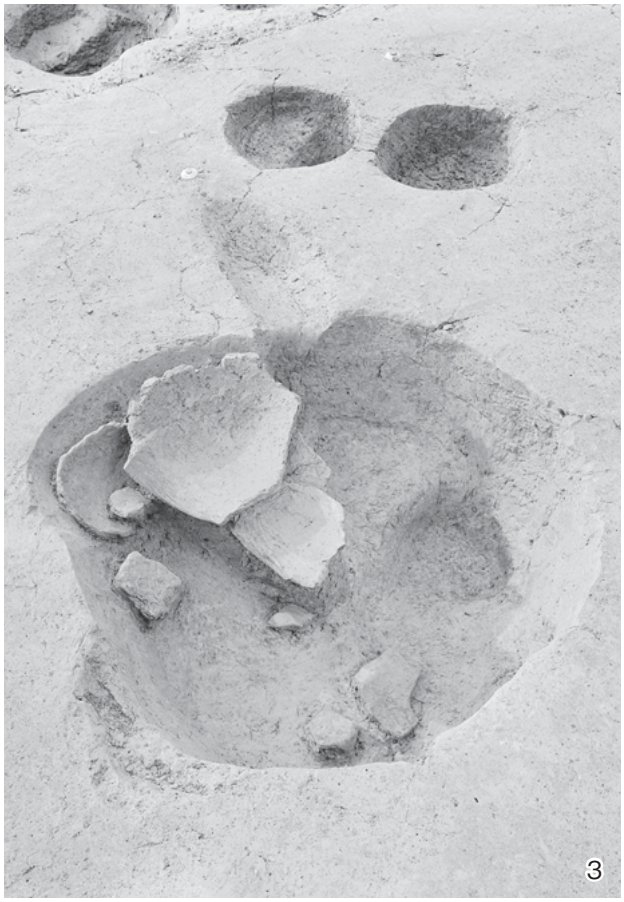
1．２区竪穴建物SI017 遺物（製塩土器）出土状況　２．２区竪穴建物SI017 遺物・獣骨（馬）出土状況
3．４．２区竪穴建物SI017 遺物出土状況

1．２区竪穴建物SI016・SI017・SI018 完掘状況（東より）
2．２区竪穴建物SI021・SI022・SI023・SI024・SI026 完掘状況（東より）

1．２区竪穴建物SI019 ピット検出状況（東より）
2．２区竪穴建物SI019 完掘状況（東より）

２区竪穴建物SI010・SI027・SI028 完掘状況（北より）

２区埋納遺構SJ001 遺物出土状況（北西より）



1．２区土坑SK005 遺物出土状況（南より）
2．２区土坑SK009・SK010 完掘状況（西より）
3．２区土坑SK011 遺物出土状況（西より）
4．２区土坑SK012 完掘状況（西より）

1．２区溝SD001（1～3）出土遺物
2．２区自然流路NR001（114）出土遺物　　3．２区自然流路NR005（116）出土遺物

1．２区溝SD008（4.5）出土遺物　　2．２区井戸SE001（6）出土遺物
3．２区井戸SE004（29～31）出土遺物

２区井戸SE002（9～14）出土遺物

２区井戸SE002（15.16.18.19）出土遺物

２区井戸SE002（21～28）出土遺物

２区井戸SE002（10.18.21.25）出土遺物

２区井戸SE002（19.28.16）出土遺物

1．２区竪穴建物SI001（32）・SI003（33.35）・SI006（36）・SI014（34）出土遺物
2．２区竪穴建物SI003（37～40）・SI008（41）出土遺物

２区竪穴建物SI007（42.43.46.48～52）出土遺物

２区竪穴建物SI010（53～57）出土遺物

２区竪穴建物SI011（58.59）出土遺物

２区竪穴建物SI013（60～63）出土遺物

２区竪穴建物SI017（65～78）出土遺物

２区竪穴建物SI017（65～70.76～78）出土遺物

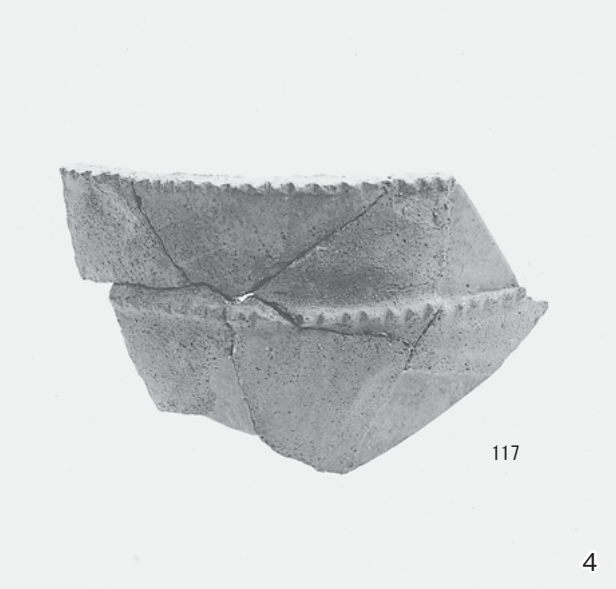
２区竪穴建物SI019（81～86）出土遺物

1．２区竪穴建物SI023（87～90）出土遺物
2．２区竪穴建物SI024（91.92）・SI026（93）出土遺物

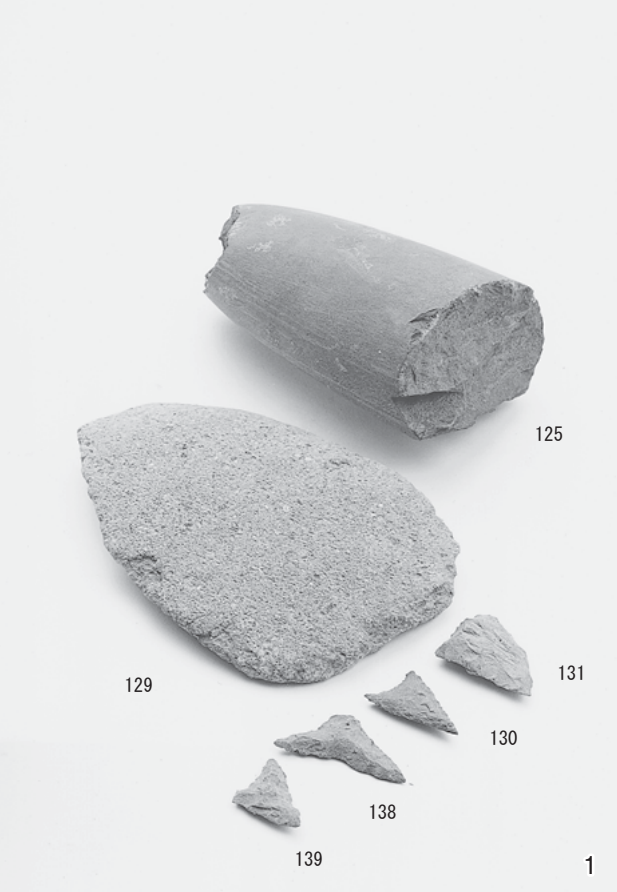
２区埋納遺構SJ001（94.95）出土遺物

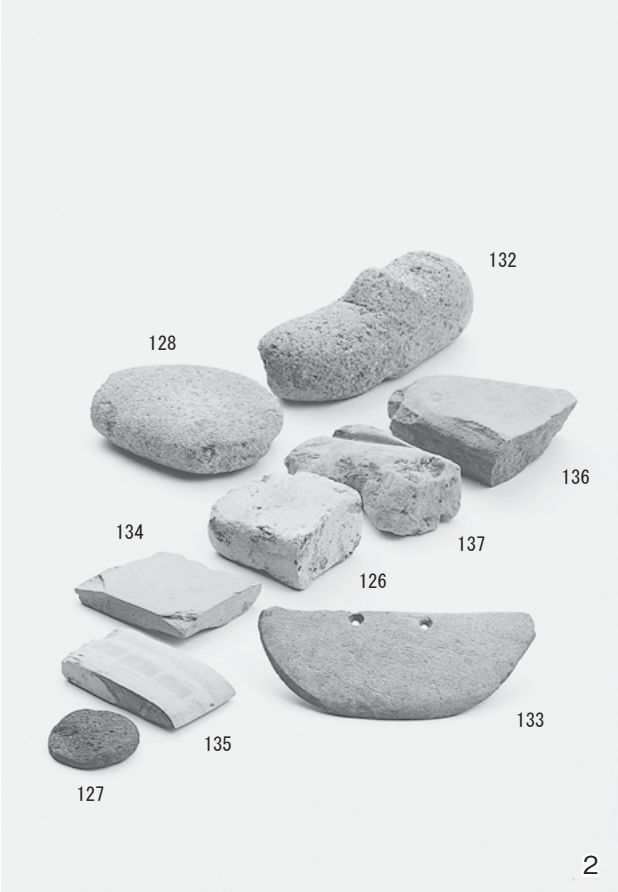
２区土坑SK004（98～101）出土遺物

1．２区土坑SK005（102～105）出土遺物
2．２区土坑SK008（106～109）出土遺物

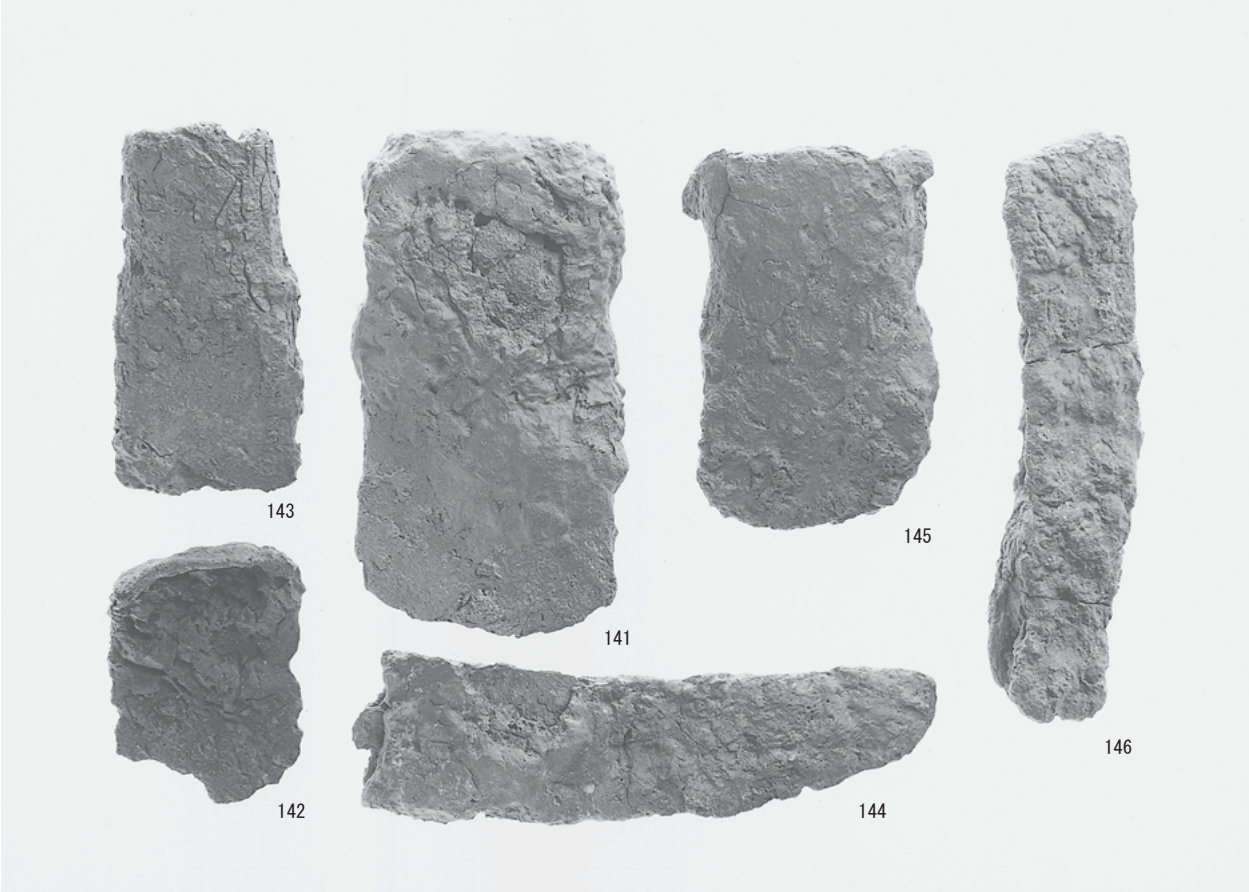


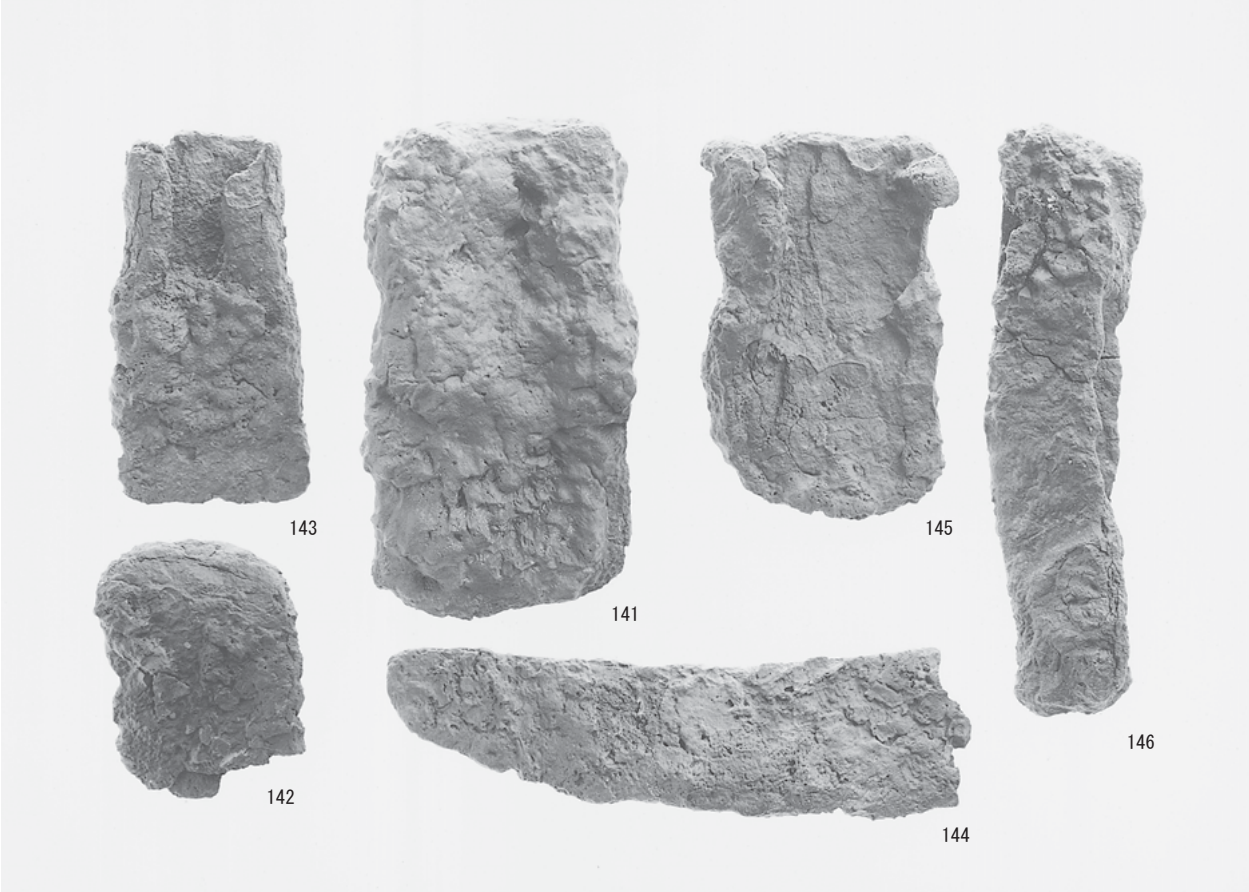
1．２区土坑SK010（110）・SK013（112）出土遺物
2．２区墓ST001（113）出土遺物
3．２区自然流路NR004（115）出土遺物
4.5.6．２区J-13Grid（117～119）出土遺物





1．2．２区石器（125～139）
3．２区製塩土器（121～124）・遺構内出土遺物





２区鉄器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たまなへいやじょうりあと（こがまえちく）
書　　名	玉名平野条里跡（古閑前地区）
副 書 名	九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 261 集
編 著 者 名	長谷部善一
編 集 機 関	熊本県教育委員会（文化課）
所　在　地	〒 862-8609　熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号　℡ 096-333-2706
発行年月日	2011 年（平成 23 年）3 月 1 日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
玉名平野条里跡（たまなへいやじょうりあと）（古閑前地区（こがまえちく））	熊本県玉名市 両迫間 158-2 ほか 9 筆	熊本県 （43） 玉名市 （206）	483	32° 56′ 10.51163″ （日本測地系）	130° 34′ 47.42618″ （日本測地系）	20070601 ～ 20080130	2,537.85㎡	九州新幹線 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉名平野条里跡 （古閑前地区）	集落	弥生時代前期 弥生時代後期 古墳時代初頭 古墳時代後期 古代	竪穴建物・井戸・土坑・遺物埋納遺構、堀立柱建物 溝状遺構、自然流路	弥生前期・後期土器、土師器（庄内系、布留系）、須恵器、製塩土器、獣骨、炭化米	6 世紀後半期の竪穴建物廃棄遺構より、須恵器（杯身）、土師器（壺）、獣骨（馬）、天草式製塩土器が一括資料として出土。 埋納遺構 SJ001 より弥生後期ジョッキ形土器出土。 庄内系甕、布留系甕出土（井戸出土）。

要約	遺跡の立地する玉名平野右岸域は、「玉名平野条里跡」として広く周知されている埋蔵文化財包蔵地である。近年では、九州新幹線「新玉名駅」やその周辺整備事業、アクセス道路としての県道改築事業等により、少しずつ遺跡内の遺構分布が判明してきている。現在までの調査では、直接条里に関する畦畔や水田面の遺構は確認されていないが、平野上には条里に由来する地名が残されており、条里があったことを窺わせる。 今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭までの集落を検出した。遺構密度は高く、既往の調査、周辺の予備調査結果を合わせると、現在の菊池川と平行に微高地が南北に巡り、集落跡が広がっているのを想定することができる。出土遺物は弥生前期の壺形土器、甕形土器が出土しているが、生活痕跡としては弥生後期、終末期、古墳時代初頭、後期である。後期では菊池川流域に広く分布する脚台付甕が出土し、終末期にはそれにタタキを有する脚台付甕へと繋がる。その後、古墳時代に入ると布留系の土師器が主体となる。後期の遺構は少ないが、廃棄竪穴建物内より須恵器杯身・高杯、土師器甕、須恵器模倣杯等が天草式製塩土器、獣骨（馬）、焼米などとともに出土し、祭祀形態を示した資料として注目される。今回の調査成果は、玉名平野における弥生後期から古墳時代初頭の土器編年を考えるうえで重要な成果といえる。

熊本県文化財調査報告第 261 集
玉名平野条里跡（古閑前地区）

2011 年（平成 23 年）3 月 31 日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒 862-8609　熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号
http://www.pref.kumamoto.jp/
印刷　株式会社 協和印刷

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 261 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 玉名平野条里跡（古閑前地区）
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/